大宰府史跡

平成元年度発掘調査概報

平成２年３月

九州歴史資料館

大宰府史跡

平成元年度発掘調査概報

平成２年３月

九州歴史資料館

序

大宰府史跡の発掘調査は昭和62年度から第４次５ケ年計画を立案し調査を進めている。この計画では観世音寺及び同子院跡の調査、研究に重点を置いている。平成元年度は、その第３年次にあたり、観世音寺東辺部について発掘調査を実施した。これまでにも報告してきたように観世音寺周辺から検出された遺構、遺物は中世を主体としたものであり、古代の観世音寺に関する手掛りが少ないことは残念な気もする。しかしながら中世における観世音寺あるいは大宰府の実態を解明することも重要な課題であり、これらの遺構・遺物は、その研究に寄与する点は多々あるものと考える。諸般の事情から調査は計画よりも若干遅れがちであるが、平成２年度はいよいよ観世音寺中心伽藍跡について調査を行う予定でいる。成果が期待される。

これまでご指導を賜っている大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位に深甚の謝意を表するとともに今後一層のご指導をお願いする次第である。

また大宰府史跡発掘調査担当のメンバーとして長年苦楽を共にしてきた当館技術主査、森田勉氏は平成元年六月、不慮の事故により不帰の人となった。末筆ではあるが心からご冥福をお祈りする。

平成２年３月31日

九州歴史資料館長　田　村　圓　澄

例　言

1．本概報は平成元年度に福岡県が国庫補助を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概要である。ただし第115次、117次調査は昭和63年度に実施した調査であるが、未報告であるので併せて報告する。

2．遺構実測図は国土調査法第II座標系をもとに基準点を設けて作成した。(昭和51年度発掘調査概報参照)

3．検出遺構および出土遺物については大宰府史跡調査研究指導委員の指導と教示を得た。

4．遺構、遺物の写真はすべて学芸第一課の石丸洋の撮影による。

5．本概報の執筆、編集は調査課の石松好雄、横田賢次郎、赤司善彦、吉村靖徳が行った。また遺物の整理については田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目　　次

序
I　調査計画……1
II　調査経過……2
1　概要……2
2　第115次調査……4
検出遺構……4
出土遺物……8
小　結……13
3　第117次調査……14
検出遺構……14
出土遺物……21
小　結……56
4　第119次調査……58
検出遺構……58
出土遺物……67
小　結……124
5　第120次調査……125
検出遺構……125
出土遺物……129
小　結……144
6　第70次補足調査……145
検出遺構……147
出土遺物……147
小　結……147

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込み
第２図　第115次調査遺構配置図 …… 5
第３図　SD3333土層断面図 …… 6
第４図　井戸実測図…… 7
第５図　SD3333・3334・3335・3336、SE3550出土土器・陶磁器実測図 …… 9
第６図　黒色粘質土層・茶褐色粘質土層出土土器実測図……10
第７図　黒色砂質土層・茶褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図……11
第８図　木製品実測図……13
第９図　出土漆椀……13
第10図　第117次調査遺構配置図 ……折込み
第11図　SD3400・SD3440土層断面図 ……15
第12図　井戸実測図(1)……17
第13図　井戸実測図(2)……18
第14図　井戸実測図(3)……19
第15図　SD3400出土土器・陶磁器実測図(1) ……22
第16図　SD3400出土陶磁器実測図(2) ……23
第17図　SD3430出土土器実測図(1) ……25
第18図　SD3430出土陶磁器実測図(2) ……26
第19図　SD3440下層出土土器・陶磁器実測図 ……28
第20図　SD3440上層出土土器・陶磁器実測図 ……30
第21図　SE3390・3405・3410・3415・3420出土土器・陶磁器実測図 ……32
第22図　SE3425・SK3404・3429出土土器・陶磁器実測図 ……34
第23図　SK3401出土土器・陶磁器実測図 ……36
第24図　土壙・その他の遺構出土土器・陶磁器実測図……38
第25図　SX3384出土土器実測図 ……39
第26図　黒色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……41
第27図　黒色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……43
第28図　黒色土層出土土器・陶磁器実測図(3)……44
第29図　黒色土層出土土器・陶器実測図(4)……46
第30図　暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図……48

第31図　暗褐色土層・黒色土層出土土器実測図……49
第32図　各遺構・層位出土瓦質土器実測図……50
第33図　軒丸瓦拓影・実測図……51
第34図　文字瓦拓影・実測図……51
第35図　各遺構・層位出土木製品・金属製品・土製品実測図……52
第36図　銅銭拓影……53
第37図　石鍋実測図……54
第38図　各遺構・層位出土滑石製品実測図……55
第39図　層位模式図……58
第40図　第119次調査遺構配置図……59
第41図　SD1230・3520A・B土層断面図……61
第42図　SD1300・3500土壙断面図……62
第43図　井戸実測図(1)……63
第44図　井戸実測図(2)……65
第45図　SD1230出土土器・陶磁器実測図……68
第46図　SD1300出土土器・陶磁器実測図……69
第47図　SD3500出土土器実測図(1)……71
第48図　SD3500出土土器実測図(2)……72
第49図　SD3500出土土器・陶磁器実測図(3)……74
第50図　SD3500出土土器実測図(4)……75
第51図　SD3500出土土器実測図(5)……75
第52図　SD3520出土土器・陶磁器実測図……77
第53図　SD3550出土土器・陶磁器実測図……79
第54図　SD3555・3478出土土器・陶磁器実測図……81
第55図　SE3475・3495・3505・3525出土土器・陶磁器実測図……83
第56図　SE3480・3530・3535出土土器・陶磁器実測図……85
第57図　SE3540・SK3501出土土器・陶磁器実測図……87
第58図　SK3464・3506・3507・3529出土土器・陶磁器実測図……90
第59図　その他の遺構出土土器・陶磁器実測図……91
第60図　炭層（SX3455）・茶灰色土層出土土器実測図……93
第61図　黄褐色土層出土土器・陶磁器実測図……94
第62図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……96
第63図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……98

第64図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)……99
第65図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(4)……101
第66図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……103
第67図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……105
第68図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)……106
第69図　各層位出土瓦質土器実測図……107
第70図　出土軒先瓦拓影・実測図……108
第71図　SD3500黒色土層出土木製品実測図……110
第72図　SD3500腐植土層出土木製品実測図(1)……111
第73図　SD3500腐植土層出土木製品実測図(2)……112
第74図　SD3500腐植土層出土木製品実測図(3)……折込み
第75図　その他の遺構出土木製品実測図……115
第76図　金属製品実測図……116
第77図　各遺構出土下駄実測図……折込み
第78図　銅銭拓影……117
第79図　各遺構・層位出土滑石製石鍋実測図……118
第80図　各遺構・層位出土石硯実測図……119
第81図　各遺構・層位出土石製品実測図……121
第82図　鋳型実測図……123
第83図　第120次調査遺構配置図……126
第84図　下層遺構SD3594・SK3587・SK3589出土土器実測図……129
第85図　下層遺構SX3600出土土器・塩壺実測図……130
第86図　中層遺構SK3576・3593・3602出土土器・陶磁器実測図……132
第87図　SE3570・3580出土土器・陶磁器実測図……133
第88図　その他の遺構出土土器・陶磁器・塩壺実測図……134
第89図　黄褐色整地層・暗赤褐色土層・暗黄褐色整地層出土土器・陶磁器実測図……136
第90図　黒色土層・黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図……138
第91図　茶灰色土層出土土器・陶磁器実測図……140
第92図　鈴鋳型実測図……141
第93図　八稜鏡拓影・実測図……142
第94図　宝篋印塔基礎石拓影・実測図……142
第95図　滑石製品実測図……143
第96図　第70次補足調査遺構配置図……145

第97図　SD1850土層断面図……145
第98図　SD1850出土土器実測図……146
第99図　観世音寺伽藍配置想定図 ……148

図　版　目　次

図版 1　（上）　第115次調査区全景（空中写真）
（下）　第115次調査区北半部（空中写真）
図版 2　（上）　第115次調査区南半部（空中写真）
（下）　第115次調査区SD3333で囲まれた区画（空中写真）
図版 3　（上）　第115次調査区全景（南から）
（下）　第115次調査区北半部（東から）
図版 4　（上）　溝SD3333・3355など（東から）
（下）　溝SD3340（東から）
図版 5　（上）　井戸SE3350竹を突き立てた状況（南から）
（下）　井戸SE3350完掘状況（南から）
図版 6　（上）　第117次調査区全景（空中写真）
（下）　第117次調査区西半部（空中写真）
図版 7　（上）　第117図調査区東半部（空中写真）
（下）　第117次調査区全景（西から）
図版 8　（上）　第117次調査区全景（東から）
（下）　溝SD3400（北東から）
図版 9　（上）　溝SD3430・3440（北東から）
（下）　井戸SE3370（南から）
図版10　（上）　井戸SE3375（東から）
（下）　井戸SE3380・3385（北から）
図版11　（上）　井戸SE3380（北から）
（下）　井戸SE3390（東から）
図版12　（上）　井戸SE3395（南から）
（下）　井戸SE3405（北東から）
図版13　（上）　井戸SE3410（西から）
（下）　井戸SE3410（南東から）
図版14　（上）　井戸SE3415・3420（北から）

（下）　井戸SE3441（南から）
図版15　第119次調査区全景（空中写真）
図版16　（上）　第119次調査北区全景（空中写真）
（下）　第119次調査南区全景（空中写真）
図版17　（上）　第119次調査区全景（北から）
（下）　第119次調査南区全景（南から）
図版18　（上）　礎石建物SB3460・柵SA3527（北から）
（下）　掘立柱建物SB3461（西から）
図版19　（上）　掘立柱建物SB3565（南から）
（下）　柵SA3561（西から）
図版20　（上）　溝SD1230・3520AB（北から）
（下）　溝SD1230・3520AB（南から）
図版21　（上）　溝SD1300（北から）
（下）　溝SD3500（北から）
図版22　（上）　溝SD3500（南から）
（下）　溝SD3550（南から）
図版23　（上）　井戸SE3465（南から）
（下）　井戸SE3470・3475（南から）
図版24　（上）　井戸SE3470（南から）
（下）　井戸SE3480（西から）
図版25　（上）　井戸SE3490（西から）
（下）　井戸SE3495（北から）
図版26　（上）　井戸SE3505（西から）
（下）　井戸SE3515（西から）
図版27　（上）　井戸SE3525（北から）
（下）　井戸SE3530（南から）
図版28　（上）　井戸SE3535（北から）
（下）　井戸SE3545（北から）
図版29　（上）　第120次調査区全景（北から）
（下）　第120次調査区南半部中層遺構（東から）
図版30　（上）　中層遺構　柵SA3590・3595（南から）
（下）　第120次調査区　下層遺構全景（南から）
図版31　（上）　第120次調査区　下層遺構全景（北から）

（下）　第120次調査区南半部下層遺構　溝SD3605など（東から）
図版32　（上）　第120次調査区南側拡張区（北から）
（下）　暗渠状遺構SX3572（東から）
図版33　（上）　第70次調査区暗渠施設全景（東から）
（下）　第70次調査区暗渠施設SX1832・1833（東から）
図版34　（上）　第70次調査　暗渠施設SX1833（北から）
（下）　第70次補足調査　暗渠施設SX1833と溝SD1850（西から）
図版35　（上）　第70次調査　暗渠施設SX1834（北から）
（下）　第70次補足調査　暗渠施設SX1834と溝SD1850（南から）
図版36　第115次調査　SD3333・3334・3335・3376・3350、黒色粘質土層、茶褐色粘質土層出土土器・陶磁器
図版37　第115次調査　黒色砂質土層、茶褐色土層、暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版38　第117次調査　SD3400出土土器・陶器
図版39　第117次調査　SD3400出土陶磁器
図版40　第117次調査　SD3430出土土器・陶磁器
図版41　第117次調査　SD3440下層出土土器・陶磁器
図版42　第117次調査　SD3440上層出土土器・陶磁器
図版43　第117次調査　SE3390・3420・3425出土土器・陶磁器
図版44　第117次調査　SK3401・3429出土土器・陶磁器
図版45　第117次調査　SK3447・SX3384・3486出土土器
図版46　第117次調査　黒色土層出土土器・陶磁器
図版47　第117次調査　黒色土層出土陶磁器
図版48　第117次調査　黒色土層出土陶器
図版49　第117次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版50　第117次調査　瓦質土器
図版51　第117次調査　軒丸瓦、文字瓦、土製品
図版52　第117次調査　金属製品、木製品
図版53　第117次調査　石鍋、石硯、石製品
図版54　第119次調査　SD1230出土土器・陶磁器
図版55　第119次調査　SD1300・3500腐植土層出土土器
図版56　第119次調査　SD3500腐植土層出土陶磁器
図版57　第119次調査　SD3500腐植土層出土土器・陶器
図版58　第119次調査　SD3500上層、SD3520出土土器・陶磁器

図版59　第119次調査　SD3550・3555・3478出土土器・陶磁器
図版60　第119次調査　SE3475・3490・3495・3505・3525出土土器・陶磁器
図版61　第119次調査　SE3480・3530・3535・3540出土土器・陶磁器
図版62　第119次調査　SK3501・3506・3529出土陶磁器
図版63　第119次調査　その他の遺構・黄褐色土層出土土器・陶磁器
図版64　第119次調査　炭層（SX3455）、茶灰色土層出土土器
図版65　第119次調査　炭層（SX3455）、茶灰色土層出土土器
図版66　第119次調査　黒褐色土層出土土器・陶器
図版67　第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器
図版68　第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器
図版69　第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器
図版70　第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器
図版71　第119次調査　茶褐色土層出土土器
図版72　第119次調査　茶褐色土層出土陶磁器
図版73　第119次調査　茶褐色土層出土陶器
図版74　第119次調査　瓦質土器、軒丸瓦・軒平瓦
図版75　第119次調査　SD3500黒色土層出土木製品
図版76　第119次調査　SD3500腐植土層出土木製品
図版77　第119次調査　SD3500腐植土層出土卒塔婆・木製品
図版78　第119次調査　SD3500腐植土層出土下駄
図版79　第119次調査　その他の遺構出土木製品
図版80　第119次調査　金属製品、石製品、ガラス製品
図版81　第119次調査　滑石製石鍋、石硯
図版82　第119次調査　石製品、石帯
図版83　第119次調査　金鼓鋳型
図版84　第120次調査　下層遺構SX3600出土塩壷
図版85　第120次調査　SX3600、SK3576、SE3570その他の遺構出土土器・陶磁器
図版86　第120次調査　各層位出土土器・陶磁器
図版87　第120次調査　茶灰色土層出土土器・陶磁器
図版88　第120次調査　鈴鋳型、八稜鏡、宝篋印塔、滑石製品
図版89　第70次補足調査　SD1850出土土器

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

I 調 査 計 画

大宰府史跡の発掘調査は昭和62年度から第４次５ケ年計画に基づいて調査を実施している。この計画では観世音寺及び同子院跡の調査、研究に重点を置いている。まず第１年次は子院のひとつである金光寺跡推定地と観世音寺南門の前面域について調査を行った。金光寺跡推定地については昭和53年以来、４次にわたって発掘調査を行い建物跡が非常に良好な状態で検出されている。昭和61年、遺跡の保存整備事業に伴い、建物群の西側の低丘陵について念のため確認調査を行ったところ五輪塔を主体とする石塔群と火葬壙と考えられる遺構が検出された。このためまず最初に、これらの遺構の調査を行った。その結果多数の石塔群と火葬壙18基及び土葬墓７基を検出した。これらの遺構はすでに検出している建物群とともに、今後、他の子院跡の調査にとって有力な参考資料になるものと考えられる。次に南門前面の調査では12世紀後半から15世紀にかけての建物跡、溝、井戸などを多数検出した。また出土遺物としては多数の土師器、輸入陶磁器などがあるが、なかでも仏具に関する鋳型などの鋳造関係遺物が多数出土したことは注目される。第２年次は引き続き観世音寺中心伽藍の東南地域を中心に調査を行った。ここでもやはり中世を主体とした各種の遺構が検出されている。以上が２ケ年にわたる調査の結果である。この２ケ年にわたる調査の進捗状況をみると当初の計画よりも、大幅に遅れている。これには観世音寺周辺における遺構が複雑に錯綜しているため調査に手間どることや、途中数件の緊急調査などが加わったことなどが大きく影響している。これらの状況を踏まえて平成元年度の調査はこれまでの未調査地区を繰り越して調査を行うようにした。ただし昭和63年度に北面築地推定地にある宅地が公有化されたため第４次５ケ年計画の目的を考慮し、計画外の地域であるが、これを調査計画に加えることとした。

この平成元年度における発掘調査計画については平成元年５月17・18日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会議において了承されたので計画どおり実施することとした。調査予定地は下記のとおりである。

調査次数	調査地区	地区面積（m²）	調査期間	備考
119	6KKZ-B	1,100	４月～７月	観世音寺東辺中央部
120	6KKZ-B	400	８月～10月	観世音寺北辺部
121	6KKZ-B	1,500	11月～２月	観世音寺東北部

II 調 査 経 過

1．概要

平成元年度の調査は調査計画の項で記したように昭和63年度に実施予定であった観世音寺東辺中央部について、これを繰り越して行うこととし、第119次調査として開始した。表土の一部はすでに63年度中に除去しており、引き続き床土を除去した後4月4日から遺構検出を開始した。この第119次調査地付近は、昭和51年度に第45次調査として北側隣接地を、さらに南側地域については今回報告する第117次調査を実施している。これらの過去における調査によって観世音寺の前面、東辺部には12世紀末から15世紀位にかけての遺構が密集していることが明らかとなっている。今回の調査においても13世紀から14世紀を主体としたピット群、溝、井戸などを検出した。これらの遺構は複雑に錯綜しており、これが検出にかなりの期間を費やした。この調査で特記すべきものとしては発掘区西半部の下層整地層から出土した金鼓と考えられるものの鋳型であろう。かなり破損はしているが、ほぼ完形近くに復原できるとともに、共伴した数点の土器から奈良時代末平安時代初頭頃のものと考えられる。金鼓とすれば我国におけるものとしては、かなり古期に属する例であろう。この調査は井戸などの補足調査にかなりの時間を費やしたため調査を終了したのは、7月末であった。8月21日からは観世音寺北面築地推定地について、これを第120次調査として開始した。調査地が住宅地であったためマサ土が厚く盛られていたこととともに調査地周辺に排土置場が確保できなかったこともあって、この整地土及び旧表土の除去にかなりの時間を費やした。調査の結果、築地に関すると考えられるような遺構は勿論、顕著な遺構は検出できなかった。このため昭和56年度に第70次調査として実施した南側隣接地について一部再調査を行った。第70次調査では調査区北辺部において5条の土管を用いた暗渠施設を検出している。さらにこの暗渠群の北側には東から西へ流れる浅い東西溝SD1830を検出している。この第70次調査段階では、この暗渠施設が北面築地に伴う施設とした場合、延喜5年の「観世音寺資財帳」に記載のある築地の丈量と対比した場合、南門の位置がかなり南側へずれることなど、多少の矛盾が生ずることなどから、これらの遺構が築地に伴うものである可能性もあるということを指摘するのみにとどめた。今回の第120次調査および第70次補足調査においても確定的な築地に関する資料を得ることはできなかったが、両次の調査結果からみて5条の暗渠が遺存する位置が築地である可能性は高くなったと考えている。北面築地の位

置に関する結論については今後の調査に俟つ点が多い。11月27日からは第121次調査として東北部について調査を開始した。「観世音寺資財帳」による南面築地と北面築地の長さは57丈（171m）である。したがって、伽藍中軸線から、上記の長さを２等分した距離、すなはち85.5mの所が、各々東面築地、西面築地の位置ということになる。今回の調査地は、この東面築地推定線に該当する所である。当該地は本来水田であったが、近年整地が行われていたため、この整地土および旧耕作土の除去にかなりの時間を費やした。年が明けて１月17日から遺構検出を開始した。この調査は３月末日現在遺構検出をほぼ終了したが、なお調査継続中である。

以上が平成元年度に行った発掘調査の概要である。これを地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調査地区	地区面積（㎡）	調査期間	備考
119	6KKZ-B	860	890322～890731	観世音寺東辺中央部
120	6KKZ-B	360	890821～891028	観世音寺北辺部
121	6KKZ-B	1,215	891127～	観世音寺東北部

第115次調査

現在、観世音寺の参道と平行して西方には県道から戒壇院へと通じる参道がある。今回の発掘調査地はこの参道に接した西側地域で、戒壇院のすぐ前面に位置する。前年度には東側の両参道に挟まれた一帯を、第109・111次調査としてすでに実施している。観世音寺前面域の様相把握を目的にしたそこでの調査結果は、既に報告したとおりである。得られた知見のうち今回の調査と関連する遺構についてその広がりと変遷を、あらためて振り返ってみることにする。

戒壇院の南を限る現在の築地塀から、南へ約65mのところには溝SD3300が東西に走る。幅3mのこの溝は掘削された時期について明かにしえないが、14世紀までの存続を確認している。興味深いのはこの溝の南側一帯では、11世紀から13世紀前半代（第II期）までの井戸や土壙をはじめ各種の遺構が集中しているが、この溝を境とした北には及んでおらず、南との遺構の差は歴然としている。この溝は単に区画溝として機能するにとどまらず、土地利用の制限としてみたとき、寺域との関連で捉えれば非常に示唆的な問題を投げかけている。さて、溝の北側にも遺構が展開するのは13世紀後半以降である。小溝や柵列によって区画されたいくつかのブロックや、建物、井戸等をはじめ無数のピットが形成されている。出土遺物からの年代的ピークは13世紀後半から14世紀前半に認められ、16世紀代まで存続していたとみられる(第III期)。この時期、特に東側では厚い整地層上に遺構が形成され、その下層からも同時期の南北大溝SD3200の存在を確認している。前回こうした遺跡の検討を通じて、この地域におけるいくつかの画期とその変容を窺った。

今回、これらの知見を踏まえ遺構の広がりを把握することとあわせて、この地点が観世音寺の寺域の西南隅部にあたることから、築地塀等の寺域区画遺構の発見を主眼に置いて調査をおこなった。

調査は南北に長い860㎡を対象としておこない、排土置き場を南側公有地に確保することで全面を一度に調査することができた。昭和63年7月8日から7月29日まで表土剝ぎ、その後9月14日まで約一ケ月半大宰府発掘20周年展の準備で作業は中止した。補足調査を含めて全作業が終了したのは11月17日である。

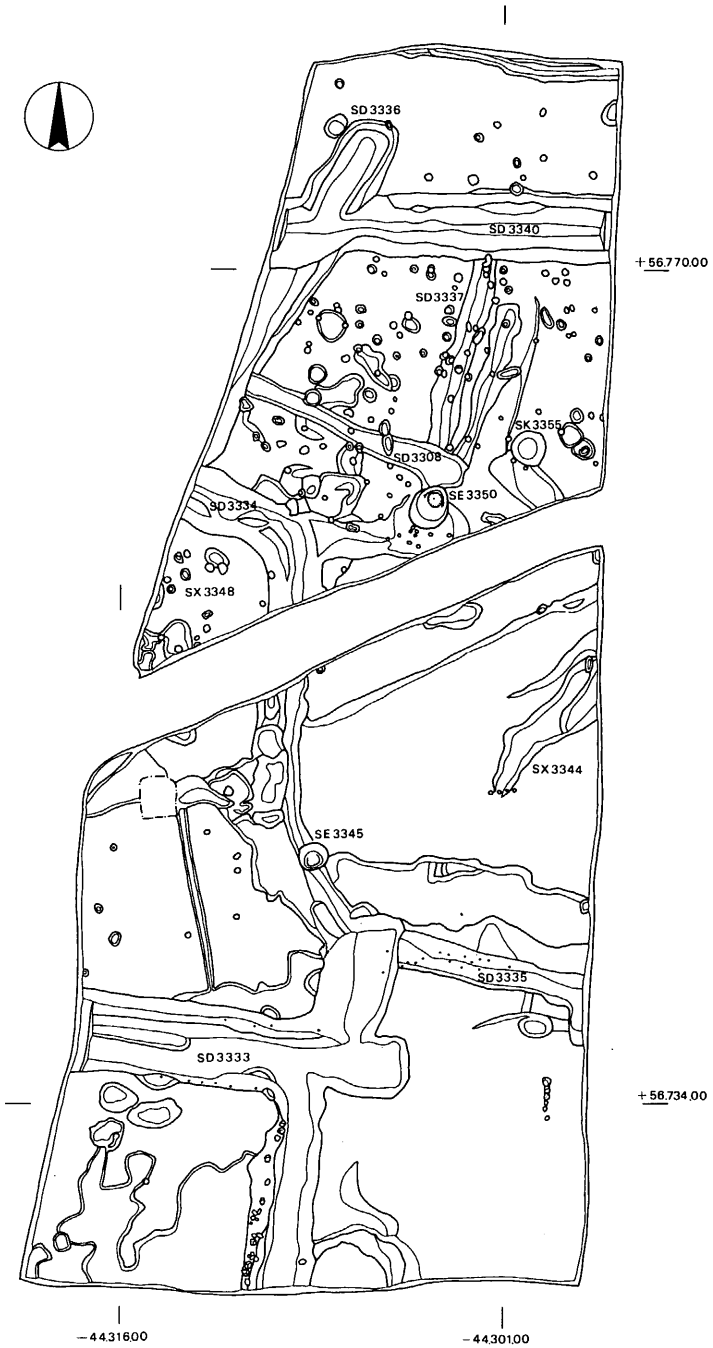
地番は太宰府市大字観世音寺字堂廻195・199である。

なお11月23日に現地説明会をおこなった。

検出遺構

発掘区は、中央付近を市道が斜めに横切っているため、以下市道を境として便宜的に北区と南区に二分する。

発掘前の表土面は標高37.50m前後で、南区は北区に比べて一段低くなっている。北区は耕作



第2図　第115次調査遺構配置図

土及び床土を除去するとすでに地山面に達する。南区では市道から約２m南の付近に段があり、そこまでは同様の状況である。段から南側には中世～近世の遺物を含む暗褐色土の包含層が堆積している。堆積は均一ではなく南下するにしたがって厚く堆積している。この暗褐色土を除去した段階で溝やピットを検出した。ただし南東部には黒色粘質土層と下層に黒灰粘質土層が厚く堆積した一画がある。この層の広がりは北がSD3335、西がSD3333までであり、東側は第109次調査では検出していないため東は戒壇院参道に限られていると思われる。この上面では遺構は認められず、これを除去した後の地山面でも石列を確認しただけである。

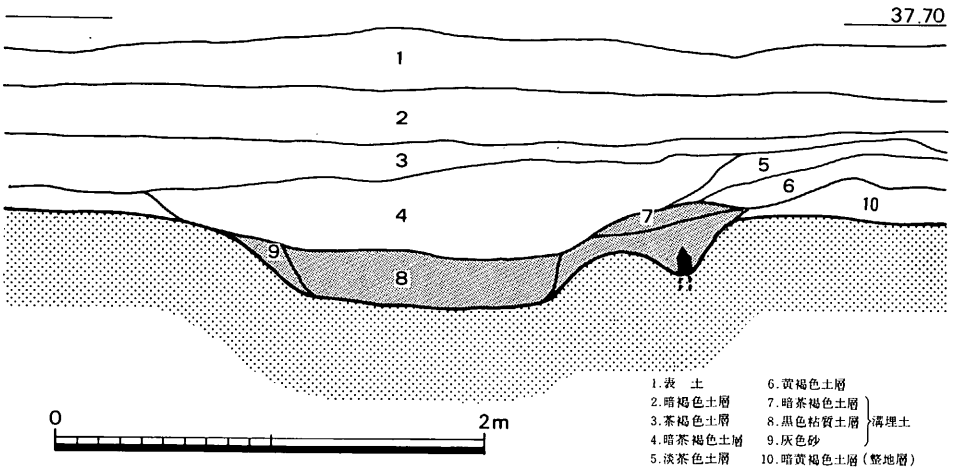
南壁で捉えた基本層序はつぎの通りである。耕作土→暗褐色土層→黒色粘質土層→黒灰色粘質土層。

溝

SD3333　南区の西南隅部にあって、東西と南北方向の二つの溝が逆L字状に接続したものである。東西方向の溝は幅2.2m、深さ0.5m前後。南北溝は東岸の上部が後に黒色粘質土層・黒灰色粘質土層の堆積で削られている。残りのよい南側で幅2.2m、深さ0.55m。現状でみる限り溝底は両者の接続部分が最も低い。ただしその高低差は0.1mに満たない。両溝の内側には岸に沿って護岸のための杭が打ち込まれて、南北溝の西肩には拳大から人頭大の石が配されていた。

SD3334　発掘区の中央付近で検出した溝で、幅2.1～2.4m。深さは残りのよい所で0.4mをはかる比較的浅い溝である。溝は北区の発掘区西側から東へ約２m延びて南へ折れ、約６mほぼ直線的に南下し、その後緩やかに反転して東西溝SD3335に接続している。したがって両者の溝は本来同一の溝と考えられる。

SD3335　南区中央の東寄りで検出した東西方向の溝。SD3333同様に黒色粘質土層・黒灰色粘



第3図　SD3333土層断面図

質土層が上部を削って堆積している。幅1.2m前後、深さ0.3m。流れはSD3334から続いており更に東へ延びていたものか。溝には杭列が打ち込まれているが、杭先端部が溝底にまで達していないことや位置関係からみてこの溝に伴うものではなく、黒色粘質土層の堆積と関わりがあるようである。

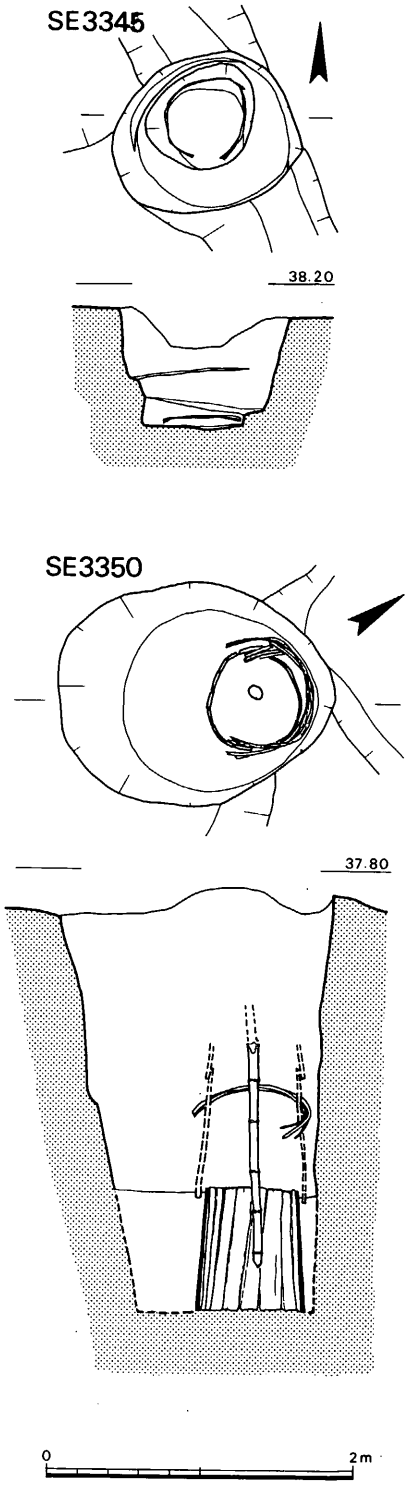
SD3336　北区の西南隅部から掘削が開始されたもので、南西方向に向かう。7.7mを確認したがそれから先は発掘区外に延びている。幅2.0m前後、深さ1.0m前後。SD3340に切られ、SD3334とも重複するが交差地点がちょうど発掘区にかかるため両者の先後関係は明らかでない。

SD3340　北区の北側よりで検出した東西方向の溝である。両端とも発掘区外に延びている。幅2.5m前後、深さ0.95m前後。溝底はほぼ水平である。遺物は皆無に近く時期の決め手にかけるが、位置関係からみて第111次調査検出の東西溝SD3149と同一の可能性が高い。

井戸

SE3345　溝SD3334によって上部を失われている。掘形は円形に近いプランで、径1.25m、深さ0.85mをはかる。底面は溝底より0.1m深く、かろうじて竹タガ枠1条が遺存していた。その内径は0.5m前後である。本来は桶側構造のものか。

SE3350　北区の南側で検出した桶側構造の井戸である。掘形は長径1.8m、短径1.5mの長円形を呈し、深さは2.7m。桶側は掘形北寄りに据えられ、最下段のみ残存していた。上段の側板はすでに抜き取られており、竹タガのみ残されている。また、中央部分では節を打ち抜いた竹筒をほぼ垂直に差し込まれた状態で検出した。下部先端を細く尖らせたこの竹筒は出土状況からみて、井戸廃棄時の所業と考えられる。民俗例にみられる水神祭りと



第4図　井戸実測図

深く関わるものか。

出土遺物

SD3333出土土器・陶磁器（第５図・図版36）

土師器

皿a(2)　口径8.2cm、器高1.0cm。糸切り、板状圧痕を有する。

皿b(1)　口径6.4cm、器高1.5cm。糸切り、板状圧痕を有する。

杯a（３・４）　口径12.0cm～12.8cm、器高3.0cm～3.1cm。糸切りで、底部に板状圧痕を有する。

中国製陶磁器

青磁

皿(5)　同安窯系Ⅰ－１･b類である。内面にヘラと櫛状工具によって施文する。底部は露胎とする。

褐釉陶器

水注(6)　破片４片があるが、直接には接合せず図上で復原作図した。口径5.8cm、器高11.5cm。体部の最大径は中位にあり、13.0cmを測る。淡茶色の胎に緑褐色釉がうすくかけられる。体部下位には釉が垂下し、底部は露胎となる。注口先端は欠失し完全ではない。

SD3334出土土器（第５図・図版36　別表）

土師器

杯a（７～11）　口径12.0cm～12.4cm、器高2.5cm～3.0cm。糸切りで底部に板状圧痕を有する。

SD3335出土陶磁器（第５図・図版36　別表）

中国製黒釉陶器

天目(12)　黒釉の天目椀の底部である。破片中では内面に黒釉がやゝ厚目に施され、外面は露胎となっている。露胎となった部分は淡茶色をを呈する。

SD3336出土土器・陶磁器（第５図・図版36）

土師器

皿a(13・14)　口径8.2cm～8.3cm、器高1.2cm～1.3cm。底部に板状圧痕を有する。

杯a(15～20)　口径11.8cm～12.2cm、器高2.4cm～3.0cm。全て糸切りで底部に板状圧痕を有する。16・19には油煙が付着する。

中国製陶磁器

白磁

皿(21)　平底の皿で、灰白色の胎に黄白色釉をかけ、外面の体部下位と底部を露胎とするⅥ類。

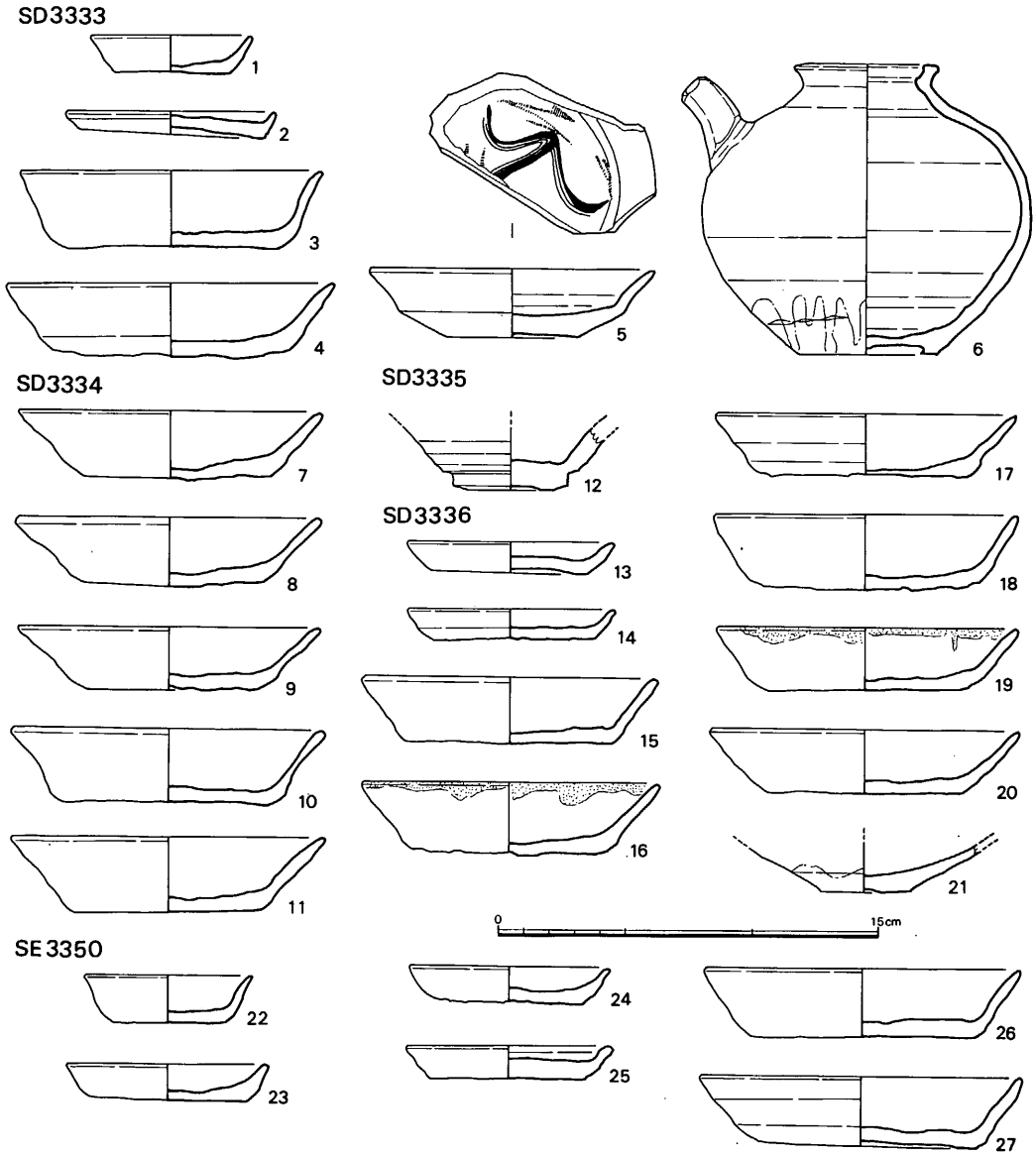
SE3350出土土器（第５図・図版36　別表）

土師器

皿a(23～25)　口径7.9cm～8.2cm、器高1.3cm～2.0cm。糸切りで、23･24には板状圧痕を有する。

皿b(22)　口径6.6cm、器高2.0cm。糸切りである。

杯a(26・27)　口径12.4cm～12.6cm、器高2.7cm～2.8cm。糸切りで27には板状圧痕を有する。



第5図　SD3333・3334・3335・3336、SE3550出土土器・陶磁器実測図

黒色粘質土層出土土器（第６図・図版36　別表）

土師器

皿b(1)　口径7.0cm、器高1.8cm。糸切りで底部に板状圧痕を有する。

杯a（２～４）　口径12.4cm～13.2cm、器高2.7cm～2.9cm。糸切りで板状圧痕を有する。

茶褐色粘質土層出土土器（第６図・図版36　別表）

土師器

皿a（５・６）　口径7.2cm～8.0cm、器高1.3cm。糸切りで板状圧痕をもつ。油煙が付着する。

皿b（７・８）　口径6.4cm～7.3cm、器高1.8cm～1.9cm。糸切りで板状圧痕を有する。いずれも油煙が付着し、灯火器として使用している。

杯a（９～18）　口径12.2cm～13.4cm、器高2.7cm～3.4cm。全て糸切りで15を除いて底部に板状圧痕をもつ。

黒色砂質土層出土土器・陶磁器（第７図・図版37　別表）

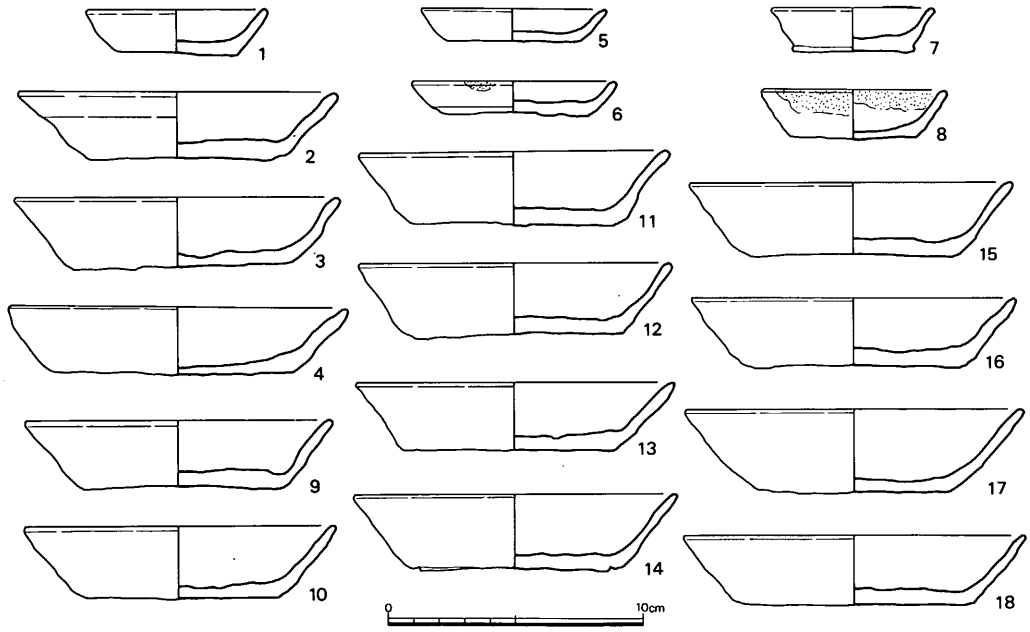
土師器

皿a（１～６）　口径7.8cm～8.2cm、器高1.1cm～2.4cm。糸切りで板状圧痕を有する。

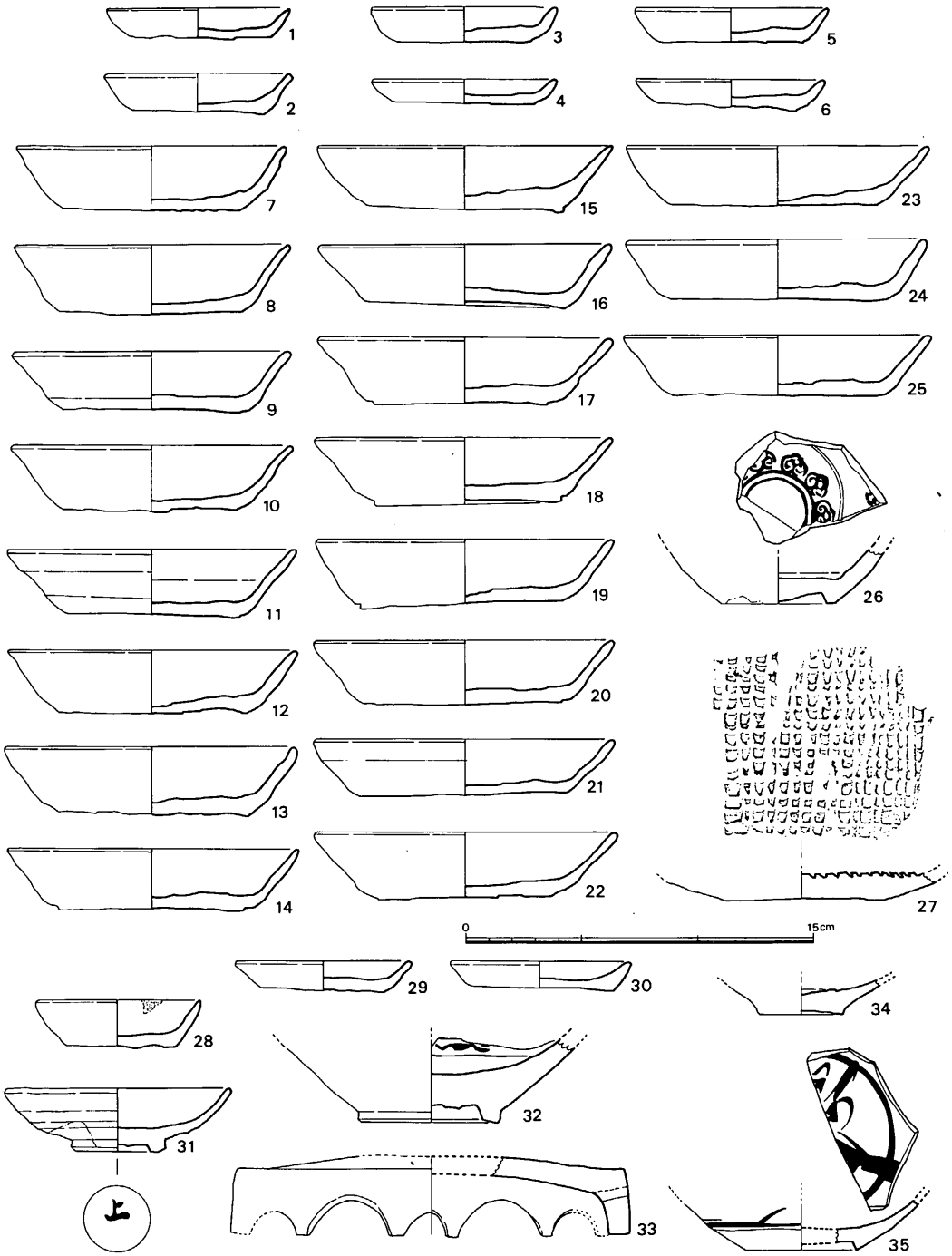
杯a（７～25）　口径11.8cm～13.2cm、器高2.5cm～3.0cm。全て糸切りで板状圧痕をもつ。

高麗青磁

椀(26)　碁笥底風の底部をもつ椀である。内面に白象嵌の如意頭文と二重圏線をもち、体部



第6図　黒色粘質土層・茶褐色粘質土層出土土器実測図



第7図　黒色砂質土層・茶褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図

に白象嵌の文様が一部みえる。灰白色の胎に灰色の強い緑色釉をかける。高台畳付の付近が露胎となる他は施釉される。内面の文様は「正陵」銘をもつ椀に似ている。

灰釉陶器

下し皿(27)　瀬戸産の下し皿の底部片である。下し目はヘラでやゝ深めに刻まれている。灰白色の胎に内面に淡緑色の灰釉がうすくかかり、外面は露胎となっている。底部には糸切り痕がある。

茶褐色土層出土土器（第７図・図版37　別表）

土師器

皿a(29・30)　口径7.6cm～7.8cm、器高1.3cm～1.4cm。糸切りで板状圧痕を有する。

皿b(28)　口径7.2cm、器高2.0cm。糸切りで板状圧痕を有する。内面に油煙が付着。

中国製陶磁器

白磁

皿(31)　口径9.8cm、器高2.7cm。白色のやゝ粘りのある胎に黄色味を帯びた白色釉をかける。外面体部下位と底部は露胎となる。底部に「上」の墨書銘が鮮明に残る。

高麗青磁

椀(32)　器肉の厚い椀の底部片である。内面に白象嵌の二重の圏線とその間に草文風の文様がある。全面にやゝ茶色味のある灰色釉がかかるが、高台畳付部が露胎となるのかは風化が著しいので不明瞭。外底と高台畳付に重ね痕がある。

灰釉陶器

蓋状製品(33)　身受け部と思われる口縁部・体部に透し風になった大小の半円形の切り込みを連続的に交互に入れる。白色の胎にガラス質の淡緑色を帯びる灰釉がかかる。内面の天井部は露胎である。器種・産地とも類例がなく、ここでは蓋状のものとして報告した。

暗褐色土層出土土器（第７図・図版37）

中国陶磁器

染付

皿(35)　底部と体部の少片である。内面には藍色で圏線とその中に花文状の文様が描かれ、外面の体部下位に線状の文様を施す。碁笥底の底部を除いた他は青味を帯びた透明釉がかかるが、風化のため色あせている。

朝鮮製陶磁器

皿(34)　平底の皿の底部片である。赤褐色の粗い胎に白濁の灰色釉をやゝ厚目に施すが、畳付部は露胎となり、そこには重ね痕がある。

木製品（第８・９図）

漆椀(1)　全体に歪みが著しく、また口縁端部と高台端部を欠損する。内外面に黒漆を施し、

内面・外面に同じ文様構成の草花文を朱で描く。腐植土層より出土。

円板状木製品(2)　薄板を整えて円形としたもの。両端はすでに折損する。周縁には法がつけられる。径14.1cm、厚さ0.7cm。杉の柾目材か。

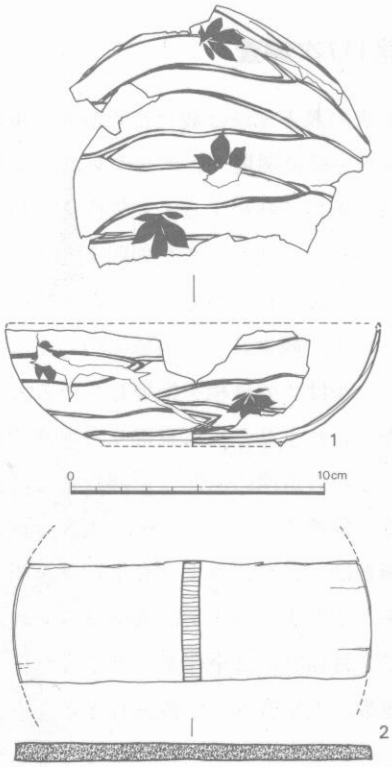
小　結

今回の調査で検出した主要な遺構は溝6条と井戸2基である。これらの遺構はもっぱら13世紀後半以降に形成されたものでそれ以前に存在していた古代の観世音寺に関わる遺構は検出していない。出土遺物から得られたそれらの存続時期は第109・111次調査での時期区分にしたがえばⅢ－1期（13世紀後半）とⅢ－2期（14世紀代）にあてることができる。

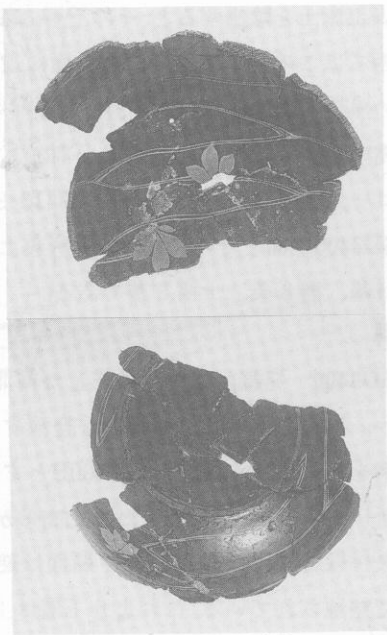
Ⅲ－1期　溝SD3333・3336、井戸SE3345が形成されている。

Ⅲ－2期　溝SD3334・3335・3340、井戸SE3350がある。このうちSE3336は最も早く埋没し、他は14世紀前半頃に埋没している。なおSD3340はほとんど遺物が出土せず正確な時期を把握できていない。切り合関係ではSD3336に後出するのは確実であるが、109次検出の東西溝SD3149と同一のものと考えられるため一応この期としておく。

以上簡単に遺構の構成を概略したが、検出した溝はSD3340をのぞいて小区域を区画する機能を果たしている。いくつかの小ブロックを形成するこうしたあり方は第109・111次調査における東西溝SD3300以北での様相と同様の傾向にあり、当地もまた中世以前は一種の空閑地であったと考えられる。



第8図　木製品実測図


第9図　出土漆椀

第117次調査

本次の調査地域は観世音寺前面の東南部にあたる。発掘区は現参道から約100m東寄りで、30m南側を県道関屋－吉木線が東西に延びている。この地は鏡山条坊案によれば観世音寺寺域に含まれ、条坊で呼称すると左郭四条七坊にあたる。「観世音寺文書」には長徳二年、観世音寺へ新施入された土地として左郭四条七坊の名がみえる。寺地と郭地が相交わる所とされ、またその四至が記載されていることから大宰府条坊復原の有力な手がかりとされてきた。

これまで観世音寺前面域については参道西側で第109・111・115次の調査を実施し、古代末から中世にかけての様相を把握している。当地を含む参道西側部分については過去に第５・23次の調査をこれよりさらに東寄りの地点でおこなっている。しかしながら、調査範囲が狭小であったことから遺構の広がりを摑むまでに至っていない。したがって今回の調査は、遺構の広がりとその変遷を把握することに主眼をおいて実施した。

調査は、11月10日より表土剥ぎを開始し11月14日より遺構検出をおこなう。年末年始の休みを狭んで翌年１月下旬に遺構検出を終え、その後写真撮影、遺構実測をおこない補足調査を含めて２月14日には全作業を終了した。

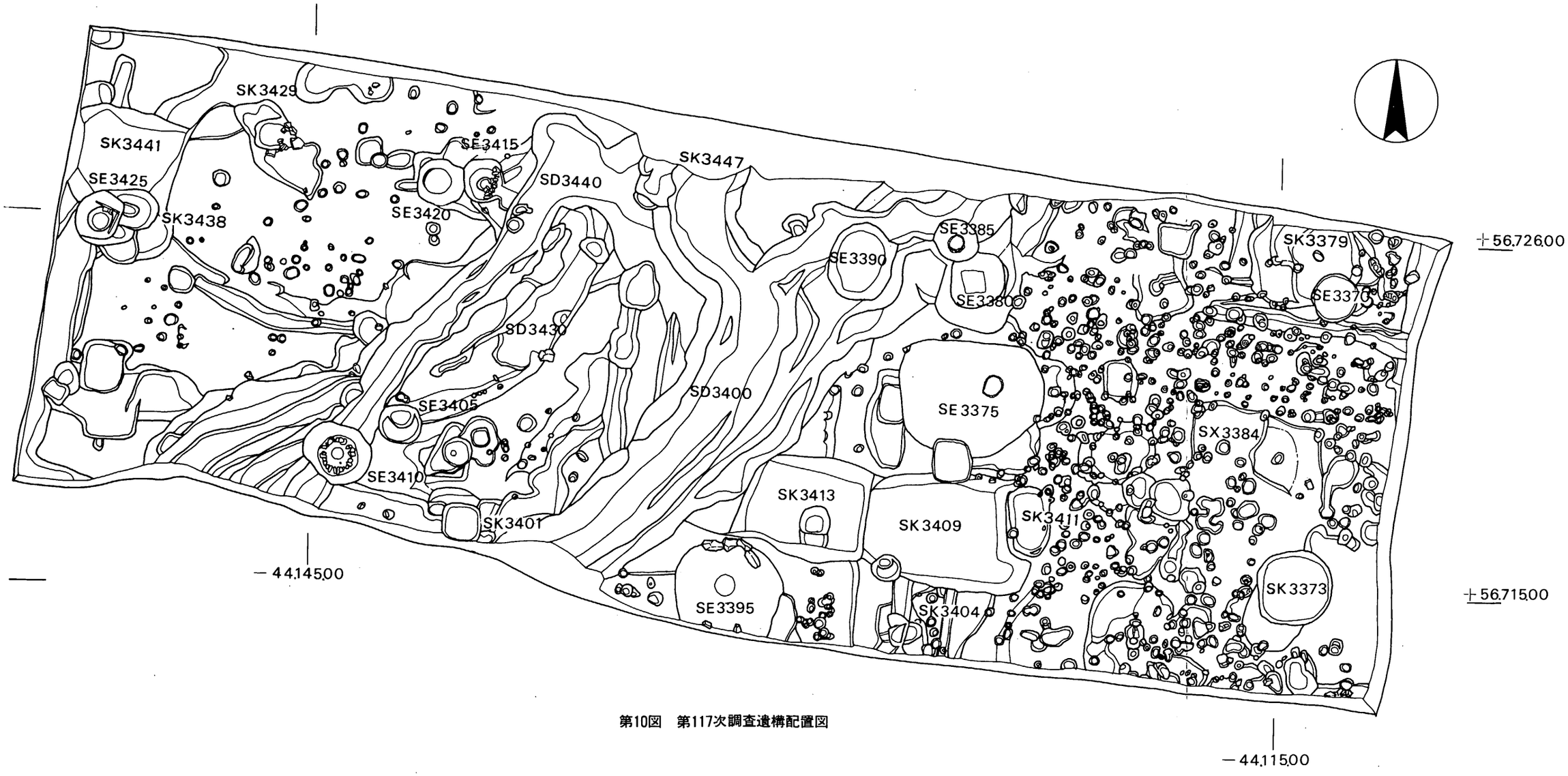
地番は太宰府市大字観世音寺字今道59である。

検出遺構

表土床土を除去すると、その下層には中・近世の土器を含む暗褐色土が堆積している。溝SD3440以西ではこの直下ですでに地山面に達するところもある。東側は一面に黒色土が広がっている。この黒色土上面からはSD3375・3395を始めとして無数のピットが掘り込まれており遺構の密度が高い。今回検出した遺構の大半はこの層位で確認したものである。黒色土を除去すると黄褐色ローム層にいたる。西側でSE3415・3420を検出。中央では南北溝SD3400を検出した。またこのSD3400上面とその周囲は、黄灰色土で整地されている。今回の調査で検出した主な遺構は井戸11基、溝３条、土壙６基である。

溝

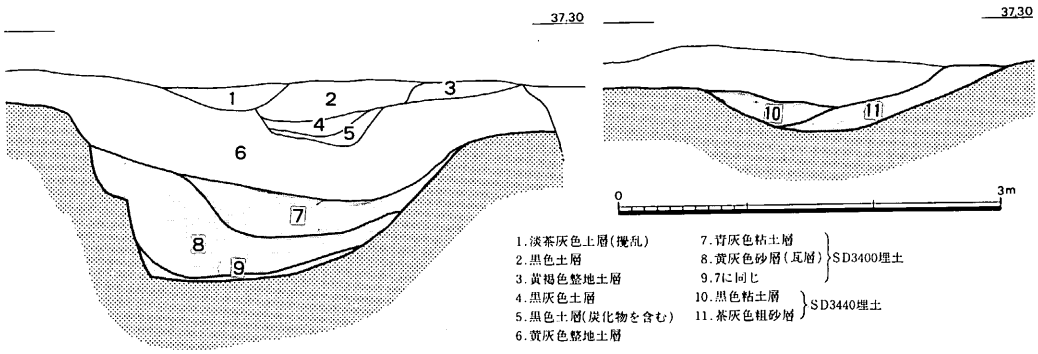
SD3400　発掘区中央で検出した南北溝である。流れは緩く蛇行しながら北西から南西へと向かう。溝の北側には２本の溝が合流する地点があることから全体としてはY字状となっている。西溝をSD3400A、東溝をSD3400Bとする。検出時点での重複関係は東溝SD3400BがSD3400Aを遮断していた。ただし溝底には比高差が認められず、また出土土器にも時期差は認められない。中央付近で幅7m、深さ1.4m、断面は逆台形に近く溝底は平坦である。上部は約60cm程の黄灰色土で整地されている。これより下層は上から青灰色土層・砂層と粘土の互層の堆積し、最下層に青灰色粘土が薄く堆積していた。上部の整地層をのぞく埋土から多量の土器が出土している。



第10図　第117次調査遺構配置図

SD3430　発掘区中央付近でSD3400とほぼ同一方向に走る南北溝。上部は同様に黄灰色土で整地されている。検出段階では後述するSD3440とは同一埋土であったが、下層では二つの流れに分かれていた。南側で両者は切り合い、本溝が先行する。溝幅は一定せず北側は約1.0m、中央付近で1.8mをはかる。南壁際で約0.4mの深さが認められるがそのほかは0.2mを残すのみで、断面はU字状である。埋土は黒色粘質土と最下層に黄灰色粗砂が堆積し、土師器、越州窯系青磁、白磁等が出土した。

SD3440　SD3430と交差して走る南北溝である。南側でSE3410に切り込まれる。SD3430ほど流れを変えることなく北東から南西に流れる。溝幅は1.0～1.6m、深さ0.7m前後、溝内には砂層が厚く堆積していた。土師器、白磁等が出土した。



第11図　SD3400・SD3440土層断面図

井戸

11基の井戸を検出し、そのうち井戸枠が残るものは7基である。なお、分類に際しては以下を使用する。(横田賢次郎「大宰府検出の井戸」『九州歴史資料館論集3』1977年)

SE3370　発掘区の東北隅部で検出した井戸で、土壙SK3379に切られる。掘形の平面プランは1.4×1.5mの円形を呈す。掘形中央のやや北寄りに井戸枠の抜取りと考えられる部分があり、深さ1.8mほど下げたが枠は残っていなかった。

SE3375　発掘区の東半部、中央よりで検出した桶側構造の井戸である。掘形は4.3×3.6mの東西に長い楕円形を呈す。今回調査分の井戸では掘形の規模が最も大きなものである。井戸枠は掘形の中心からかなり東に寄っている。桶側は二段分確認した。上・下段とも21枚の板材を使用し、板材の幅は7～10cmを測る。壁面の崩落が著しかったため、掘形の検出面から1.7mほど下げるにとどめた。Ⅳ類。

SE3380　発掘区の中央部、井戸SE3375の北で検出した井戸で検出した方形縦板構造の井戸である。掘形の北を井戸SE3385に切られている。掘形の平面プランは一辺2.5m前後の隅丸方形を呈す。二段掘りか。井戸枠は一辺0.70cm前後で、遺存状況はきわめて悪い。南辺部では、8枚

の縦板が残っており、一辺10枚程度の板材を使用していたと考えられる。板材の幅は7～10cm、厚さ1cmほどである。II類。

SE3385　発掘区の中央部北壁際で検出した井戸で、井戸SE3380を切る。桶側構造の井戸である。掘形は径1.3～1.4mの円形を呈す。井戸枠は裾開きとなる桶側を二段分確認したが、上段は腐朽が著しい。一段の桶側の深さは0.83m以上になる。板材は下段で幅9cm、厚さ1cm前後のものを19枚使用している。IV類。

SE3390　発掘区の中央北壁寄り、井戸SE3385の西で検出した桶側構造の井戸である。SD3400を切っている。掘形は南北に長い楕円形を呈する。井戸枠は掘形のやや南に寄っており、三段分を確認したが、上段の残りはきわめて悪い。中段での桶側の上端径0.46m、下端径0.64m。一段の桶側の深さは0.78mをはかる。板材は幅8～10cm、厚さ1～2cm。下段は上端径0.55m。中段に比べ板材の幅が8～14cmと幅広くなる。IV類。

SE3395　発掘区の中央部南端で検出した桶側構造と考えられる井戸である。掘形は径3.4m前後の不整円形を呈すが南側は発掘区外となる。掘形の中央やや北寄りに井戸枠の抜取り跡があり、深さ1～1.4mの所に竹タガが残っている。井戸枠の埋土は黒色の粘質土で40～50cmほどの花崗岩の自然石が落し込まれていた。井戸廃棄後の枠部の沈下を防ぐためのものと思われる。

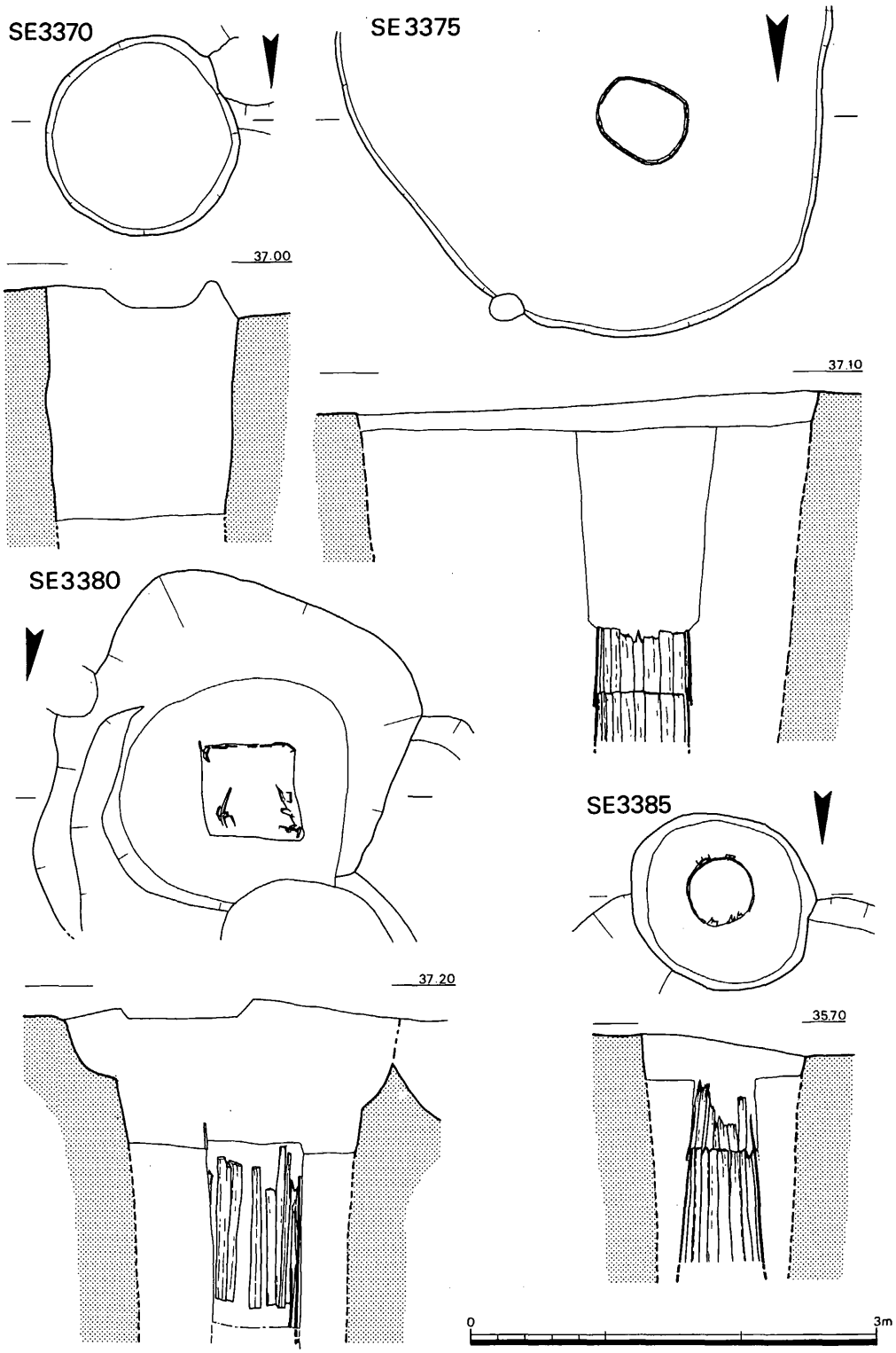
SE3405　発掘区の南西部で検出した井戸である。掘形の平面プランは径1.3mの円形を呈す。深さ2mほどのところに三日月形のテラスをもつ。井戸枠は残存しない。埋土は黒灰色の粘質土である。

SE3410　発掘区の南西部、南壁際で検出した石組の井戸で底部に曲物を据えるものか。石はほとんどが抜き取られており、最下段を残すのみである。掘形は上端部が1.4mの北西・南東方向に長い楕円形を呈す。遺構面から深さ2.0mまで確認した。北壁際には、長さ44cm以上の竹が残っていた。井戸廃棄時の水神祭りに関わるものと考えられる。溝SD3440と切り合う。

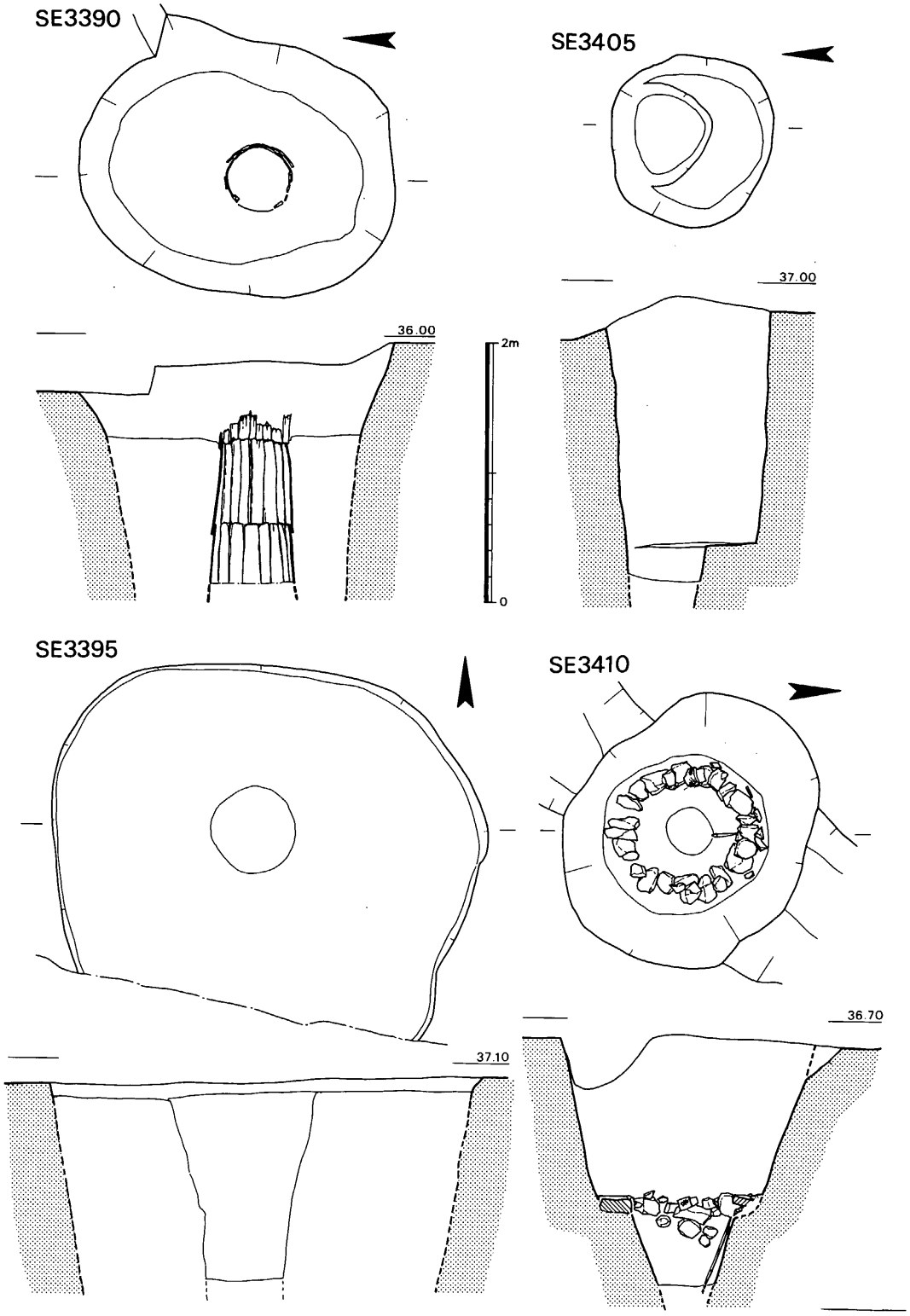
SE3415　発掘区の西半部北寄りで検出した井戸である。掘形の平面プランは径1.3mの円形を呈す。下端部の径1.0m、深さ1.0mでさらに径0.4m、深さ0.2mの穴が掘り込まれている。井戸枠は遺存していないが、底部に曲物を据えた井戸である可能性がある。なお、掘形埋土の上層では、自然石の集積がみられたが井戸に伴うものかどうかは不明。

SE3420　井戸SE3415の西に接する桶側構造の井戸である。掘形は径1.5mの円形を呈す。井戸枠は掘形の西壁際で検出した。桶側は一段確認したが、腐朽が著しい。桶側の深さは0.6m以上となる。板材は幅10cm、厚さは1cm前後である。IV類。

SE3425　発掘区のやや北寄りの東壁際で検出した井戸である。掘形は東側を新期の土壙に切られているが、不整円形を呈すものと考えられる。井戸枠は掘形のほぼ中央にあり、上部は方形縦板枠、下部には曲物を据える。上部の井戸枠と下部の曲物の間の約0.5mには枠材がなく、地山を井戸枠とする特異な構造である。上部は縦板を横桟によって固定し、隅部には支柱をた



第12図　井戸実測図(1)



第13図　井戸実測図(2)

てる。横桟は掘形の地山に直接固定される。上段の横桟はすでに腐朽していたが、支柱の枘穴で固定するものである。下部の曲物は径0.5m、深さ0.2mをはかる。

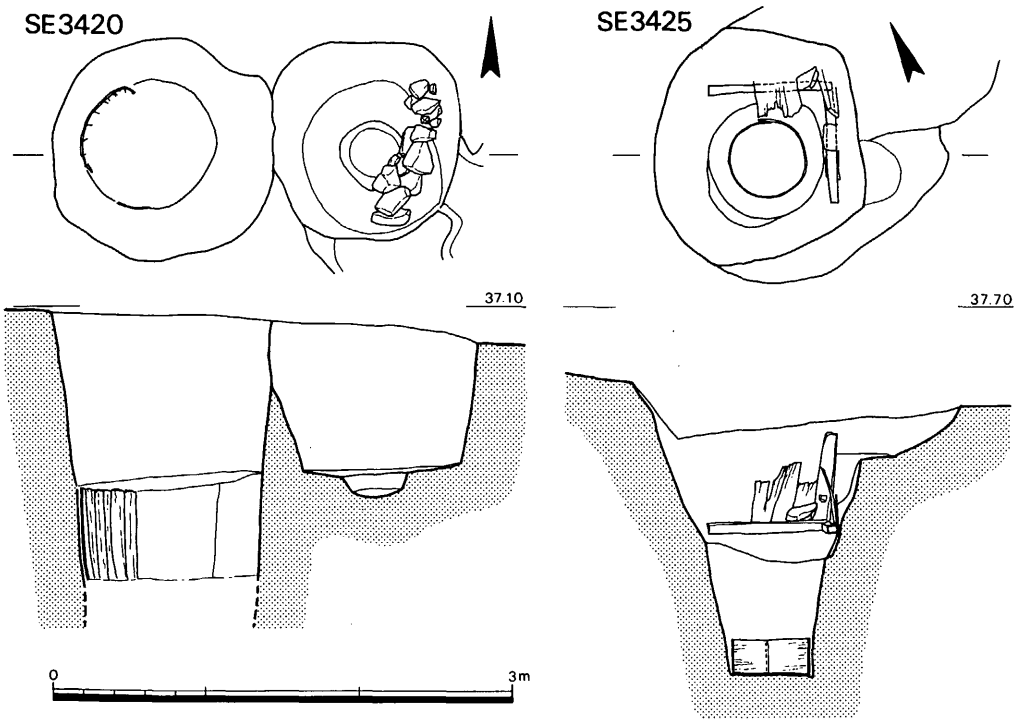
土壙

SK3373　発掘区の南東隅部で黒色土を除去した段階で検出した。隅丸方形プランの土壙。径2.3m、深さ0.4m、埋土は灰色砂質土に黄褐色土ブロックが混入していた。井戸であった可能性もある。

SK3379　発掘区東北隅近くで検出した円形に近い土壙。北側の一部は発掘区壁面にかかる。東西径2.2m、深さ0.4m。多量の焼土と人頭大近い石が投棄されていた。SE3370に掘り込まれる。黒色土除去後に検出した。

SK3399　発掘区東寄りで検出した長円形土壙。長軸2.15m、短軸1.2m、深さ0.25m。横断面はU字形であり、底面全体に黄褐色粘土が薄く広がっていた。遺物はほとんど出土しておらず性格は不明。

SK3401　発掘区南寄りで、黒色土除去後に黄褐色整地面で検出した長方形土壙。径1.2m、深さ1.05m。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。内部は泥炭層で充満していた。完形の土師器坏や白磁椀等が一括出土している。井戸であった可能性が高い。



第14図　井戸実測図(3)

SK3404　発掘区中央寄りで検出した二段掘りの小土壙。SK3409によって上部を削られている。上端径0.9m、深さ0.8m。完形の土師器数点が出土し、その多くは底部に穿孔の認められるものである。

SK3409　発掘区中央寄りで検出した規模の大きい長方形土壙。東壁の上部をSK3399に切り込まれている。東西5.2m、南北3.6m、深さ0.7m。底面はフラットである。埋土は黄褐色土ブロックが混入した黒灰土の単純堆積で、徐々に埋まったのではなく一気に埋め戻されたもようである。

SK3411　発掘区中央東寄りで、SK3409に切り込んだ正方形に近い小土壙。長軸1.3m、短軸1.15m。非常に浅く、0.1m程しか遺存していなかった。土壙中央から焼土塊・炭化物とともに鋳造関係に使われたと考えられる炉壁がまとまって検出できた。

SK3413　発掘区中央付近で検出した長方形土壙。東西3.9m、南北3.35m、深さ0.95m。SK3409とは連続して掘り込まれる。底面は同様にフラットであるがより深い。上面での重複関係は本土壙が後出する。埋土も一度に埋め戻されるなどSK3409と共通する性格のものである。

SK3429　発掘区西北部で検出した円形土壙。径1.1m、深さ0.35m。埋土中には拳大の石が混入し、少量の土器と石鍋片が出土。

SK3438　発掘区西端で検出した浅い円形土壙。井戸SE3425によって西半を掘り込まれている。径1.8m以上、深さ0.26m。埋土は砂を主体とするもので、土師器坏等が出土。

SK3441　発掘区西北隅で検出した不整形土壙。南北径3.3m、深さ0.48m。南壁はSE3425、SK3438を切っている。埋土の上部から拳大の石が多量に出土している。

SK3447　発掘区中央の北端にかかって検出した円形土壙。SD3400埋没後に掘り込まれる。北側の発掘区壁面が崩壊のおそれがあったので、調査中に埋め戻しを行った。その結果、詳しい計測は不可能であった。検出時点では径1.2m前後である。深さは少なくとも１m以上であった。埋土はSK3401同様泥炭層である。井戸であった可能性もある。

その他の遺構

SD3400より以東の発掘区では上層、下層で高い密度のピット群を検出している。それらのうちには建物の柱穴としてまとまるものが存在する可能性は大きいが、あまりに密集していたため、敢えて建物柱穴として拾うことはひかえておく。この他、ピットの埋土に焼土や炉壁片を混えたものがいくつか存在していた。

出土遺物

SD3400出土土器・陶磁器（第15・16図・図版38・39　別表）

土師器

皿ａ（３～７）　全てヘラ切りである。口径9.8cm～11.4cm、器高1.2cm～2.7cm。内底はナデで外底には板状圧痕を有する。７には油煙が付着する。

皿ｃ（１・２）　口径12.0cm～12.6cm、器高2.0cm～2.5cm。１には板状圧痕があり、２の底部には径1.6cmの焼成後の穿孔がある。

杯（８～11）　口径11.5cm～12.2cm、器高2.9～3.3cm。全てヘラ切りで板状圧痕を有する。8・10には油煙が付着する。

椀（13～16）　口径12.9cm～15.3cm、器高5.3cm～5.8cm。直線的な体部をもつ13・14と体部に丸味をもち、口縁部を外反させる15・16がある。

甕（20・21）　20は体部の外面を縦の細かい刷毛目調整し、内面を粗いヘラ削りする。外面には煤が付着する。21は内面と口縁部をヨコナデし、体部の外面は刷毛目調整後ナデ調整する。

黒色土器

内面のみを燻すＡと内外面を燻すＢがある。

黒色土器Ａ

椀（12）．底部片であるが内面を黒色に燻す。内面のヘラミガキは不明であるが器面は滑らかである。底部の中心に径0.5cmの焼成後の穿孔がある。また外底にはヘラによる刻線がある。

黒色土器Ｂ

皿（17）　直上に引出された口縁部をもつ高台付皿である。内外面をヘラミガキするが、内面を放射状に、外面を横方向に比較的丁寧にミガキを施す。

椀（18・19）　18は口径14.9cm、器高6.1cm。内外面をヨコ方向にヘラミガキする。19は口径16.8cm、器高7.6cm。内外面のミガキは粗い。

緑釉陶器

椀（22・23）　22は須恵質の胎で、内外面に淡緑色の釉をかける。23は土師質の胎で濃緑色の釉がかかる。高台の内面および底部は無釉である。底部には糸切り痕がある。

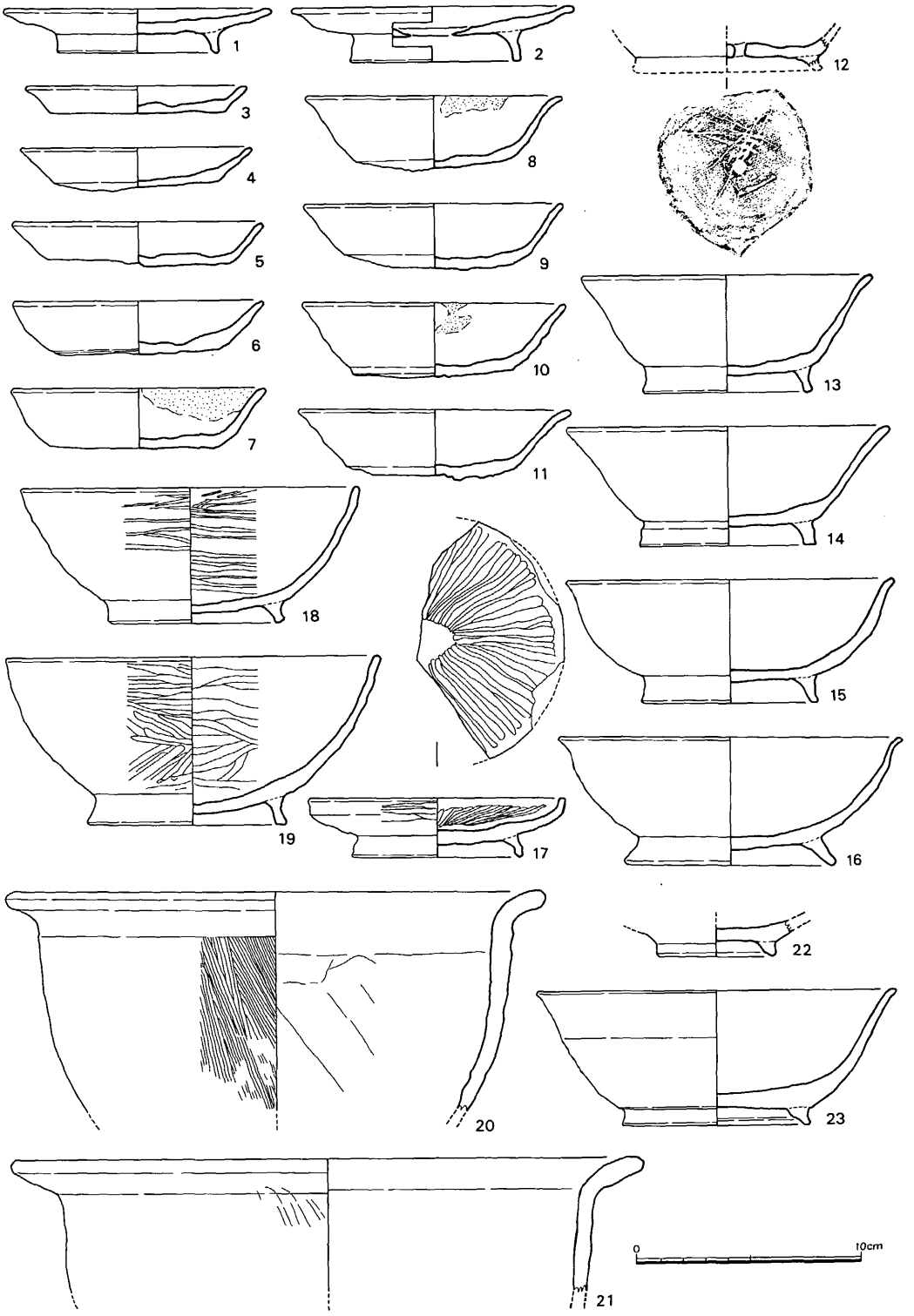
須恵質土器

鉢（38）　口径21.0cmに復原できる。口縁部を玉縁状に丸くする。胎土は砂粒を余り含まず緻密で、灰白色を呈する。硬質に焼成されている。

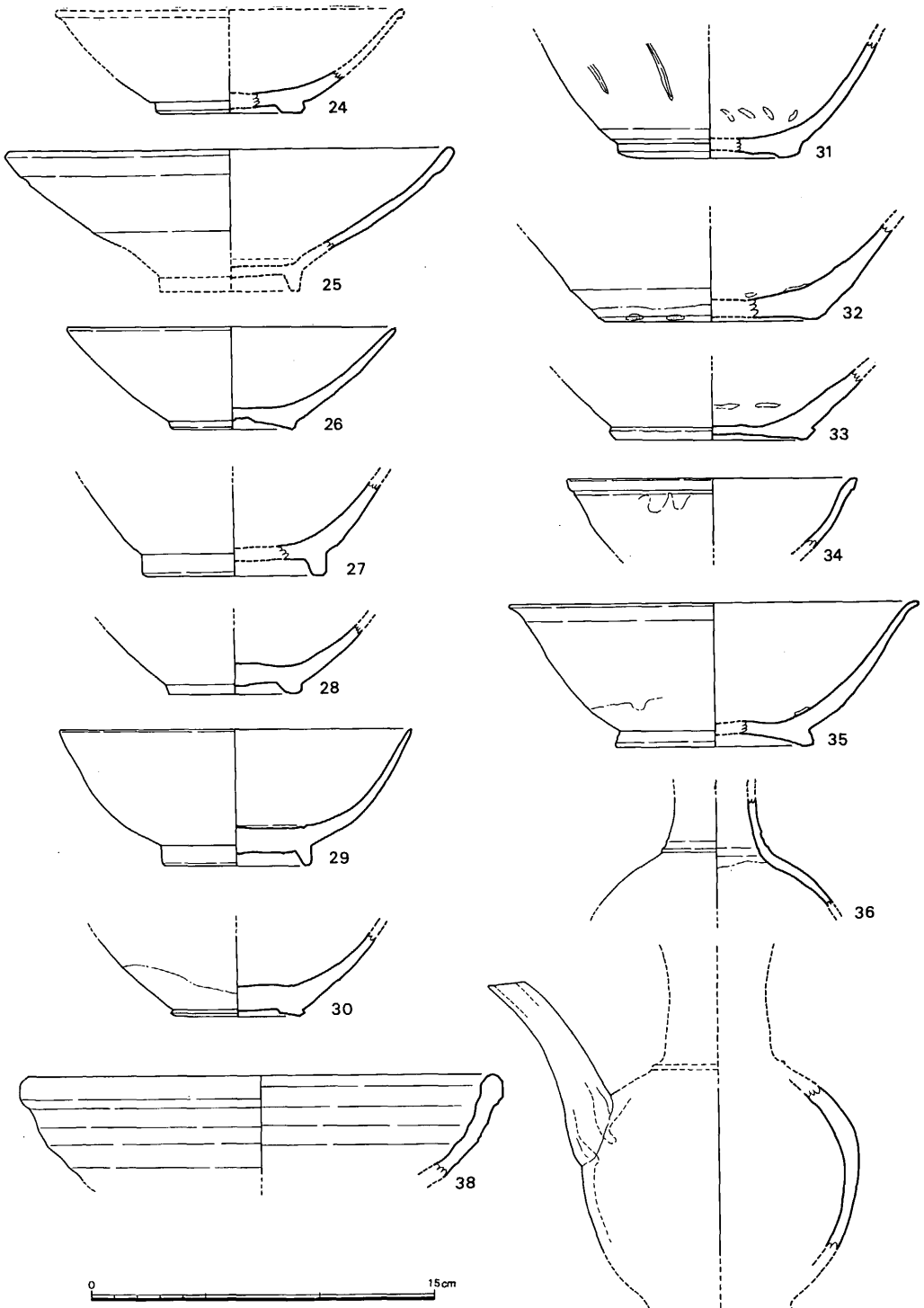
中国陶磁

白磁

椀（24・25）　24は白濁色の緻密な胎に白色の光沢ある釉をかける。高台畳付部を含め底部は



第15図　SD3400出土土器・陶磁器実測図(1)



第16図　SD3400出土陶磁器実測図(2)

露胎である。蛇の目高台の畳付部は手持ちヘラ削りする。25は体部と口縁部が大きく開き、口縁部に扁平な玉縁を有する椀である。白色緻密な胎に淡青色味のある白色釉をかけるが、外面の体部下位は露胎とする。高台は蛇の目である可能性が強いが、ここでは輪高台を考えた。

越州窯系青磁

椀(26～35)　26は「蛇ノ目」高台のⅠ－1類である。27～29は全面施釉するⅠ－2類である。30はⅡ－1類。30・32～35はⅡ類で体部下位を[註1]露胎とする。35の釉下には白化粧土をかける。31は全面施釉であるが、高台の畳付を磨って露胎とする。

水注(36・37)　2点とも同形態を示す水注で、36は肩部と頸部片、37は体部と注口片である。瓜胴になるのかは少片であるため不明。37は風化のため釉は白く、剝落している。

SD3430出土土器・陶磁器（第17・18図・図版40　別表）

土師器

皿a（1～7・9）　1は糸切り、2～7・9はヘラ切りである。1は口径9.0cm、器高0.8cm。板状圧痕を有する。口径9.5cm～10.2cm、器高1.1cm～1.5cmの2～7と器高の高い口径9.5cm、器高2.0cmの9がある。いずれも内底はナデで、外底に板状圧痕を有する。

皿c(8)　口径12.8cm、器高2.6cm。外底にはヘラ切り痕を残し、板状圧痕を有する。

杯(10・11)　10は口径10.8cm、器高3.1cm、11は口径15.0cm、器高2.5cm。いずれもヘラ切りである。

丸底の杯(12～15)　口径14.5cm～15.4cm、器高3.0cm～3.9cm。内面はミガキで、13の内底にはコテ当て痕がある。

椀(16)　口径を12.4cm、器高4.9cmに復原。胎土には砂粒を比較的多く含む。全体はヨコナデ調整する。

壺(17)　口頸部を欠失する。全体に磨滅が著しく調整は不明。

甕(18～20)　18・19は小片であるため口径は復原できない。18の外面には部分的に叩きの痕跡がある。19の内面には粗い刷毛目があり、外面には煤が付着する。20は復原口径20.0cm。体部の外面は刷毛目調整し、内面はヘラ状工具によるナデ状の調整をする。外面には煤が付着。

黒色土器

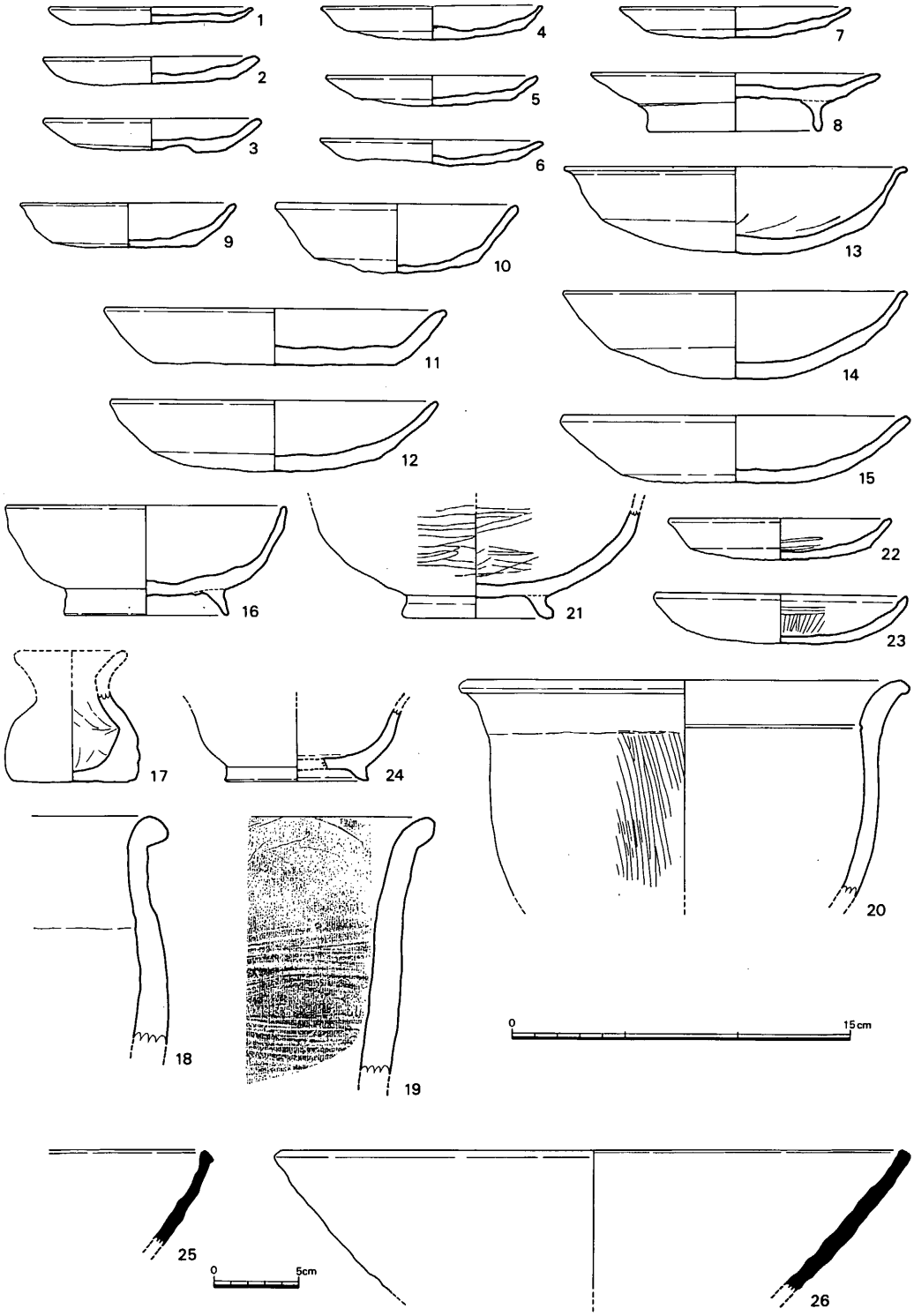
椀(21)．内外面を黒色に燻す黒色土器Bである。内外面に粗いミガキを施す。

瓦器

皿(22・23)　22は内面にミガキを施すが外面は不明である。23は内面の底部を放射状に、体部をヨコ方向にヘラミガキする。

瓦質土器

鉢(25・26)　25は口径40.0cm程に復原できるが、小片であるため確でない。口縁部は黒灰色を呈し、他は灰色。26は口径38.0cmに復原できる。胎土には砂粒を多く含み、器肉は灰色であ



第17図　SD3430出土土器実測図(1)

るが、器面は真黒色を呈する。

緑釉陶器

椀(24)　胎土は淡茶色で土師質。高台畳付に浅い凹線を入れる。淡緑色の釉を全面にかける。

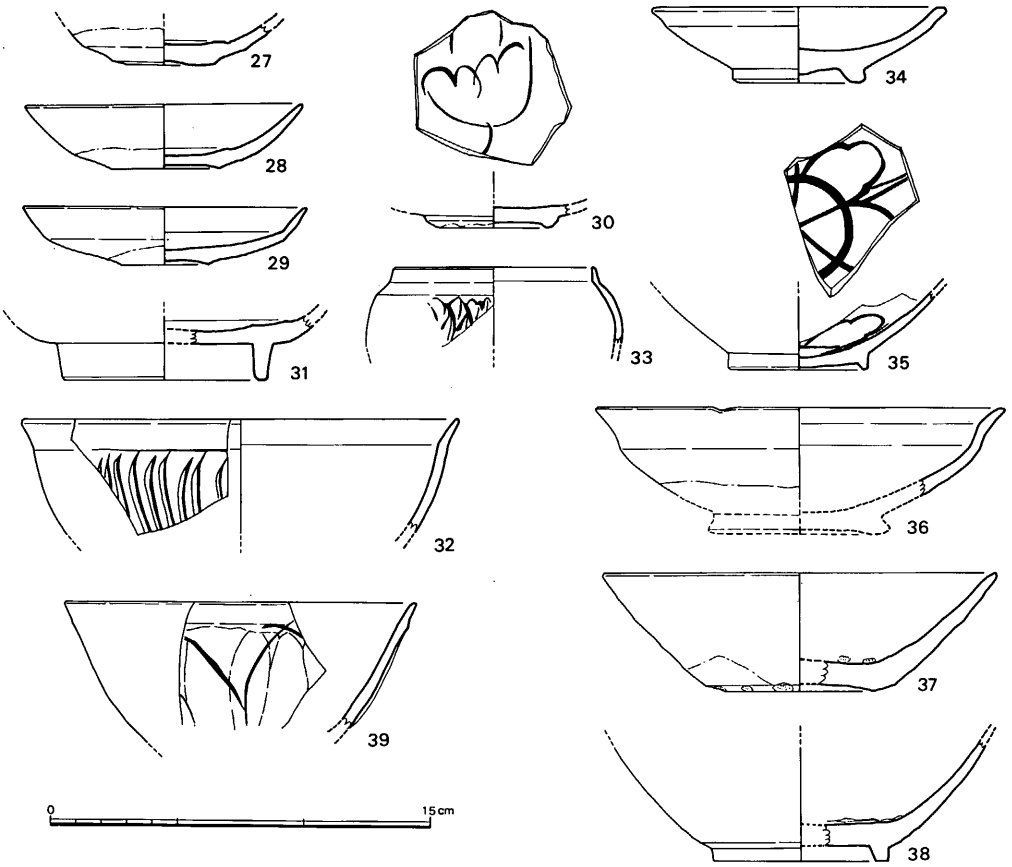
中国陶磁器

白磁

皿(27～30)　27・28はⅥ－１・b類。29はⅥ－１・a類である。いずれも胎土は灰白色ないし、淡茶白色で、釉は灰白色ないし黄色味のある白色釉をうすくかける。30は底部を高台風に削出すⅦ類で、見込みにヘラで花文を描く。釉は透明に近い白色釉。底部は露胎。

椀(31・32・39)　31は白濁色の緻密な胎に透明に近い淡青色味のあるガラス質の釉がかかる。高台内面と底部は露胎。32は外面に片切彫りの文様を入れる。Ⅴ類。

39は小片であるが、口径13.8cmに復原できる。外面の体部には蓮弁を削り出し、その輪郭を



第18図　SD3430出土陶磁器実測図(2)

ヘラの先端で描く。いわゆる龍泉窯系の鎬蓮弁の施文方法とは異なる。やゝ黄色味のある白色の胎に透明感のある白色釉をかける。

青白磁

壺(33)　やゝ大き目の壺で、白色の胎に淡青色釉を全面に施すが、口縁部の内面と端部は削り露胎とする。

越州窯系青磁

皿(34)　淡茶色の胎に黄色味のある緑茶色釉を全面にかけるが、高台畳付は露胎で、そこには茶色に発色した目跡を残す。越州窯系としてはやゝ疑問があるが、この類に入れた。

椀(35～38)　内面にヘラで施文する北宋タイプで器肉が薄く、灰緑色釉を全面に施す。底部には白い粘土の目跡を残す。36・37はII類。38は全面施釉するI－2類。内底に重ね痕が残る。

SD3440下層出土土器・陶磁器（第19図・図版41　別表）

土師器

皿a(1～4)　1・2は糸切り、3・4はヘラ切りである。1・2は口径9.0cm～9.5cm、器高1.2cm～1.5cm。3・4は口径9.5cm～9.6cm、器高1.3cm～1.6cm。

杯a(6～8)　口径14.8cm～15.6cm。器高2.4cm～3.0cm。全てヘラ切り。底部に板状圧痕を残す。

杯c(5)　口径12.6cm、器高3.5cm。底部に糸切り痕を残す。

丸底の杯(9・10)　口径15.4cm～15.7cm。内面にミガキを施す。

瓦器

椀(11)　口径17.2cm、器高5.7cm。内外面を粗いヘラミガキする。

中国陶磁器

白磁

皿(13・14)　13はVI類、14はII－1類である。

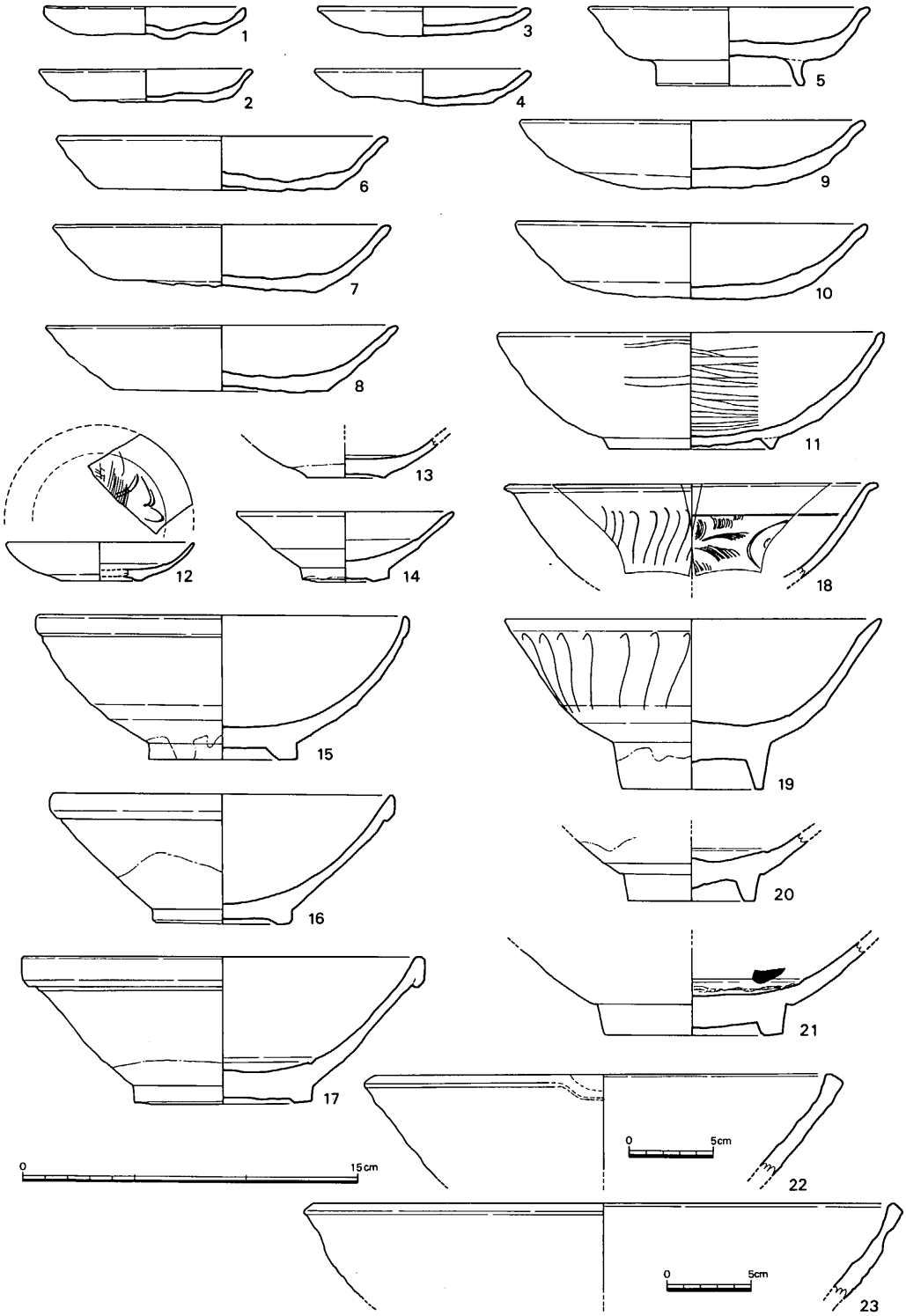
椀(15～21)　15は小さな玉縁をもち、やゝ黄味のある白色釉をかけるII－1類。16・17はIV類で、16は見込みに段を有さないもの、17はI類の典型的なもの。18～20は細く高い高台を有するV類。18の体部内面には櫛状とヘラによる施文、外面には片切彫風の細い施文がある。内外面に施文する例は少ない。20は底部片であるがV－1類。21は見込の全面の釉をカキ取るもので、見込との境に鉄絵がある。

青白磁

皿(12)　白色緻密な胎に透明に近い青白色釉を施し、低く削り出された高台の内面は露胎となっている。内面見込みには櫛状工具とヘラによる文様がある。

須恵質土器

摺鉢(22・23)　22は口径28.4cm。焼成はやゝ軟質で砂礫を多く含む。口縁部は黒灰色で他は



第19図　SD3440下層出土土器・陶磁器実測図

暗灰色を呈する。23は少片であるため口径はやゝ不確実であるが、大形のものである。22同様、口縁部は黒灰色、他は灰色ないし暗灰色を呈する。

SD3440上層出土土器・陶磁器（第20図・図版42　別表）

土師器

皿a(24～33)　24～26は糸切り、27～33はヘラ切りである。24～26は口径9.0cm～9.1cm、器高1.1cm～1.2cm。27～33は口径9.0cm～10.2cm、器高1.1cm～1.9cm。12には油煙が付着する。

丸底の杯(34～39)　口径14.2cm～15.6cm。内面をミガキ、34・35・39にはコテ当て痕が残る。

瓦器

皿(40)　内面の全面を粗いヘラミガキし、内面と外面の一部を燻している。

椀(41～44)　41は口縁部を欠失するが、小椀とみられる。内面見込を放射状にヘラミガキし、体部との境を周縁に沿うようにヘラミガキする。胎土には砂粒をほとんど含まず焼成も良好。燻しは全体に及び黒灰色を呈する。42～44は内外面に粗いヘラミガキを施し、42には燻しがなく、43は全面を燻す。44は内面と外面の口縁部付近を燻す。いずれも胎土には砂粒を含み焼成も良好である。

須恵器

甕(45)　口縁部を折り曲げ玉縁とする口径18.2cmの甕である。胎土には余り砂粒を含まず、器肉は灰褐色を呈する。

中国陶磁器

白磁

皿(46～48)　46・47はⅥ類。48はⅡ類である。

小壺(49)　白灰色の胎に淡黄白色の釉がかかる。内面は露胎である。

椀(50・51)　白濁色の胎に釉はうす目で灰色を帯びた白色釉をかける。内面の体部から口縁部にかけて白い粘土で割花をつくり、外面口縁には切り込みを入れて輪花とする。51はⅣ類で、灰色味のある白色釉がかかる。

青磁

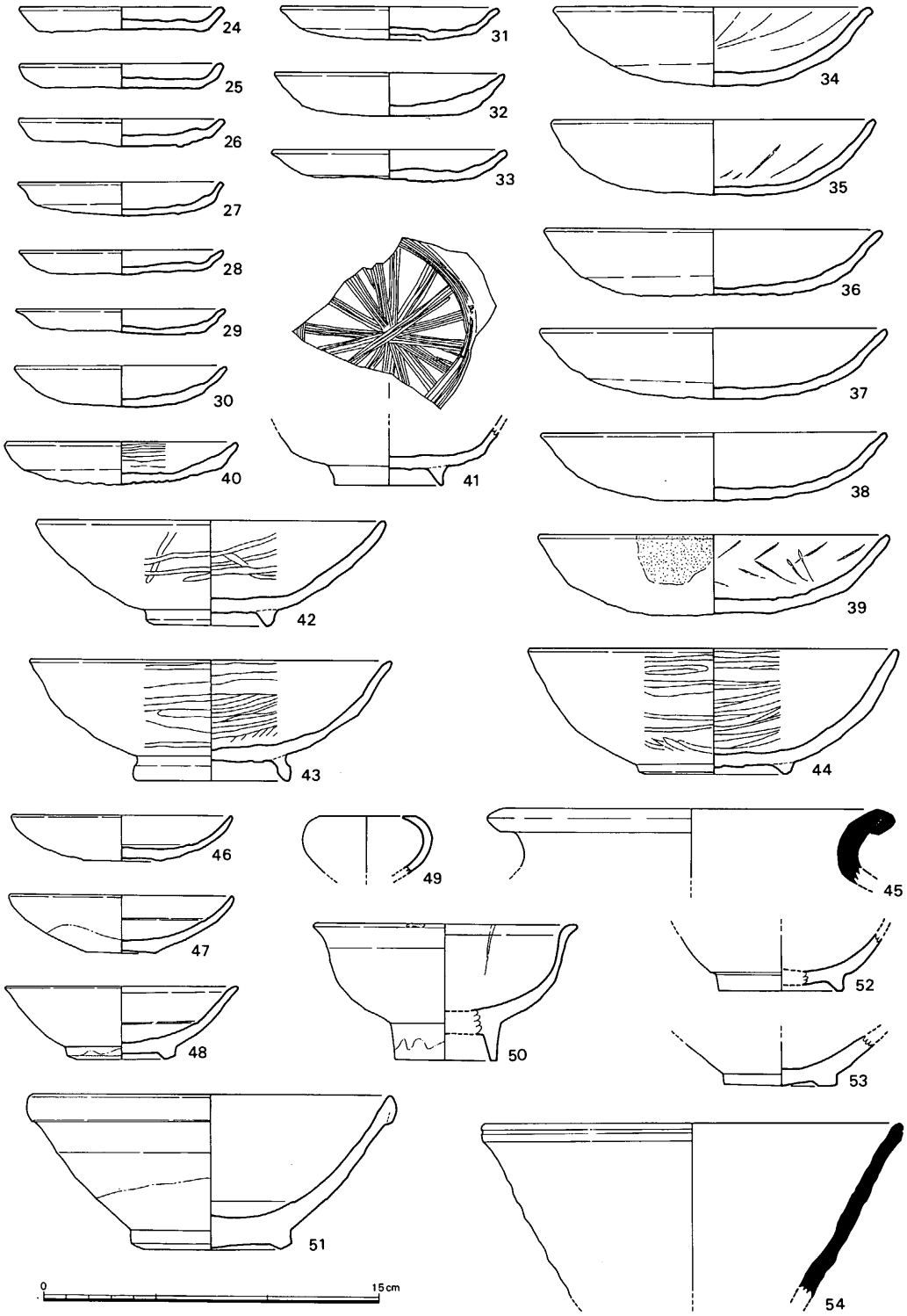
椀(52・53)　52は高台畳付部と露胎とする他は全面に緑色の釉をかける。内面見込に目跡が残る。53は断面四角の低い高台を有し高台畳付部は釉を削り取り露胎とする他は緑色の釉をやゝ厚目にかける。越州窯系か。

須恵質土器

鉢(54)　片口の鉢とみられる。口縁部は黒化し、全体は暗灰色を呈する。胎土には比較的砂礫を多く含み、焼成は堅緻である。内面の体部下位は摺れて平滑となる。

SE3390出土土器・陶磁器（第21図・図版43）

中国輸入陶磁器



第20図　SD3440上層出土土器・陶磁器実測図

白磁

皿(2)　II－2類で、外面の体部3分2以下と底部は露胎となる。

青白磁

水滴(1)　小形の水注形をした水滴である。口頸部と底部を欠失する。全体に風化が著しく、本来の釉色は残っていない。内面と底部は露胎。

青磁

杯(3)　龍泉窯系のIII－4類の口縁部片である。

椀(4～7)　龍泉窯系I－5類で、6の見込に「河濱遺範」のスタンプがある。7は越州窯系II－2類で白化粧土の上に黄緑色釉をかける。

SE3405出土土器（第21図　別表）

須恵質土器

鉢(8)　少片であるため口径は不明。内面は刷毛目調整する。砂粒を含み灰褐色を呈する。

SE3410出土土器・陶磁器（第21図　別表）

土師器

皿a(9～11)　口径9.6cm～10.5cm、器高1.4cm～1.5cm。ヘラ切りで、板状圧痕を有する。

杯a(12)　口径14.7cm、器高2.9cm。糸切りで板状圧痕を有する。

丸底の杯(13)　内面のミガキは磨滅のため不鮮明である。

中国陶磁器

白磁

皿(14・15)　14は口縁部を削り露胎とする口禿で、他は全面施釉する。15は内面見込を輪状に釉をカキ取るIII類。

朝鮮陶磁

椀(16)　小形の椀である。口縁部を外反させる。淡灰色の粗い胎に緑色のガラス質の釉が全面にかかる。全体に白く風化した感じである。高台畳付には重ね焼きの痕跡がある。

SE3415出土土器（第21図　別表）

土師器

皿a(17～22)　口径9.2cm～10.4cm、器高1.0cm～1.5cm。全てヘラ切りで17には板状圧痕がある。

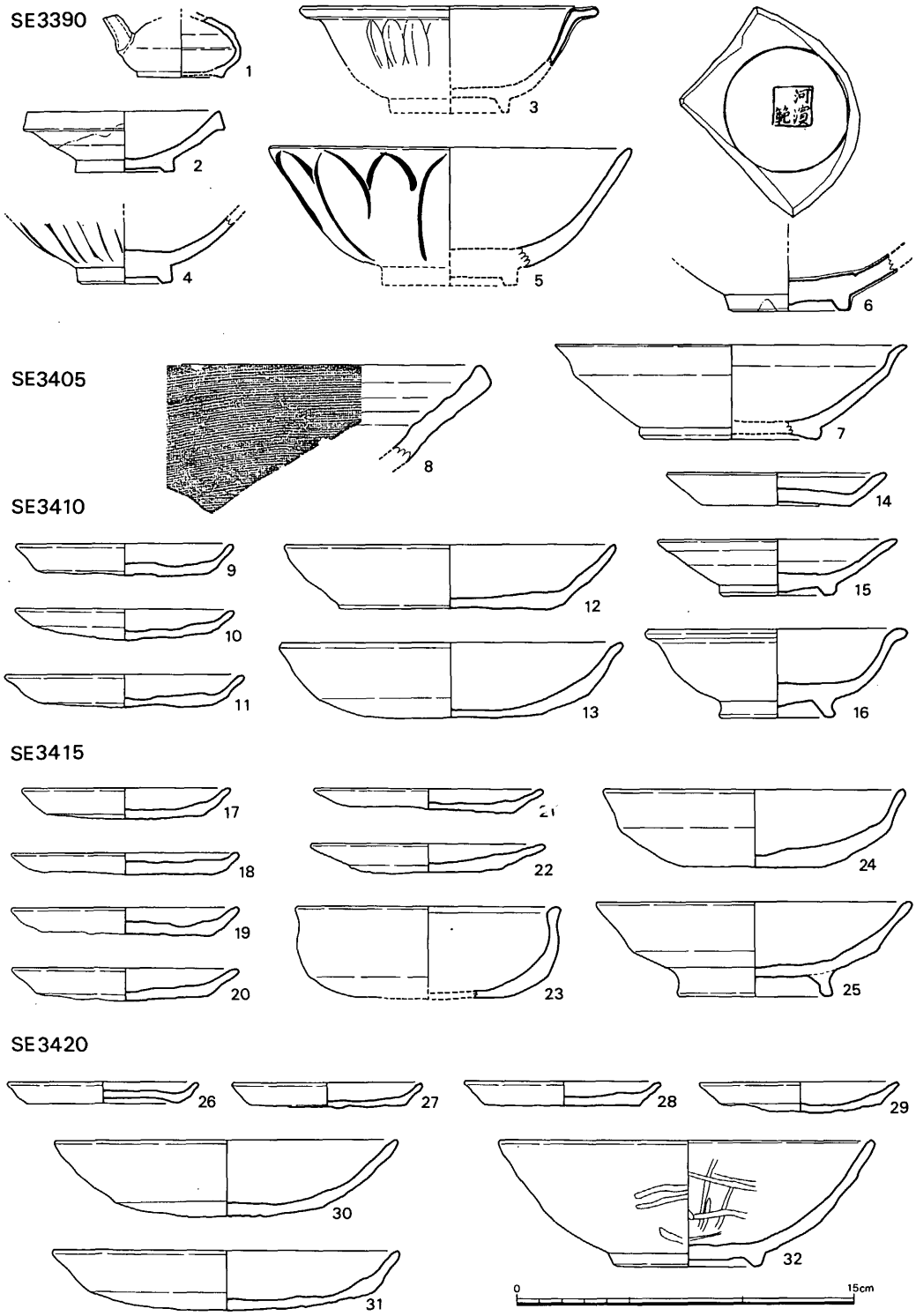
杯(23)　復原口径11.8cm、器高4.1cm。丸底風の形態であるが、体部や口縁部にやゝ特徴があり、特異な形態と云える。全体の調整はヨコナデで、無高台の椀とした方が良いかもしれない。

丸底の杯(24)　口径13.4cm、器高3.5cm。内面の底部付近はミガキを施す。

椀(25)　復原口径14.0cm、器高4.3cm。丸底の杯に高台を貼付した形態である。

SE3420出土土器（第21図・図版43　別表）

土師器



第21図　SE3390・3405・3410・3415・3420出土土器・陶磁器実測図

Ⅲａ(26～29)　口径8.3cm～8.8cm、器高1.0cm～1.4cm。全て糸切りで、26を除いて板状圧痕を有する。

丸底の杯(30・31)　30は糸切りで希有な例と言える。口径15.2cm、器高3.5cm。内面はミガキを施す。底部には板状圧痕を有する。31は15.4cm～15.5cm、器高2.7cm。底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。

瓦器

椀(32)　内外面に粗いヘラミガキを施す。口径16.6cm、器高5.6cm。胎土には砂粒を含み黄褐色を呈する。外面と口縁部内面が燻されている。底部に糸切り痕を残す。

SE3425出土土器・陶磁器（第22図・図版43　別表）

土師器

Ⅲａ(１～３)　口径8.1cm～9.6cm、器高1.2cm～1.6cm。全てヘラ切り。

杯a(４～６)　丸底気味のものである。底部は全てヘラ切り。口径13.6cm～14.6cm、器高2.4cm～2.8cm。板状圧痕を有する。５はミガキが明瞭でないが、丸底の杯になるのかもしれない。

丸底の杯(7)　口径15.2cm、器高3.3cm。内面にミガキを施す。

須恵質土器

鉢(10)　口縁部は黒灰色を呈し、他は灰色を呈する。胎土にはやゝ砂粒を多く含む。

中国陶磁器

白磁

Ⅲ(8)　Ⅵ－１・b類で、黄白色釉を施す。

青磁

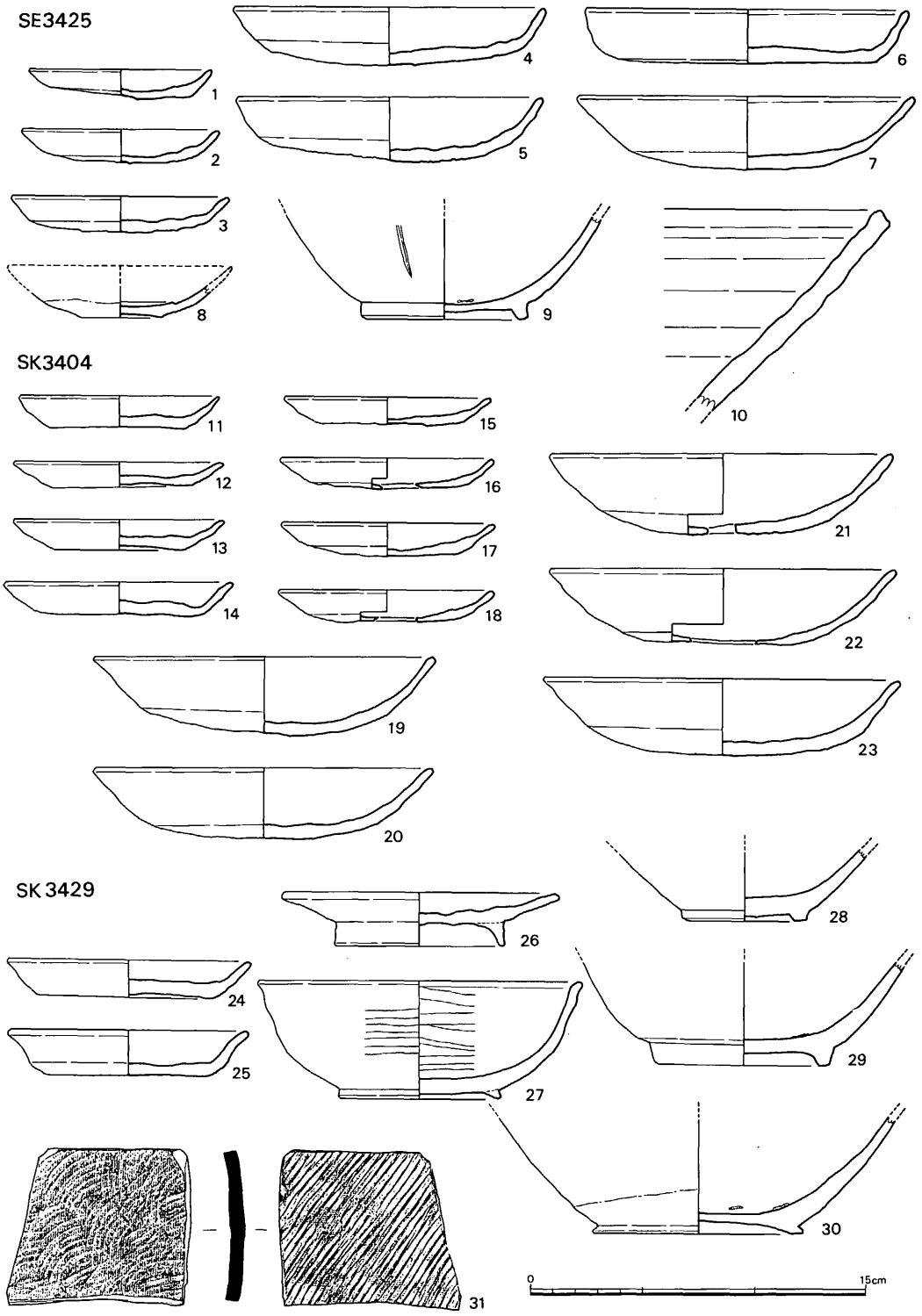
椀(9)　越州窯系で、淡茶色の胎に茶緑色の釉を全面施釉するⅠ類である。体部外面にはヘラ押えによる割花がある。高台畳付と内底に目跡を残す。

SK3404出土土器（第22図　別表）

土師器

Ⅲａ(11～18)　11～14は糸切り、15～18はヘラ切りである。11～14は口径8.9cm～10.1cm。器高1.1cm～1.5cm。15～16は口径9.3cm～9.6cm、器高1.2cm～1.5cm。16と18の底部には2.0cm前後の焼成後の穿孔がある。

丸底の杯(19～23)　口径15.2cm～16.0cm、器高3.4cm～3.6cm。内面はミガキで、21・22の底部には焼成後の穿孔がある。



第22図　SE3425・SK3404・3429出土土器・陶磁器実測図

SK3429出土土器（第22図・図版44　別表）

土師器

Ⅲａ(24・25)　口径10.8cm、器高1.6cm～2.1cm。ヘラ切りで板状圧痕を有する。

Ⅲｃ(26)　口径12.4cm、器高2.4cm。底部にヘラ切り痕を残す。

瓦器

椀(27)　復原口径14.6cm、器高5.3cmのやゝ小形の椀である。内面と外面の体部上半に粗いヘラミガキを施す。

中国陶磁器

青磁

椀(28～30)　越州窯系で、28・29は全面施釉するⅠ類。いずれも高台畳付に重ね痕を残し、29の内面には10個の目跡がある。30はⅡ－３類。淡茶色の粗い胎で、白化粧土の上から黄緑色釉をかける。内底に目跡を残す。

転用硯(31)　須恵器の甕片を転用し硯としたものである。内面を硯面として使用し、青海波の当具痕は磨墨されたため消ている。所々に墨痕が残っており、かなり使用された事がわかる。外面には平行叩き目がある。

SK3401出土土器・陶磁器（第23図・図版44　別表）

土師器

Ⅲａ(１～20)　口径8.6cm～9.7cm、器高1.3cm～1.7cm。全てヘラ切りで、４・11・15・17・19には油煙が付着する。

丸底の杯(21)　内面にはミガキを施し、口縁部付近には油煙が付着する。

甕(22)　体部の上位に最大径を有する甕。外面の体部は縦位の刷毛目の後、部分的に横ナデ調整する。内面は横位の粗い刷毛目調整。口縁部の外面には煤が付着する。出土状況からみて、隣接する遺構から混入した可能性が大きい。

瓦器

椀(23)　内面と外面体部上半を粗いヘラミガキする。砂粒をわずかに含むが、焼成は良好である。燻しはなく明黄灰色を呈する。

中国陶磁器

白磁

Ⅲ(24～26)　やゝ灰色味のある胎に黄白色の釉を施すⅥ類である。

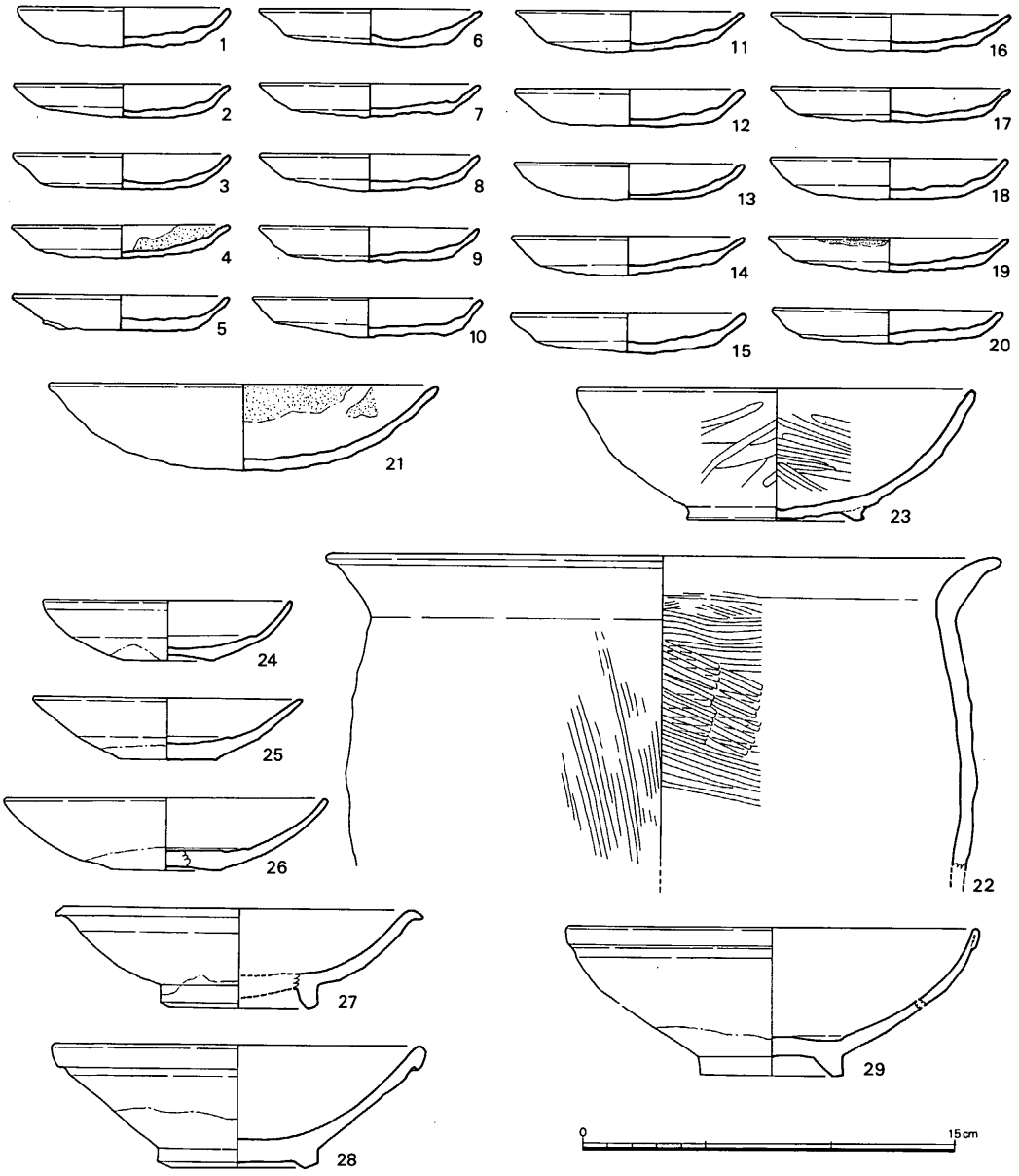
椀(27～29)　27は浅い椀で、口縁部をわずかに丸く曲げる。白色の胎に灰色味のある透明釉がうす目に施される。体部下位と底部は露胎である。28はⅥ－１・a類。29は小さな玉縁をもつⅡ－１類。

この土壙出土の土器は22を除き、11世紀後半代の資料として良好なものである。

SK3438出土土器（第24図　別表）

土師器

皿a(1)　口径9.8cm、器高1.0cm。ヘラ切りで、底部に板状圧痕を有する。



第23図　SK3401出土土器・陶磁器実測図

杯ｃ(2)　口径13.9cm、器高3.2cm。丸底の杯に高台を貼付した形態のものである。

丸底の杯(３～５)　口径13.7cm～15.6cm、器高3.1cm～3.5cm。内面にミガキを施す。５の内面にはヘラ当て痕が、４には油煙が付着する。

SK3441出土土器（第24図）

土師質土器

鉢(7)　軟質に焼成された鉢で、少片のため口径は不明。口縁部は折り曲げて断面三角形の玉縁状を呈する。内外面を刷毛目調整するが、外面は刷毛目がナデ消された状況である。

日本製陶器

鉢(9)　口縁部を断面三角形状にする鉢で、備前産である。胎土は粗く、茶褐色を呈する。内面に筋目がある。

甕(8)　「N」字状口縁をもつ備前産の甕である。口縁部上面と、頸部付近に自然釉がかかる。

中国製陶磁器

染付

皿(6)　碁笥底の皿である。少片であるため染付の文様は不明であるが、見込に二重の圏線がある。明代のものか。

SK3447出土土器・陶磁器（第24図・図版45　別表）

土師器

皿ａ(10～14)　10～12は糸切り、13・14はヘラ切りである。10～12は口径8.2cm～9.2cm、器高0.9cm～1.2cm。13・14は口径9.0cm～9.2cm、器高1.1cm～1.3cm。

杯ａ(15・16)　15は口径11.7cm、器高2.3cmの小形のものである。糸切りで板状圧痕を有する。

丸底の杯(17)　口径15.2cm、器高3.2cm。

中国製陶磁器

白磁

椀(18・19)　18は細く高い高台をもつＶ類。19は内面の見込みを輪状にカキ取りするⅧ－２類である。白色の胎に黄味の強い白色釉を施す。

SX3377出土陶磁器（第24図・図版45　別表）

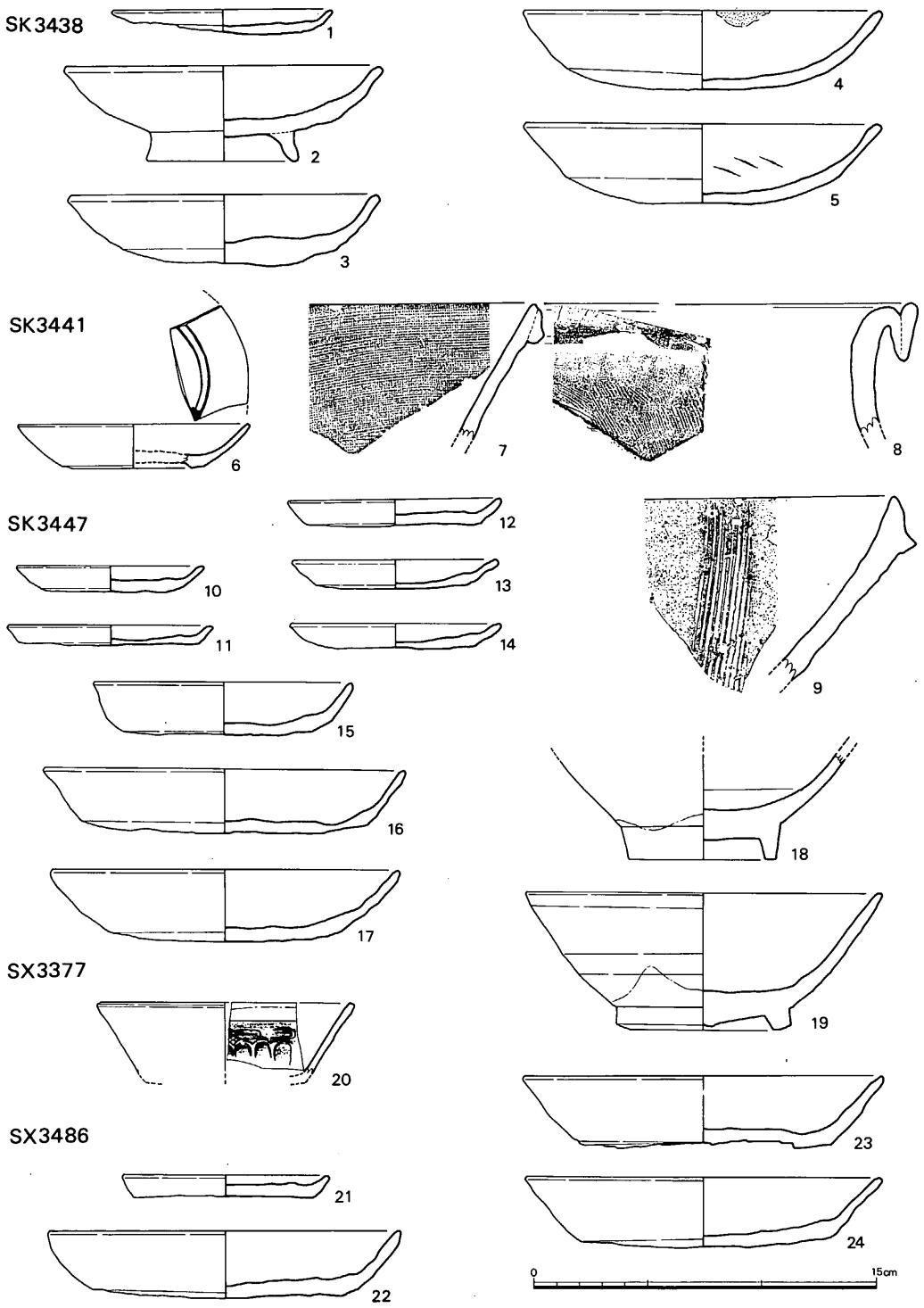
青白磁

杯(20)　体部内面に型押しによる雷文帯と蓮弁を浮文とする。白色緻密な胎に青白色釉をうすくかけるが、口縁部は削り露胎とし口禿となる。

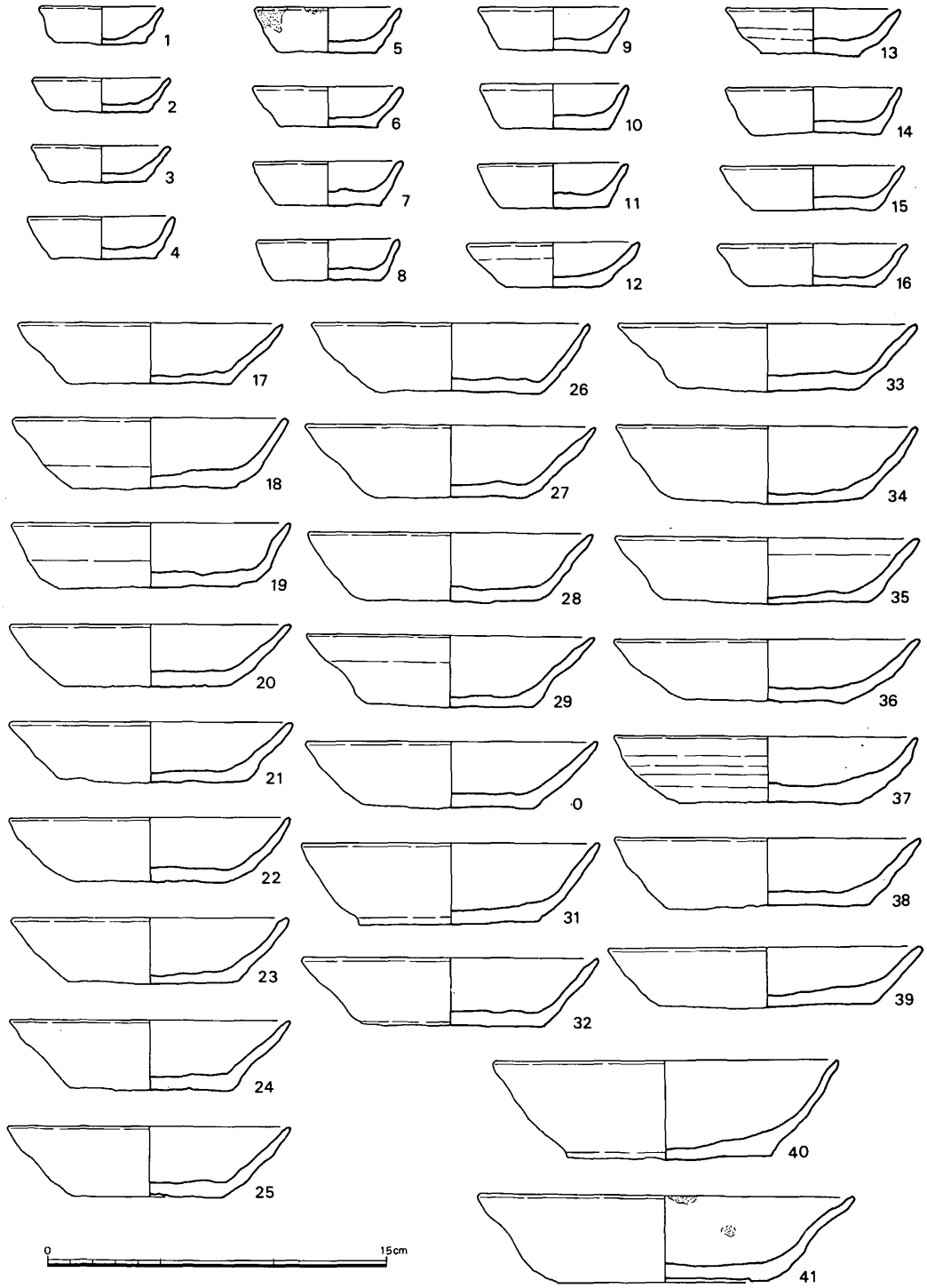
SX3486出土土器（第24図・図版45）

土師器

皿ａ(21)　口径9.1cm、器高1.0cm。糸切り。



第24図　土壙・その他の遺構出土土器・陶磁器実測図



第25図　ＳＸ3384出土土器実測図

杯ａ(22～24)　口径15.6cm～15.8cm、器高3.0cm～3.1cm。糸切りで板状圧痕を有す。

SX3384出土土器（第25図・図版45　別表）

土師器

皿ｂ(１～16)　口径5.4cm～8.3cm、器高1.5cm～2.1cm。全て糸切り。５には油煙が付着。

杯ａ(17～41)　口径11.6cm～13.7cm、器高2.8cm～3.6cmの17～39と口径15.2cm～16.5cm、器高3.9cm～4.4cmの40・41の二種がある。17・21・24・27は体部下位をやゝおさえ気味に横ナデしやゝ細くする。41には油煙が付着する。全て糸切りである。

黒色土層出土土器・陶磁器（第26～29・31図・図版46～48　別表）

土師器

皿ａ(５～22)　５～13は糸切り、14～22はヘラ切りである。５～13は口径7.6cm～9.6cm、器高1.0cm～1.5cm。14～22は口径8.4cm～10.4cm、器高1.1cm～1.5cm。11・12には油煙が付着。

皿ｂ(１～４)　口径6.8cm～7.2cm、器高1.5cm～2.2cm。糸切りで、４には油煙が付着する。

皿ｃ(23・24・35)　口径9.0cm～9.7cm、器高2.3cm～2.5cm。24の底部はヘラ切りである。35は口径19.0cm、器高3.2cmの大形のものである。底部には糸切り痕を残す。

杯ａ(25～33)　25～32は糸切り、33はヘラ切りである。口径11.9cm～13.5cm、器高2.4cm～3.0cmの25～30と口径14.5cm～15.2cm、器高2.6cm～2.7cmの31・32がある。33は口径15.3cm、器高3.5cm。28を除いて板状圧痕がある。

脚付皿(34)　復原口径13.2cm、器高2.6cmの三脚（１個残存）を有する皿である。胎土には砂粒を若干含む。三脚の内面および外底は煤状のもので黒化している。

椀(36・37)　丸底の杯に高台を貼付したものである。36の内面には放射状に細かいヘラミガキがあり、37にはコテ当て痕がある。

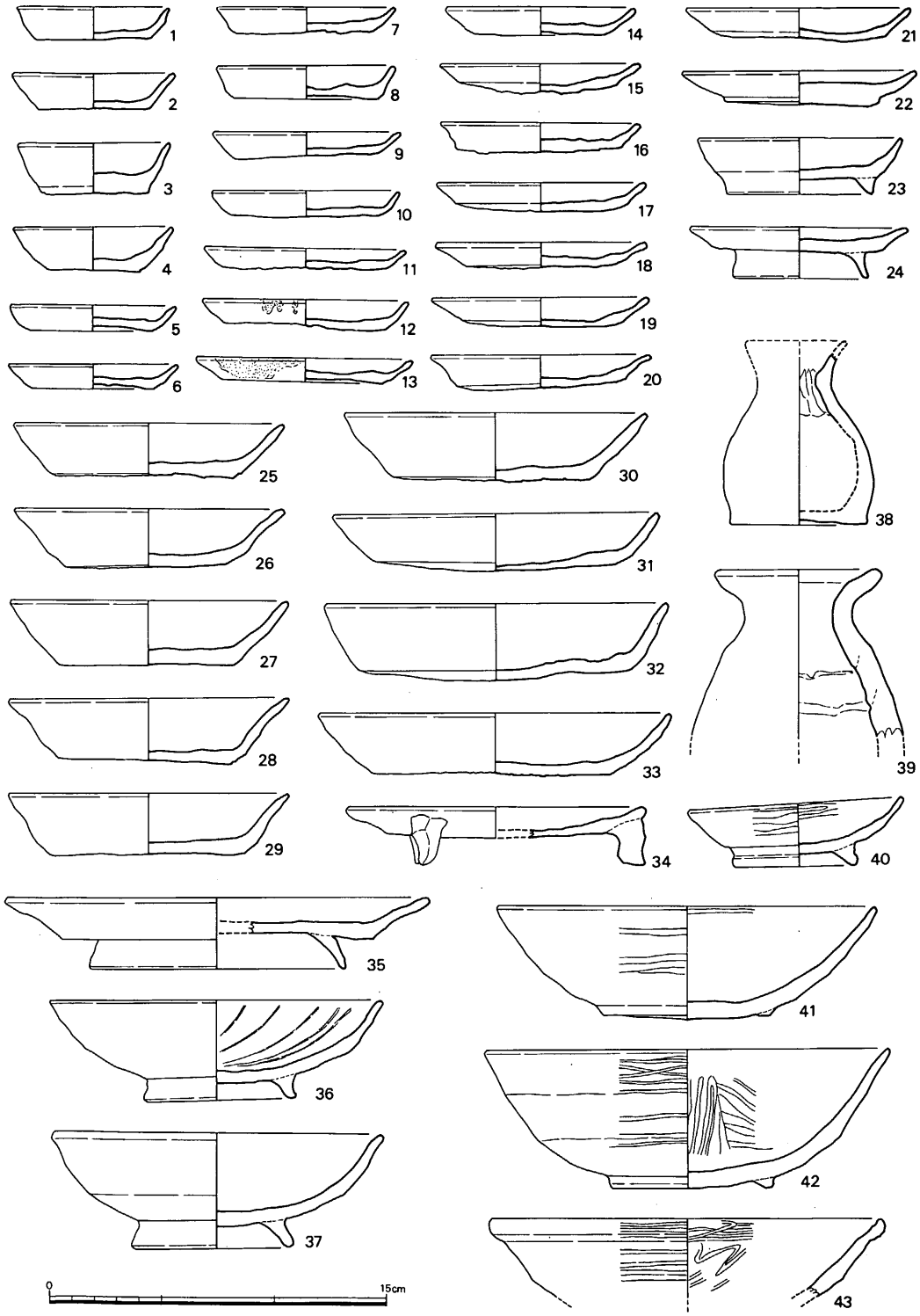
瓶(38・39)　平底の瓶で、頸部をシボリ細くする。体部の外面は横ナデで、38の底部は未調整である。胎土には砂粒をほとんど含まず緻密である。淡茶色を呈する。

瓦器

椀(40～43)　40は口径9.6cm、器高5.6cmの小椀である。内外の全面を黒灰色に燻し、内面の口縁部から外面体部下位まで粗いヘラミガキする。胎土中には砂粒をほとんど含まず精良である。41・42は内外面に粗いヘラミガキを施す。41は口縁部の内外面を、42は口縁部の外面を燻す。43は復原口径17.6cmで、口縁部の内面に凹線を入れる。内外面に粗いミガキを施す。燻されて黒灰色を呈する。

土師質土器

釜(92)　口径21.6cmに復原できる鍔釜である。全体に摩滅が著しく調整は不明瞭。胎土には砂粒を含むが、焼成は硬質である。外面に煤付着。



第26図　黒色土層出土土器・陶磁器実測図(1)

須恵質土器

鉢(35)　口径25.4cm、器高10.0cmの片口の鉢である。胎土、焼成、調整とも良好である。内面は横位ないし斜位の刷毛目調整し、外面は縦位の刷毛目調整後ナデ調整している。そのため刷毛目は明瞭に残らない。東播系。

中国陶磁器

白磁

蓋(44・45)　44は落し蓋で、内面は露胎となる。白色の胎には黒い細粒子が混り、釉は灰色味のある白色釉をうす目にかける。45は小壺の蓋である。44同様に内面は露胎となる。黄白色釉をうすく施す。

小壺(46)　少片であるため全形が不明で、ここでは小壺として報告した。体部の中位から直立気味で、そこには凹線を入れ施文している。白濁色の釉は内面の半分位にかかり、外面は高台部と底部が露胎となる。

皿(47～54)　47はⅥ－1類。48は内面に白い粘土で隆線をつくり割花とするⅣ類である。49は内面に放射状ないし花文をヘラで細く施文するⅦ－1・b類。50は口縁部を屈曲させ玉縁状にする。胎土、釉調はⅣ類に似る。51・52は見込みを輪状にカキ取るⅢ類。53・54は口縁部を削り露胎とする口禿の皿で、Ⅸ類。

椀(58～65)　白色緻密な胎に灰白色の釉をうすく施す。高台部と底部は露胎。59は口縁部を外反させ端部を直上につまみ上げる。口縁部にはヘラで押え輪花をつくる。白濁色の緻密な胎に白濁釉をかける。体部下位は露胎。60は小さな玉縁をもつⅡ－1類。61はⅣ－1・a類。62・63は見込を輪状に釉カキ取りするⅧ類。64・65はⅤ類で、64の外面体部にはヘラの片切彫の施文、65の内面には櫛状工具による施文がある。

四耳壺(55・56)　55は四耳壺の口頸部片で、56は底部片である。白色の胎に白濁釉をかける。

水注(57)　水注の体部小片である。注口および、把手の痕跡は破片にはない。

青白磁

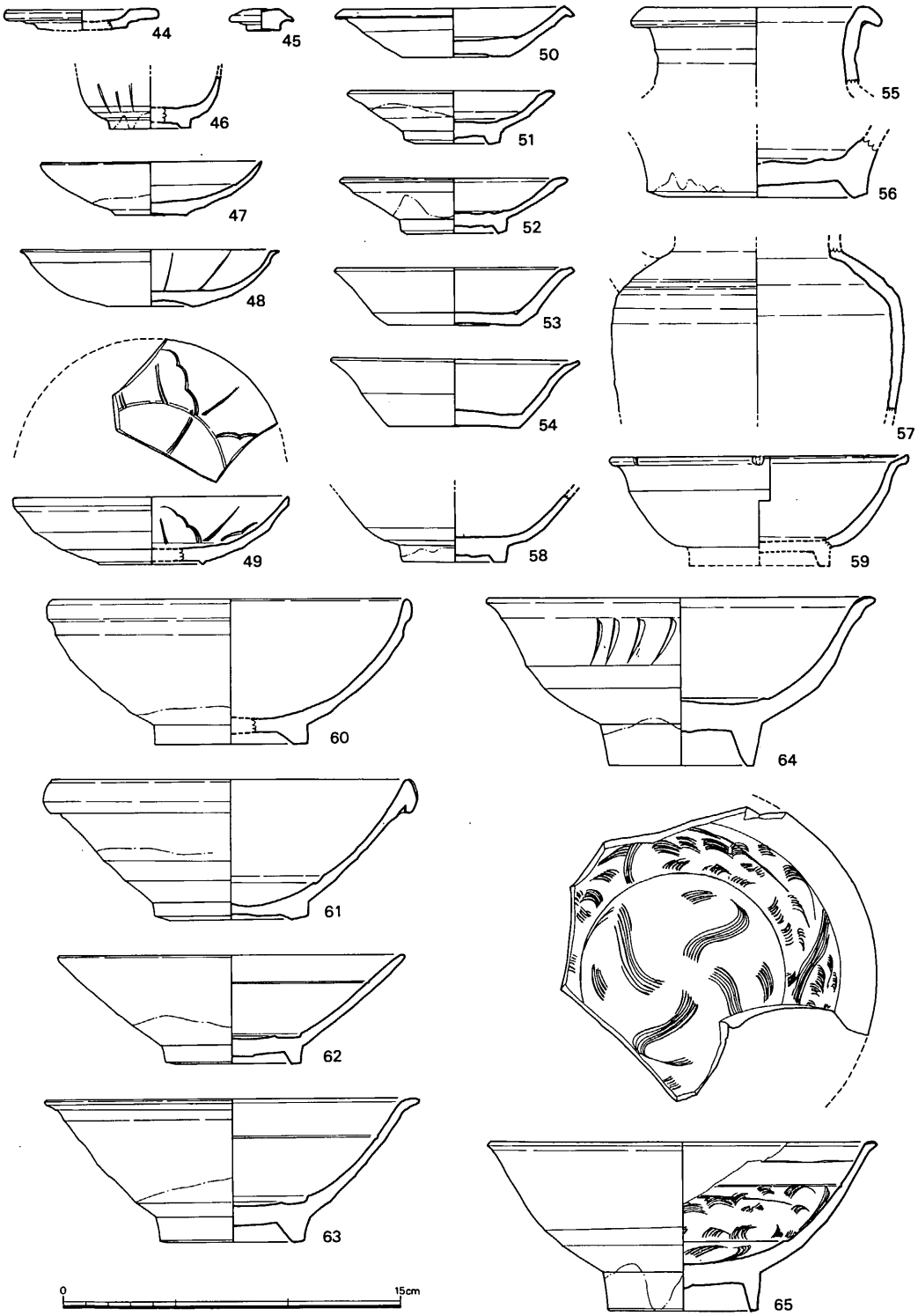
合子(66～68)　いずれも蓋である。66は深みのある蓋で、別の器種とも考えられる。天井部外面には花文様の型押がある。淡青白色の釉は口縁部と内面にはかからず露胎となる。67には鳳凰文を外面天井部に、67には花文と蓮華風文様を型押する。

椀(69)　平底の椀である。底部の釉を削り取る他は全面に透明に近い青白釉をかける。内面にはヘラと櫛状工具による施文がある。

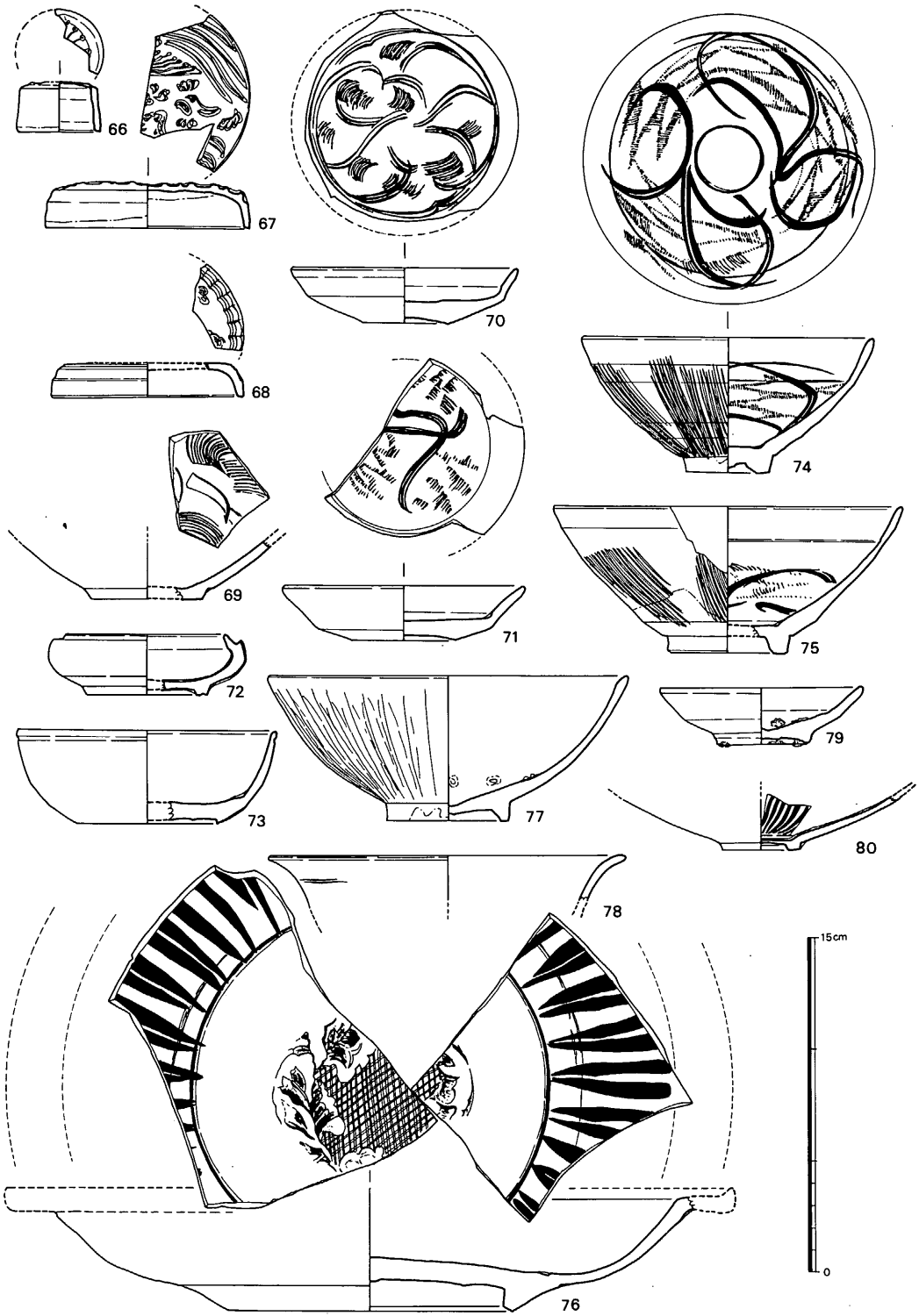
青磁

皿(70・71)　70は内面にヘラと櫛状工具により施文する龍泉窯系の皿。底部は露胎であずき色を呈する。71は同安窯系で、底部のみ露胎とする。

杯(72・73)　72は蓋受け部をもつ扁平な高台付杯である。受け部と高台部を露胎とする他は



第27図　黒色土層出土土器・陶磁器実測図(2)



第28図　黒色土層出土土器・陶磁器実測図(3)

淡緑色の釉が厚く施される。龍泉窯系で、合子とも考えられるが、ここでは杯とした。73は碁笥底の杯で、口縁部を小さな玉縁状にする。碁笥底の底部は露胎で、他は灰緑色の釉がやゝ厚目にかかる。龍泉窯系。

椀(74・75)　いずれも同安窯系で、内外面にヘラと櫛状工具の施文がある。74は口径13.0cm、器高6.0cmのやゝ小形の椀である。

盤(76)　龍泉窯系の盤の底部と体部片である。碁笥底風の底部から体部は丸味をもって立ち上がる。口縁部を欠失するが、類例から、平坦になった口縁部は端部を断面三角形状にするものである。内面見込には葉文を周囲に巡らし、その中に網目をヘラ彫りしており、体部には丸刀によるやゝ深めの蓮弁風文様を施している。灰白色の胎に緑色釉が厚く全面にかけられているが、底部には輪状になった露胎部分があり、そこは茶色に発色している。

ベトナム製陶磁器

椀(77・78)　復原口径16.0cm、器高6.5cmで、全体に器肉の薄い椀である。体部外面にやゝ細めの鎬蓮弁をヘラ彫りする。白化粧土をかけ、その上に淡黄緑色の透明性のある釉を施すが、高台下位から底部は露胎とし、畳付部には重ね痕がある。また、破片の内面には5個の目跡が認められる。78は口縁部を外反させる椀で、淡黄白色の胎に透明性のある釉をかける。外面の口縁部近くに線状の鉄絵がある。

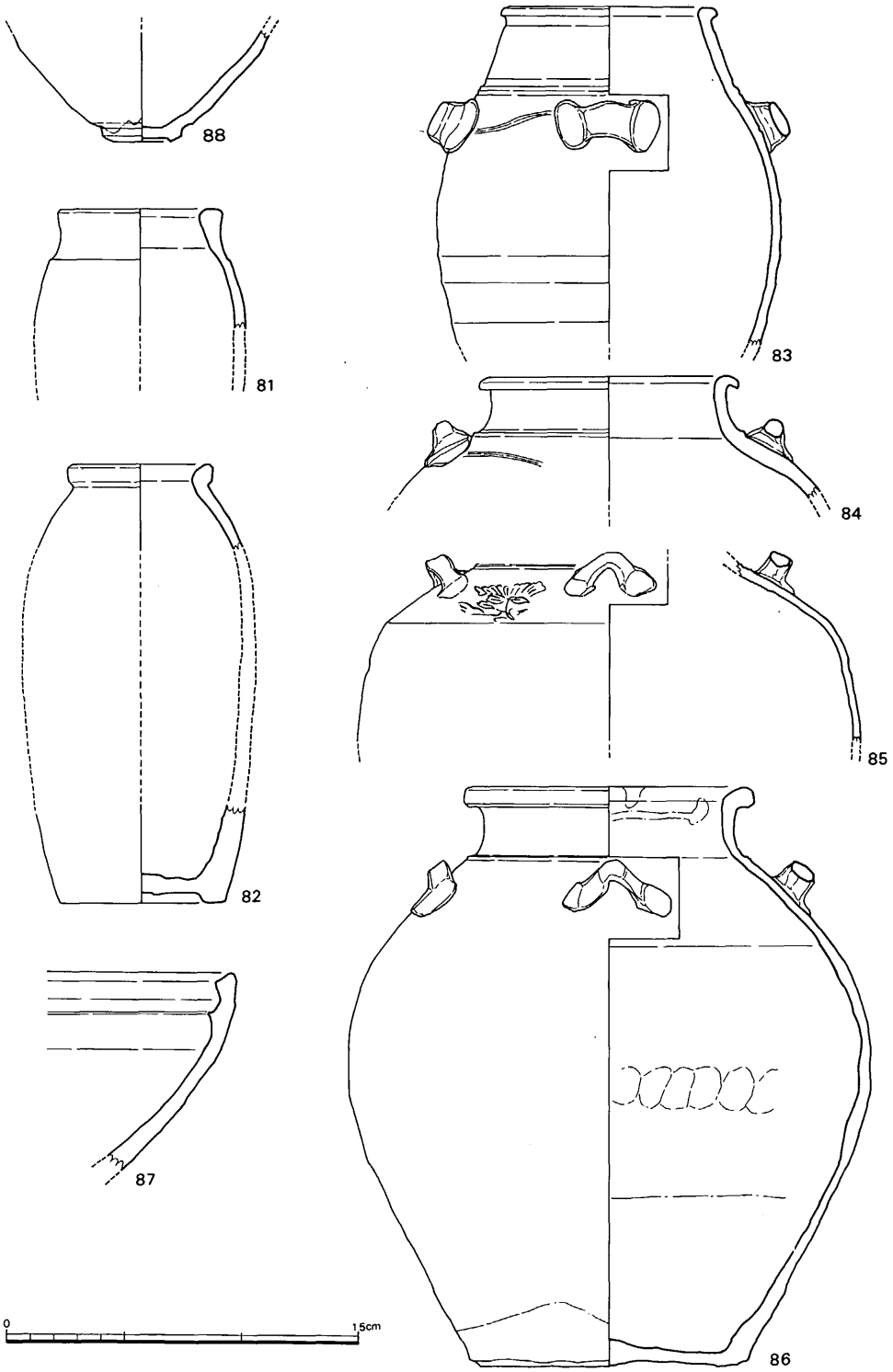
朝鮮製陶磁器

椀(79・80)　79は淡茶白色の粗い胎に淡緑色の釉を全面にかける。内底と外底には6個の目跡がある。80は体部が大きく開く、非常に器肉の薄い椀である。淡灰色の緻密な胎に濃緑色の釉が厚目に施されるが、高台畳付は露胎で茶色に発色している。内面には片切彫の蓮弁風文様を施す。初期高麗青磁の様相を示す。

中国製陶器

椀(88)　暗灰色の胎に黒釉がやゝ厚目にかけられ、内面には淡茶色の斑点が無数に油状になる。いわゆる油滴天目と称されるものである。黒釉は高台部近くまでかかり、底部は露胎にする。

壺(81～86)　長胴の褐釉壺である。81は淡茶灰色の胎に褐色釉がまだら状にうすくかかる。82は内外面の全面に暗緑色の釉をうすく施す。83～86は四耳壺である。83は肩の張らないもので、外面には黄緑釉がうすくかかる。大部分剝落している。84は双耳の可能性もある。外面は暗緑褐色釉がうすくかかる。85は口頸部と体部下半以下を欠失する。外面にはやゝ光沢のある褐釉がかかる。肩部には耳と耳の間に1個の花文のスタンプがある。86は図上完形に復原できる壺である。復原口径12.3cm、器高25.0cm。淡灰色の粗い胎に黄釉をうすくかける。内面は露胎となるが、体部の下位と底部には茶褐色の釉が刷毛でうすく塗られる。外面の体部下位と底部は露胎。



第29図　黒色土層出土土器・陶器実測図(4)

鉢(87)　無釉の鉢で、赤味のある茶色を呈する。胎土には砂粒の混入が多く粗い。内面は摺鉢として使用されたため器面が滑らかとなっている。

暗褐色土層出土土器・陶磁器（第30・31図・図版49　別表）

土師器

皿ａ（１～12）　口径7.4cm～9.2cm、器高1.0cm～1.5cm。全て糸切りで、８・12を除いて板状圧痕を有する。２・７には油煙が付着する。

杯ａ（13～18）　口径12.0cm～13.8cm、器高2.4cm～3.4cm。全て糸切り。17の体部下位に径0.5cmの穿孔が１個残存する。

瓦質土器

甕(34)　口径を31.0cmに復原できる内外面黒灰色を呈する甕片である。口縁部上面を凹状にし、端部を斜め上方につまみ上げる。口縁部と内面は横ナデ調整するが、外面体部は平行叩き目が斜位ないし横位には入る。

須恵質土器

鉢(36)　復原口径24.0cmの東播系の鉢である。内面を刷毛目調整し、外面を刷毛目調整した後ナデ調整する。

甕(33)　復原口径36.8cmの口頸部片である。口縁部の上面を横ナデでおさえ凹状にする。外面の口頸部は斜位の平行叩き目があるが、叩きの後横ナデされたため、叩き目はかすかに痕跡がみられるだけである。体部上位は横位の平行叩き目がある。胎土、焼成とも良好で、灰褐色を呈する。

中国製陶磁器

白磁

皿(19～21)　19は平底の皿で胎土・釉調はII類である。20・21はいわゆる見込を輪状に釉をカキ取るIII類である。

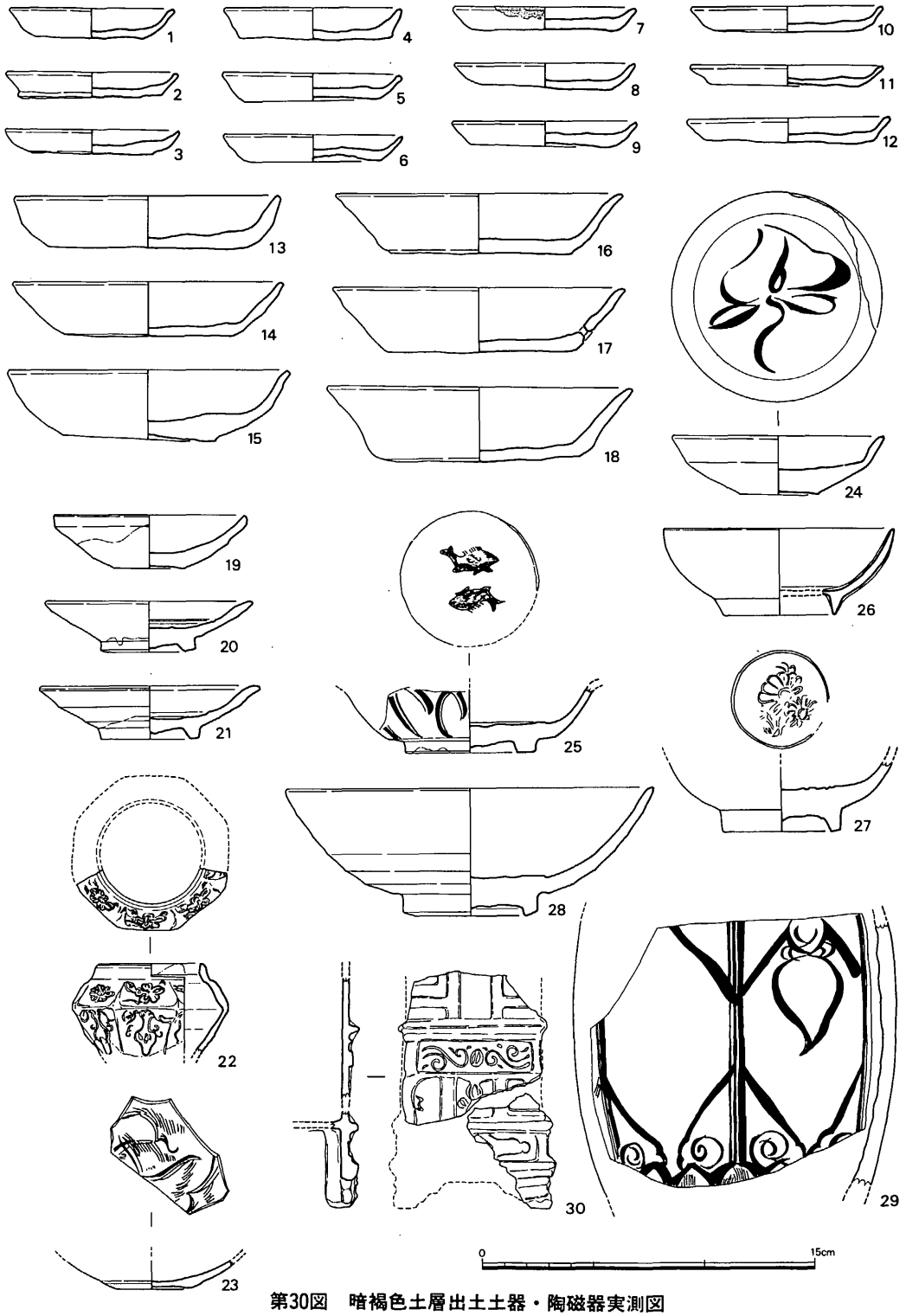
小壺(22)　体部上位に稜もち、平面形が八角形を呈する徳化窯系白磁小壺である。白濁色の緻密な胎に透明釉を内外の全面に施すが、口縁部は削り露胎とし、口禿とする。八角形の各面には花瓶と花を型押し浮文としている。

青白磁

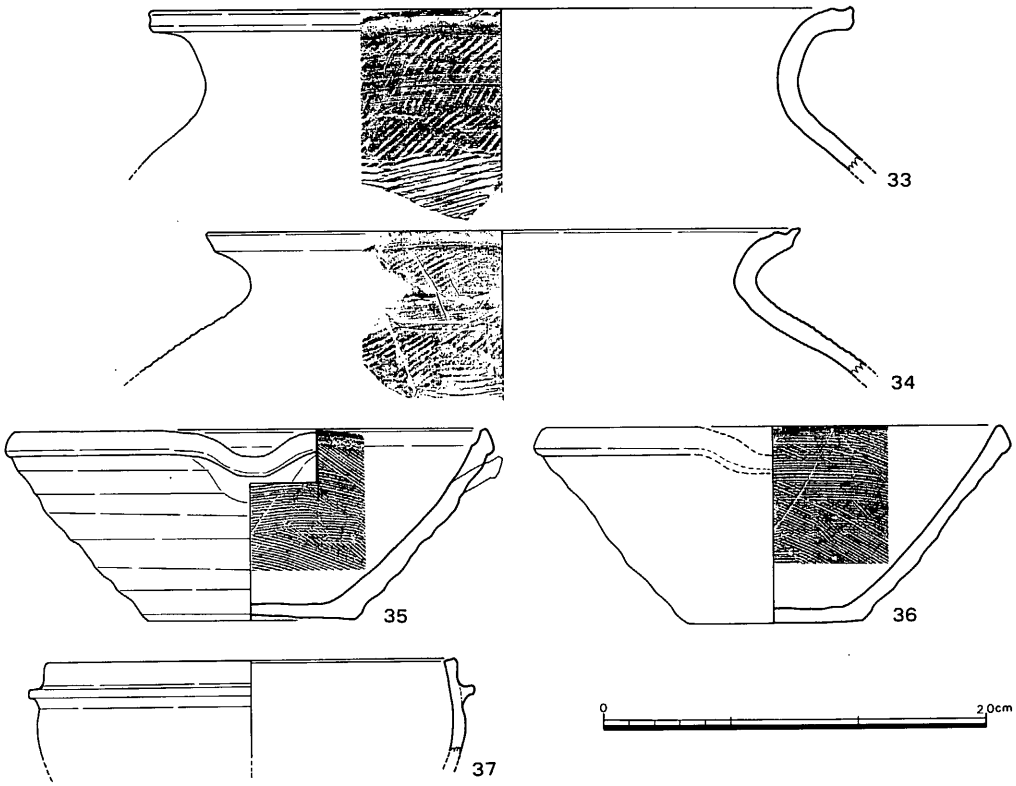
皿(23)　平底で、白色緻密な胎に淡青白色の透明性のある釉をうすく施す。外底は釉を削りとり露胎とする。内面にはヘラと櫛状工具による施文があり、外面の体部下位には圏線を巡らす。

青磁

皿(24)　龍泉窯系のＩ－１類で、暗灰色の胎にやゝ濃い緑色釉をかけ、外底は露胎とする。見込に花文を片切彫りする。



第30図　暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図



第31図　暗褐色土層・黒色土層出土土器実測図

杯(25・26)　25は内底見込に双魚をヘラ彫りし、体部に蓮弁を片切彫りする。龍泉窯系で、いわゆるIII類とは異なる。26は龍泉窯系のIII類で、高台の先端部を削り露胎とする。

椀(27・28)　27は内面見込に花文を押印し、その部分は露胎となる。淡灰色の胎にくすんだ緑色釉を施すが、高台畳付および外底は露胎。28は暗緑色のガラス質の釉が厚目に施され、高台畳付部および底部は露胎となる。内面見込みに花文の押印があるが不鮮明である。見込には4個所に目跡を残す。中国製ではないかもしれない。

壺(29)　越州窯系の長胴形の壺と考えられる。灰白色の緻密な胎に暗緑色の釉が内外の全面にかかる。体部の外面にはヘラによる片切彫で縦位の分割線を入れ、その内に同じ花文様を連続して施文する。下位に一部櫛目を入れた蓮華文がみえる。

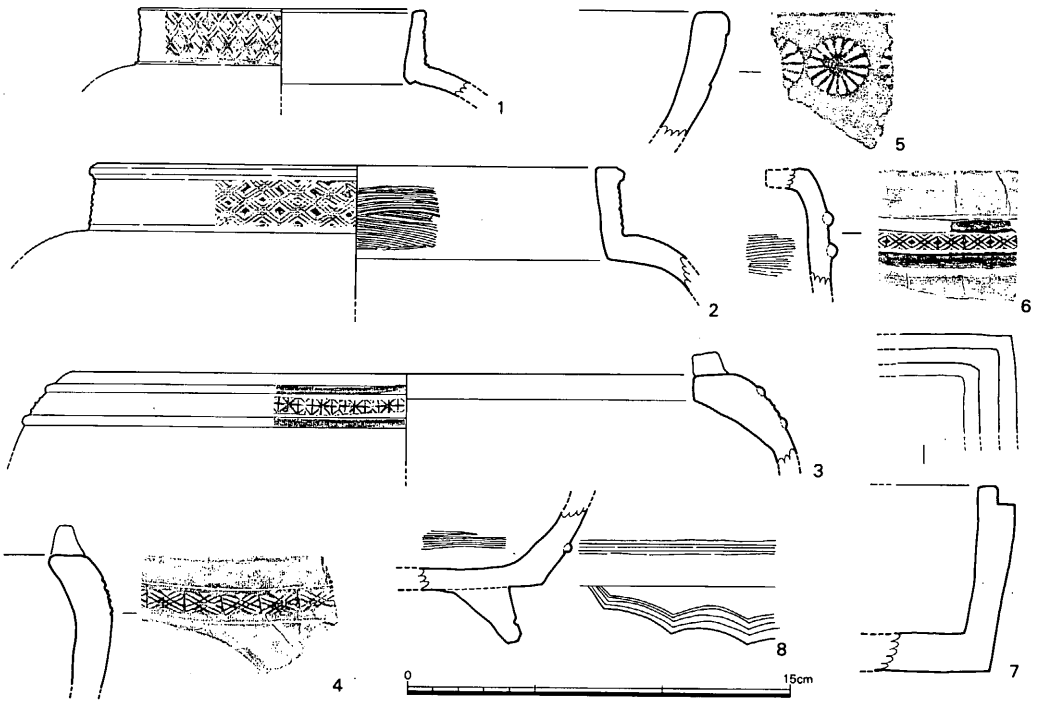
香爐(30)　角香爐の破片で、全形については不明であるが、上げ底の一部が残存する。型押しによる矩形の浮文を主体とし、その中に草花文を配する。灰白色の胎に緑色の釉をやゝ厚目に施す。内面の一部と脚の先端部は露胎とする。

瓦質土器（第32図・図版50）

鉢（1～8）　1・2の口縁部は直立する。口縁部外面に直違文を押印する。1は復原口径15.0cm、2は28.1cm。3・4は口縁部の平坦面に突起を貼付する。3は外面に断面半円形の凸帯を二条巡らし、凸帯間に十字文を押印する。5は体部が内弯し、口縁部の外面に16弁の菊花文を押印する。6は口縁部を内側に折り曲げたものだが、先端部を欠失する。外面に二条の凸帯を貼付し、その間に二直違文を押印する。7は平面形が方形となる例で、口縁部には段を有する。8は底部を残すもので、底部近くに一条の凸帯を巡らす。足は雲形に整えて装飾性を持たせている。

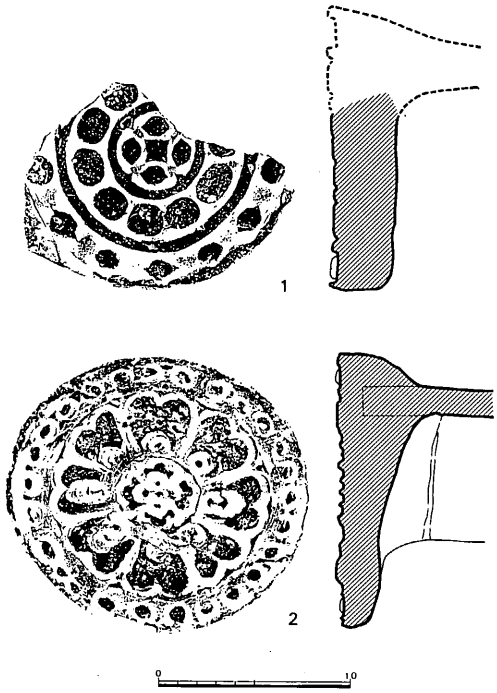
瓦類（第33・34図・図版51）

この調査で出土した瓦類は多量の丸・平瓦のほかに軒丸瓦50点、軒平瓦25点、文字瓦33点である。軒瓦には中世のものが若干含まれる。まず軒瓦では軒丸瓦は12種類、軒平瓦7種類に分類できるが、両者とも老司Ⅰ式（第119次調査、第70図参照）が量的に多い。ここでは、これまで未報告である2点の軒丸瓦について紹介する。第33図－1は単弁十弁で肉太の圏線によって囲まれた中房内には方形の中心節の周囲に杏仁様の蓮子4個を配する。蓮弁は扁平な長円形を呈する。外区と内区はやはり肉太の圏線によって区画され中房と同様の杏仁様の珠文13個を配する。第33図－2は笵型のくずれが著しく各文様の形状が判然としない点が多い。単弁八弁で



第32図　各遺構・層位出土瓦質土器実測図

蓮弁はハート形の下端部に１個の珠文を配している。中房は細い圏線によって囲まれ、内部には１＋４の珠文を中心にして、その周囲に４個の三葉形の文様を配している。外区には23個の珠文を配するが、各珠文の間には鼓形の文様を配し、各珠文を囲うような形になっている。丸瓦の取付け位置は外区と内区の境界付近にあり、取付き部の丸瓦の上、下に粘土を厚く入れて補強している。文字瓦には「観世音寺」、「平井」、「平井瓦屋」、「賀茂」、「佐」、「安」などがあるが、第34図に示した「観世音寺」銘のものが圧倒的に多い。斜格子の叩きの中央部に三重の界線によって囲まれた枠を設け、その中に楷書で「観世音寺」と左文字で入れる。この文字瓦は僧房跡、東面回廊跡などでも比較的多く出土しており、観世音寺再建の際のものとも考えられるが、具体的な時期について判然としない。



第33図　軒丸瓦拓影・実測図

出土木製品（第35図・図版52）

毬（１・２）　広葉樹心持材の両端を荒くはつったもの。側面には節を残す。SE3425出土。

蓋形木板(3)　杉の征目材を円形に整えたもの。周縁部には法をつける。残存状態は著しく悪い。径16.1cm、厚さ0.7cm。SD3400の最下層より出土。

欠き込み部材(4)　長方形の板材の一辺にV字の欠き込みを入れたもの。欠き込み部分はさらに面取りを施す。長さ6.1cm、幅3.9cm、厚さ1.2cm。SE3390出土。

金属製品（第35図・図版52）

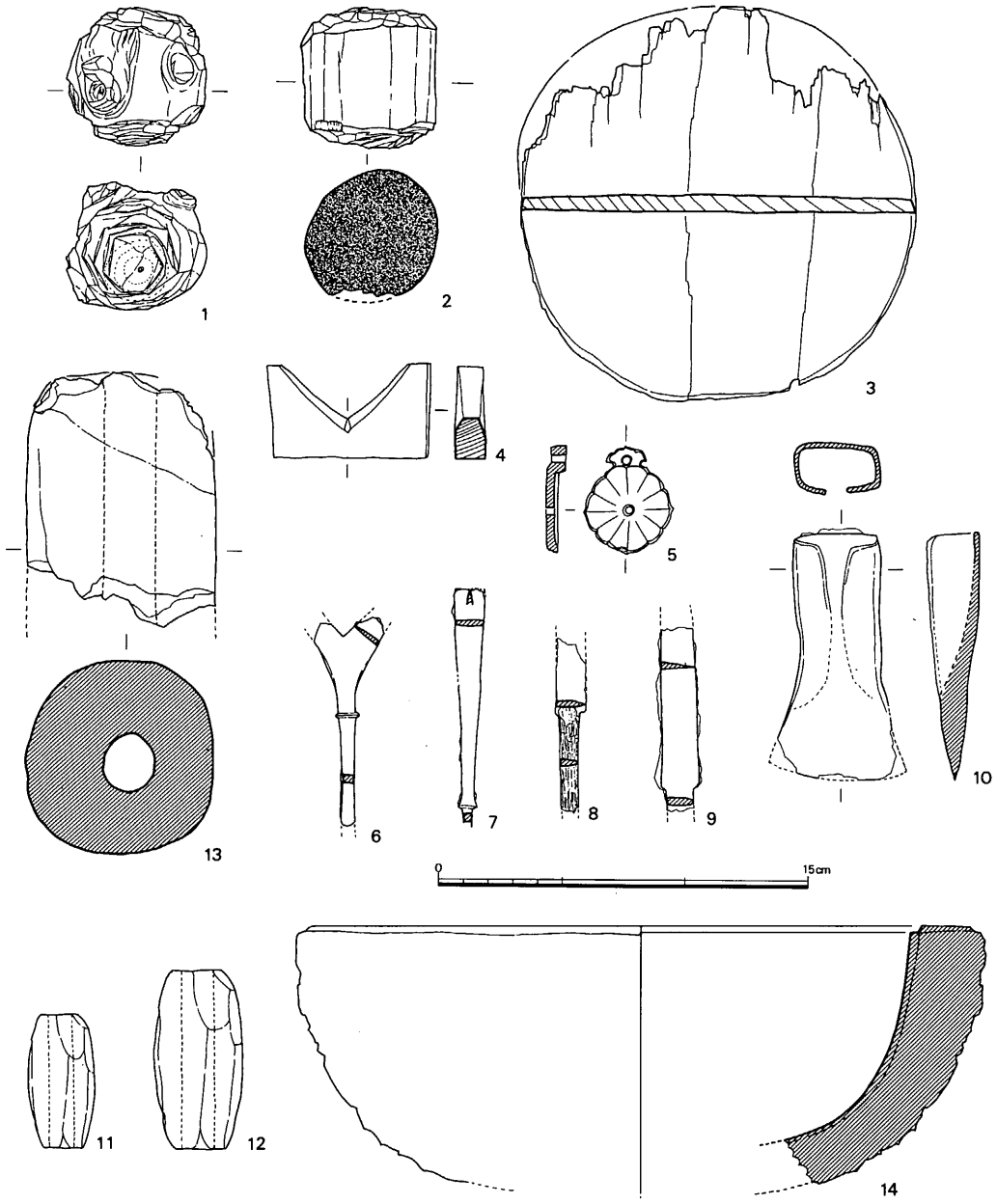
銅製飾り金具(5)　銅鋳造品で、本体を稜花形に象り、中心に孔を穿つ。上端にはさらに肉厚の花先形をした突出部を設ける。裏面は鋳放しのままである。縦長4.5cm、横幅3.7cm、中央部分での厚さ0.4cm。

鉄鏃（６・７）　６は鏑矢。矢先は先端を欠損するが、残存

第34図　文字瓦拓影

部分は断面が三角形。箆被を輪状につくり、そこからさらに続く茎は断面四角形である。７は平根の有茎鏃。茎を欠損する。

刀子（８・９） 関を設けたもので、棟はまっすぐのびる。刃先を折損している。銹が著しく



第35図　各遺構・層位出土木製品・金属製品・土製品実測図

刃の造りは不明。8の茎部には木質が遺存している。

鉄斧(10)　鋳造の袋状鉄斧

5は暗褐色土、6～9は黒色土、10は発掘区東側のピットから出土した。

土製品（第35図・図版51）

土錘(11・12)　丸棒に粘土を巻きつけてつくったもの。11は長さ5.5cm、幅2.2cm、内径1.0cm。12は長さ7.3cm、幅3.6cm、内径1.3cm。ともに暗褐色土層より出土。

円盤状土製品(a・b)　a径3.8cm前後の不整円形のもので、瓦を成形して造っている。側面は磨って調整する。bはやや小形で径3.3cm前後である。aと同じく瓦の再利用であるが、側面は磨るなどの調整は行なわず未調整である。打毬の球であろうか。黒色土層およびピット出土である。

鋳造関係品

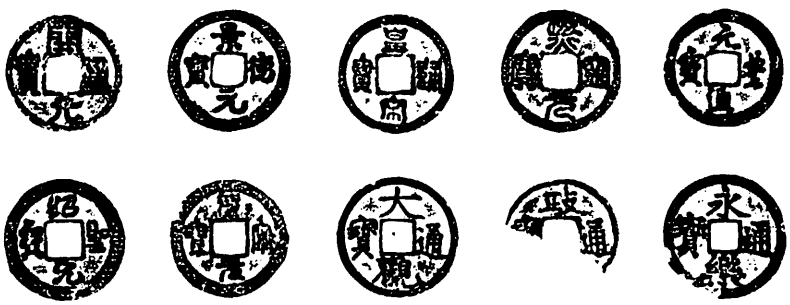
フイゴ羽口(13)　先端部分を残すもので、断面輪状につくる。外面は先端部分のみ黒色に変化している。

鋳型(14)　銅製品の鋳型外型片である。同様の形態をしたものが、第111次調査でも出土している。鋳型は上端に段を巡らし、そこから下部へほぼ内弯してすぼまる。形状からは何等かの容器を製品として想定しうる。鋳面には仕上げ真土がよく残りロクロ目も認められる。また、黒味も僅かながら残存している。中真土には砂粒、スサ等が混入している。上端内径22.8cm、仕上げ真土の浅い0.2～0.3cm。黒色土層から出土。

銅銭（第36図）

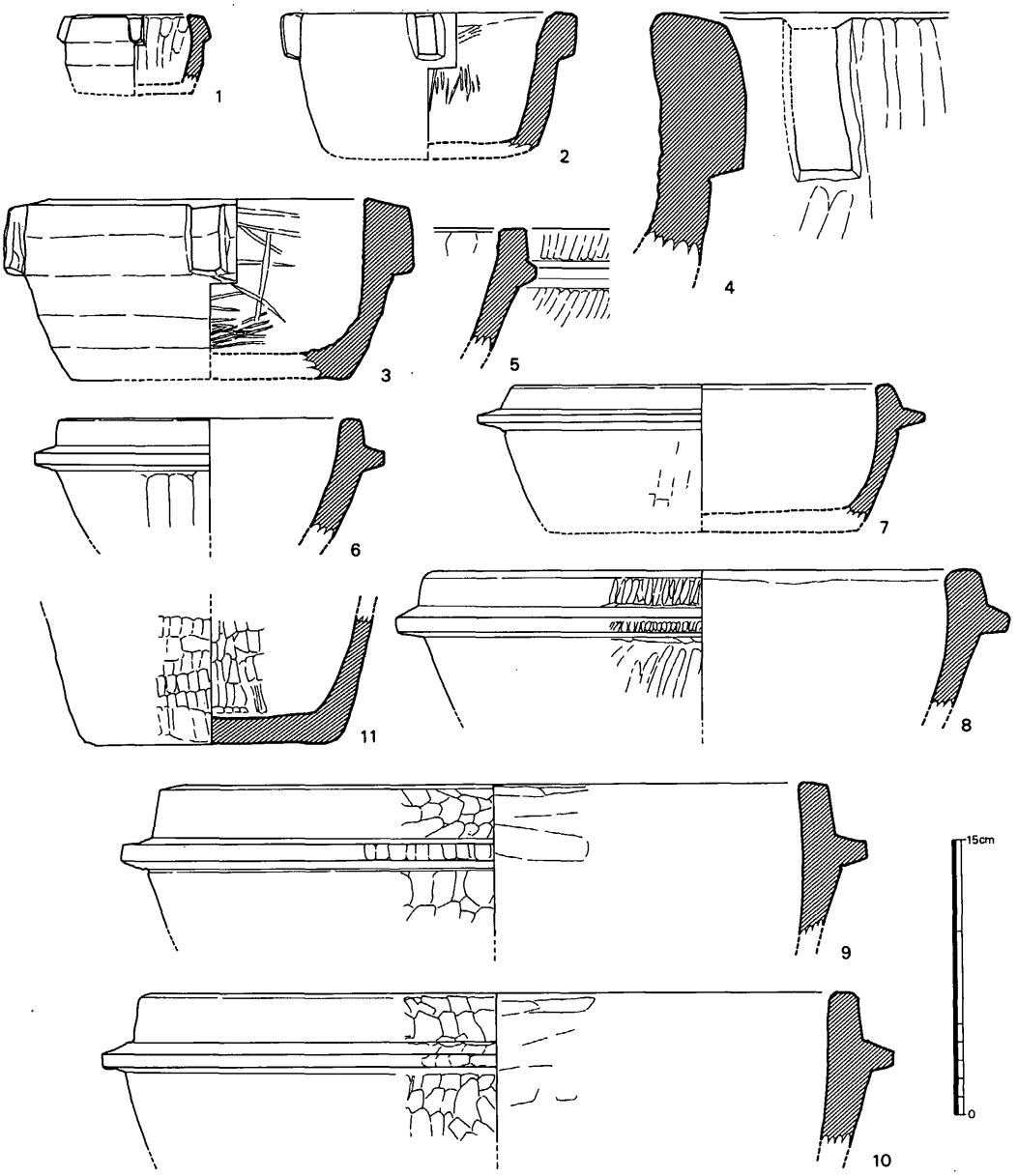
開元通寶から永楽通寶まで10種、14点がある。これらは発掘区東半部に堆積した黒色土層およびピットから出土した。出土状況および銭種には出土傾向などきわだった傾向は認められない。

石製品（第37・38図、図版53）



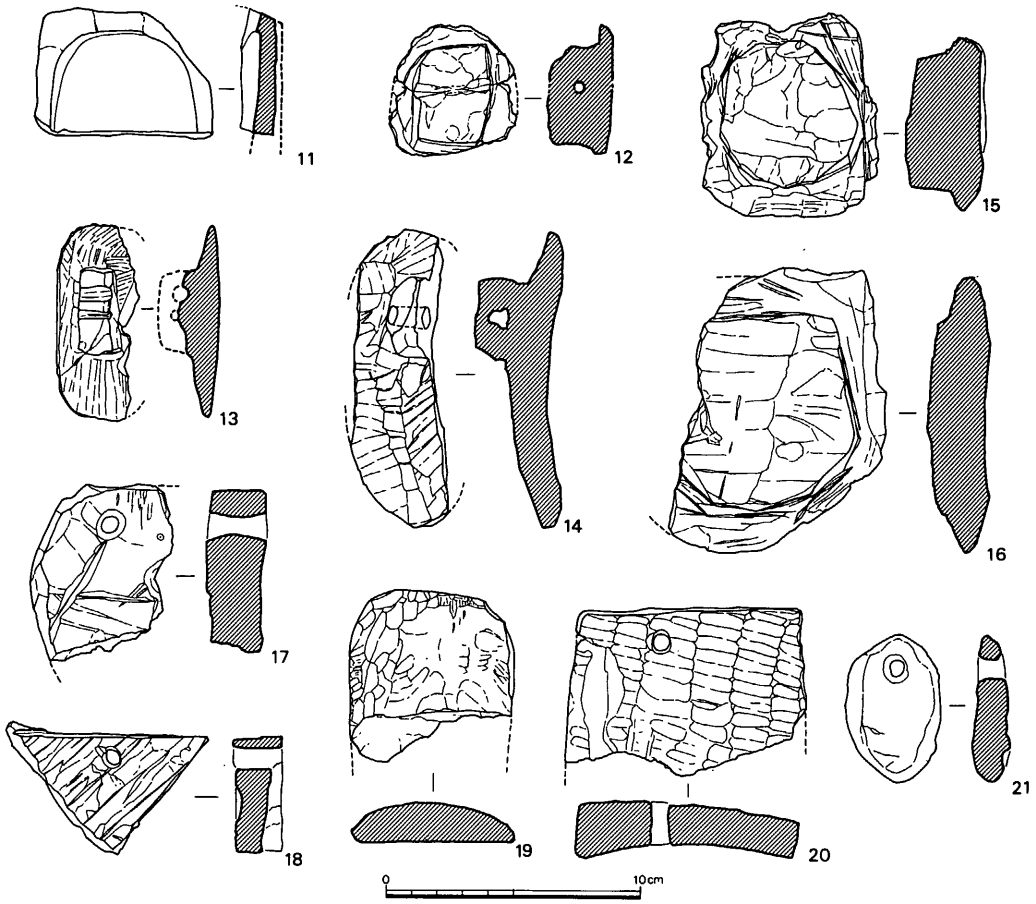
第36図　銅銭拓影

滑石製石鍋（１～10）　１～４は縦耳型の石鍋。１は小型品で、体部が内弯ぎみにたちあがる。体部下半には煤が付着している。復原での口径7.5cm、最大径8.2cmをはかる。２は体部が直に開くもので、口縁内面は外傾する。外面は平滑に削られ、煤が付着する。復原口径14.2cm。３の体部は直線的に上方へのびる。特に外面にはノミ状工具による縦方向の削りが明瞭に残る。



第37図　石鍋実測図

復原での口径19.8cm、底径15.0cm、器高9.8cm。4は大形品で縦耳の部分が残るのみである。耳の表面は風化による凹凸が著しい。耳下半部から胴部にかけて煤が付着する。5～10は口縁下に鍔が一周するタイプである。口径から大・小に分けられる。5～8は小形品である。5の体部は張らずに直線的に斜め上方にたちあがる。鍔部は退化し付根の下端に溝状の削りを一周させる。6の体部は5と同じような傾きであるが、やや丸みをもつ。外面に煤が付着する。復原口径16.3cm。7は鍔の幅が1.3cmと他にくらべて長く細めである。鍔部の端面はかどがとれて丸くなる。口縁・鍔部には径5㎜程度の穿孔が数ケ所に認められる。復原口径20.4cm。外面には煤が付着する。8は外面に細かいノミ痕を残す。9・10は大型品で、体部は直線的にたちあがる。10は鍔部に数ケ所の刃物傷がはいる。破損後の再加工痕か。9・10は小片のため口径が不確実だが33.0cm・36.0cmをはかる。11は底部から胴部下半の破片である。外面には厚く煤が付



第38図　各遺構・層位出土滑石製品実測図

着する。復原口径12.4cm。1・3～5・10は黒褐色土層、2は溝SD3440B、6は暗褐色土層、8は床土より出土した。

硯(11)　硯頭部が残る。硯面は楕円形を呈す。現状では陸部と海部に境はない。硯面は擦れ、平滑となっている。赤味を帯びた硬質砂岩を使用。

有孔紐付製品(12～14)　12は周囲を粗く打ち欠き、中央に鈕をおく。紐孔は鈕の両側面から穿孔している。背面は平坦である。13は平面が楕円形を呈し、鍋取手を鈕として利用する。紐孔は側面に二孔穿つ。背面は表面とは逆の弯曲をなしている。14は上面に鍋の口縁部をそのまま生かし、鈕も同様に縦耳の取手を削ってつくり、上端寄りに設けている。紐孔を側面の中央に一孔穿つ。背面は鍋内面のカーブのままである。

凸形製品(15・16)　鍋の側面を利用し、周囲を比較的粗く打ち欠いた後に、周囲を削り出して釦状の凸部をつくったもの。凸部は多角形状にし、身部との境には2条の条痕が残る。背面は鍋内面の湾曲を生かすが、15は周囲をさらに削っている。

有孔板状製品(17・18・19・20)　鍋の口縁部付近もしくは体部を再加工し、縁部に近い一辺に孔を通したもの。17は貫通孔以外に半ばで放棄された孔も認められる。18は周囲を鋸挽きで三角形に切ったもの。20は上辺が鍋の口縁部のままであり平滑だが、さらに側面の一方のみ研磨している。

板状製品(19)　周囲を隅丸方形状に整えたもので、表面もノミで削った後、研磨して平滑にする。

石錘(21)　杏仁形に整えた上端近くに、紐孔を両側より穿ったもの。軽石製。

11～14・16・20・21は黒色土層、17は暗褐色土層、15・18はSD3400からそれぞれ出土した。

註1　当報告書の中国陶磁器の分類は横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」

九州歴史資料館研究論集4　1978年による。

小　結

以上、遺構と遺物について概略を述べてきたが、最後に整理し若干の問題点なり疑問点なりを述べて結びとしたい。

当調査地は鏡山氏条坊復原案の観世音寺寺域の南東辺部にあたり、「観世音寺文書」の長徳二年の記事にみえる左郭4条7坊との関連から、条坊復原の上から注目される地域である。調査の結果、溝3条、井戸11基、土壙および多数のピット等を検出した。昭和52年度に実施した第45次調査および、本年度に実施した第119次調査との関連から、これら検出した遺構を下表のとうり大きく3期に分けた。第Ⅰ期は9世紀後半代～11世紀後半代、第Ⅱ期は12世紀代、第Ⅲ期を13世紀～14世紀代とすることができる。

とくに注目されるのは第Ⅰ期に属する溝SD3400・3430・3440の3条である。この3条の

溝のうち最も古期に属するのはSD3400で9世紀後半～10世紀中頃にその埋没の時期が考えられるものである。そして、時期的には順次SD3430→SD3440と西側に移っていく。最も西側に位置するSD3440は11世紀後半～12世紀前後にその埋没の時期が考えられるものである。これら3条の溝は蛇行し、重複しており、埋土の上層では必ずしも明確に判別し得ないところもあった。すなわち、この3条の溝は若干流路を変えながら、9世紀後半代～12世紀前後の時期まで、ほぼ連続する形で流れていたと考えられる。

本年度実施した第119次調査において4条の南北方向の溝を検出しているが、これらの溝と本次調査で検出した3条の溝が関連するとみられるが、約36mの未掘部分があるため確定できないが、時期的には第119次調査検出のSD1300・3500・3550の3条の溝と今回第117次調査検出の3条の溝の何れかと各々連結すると考えられる。第119次調査結果からすると3条の溝は時期的にはSD1300→SD3500→SD3550の順に東へ向って新しくなる。第117次調査の溝は時期的にSD3400→SD3430→SD3440と東から西に向って新しくなり、第119次調査検出の溝と逆の傾向を示している。即ち年代の上からはSD1300＝SD3400 SD3500＝SD3430 SD3550＝SD3440の連結が推定され、第119次調査区と第117次調査区間の未発掘区域で、蛇行・重複し、第117次調査地へ至るとみられる。SD1300は第45次調査、第119次調査地を通してほぼ真南北方向であるが、第117次調査地ではその延長上には溝はなく、仮に推定通り、SD3400と連結するものであれば、他の2条の溝SD3500およびSD3550と同じく、西方へ大きく弯曲する流路をとることになる。

3条の溝SD3400・3430・3440は発掘区のほぼ中央を斜めによぎる形になっているが、この溝を境に、東・西では遺構の在り方に違いがみられる。すなわち、溝の西側にはⅠ期およびⅡ期の遺構が集中し、Ⅲ期の遺構がほとんど存在しない。逆に東側ではⅢ期の遺構、とくに小ピットが密集してある。このことはこの溝によって何らかの制約があった事を示唆しているようでもある。

観世音寺の寺域については現在のところ明確な遺構として確認しておらず、現段階で結論を出し得るまでには至っていないが、今後長徳2年の観世音寺文書との記事との関連についても、調査の進展とともに検討を加えていきたい。

主要遺構 ＼ 期別	建物、柵、井戸、溝、土壙、その他
Ⅰ 期	SD3400、SD3430、SD3440、SE3415、SE3425、SK3401、SK3429
Ⅱ 期	SE3405、SE3410、SE3420、SK3404、SK3438
Ⅲ 期	SE3390、SK3441、SK3447、SX3377、SX3486、SX3384、SD3400の東側のピット群

4．119次調査

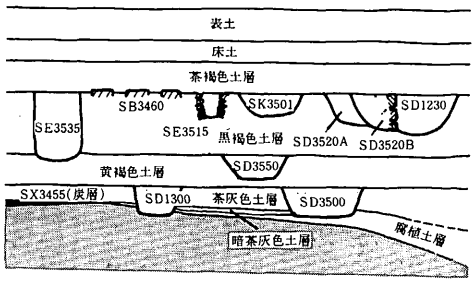
第119次調査地は観世音寺の東辺部にあたり、推定東面築地跡を含む地域の約860m²について実施した。本調査地は昭和52年度に行なった第45次調査地の南側に隣接した地域である。

このときの調査では掘立柱建物や溝・柵・井戸などを検出したが、主たる目的とした東面築地については検出できなかった。ここでは大略３層を数える遺構面を検出した。Ⅰ期の遺構は８世紀中頃ないしはそれをやや降る時期に形成されている。第Ⅱ期は12世紀前半～中頃に形成されたものである。第Ⅲ期は黒褐色土層面で12世紀後半から14世紀代にわたる。保存状態の最も良好なものはこの期の遺構で、大部分の遺構がこの面から切り込まれている。

本次調査の目的は第45次調査同様、東面築地について何らかの手掛りを得るためと、周辺地域に対する遺構の状況等を把握することにあった。調査地の地番は大字観世音寺字今道54－１・２番地である。調査は平成元年３月22日に着手した。４月４日には遺構検出に入り、４月19日には最上層の黒褐色土に切り込む遺構の検出を終了し、４月20日には写真撮影と遺構の略測を行なった。４月25日より黒褐色土層を除去し、掘り下げ、下層遺構の検出を開始した。しかしながら、当初目的とした築地の遺構を検出するには至らず、第45次調査と同様の中世を主体とする遺構の調査となった。６月30日には一応の調査を終了し、７月５日から写真撮影・遺構実測を行なった。実測をほぼ終了した段階で井戸・土壙等の補足調査を行ない、部分的ではあるがさらに下層部の遺構調査を行なった。全体的に遺構の残存状況は良好と云えず、７月22日には一部掘り下げて検出した溝SD3500等の写真撮影・実測を行ない、全ての調査を終了し、７月28日より埋め戻しを開始し、上部は重機を使用して、８月12日には完全に全作業を終わった。

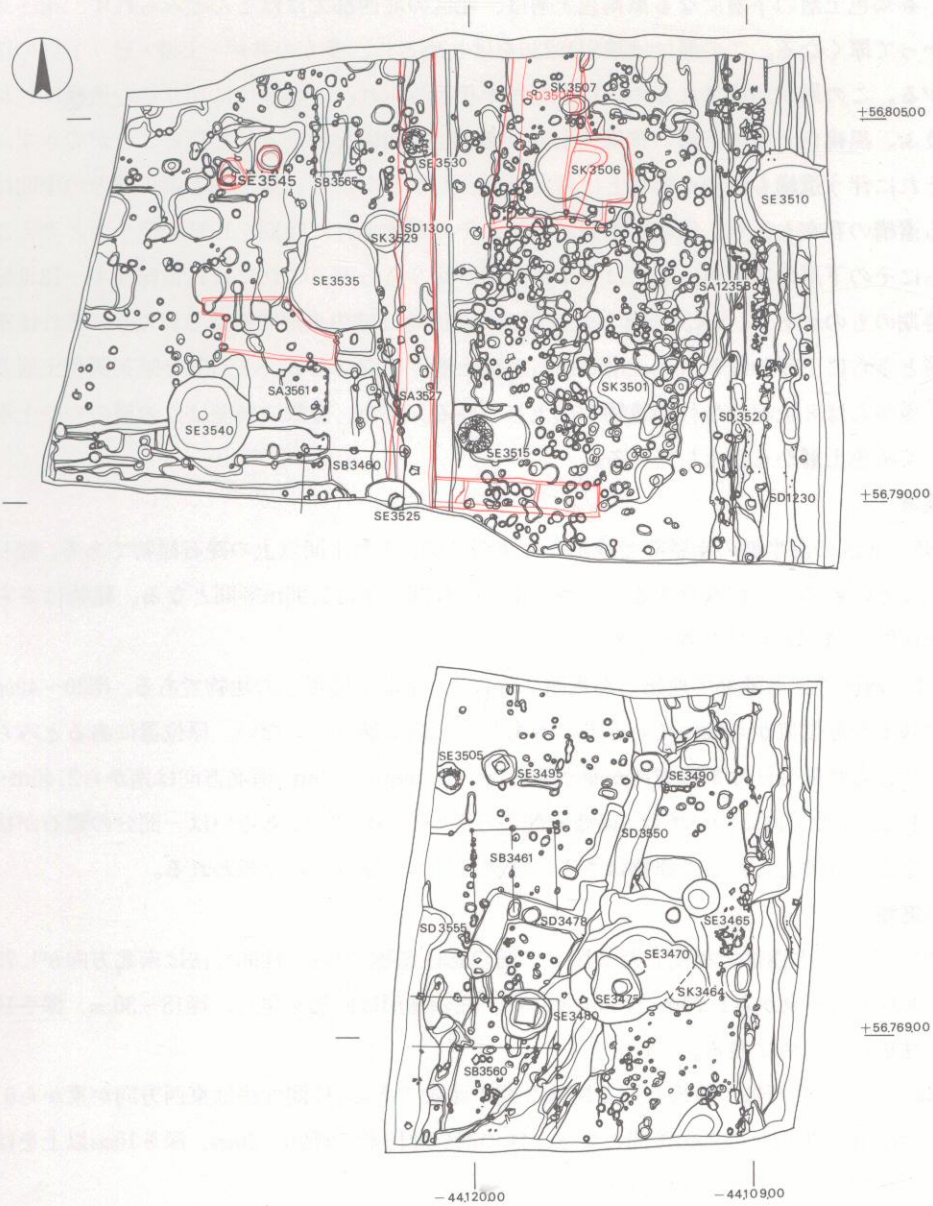
検出遺構

第119次調査では礎石建物２棟、掘立柱建物２棟、井戸15基、溝６条等を検出した。遺構面は黒褐色土層・黄褐色土層（上層整地層）・茶灰色土層の３層に大きく分けられる。これらの遺構面で残存状況が良好で遺構の密集度が多いのは黒褐色土層及び黄褐色土層である。以下、層位の関係について述べ、検出した遺構の概略について記すことにする。また、記述の都合上、発掘区が分かれているので北区・南区の呼称をもって記すところもある。



第39図　層位模式図

調査地の地山は北から南に、西から東に



第40図　第119次調査遺構配置図

緩やかに傾斜している。そのため発掘区の北区北側及び西側では薄く堆積する茶褐色土層を除去すると地山面となる。茶褐色土層の堆積も南側にいくにつれ厚くなり、南区ではそれは顕著である。茶褐色土層の下層になる黒褐色土層は、北区の北西部ではほとんどみられず、南・東側に向かって厚くなる。この層には溝SD1230をはじめとし、多くの井戸・土壙・ピット群の遺構が広がる。この層が形成されるのは12世紀後半代とみられ、この層位に切り込む遺構は14世紀代に及ぶ。黒褐色土層の下層の黄褐色土層は必ずしも明確な層位として捉ることができず、また、それに伴う遺構も峻別が容易とは言えない。しかしながら、第Ⅰ期と第Ⅲ期との中間に位置する遺構の存在もあり、第45次調査と同じくその形成された時期を12世紀前半頃と考えたい。さらにその下層の茶灰色土層には第Ⅰ期遺構が切り込むが、これには11世紀後半～12世紀前後の時期のものがある。SX3455とした炭層が、北区のほぼ中央部で確認されたが、それは茶灰色土層とさらに下層の暗茶灰色土層ないし腐植土層との間にある。SX3455と暗茶灰色土層及び腐植土層からは８世紀後半代の遺物が出土している。また、金鼓の鋳型はこの層のやや上層にあたる茶灰色土層から出土している。

礎石建物

SB3460　北区の西半部の南壁際で検出した東西２間、南北１間以上の礎石建物である。礎石は径40cmほどのものが５個残存する。東西・南北の柱間寸法は1.95m等間となる。建物はさらに、発掘区外へのびるものと考えられる。

SB3560　南区の西南隅部で検出した東西３間以上、南北２間以上の建物である。径20～40cmの礎石が残るが原位置から動いているものもあり、柱筋は通っていない。原位置にあるとみられる礎石による柱間寸法は東西方向が東から2.00m･2.00m･1.50m、南北方向は南から2.45m･1.95mである。南北方向については、南側一間の柱間がひろいため、あるいは一間分の礎石が抜き取られたことも考えられる。建物はさらに発掘区外へのびるものと思われる。

掘立柱建物

SB3461　南区の北西部で検出した２間×２間の総柱建物である。柱間寸法は南北方向が1.75m等間、東西方向が東から1.70m･1.60mとなる。柱の掘形は円形を呈し、径15～30cm、深さ10cm以上で柱根が５ケ所に残る。

SB3565　北区の北西部で検出した２間×２間の建物である。柱間寸法は東西方向が東から0.90m･0.85m、南北方向は0.90m等間となる。柱の掘形は円形で径20～40cm、深さ10cm以上をはかり、そのうちの１ケ所には柱根が残る。

柵

SA1235B　溝SD1230とともにその西側を区画する南北方向の柵で、第45次調査検出の柵SA1235Bと一連のものである。柱間は一定でなく1.4～2.0mと幅がある。柱掘形は径20～50cmの円形で柱根が残っているものが多い。この柵は北区の南端までは確実に続くが、南区では遺

構面の残りが悪く柱穴は確認できなかった。そのため、この柵がさらに南へのびるものか、あるいは北区と南区の未発掘区で収束するものか判断しがたい。

SA3561　北区の西南部で検出した「コ」の字形に巡る柵状の施設である。規模は南北3.4m、東西1.6mをはかる。柱穴の径は8～15cm、深さ20cmをはかり、19個確認した。埋土は黄灰色の砂質土。

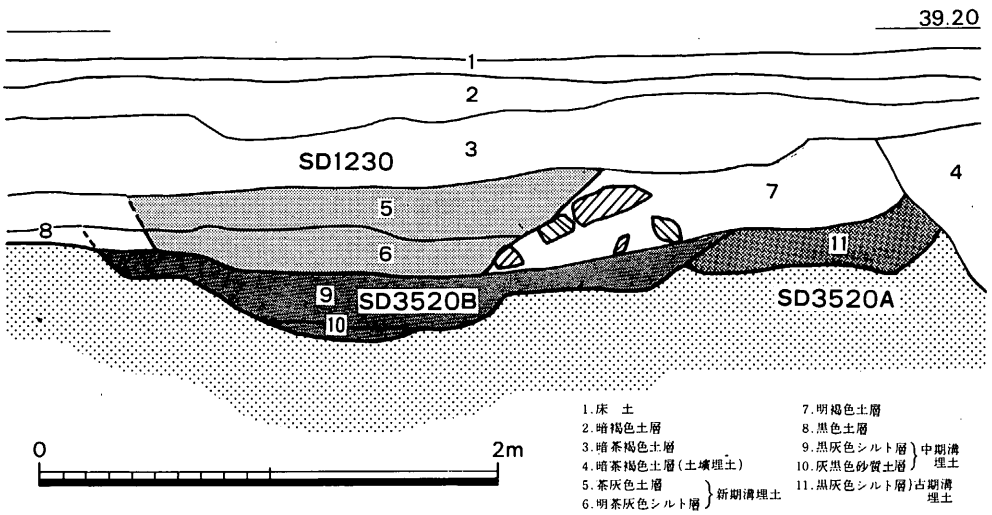
SA3527　北区の南壁際、SB3460の北で検出した柵列である。南北方向に径20～40cmの柱穴がならぶ。柱根は4ケ所にのこる。柱間は一定でなく、その間隔がせますぎることからみて、すべての柱穴が柵に伴うものかは不明である。また、SB3460との関係については、位置的に近接しすぎており方向も振れていることから時期差が認められる。

溝

性格不明なものを含め、多数の溝を検出した。

SD1230　発掘区の東端部で検出した南北溝で、第45次調査検出の溝SD1230Bと一連のものである。この溝は同一方向の流路をもつ溝SD3520A・Bを切っている。溝幅は2.0～2.15m、深さ0.4mをはかる。溝の西側は花崗岩の自然石で護岸をおこなっているが、東側についてはもともと石による護岸はされていなかったものと考えられる。石はそのほとんどが抜き取られているが、北区北半では比較的残りがよい。埋土は茶灰色土で南側にはその下に砂が堆積する。この溝には柵SA1235Bが伴う。

SD1300　北区の中央のやや西寄りで検出した南北溝で、第45次調査検出の溝SD1300と一連のものである。長さは18m以上で、さらに南の発掘区外に延びる。溝は黄褐色整地層から掘り込ま



第41図　SD1230・3520A・B土層断面図

れている。溝の上端幅1.4～1.8m、底部幅1.2～1.3m、深さ0.35mをはかる。断面は逆台形状を呈す。検出部分の南・北端の底面レベル差は0.4m前後であり北から南に流れるものである。

SD3478　南区の中央西寄りで検出した溝で鍵形を呈すものである。溝の上端幅0.8～1.2m、下端幅0.7～1.0mをはかり、断面は逆台形状を呈する。底面のレベルは一定である。土壙と切り合うが前後関係は不明である。

SD3500　北区の中央部やや東寄りで、上層整地除去後に検出した南北大溝である。溝は真北から約7°東に振れている。溝の上端幅2.8～3.3m、底幅2.0～2.7m、深さ0.65mをはかる。北・南壁際にいれた二ケ所のトレンチで確認し、長さは18mになる。南北ともさらに発掘区外にのびる。溝の埋土は上層の黒色土と下層の腐植土にわかれ、特に下層から多数の完形の土師器、瓦器、加えて種々の木製品が一括出土した。

SD3520A・B　溝SD1230の下層で検出した溝で、第45次調査検出の溝SD1230Aと一連のものである。A・B二時期にわかれ、BがAを切っている。Bは二段掘りで上端幅2.8m、二段目の幅1.5m、深さは0.5m。Aは幅2m以上、深さ0.3mをはかる。AとBの時期差はほとんどない。

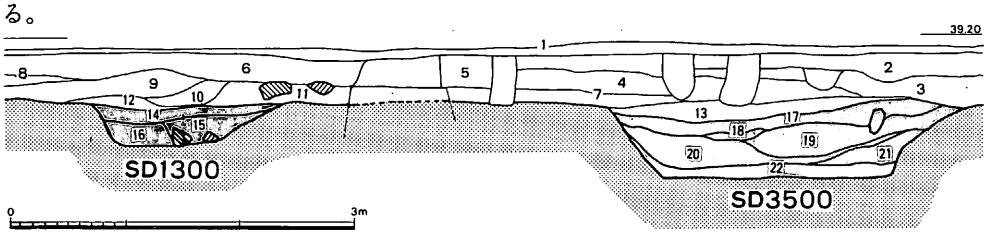
SD3550　南区のほぼ中央をわずかに蛇行しながら流れる南北溝である。溝のはじまりについては北側が発掘区外のため不明であるが、北区では検出していないことから、この間の未発掘区に求められよう。溝の上端幅1.8～2.7m、底部幅1.0m、深さ0.3mをはかる。埋土は下層が黄灰色の砂、上層には暗灰色の粘質土が堆積する。中央付近でSE3470・SE3475に切られる。南・北端での底面のレベル差は0.5mをはかる。

SD3555　南区の西北隅部で、約9.5m分検出した。土壙SK3485と切り合うが前後関係は不明。溝の西肩は発掘区外になるため幅等は不明である。

井戸

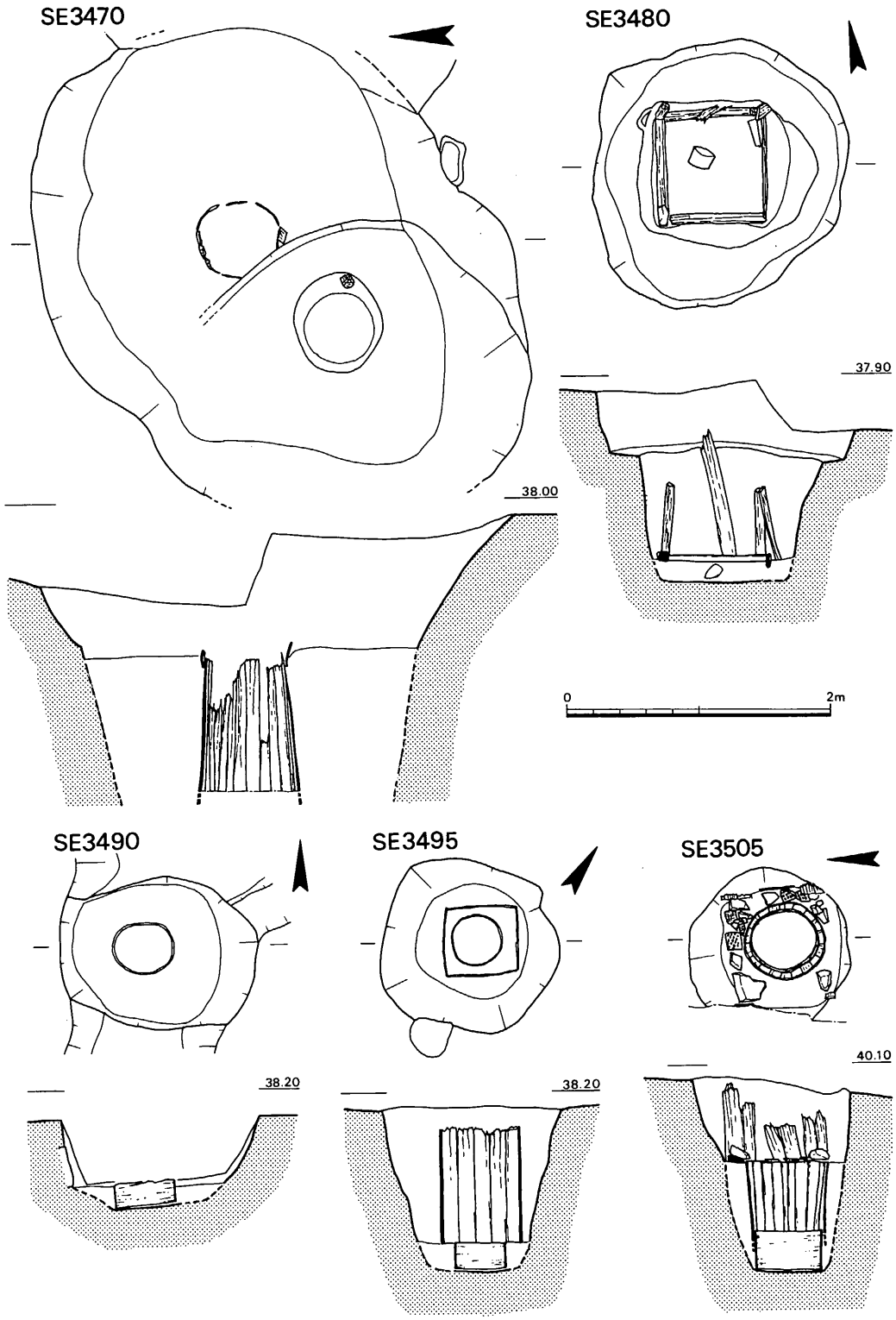
総数14基を検出した。

SE3465　南区の中央東寄りで検出した。掘形のプランは正円形を呈し、径1.5m、深さ2.2mをはかる。底部径は0.8m。井戸枠は残っていない。掘り込みは砂層をつきぬけて礫層にまで達する。



1.床　土
2.暗褐色土層
3.暗茶褐色土層
4.黄褐色土層
5.赤褐色土層（焼土のブロック多数混入）
6.暗黒灰色土層
7.黒茶色土層
8.黒灰色砂質土層
9.暗褐色土層（黄褐色ブロック混入）
10.黄灰色粗砂層
11.7に同じ
12.茶灰色砂層
13.黒色土層
14.暗茶色粘質土層
15.黒灰色砂質土層
16.暗灰色粘質土層
SD3500埋土
17.黒色粘質土層
18.青灰色粘土層
19.淡黒色粘質土層（木質分多量に含む）
20.黒色粘土層（土器を多量に含む）
21.黒色砂質土層
22.黒色粘土層（瘠みをおびる）
SD1300埋土

第42図　SD1300・3500土層断面図


SE3470
38.00
SE3480
37.90
0
2m
SE3490
38.20
SE3495
38.20
SE3505
40.10

第43図　井戸実測図(1)

SE3470　南区の中央やや東南寄りで検出した桶側構造の井戸である。掘形は径1.5mの円形プランを呈し、深さは2.1m以上をはかる。井戸枠の南西部をSE3475に切られる。井戸枠は掘形のほぼ中央に位置し、桶側を二段分確認した。上段は桶側の下端部が3枚かろうじて残るのみである。下段の桶側は上端径0.56m、深さ1.10m以上で、幅9～10cmの板材を約20枚使用している。桶側の形状は裾開きになる。

SE3475　井戸SE3470の西で検出した。桶側構造と考えられる井戸である。掘形の規模は明確にし得ていないが、径1.8mほどの略円形を呈すものであろう。掘形中央の茶灰色部分を0.6mほど下げたが、井戸枠は残存していなかった。

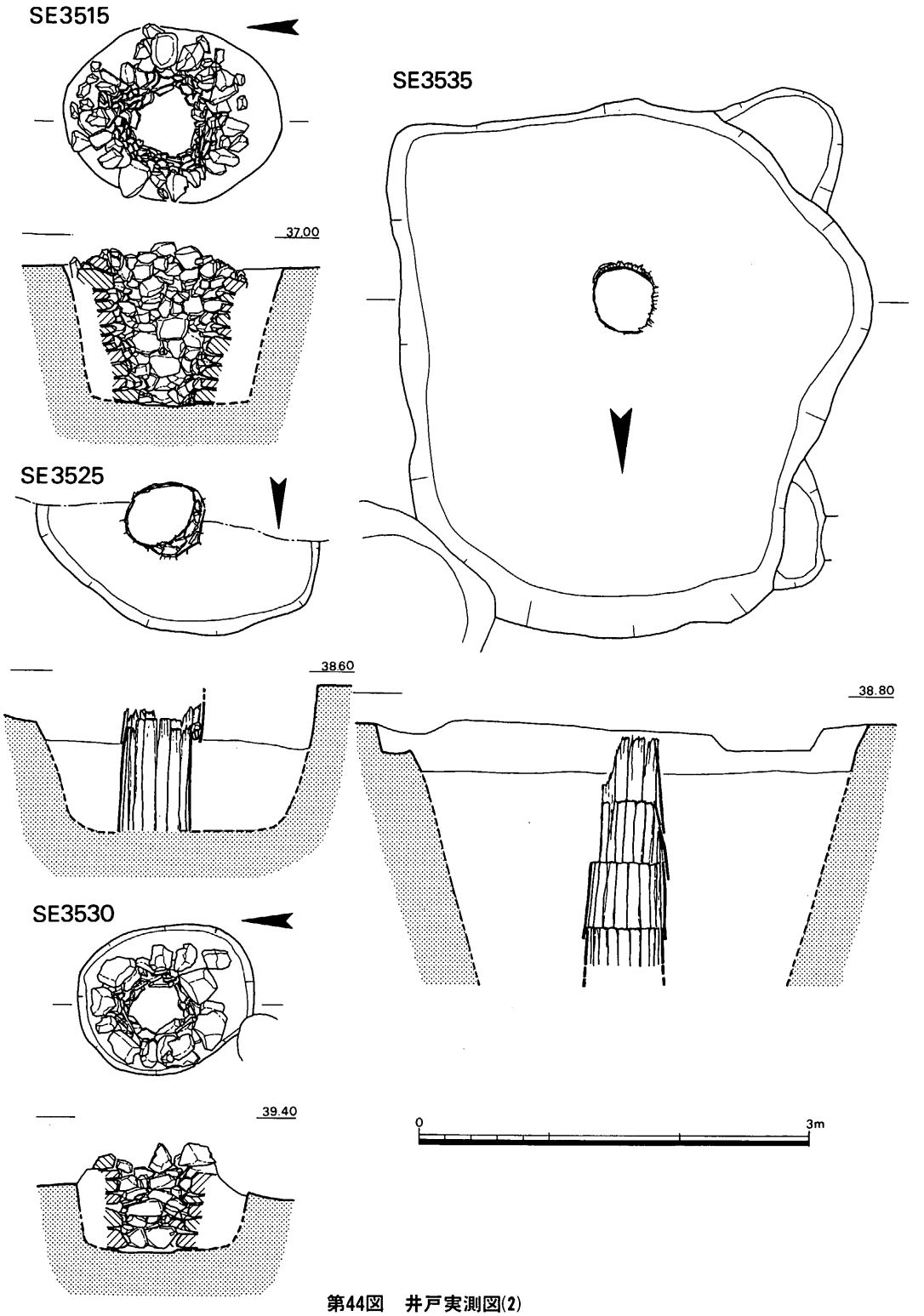
SE3480　南区の南西部で検出した井戸で方形縦板構造と考えられる井戸である。掘形は二段掘りとなる。平面プランは1.1×2.1mの略円形を呈し、深さは1.5mをはかる。下段は北辺を除く3辺の中央が膨らんだ方形となる。上端幅1.4m、深さ1.0m。井戸枠は北・西辺には丸木材を、南・東辺は幅9cm、厚さ約2cmの板材を方形に組み横桟とし、北辺両端には支柱となる丸杭がたつ。内法0.76m、丸杭の長さ0.52m。縦板は遺存状況がわるく、わずかに二枚が残るのみである。板材の長さは0.98mをはかる。底には曲物が倒れた状態で残っていたが井戸枠ではない。II－A類。

SE3490　南区の北部中央で溝SD3550の埋土除去後に検出した井戸である。掘形は径1.4mで略円形を呈し、深さは0.8mをはかる。基底部の中央には径0.44m、深さ0.38mの曲物を据え置く。全体的に遺存状況はあまよくない。

SE3495　南区の北西隅部で検出した井戸である。掘形は1.4×1.4mの隅丸方形を呈し、深さは1.3mをはかる。構造は上部が方形縦板、下部には曲物を据えるものである。上部の井戸枠は内法0.52×0.55mで、深さ0.88m。板材は幅11～13cm、厚さ約1cmで各辺に5枚ずつ使用する。底部の曲物は径0.37m、高さ0.21mをはかる。

SE3505　南区の北西隅部、井戸SE3495のすぐ西で検出した井戸である。掘形は径1.2mの円形を呈し、深さは1.5mをはかる。井戸枠は上部が方形縦板、下部が桶側の累積構造のものであり、底部にはさらに曲物を据える。上部の縦板は東側に5枚残っており、板材の幅12cm前後をはかる。下部の桶側は上端径0.60m、下端径0.56m、深さ0.62m。板材は幅約10cm、厚さ1.5cmのものを18枚使用している。なお、桶側の上端周囲には、瓦片や小石をしき、四隅には人頭大の石が配されている。底の曲物は径0.50m、高さ0.30m。掘形の一部は調査区外のため未掘である。II－A類。

SE3510　北区の東北隅部で検出した井戸で溝SD1230を切っている。掘形は径3.5m前後の円形を呈す。掘形の東側は調査区の東壁となり、崩壊が著しかったために確認面から約0.6m下げるにとどめた。井戸枠と考えられる部分には径0.6mほどの花崗岩がかさなっており、井戸廃棄後に枠内に投げ込んだものと考えられる。



第44図　井戸実測図(2)

SE3515　北区の中央南寄りで検出した石組の井戸である。掘形の平面プランは1.4×1.7mの南北に長い楕円形を呈す。花崗岩の自然石を摺鉢状に積み上げ、10～12段が残っている。石組の上端径0.8m、底部径0.4m、深さ1.3mをはかる。底面は粗砂層に達する。V類。

SE3525　北区の中央南端部で検出した桶側構造の井戸で、南半分は発掘区外になる。掘形は径2.2mの円形を呈する。掘形のやや東寄りで二段の桶側を確認したが上段は0.3mほどしか残っていない。板材は21枚。下段の桶側は深さ0.85mで、幅10cmの板材を20枚使っている。井戸使用時の土圧によりかなり変形しており、一段目との境にできた空間に小石を6個詰め込んで補修している。底面は青灰色シルト層に達する。井戸枠内の埋土から「呑䨻天真急々如律令」と墨書された土師器皿が出土した。

SE3530　北区の中央北側で検出した石組構造の井戸である。掘形は1.1×1.3mの楕円形を呈す。人頭大の花崗岩の自然石を6段、摺鉢状に積むが、北壁の断面は直に近い。上端径0.58m、底面径0.38m、深さ0.86mをはかる。底面は砂層に達する。V類。

SE3535　北区中央の西寄りで検出した桶側構造の井戸である。掘形は南北径4.2m、東西径3.6mの不整円形を呈する。掘形の南寄りに井戸枠があるが、周囲の壁の崩落がはげしかったため、井戸枠は4段目までを確認するにとどめた。下3段の桶側の残りはきわめて良好である。上端径は下から二段目で0.54m、最下段は0.56m。桶側は最上段の深さ0.75m、使用板材の幅は14～15cm、下三段はそれぞれ深さ0.56m以上、板材の幅8～10cmと最上段に比して板材が幅狭となっている。板材は一段につき19枚を使用する。遺構面からの深さは1.9mをはかる。

SE3540　北区の西南隅部で検出した井戸で、掘形は径3.3mの円形を呈す。中央からやや北西寄りに井戸枠の痕跡があるが、井戸側等はまったく残存しない。

SE3545　北区の北東部で検出した。掘形のプランはほぼ正円形で、上端径0.9m、底部径0.7m、深さ1.1mをはかる。井戸枠は残っていないが、規模・形状からみて井戸と考えられる。

土壙

多数の土壙を検出したが、これらのなかで主要なものについて述べる。

SK3464　南区の中央東寄りで検出した。西側を井戸SE3470に切られている。平面プランは正円形に近い形状を呈す。径1.1m、深さ約0.8mをはかる。埋土は黒褐色の粘質土である。

SK3501　北区の東南部で検出した。平面プランは不整形。規模は2.2×2.2m、深さ0.3m。床面は中央がやや凹むが、ほぼフラットである。埋土は黒灰色土で多数の土師器が出土した。

SK3506　北区の北東部で検出した略隅丸方形を呈する溜り状の土壙で、西側は円形に近い。東西長3.6m、南北長2.8m、深さ0.3mをはかる。床面は中央部がわずかに凹むものの、ほぼフラットである。

SK3507　北区の北東部、SK3506の北側で検出した。東西軸を長円形の土壙で、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4～0.5mをはかる。底面は東から西へ傾斜する。粘性の強い黒灰色土を埋土とする。

SK3529　北区の中央寄りで検出。井戸SE3535の掘形と切り合う。平面プランは不整円形を呈す。径1.7m、深さは0.5mをはかる。

出土遺物

SD1230出土土器・陶磁器（第45図・図版54　別表）

土師器

Ⅲａ（３～８）　口径8.0cm～8.8cm、器高0.9cm～1.2cm、底径5.9cm～7.0cmで、全て糸切りで板状圧痕を有する。

Ⅲｂ（１・２）　口径6.4cm～7.8cm、器高1.7cm～1.9cm、底径5.1cm～5.4cmで、底部は糸切り、板状圧痕を有する。

杯ａ（９～12・14）　口径11.9cm～13.6cm、器高2.5cm～2.7cm、底径7.8cm～9.2cm。糸切り。

杯ｂ(13)　口径13.0cm、器高3.1cm、底径7.8cm。糸切りである。

瓦質土器

鉢(15)　口径30.2cm前後に復原される。胎土には余り目立たない程度の砂粒を含み灰褐色を呈する。全体に摩滅が著しいが、内面から口縁部はヨコナデである。外面は凹凸がみられる。内面から口縁部にかけては焦げつきのため黒化している。

中国陶磁器

白磁

Ⅲ（16・17）　16は口縁部の釉をカキとり露胎とし、やゝ空色味のある白濁釉が全面にかかる。Ⅸ－１･Cである。17は白灰色の胎に淡灰色の透明釉がかかる。見込みに印花があるが、余り明瞭でない。Ⅷ－２・b類。

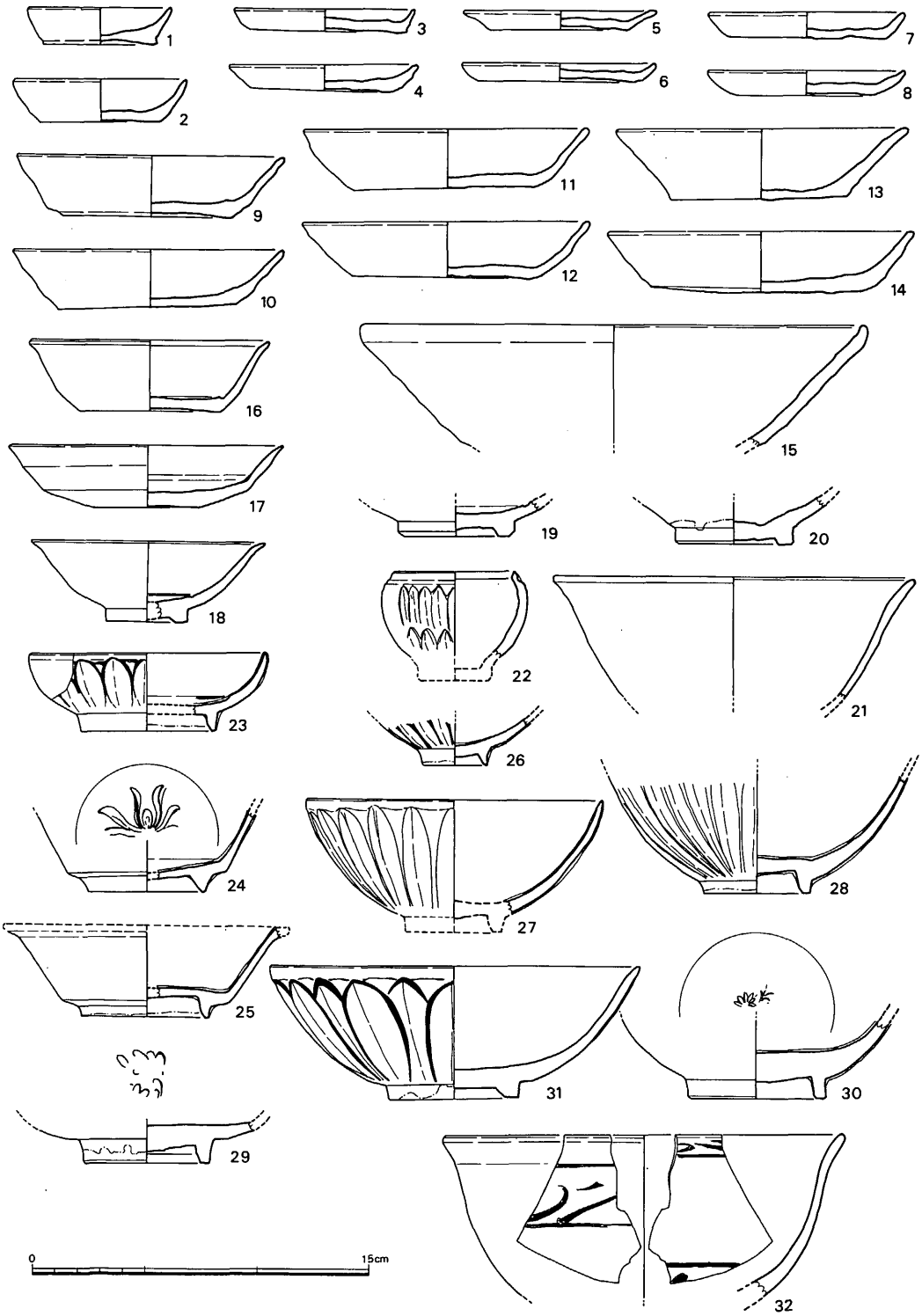
椀（18～21）　18は口禿の小椀である。白色の胎に白濁の釉が全面にかかる。19・20は口禿の椀の底部で20は高台部付近は露胎となる。21は口縁部片で、口縁端部を口禿とする。

青白磁

壷（22）　白色の胎に透明に近い淡青色を呈する釉をかける。外面には二段になった蓮弁が型押しされる。

青磁

杯（23～25）　灰白色の胎に淡緑色の釉が厚くかかり、そのために蓮弁は明瞭さを欠く。高台先端は尖り露胎となる。Ⅲ－５類。24・25はともに直線的な体部を有し、淡緑色の釉を全面に厚く施すが、いずれも高台先端は露胎とする。24の見込みには印花がある。Ⅲ－１・b類。



第45図　SD1230出土土器・陶磁器実測図

椀（26～31）　26～28は灰白色の胎に淡緑色の釉が厚目にかかり、幅の狭い蓮弁は鎬が明瞭でない。高台先端はケズリにより露胎となる。29・30はやゝ細めの高い高台を有する。29は高台下半以下は露胎であり、茶褐色に発色している。見込には印花があるが不鮮明である。30は濃緑色の釉が厚目に施されているが、高台見込みを輪状にカキ取っている。内面の見込みには印花があるが不鮮明。

ベトナム陶磁

椀（32）　小片であるが、器肉の厚さ等から大形の椀とみられる。内面には口縁部と見込み付近に条線と施文の鉄絵。外面には体部のほぼ中位に２本の条線と花文の鉄絵がある。釉は光沢がなく、やゝ黄味のある白色を呈する。

SD1300出土土器・陶磁器（第46図・図版55　別表）

土師器

皿ａ(1)　口径10.2cm、器高1.6cmである。ヘラ切りで板状圧痕を有する。

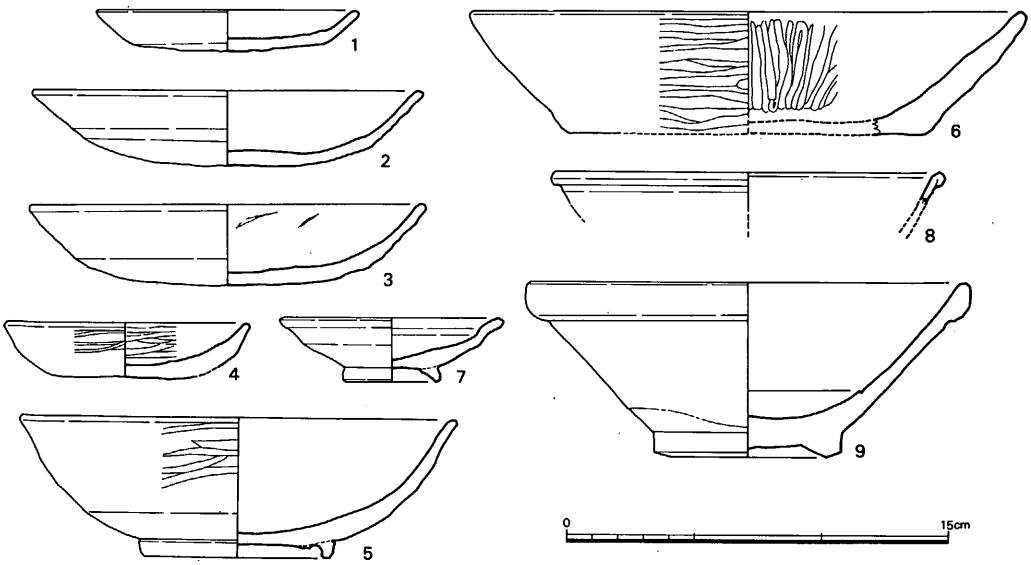
丸底の杯（２・３）　口径15.3cm～15.6cm、器高3.0cm～3.2cm。いずれも内面にミガキがあるが、３にはコテ当痕が残る。体部中位以下はヘラ切り離し後の板状圧痕がみられる。

瓦器

皿(4)　口径9.8cm、器高2.2cm、内外面に密なヘラミガキを施す。

椀(5)　内面および外面の体部中位以上を粗いヘラミガキする。内面は灰白色で、外面は黒色を呈する。

鉢(6)　器高が低く、器肉の厚い浅鉢である。砂粒を比較的多く含み、硬質に焼成されている。



第46図　SD1300出土土器・陶磁器実測図

灰黒色を呈し、内面にはタテ方向、外面にはヨコ方向の粗いヘラミガキを施す。出土例としては希有である。

灰釉陶器

皿(7)　口縁部を外反させる皿である。内面の見込と体部下半以下は釉がかかっていない。灰釉は薄くまだら状になる。

中国陶磁器

白磁

椀（8・9）　8はⅠ類の口縁部小片である。小さい玉縁は折り曲げが明瞭である。胎土は白濁色で、釉は若干黄味を帯びた白色を呈する。9は玉縁の大きい口縁部を有する。灰白色の胎に淡黄灰色の釉が体部下位にまでかかる。

SD3500出土土器・陶磁器（第47～51図・図版55～58　別表）

溝の埋土を上層（黒色土層）と下層（フショク土層）に分けて採り上げたので、ここでは上層・下層出土として報告する。

下層出土土器・陶磁器

土師器

皿a（1～16）　口径8.7cm～10.0cm、器高1.2cm～1.8cm。底部は全てヘラ切り離しで、板状圧痕を有する。5と13には底部のほぼ中心部に径2.0cmの穿孔がある。これは焼成後になされたもので、内面より外に向って力が加えられている。11には油煙が付着する。

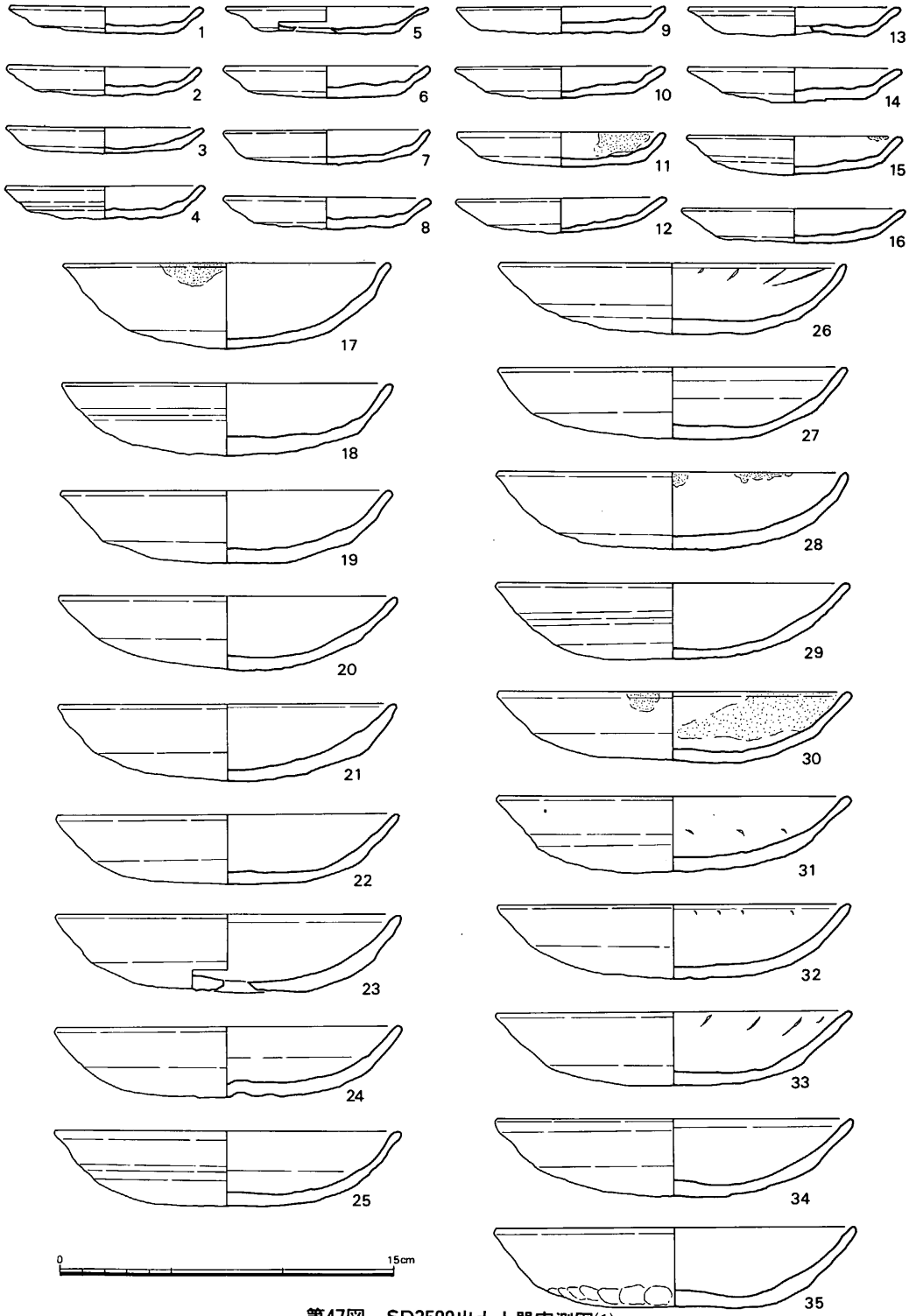
丸底の杯（17～35）　口径14.8cm～16.2cm、器高3.1cm～3.9cm。内面はミガキにより平滑である。22・26・31・32・33の内面にはコテ当痕、外底部には板状圧痕を伴う。全てヘラ切りで17・28・30には油煙が付着する。23の底部中心には先述の5・13と同様に径1.5cm前後の穿孔がある。

器台（36）　杯部と脚部が同じ形態をもつ器台の破片である。筒部は径1.0cmの棒に粘土をまきつけて作られたもので、そのため器面は指による成形のため凹凸が著しい。杯部と脚部はそのほとんどが欠失しているが、出土例からみると丸底の杯の成形・技法に似ている。

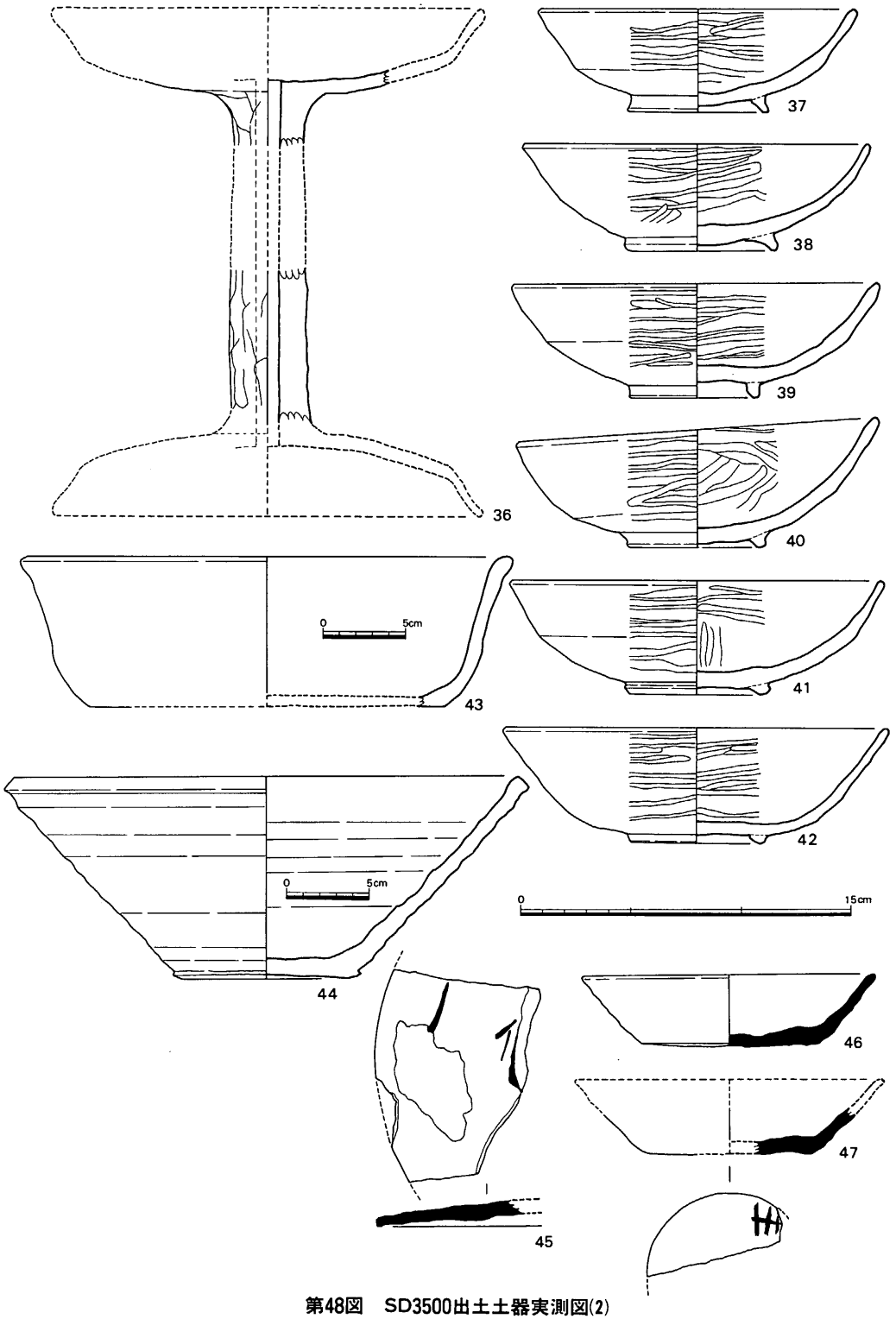
鉢（43）　口径30.0cm前後に復原可能な大形の鉢である。胎土には砂礫が多く、器面は粗い。内面はヨコナデ・ナデ調整で外面はナデないし指により成形・調整している。体部の下位はヘラ削りし、底部には板状圧痕を残す。淡灰褐色に焼成され、比較的硬質である。口縁部端には煤が付着し、内面には焦げつきがみられる。

瓦器

椀（37～42）　37は丸底の杯に高台を貼付した形態を有する。内外面のヘラミガキは粗く、37・38・40は内面体部を4～5回に分けてヨコ方向のヘラミガキを行なう。38・41・42の外面体部下半には燻しがなく、また、他のものには十分な燻しがなされておらず、暗灰色ないし黒灰色に焼成されている。



第47図　SD3500出土土器実測図(1)



第48図　SD3500出土土器実測図(2)

須恵器

蓋（45）　杯蓋の破片である。口縁部は丸味があり、内面の屈曲は明瞭でない。外天井部には墨書と墨痕がみられるが、墨書については判読できない。

杯（46・47）　46は口径13.3cm、器高3.3cm、底径6.9cm。胎土には若干の砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。底部はヘラ切り未調整である。47の底部はヘラ削り再調整を行ない底部端には不確実であるが「三十」と判読できる墨書がある。

甕（62）　口径24.8cm、器高43.7cm、体部最大径45.6cm。平底の甕で、全体に器肉が薄く、焼成・色調とも須恵器であるが、器形・調整等からみて、大宰府出土の須恵器としては類例がきわめて少ない。「く」字状に折り曲げた頸部は口縁部を外反させ端部を直におさめる。丸くなった体部はほぼ中位に最大径を有し、底部は平坦とする。輪づみによって成形され、数個所でその痕跡をみることができる。外面の体部上半はヨコナデで、下半は叩きの後ヨコナデされているが、その痕跡が部分的に認められる。内面の口縁部と体部の大部分はヨコナデでロクロ目が顕著であるが、下位には当具痕が残っている。外底は未調整である。胎土にはほとんど砂粒を含まず緻密で、焼成も硬質堅緻である。暗灰色を呈する。

須恵質土器

鉢（44）　口径31.8cm、器高13.2cm、胎土には砂礫を比較的多く含む。おそらく片口を有する捏鉢になると思われる。体部の内外面にはロクロ目が顕著にのこる。口縁部は灰黒色で他は白灰色に焼成される。

中国陶磁器

白磁

小壷（49）　口径2.0cm、器高3.9cm、体部最大径5.3cmの小壷である。白色の胎に黄白色の釉がうすく施され光沢がある。内面の口縁部付近と外面の体部下位と底部は露胎。

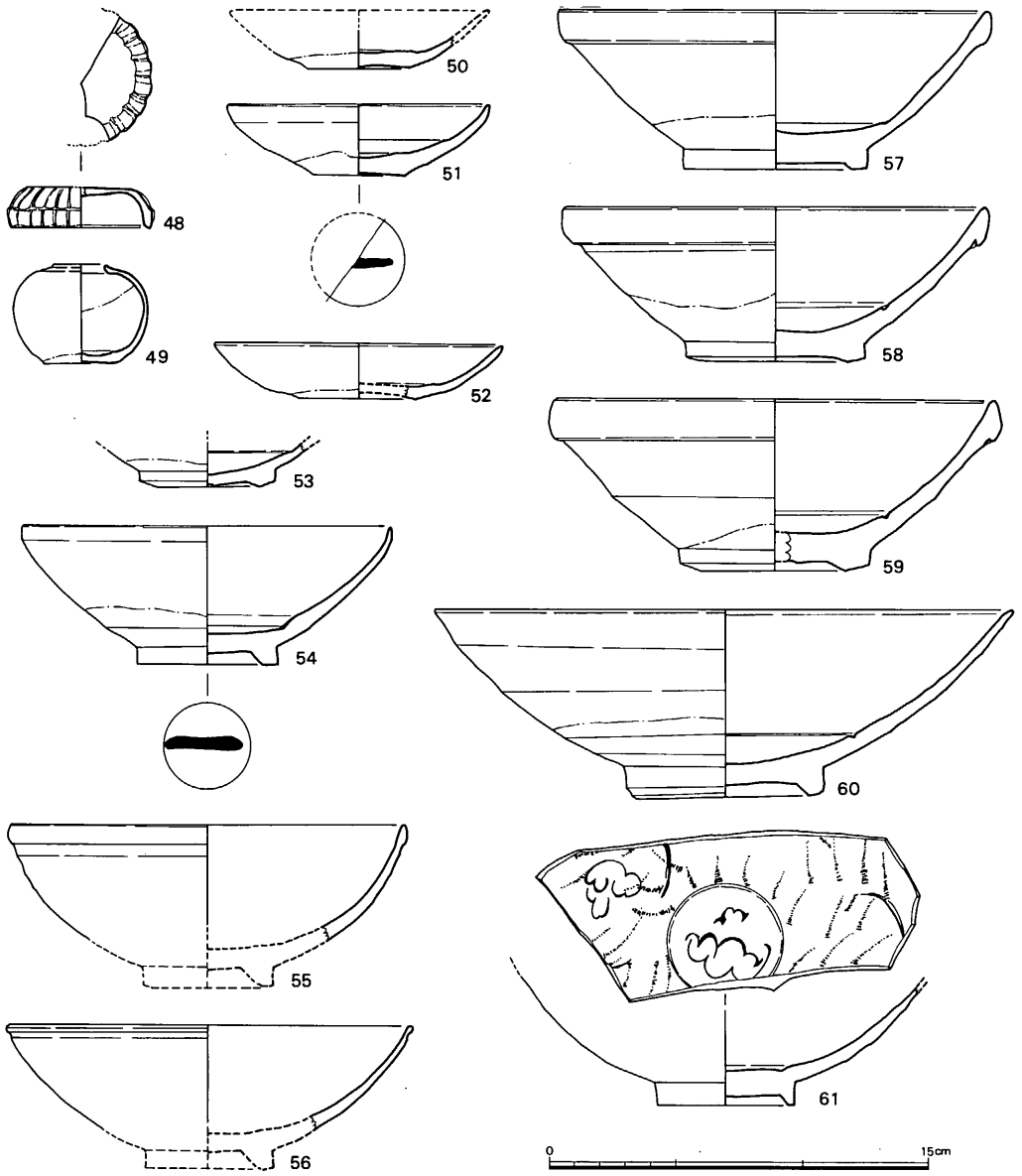
皿（50～53）　50～52はⅥ類で、白色の胎に黄味の強い白色釉をかける。体部の下位から底部は露胎である。51の底部には「一」と判読できる墨書がある。53はⅡ類で、体部下位と底部は露胎である。

椀（54～60）　54～56はⅡ類で、口縁部を内弯させる54と玉縁を有する55・56がある。57の玉縁は丸く小さい。やゝ黄味のある胎に透明感のある黄白色の釉を薄く施す。外面の体部下位から底部は露胎となる。54の高台内面には「一」の墨書がある。57～60はⅣ－1・a類で、断面三角形状の玉縁の口縁を有する。白色の胎には黒い粒子が混入している。灰黄味のある白色釉はやゝ厚目に施され、外面の体部下位から底部は露胎である。60は口径22.9cm、器高7.5cm。やゝ内弯気味の体部と口縁部は外方に開く。内面の見込との境には浅い段を有する。わずかに灰色味のある胎には黒い微粒子が混入している。やゝ黄味のある白色釉は光沢がなく、外面体部下半は露胎となっている。大宰府出土例としてはきわめて少ない出土品である。

青白磁

合子（48）　上・下二段からなる蓮弁文を型造りにより成形している。内面の口縁部から天井部の一部は露胎となる。白色緻密な胎にわずかに青味のある白色釉を施す。

椀（61）　体部と口縁部がやゝ内弯気味に大きく外方に開く、器肉の薄い椀である。内面に



第49図　SD3500出土土器・陶磁器実測図(3)

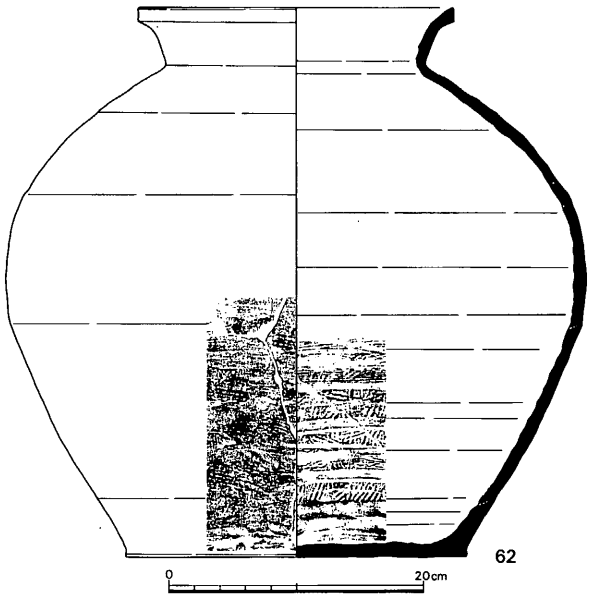
は全面に櫛状工具とヘラによる花文が施される。淡青白色の透明感のあるガラス質の釉がうすく施され、高台内面は露胎となっている。大宰府出土例としてはきわめて少ない。

上層出土土器（第51図　別表）

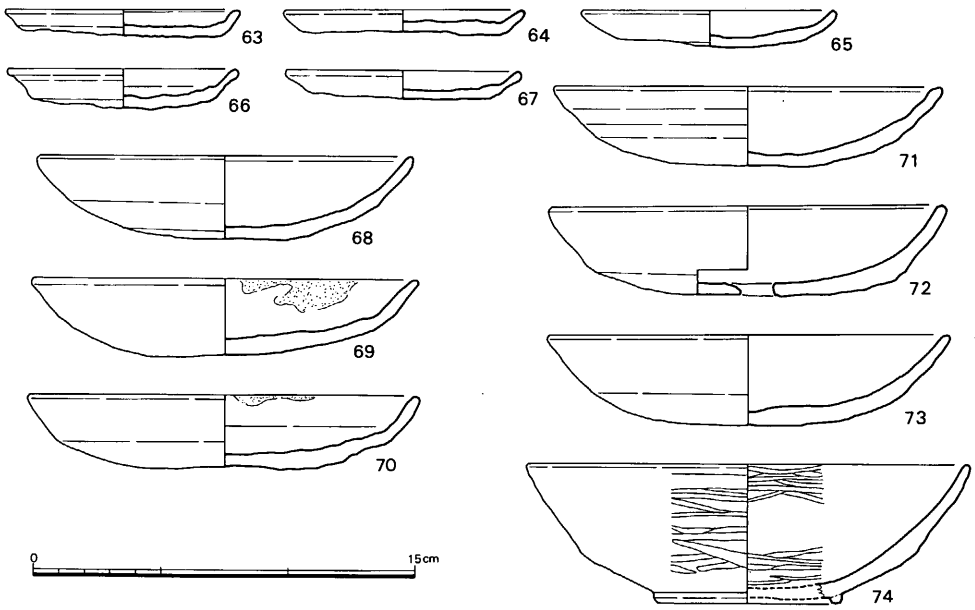
土師器

皿ａ（63～67）　口径9.1cm～10.0cm、器高1.0cm～1.6cm。63～65は糸切りで66・67はヘラ切りである。いずれも内底をナデ調整し、外底には板状圧痕を有する。

丸底の杯（68～73）　口径14.6cm～15.6cm、器高3.0cm～3.5cm。いずれも内面にミガキを施すが、68・72にはコテを当て痕を残す。69・70には油煙が付着し灯火器として使用されている。また、72には底部の中心に径1.5cm前後の焼成後の穿孔があ



第50図　SD3500出土土器実測図(4)



第51図　SD3500上層出土土器実測図(5)

る。

瓦器

椀（74）　口径17.3cm、器高5.5cm。内外面に粗いミガキを施す。黒灰色を呈する。

SD3520出土土器・陶磁器（第52図・図版58　別表）

土師器

皿a（2～5）　口径8.2cm～9.2cm、器高0.9cm～1.2cm、底径5.8cm～8.4cm。底部は全て糸切りで、板状圧痕を有する。

皿b(1)　口径6.6cm、器高1.8cm、底径4.3cm。口縁部には油煙が付着する。底部は糸切りである。

皿c(6)　口径10.1cm、器高1.5cm、底部にはわずかに糸切り痕を残す。

杯a(7)　口径13.3cm、器高2.9cm、底径8.3cm。底部には糸切り痕と板状圧痕を残す。

蓋(8)　口径を15.0cm前後に復原できる。砂粒を多く含み、暗茶色に焼成されている。類例からすると撮を有するとみられる。

須恵器

甕（21）　「く」字状に外反させる口頸部は短かく、ぶ厚い。口縁部はヨコナデで、体部の外面は平行叩きを縦横位に敲打し、細かい格子目状とする。内面は粗いナデで当具痕をすり消している。胎土には余り砂粒を含まず、硬質に焼成されている。

中国陶磁器

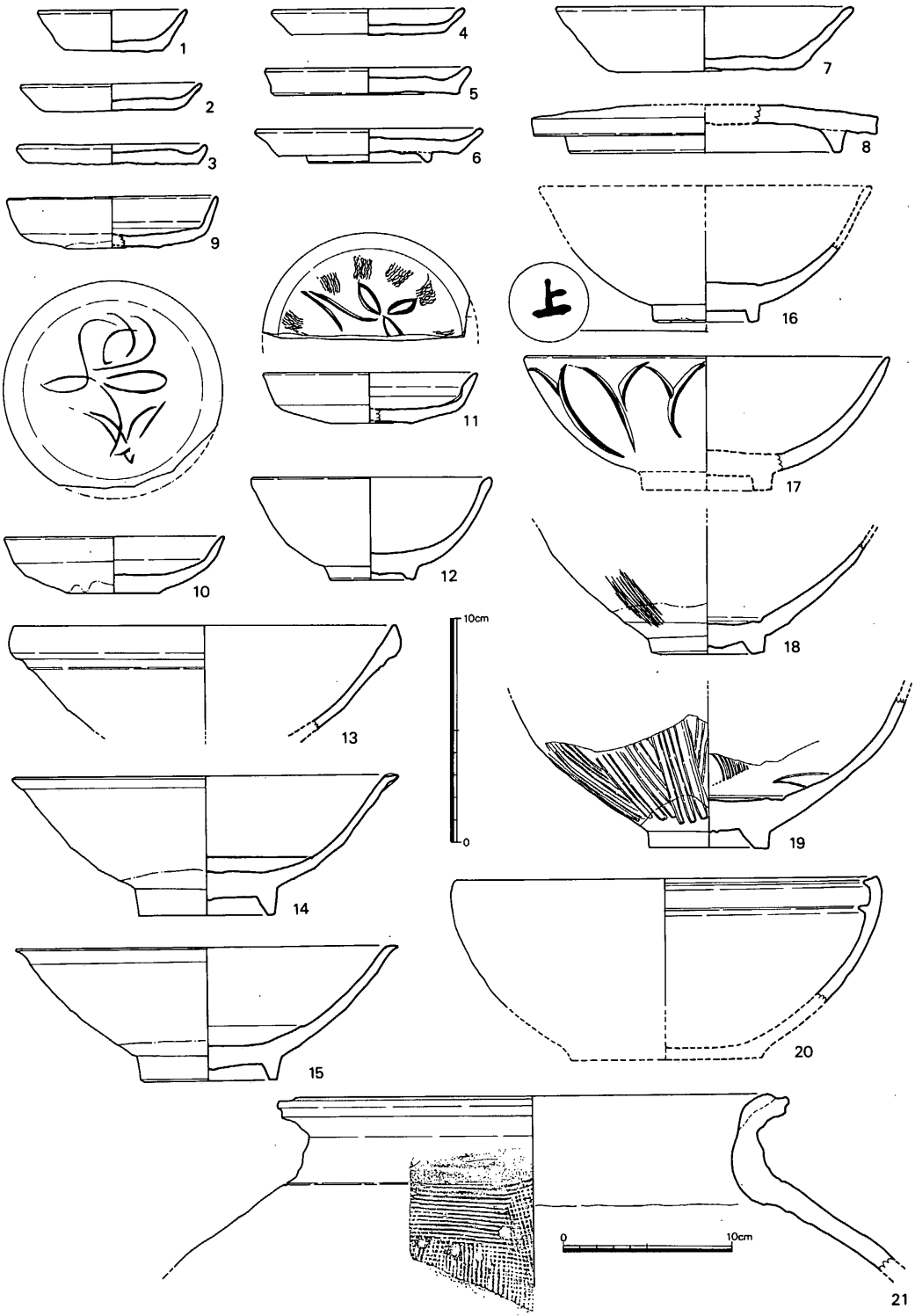
白磁

皿（9～11）　9は胎土は白色で黒い細粒子が混じる。釉はやゝ灰色味があり白濁色を呈する。外面は体部下位から底部は露胎である。釉のかかりは悪い。10・11は内面見込に花文を描き、淡灰色の透明釉は10の体部下位以下を、11は外底面を回転ヘラ削り調整し、露胎とする。

椀（13～15）　13は三角形に近い玉縁の口縁部を有し、外面体部の中位以下は露胎とする。14・15は口径17.0cm、器高6.0cm～6.2cm。口縁端部を平坦にするタイプで、透明感のある淡黄灰色の釉がかかる。体部下位と底部は露胎である。

青磁

椀（12・16～19）　12は小形の椀で口径10.8cm、器高4.6cm。淡緑色の釉はやゝ厚目にかかり、ガラス質で光沢がある。高台畳付および高台内面は露胎。16・17は龍泉窯系で、灰白色の胎に淡緑色の釉がかかる。16は無文であるが17は外面体部に鎬蓮弁を有する。16の高台見込には「上」の墨書がある。18・19は同安窯系で、淡茶灰色の粗い胎に淡黄緑色ないし淡茶緑色のガラス質の釉がかかる。外面体部下位以下は露胎で、18の外面体部には細目の、19には幅広の櫛状工具で施文されている。



第52図　SD3520出土土器・陶磁器実測図

陶器

鉢⑳　口径25.0cmに復原できる無釉の陶器で、胎土には白色の粒子を多く含み、粗い胎で、淡茶色を呈する。摺鉢として使われる事が多く、内面がなめらかになっている例が多い。

SD3550出土土器・陶磁器（第53図・図版59　別表）

土師器

皿ａ（１～12）　口径9.0cm～10.3cm、器高1.1cm～1.6cm。全て内底はナデ調整し、外底はヘラ切りで板状圧痕を有する。２の口縁部内面には油煙が付着し、灯火器として使用されている。

皿ｃ⒀　口径10.0cm、器高2.5cm。高台内面には板状圧痕を残す。

丸底の杯（14～18）　口径14.8cm～15.7cm、器高2.9cm～3.6cm。内面をミガキ、外底はヘラ切り後の板状圧痕を残す。

鉢⒆　口径28.6cm、器高7.0cm、底径18.8cmに復原される。胎土には砂粒を多く含み、淡褐色に焼成されている。内面はヨコナデで外面は大部分が摩滅のため調整は不明であるが、体部下位はヘラ削りしている。内面には焦げつきか、煤状のものが付着。

緑釉陶器

椀⑳　底部と体部の小片である。胎土は須恵質で灰色を呈し、砂粒を含まない精選されたものである。底部は円盤貼付で、平坦になっている。全面施釉で、濃緑色の釉は風化のためか残りは良くない。

中国陶磁器

白磁

皿（21）　Ⅵ類の底部片である。体部下位から底部は露胎。

杯（22）　低い高台を有し、どちらかと言えば皿形のものである。内面の見込との境にわずかな段をもつ。高台畳付は凹状にしている。灰白色の胎は比較的緻密で、光沢のある灰白色釉は透明感があり、うす目に施される。体部の下位と底部は露胎で、そこには化粧土がみられる。

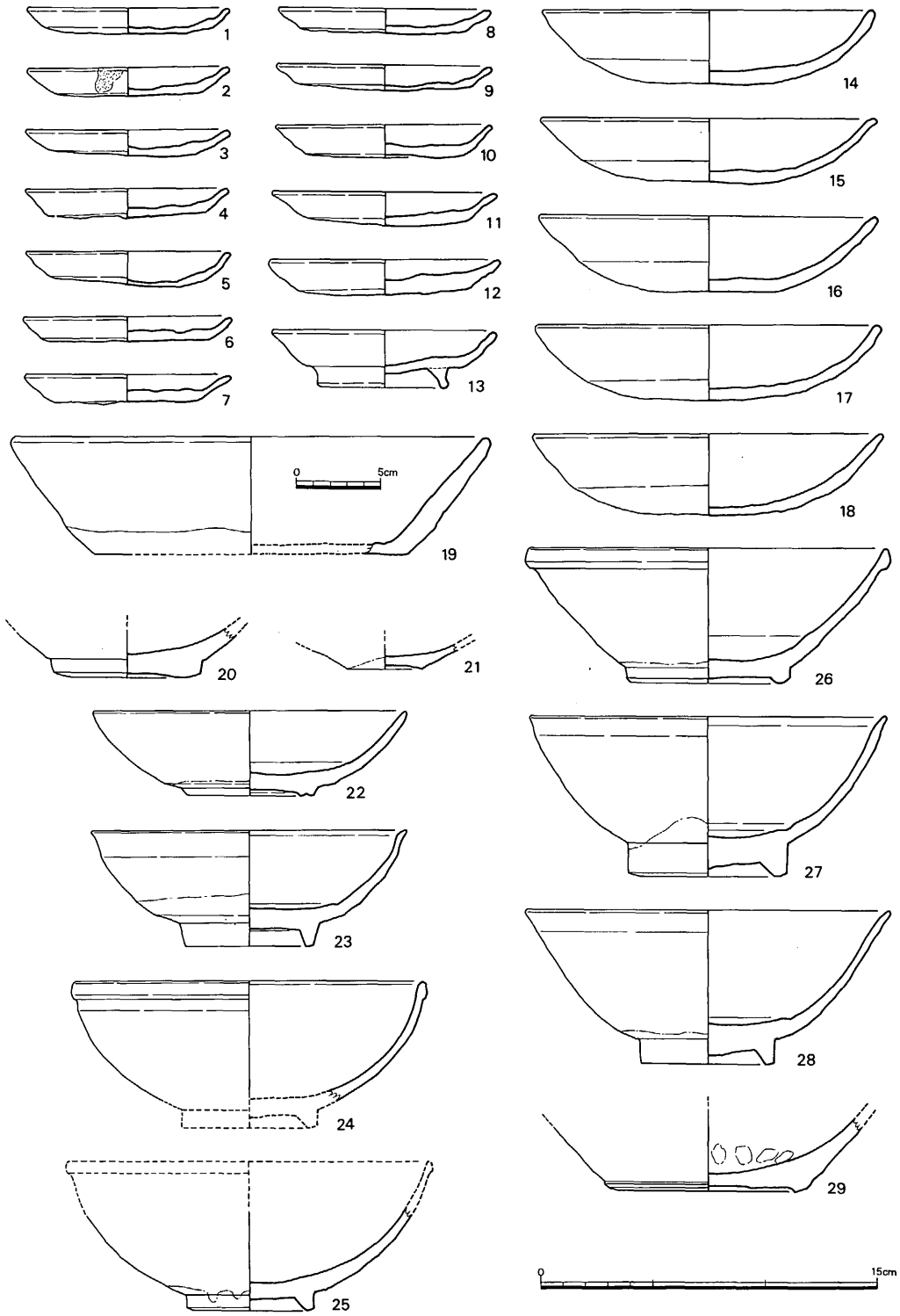
椀（23～28）　23はⅤ－１類に入るが、やゝ小形で、胎および釉も精良である。やゝ灰色味のある釉は光沢がある。24・25はⅡ－Ⅰ類で24は小さな玉縁を有するタイプである。26はⅣ－１･b類で内面見込を凹ませ、口縁部の玉縁もやゝ小さ目である。釉はうす目に施され灰白色を呈する。体部下位から底部は露胎である。27・28は高台を高く削り出すタイプで白色の胎に白色の釉がうす目に施される。体部下位から底部にかけては露胎である。

青磁

椀（29）　越州窯系青磁の椀で内外面の全面に灰緑色を呈する釉がうす目に施される。わずかに削り出された低い高台には重ね焼きの目跡がのこる。また、内面の見込にも目跡を残す。

SD3555出土土器・陶磁器（第54図・図版59　別表）

土師器



第53図　SD3550出土土器・陶磁器実測図

皿a（1～13）　1～6は糸切り、7～13はヘラ切りである。1～6は口径8.4cm～9.9cm、器高1.0cm～1.3cm。7～13は口径8.6cm～10.4cm、器高1.0cm～1.5cm。12には油煙が付着する。

杯（14・15）　口径13.8cm～15.3cm、器高2.5cm～2.8cm。いずれも底部はヘラ切りで板状圧痕を残すが、やゝ丸味をもち丸底風になっている。。

丸底の杯（16～19）　口径15.2cm～16.0cm、器高2.8cm～3.9cm。内面はミガキを施しており、外底にはヘラ切り痕と板状圧痕を残す。

杯c（20・21）　20は口径17.7cm、器高4.5cm。丸底風になった杯に高台を貼付した形状を示し、やゝ径の小さな高台は細く端部を丸くする。底部にはヘラ切り痕が認められる。口縁部の外面には油煙が付着する。21は大形のもので、口径25.3cm、器高5.1cmを測る。全体に器肉は厚く、高台も安定感がある。体部はヨコナデで、内底はナデ調整する。底部と体部との境は不明瞭であるが、杯部底には板状圧痕を残す。

瓦器

椀（22・23）　22は口径9.0cm、器高2.7cmの小椀である。内外面に粗いヘラミガキを施す。灰色に焼成されている。23は口径16.4cm、器高4.8cm。外底部を除いた内外面を粗くヘラミガキする。内面は黒色に燻されているが他は灰色を呈する。

中国陶磁器

白磁

椀（24・25）　大き目の玉縁を有するタイプで、Ⅳ－1・a類である。白色の胎には黒い粒子が混り、灰色ないし黄色味のある白色釉をやゝ厚目に施すが、25は気泡が無数にみられ、出来上がりは余り良くない。

青磁

椀（26）　同安窯系で、内外面に櫛状工具とヘラにより花文を描く。灰白色の胎に黄緑色の釉を施す。体部下位と底部は露胎。

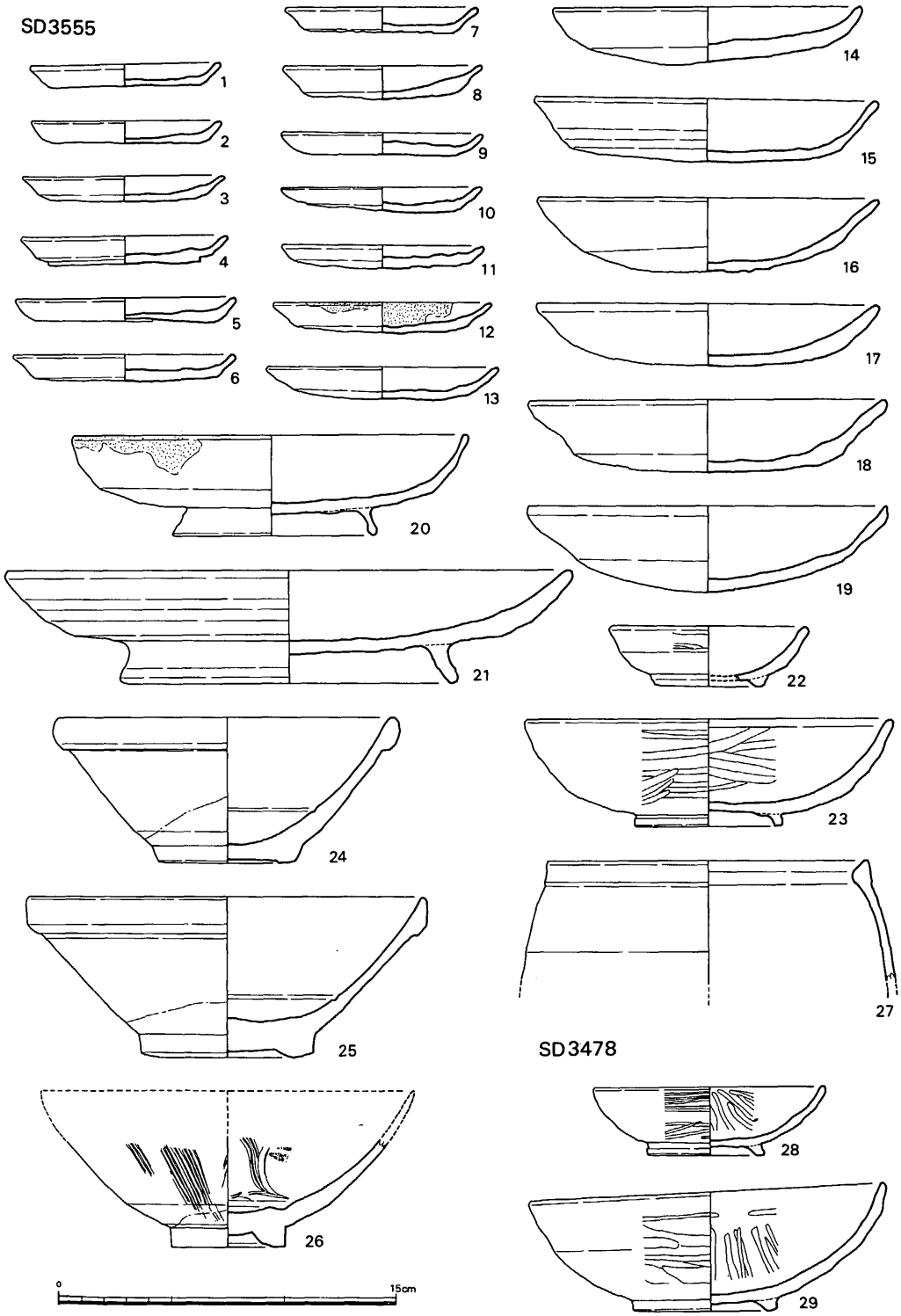
陶器

壷（27）　口縁部と体部の小片である。肥厚した口縁の端部には焼成時の目跡が残る。灰緑色の釉はうす目に内外の全面に施され、光沢は余りない。

SD3478出土土器（第54図・図版59　別表）

瓦器

椀（28・29）　28は口径10.3cm、器高5.2cm、器高3.1cmの小形の椀である。胎土には若干の砂粒を含むが比較的精選されている。比較的硬質に焼成され、内外面のヘラミガキは粗いが残りは良い。茶灰色ないし無灰色を呈する。29は口径15.9cm、器高4.6cm。内外面のヘラミガキは粗い。口縁部は燻しのため黒化しているが、他は灰褐色を呈する。



第54図　SD3555・3478出土土器・陶磁器実測図

SE3475出土土器・陶磁器（第55図・図版60　別表）

土師器

丸底の杯（１・２）　口径14.7cm～15.0cm、器高3.2cm～3.6cm。内面はヘラミガキし、底部にはヘラ切りと板状圧痕を残す。

須恵器

甕⑿　口径を36.8cmに復原できる大形の甕片である。「く」字状に外反する口頸部は、ほぼ直線的である。口頸部はヨコナデで体部は平行叩きを縦・横位に敲打している。内面は横位に刷毛目があり、所々に指頭圧痕が刷毛目調整後に認められる。口頸部と外面体部に自然釉がかかる。

灰釉陶器

椀⑶　椀の底部片である。灰白色のやゝ粗い胎に、内面には淡緑色の灰釉がうすくまだら状にかかる。高台の内面には糸切り痕が残る。

中国陶磁器

白磁

皿⑷　口縁端部を削り露胎とするいわゆる口禿のタイプで、体部下位と底部には釉がかからないⅨ－２類である。

椀（５・６）　やゝ小さ目の玉縁を有するタイプで、削り出された高台は低いが、いわゆるⅣ類とは内面見込との境に切り込みを入れない点で異なり、Ⅲ類の椀である。白色の胎にやゝ灰色味のある白色釉を施す。体部下位と底部は露胎。

青磁

杯（７・８）　高台の端部を削り露胎とするタイプで、先端はやゝ尖り気味である。灰白色の胎に淡緑色の釉を厚く全面に施す。いずれも無文である。Ⅲ類。

小椀（９・10）　龍泉窯系の小椀Ⅰ類である。いずれも小片であるが、９の高台畳付部および底部は露胎で、高台内面には墨痕がある。

盤⑾　盤の高台部小片で全形は不明。高台先端部は削り露胎となっているが、全面にくすんだ緑色釉が厚くかかる。

SE3495出土土器（第55図・図版60　別表）

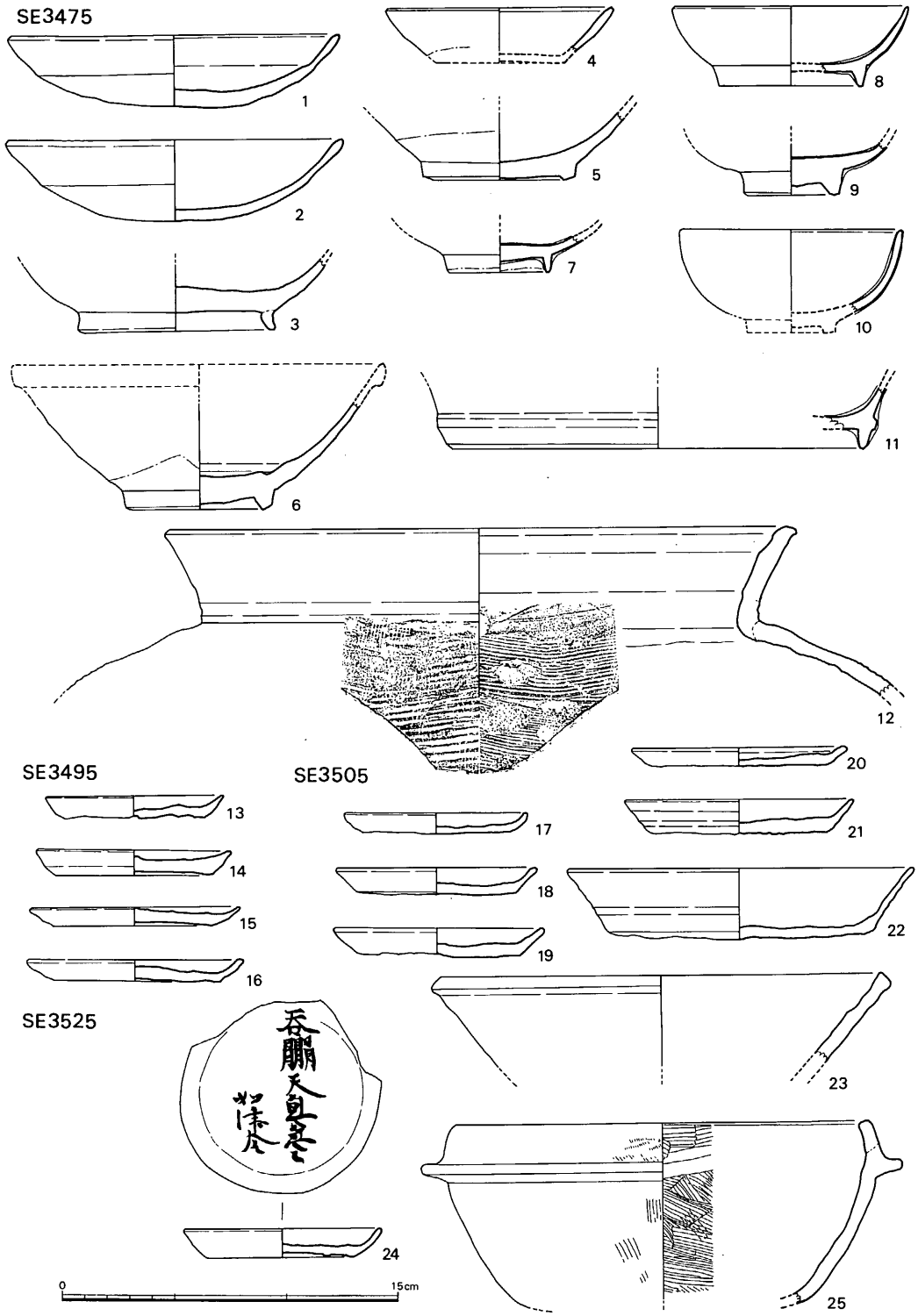
土師器

Ⅲａ（13～16）　口径8.0cm～9.6cm、器高0.9cm～1.2cm。全て糸切りで、14を除いて板状圧痕を有する。16には油煙が付着している。

SE3505出土土器・陶磁器（第55図・図版60）

土師器

Ⅲａ（17～21）　口径8.2cm～10.2cm、器高0.9cm～1.5cm。底部は全て糸切りで板状圧痕を有



第55図　SE3475・3495・3505・3525出土土器・陶磁器実測図

する。18には油煙が付着。

杯a（22）　口径15.5cm、器高3.2cm、底径11.6cm。底部は糸切りで板状圧痕を有する。

須恵質土器

鉢（23）　口径26.0cm前後に復原でき、片口の鉢と思われる。口縁部外面は黒色を呈する。

SE3525出土土器・陶磁器（第55図・図版60　別表）

土師器

皿a（24）　口径8.9cm、器高1.3cm。底部は糸切りで、板状圧痕を有する。内底のほぼ中心部の位置に縦位に「呑闕天真急々如律令」の墨書がある。病気、災難から逃れる祈願文で、この器はそれらのために使用されたと思われる。井戸枠中から検出したことは井戸との関係が考慮される。

土師質土器

釜（25）　口径24.6cm前後に復原できる鍔釜である。鍔を除いた内外面は刷毛目調整を施しているが、外面の鍔以下は厚く煤が付着して、調整は不明瞭となっている。

SE3480出土土器・陶磁器（第56図・図版61　別表）

土師器

皿a（1～8）　1～4は糸切り、5～8はヘラ切りである。1～4は口径8.6cm～9.6cm、器高1.0cm～1.3cm。5～8は口径9.2cm～11.2cm、器高1.3cm～1.6cm。2には油煙が付着。

杯a（9・10）　口径15.0cm～16.6cm、器高2.5cm～3.0cm。9・10は糸切りで、板状圧痕を有する。10は油煙が付着。

丸底の杯(11)　口径16.6cm、器高2.9cm。平底に近い底部をもつ。内面はミガキを施しコテ当て痕を有する。ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

土師質土器

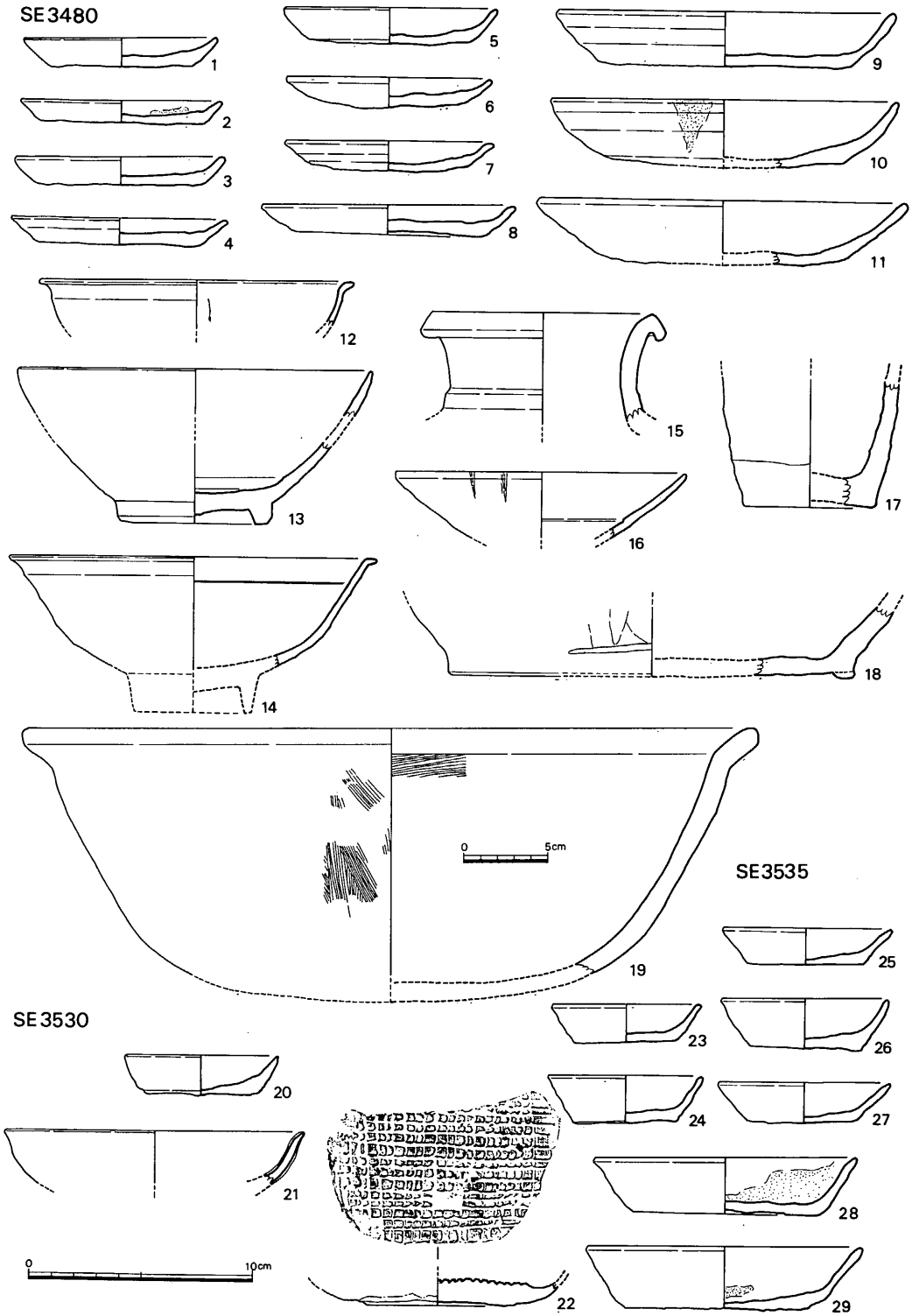
鍋(19)　口径43.8cm前後に復原できる鍋で、「く」の字状に折り曲げられた口縁部は短い。胎土中には砂粒が目立つが、比較的硬質に焼成される。口縁部を除いた内外面は刷毛目調整するが、外面は煤の付着が著しい。

甕(18)　小片であるため全形は不明であるが、甕の底部と考えられる。平底の底部端には低い高台をもつ。全体にはナデ調整するが、体部の最下位付近はヘラナデする。高台部を中心とする底部と体部には煤が付着する。胎土には砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。

中国陶磁器

白磁

椀（12～14）　12は口縁部を「く」字状に外反させる小形の椀の小片である。胎は白色に黒い微粒子が混入するもので、釉は灰白色を呈する。内面には白色の隆線があり、割花となる。13はV－1類で、内面見込を輪状に釉をカキ取る。14は底部を欠くが、V－4・a類。



第56図　SE3480・3530・3535出土土器・陶磁器実測図

壺(15)　四耳壺の口頸部片である。口縁部を折り曲げ玉縁状にする。

青白磁

杯(16)　全体の形状は不明で、皿形の可能性もある。器肉の薄い体部の内面の下位には段をもつ。透明に近い青白色の釉はうすく施される。体部の上位から口縁部には、外面からヘラで押えて割花としている。

陶器

壺(17)　茶褐色のやゝ粗い胎に緑褐釉が全面に施される。

SE3490出土陶器（図版60）

唐三彩（a）　唐三彩壺の肩部小片である。出土した小片の大部分は貼付されたメダリオンの装飾で占められている。製品化されたのち、火熱を受けたためか釉を施した表面は黒化しており、唐三彩本来の釉色は全くみられない。しかしながら微紅色を呈するカオリン質の白陶土と内面の化粧土は唐三彩の特徴を示しており、何よりも、貼付されたメダリオン装飾はこの特徴を最も良く示している。メダリオンの文様は宝相華文で、昭和52年度に実施した第45次調査の溝SD1300出土のものに酷似している。調査地が隣接している点などから、同一個体である可能性が強い。

SE3530出土土器・陶磁器（第56図・図版61　別表）

土師器

皿ｂ(20)　口径6.9cm、器高1.8cm、底径5.0cm。底部は糸切りである。

灰釉陶器

下し皿（22）　灰白色の胎はやゝ粗く、釉は内面と外面の体部に施される。露胎となった底部は糸切りである。下し目の刻みは浅く細かい。瀬戸産。

中国陶磁器

青磁

小椀（21）　口縁部の小片である。淡緑色の釉は厚く光沢がある。

SE3535出土土器・陶磁器（第56図・図版61　別表）

土師器

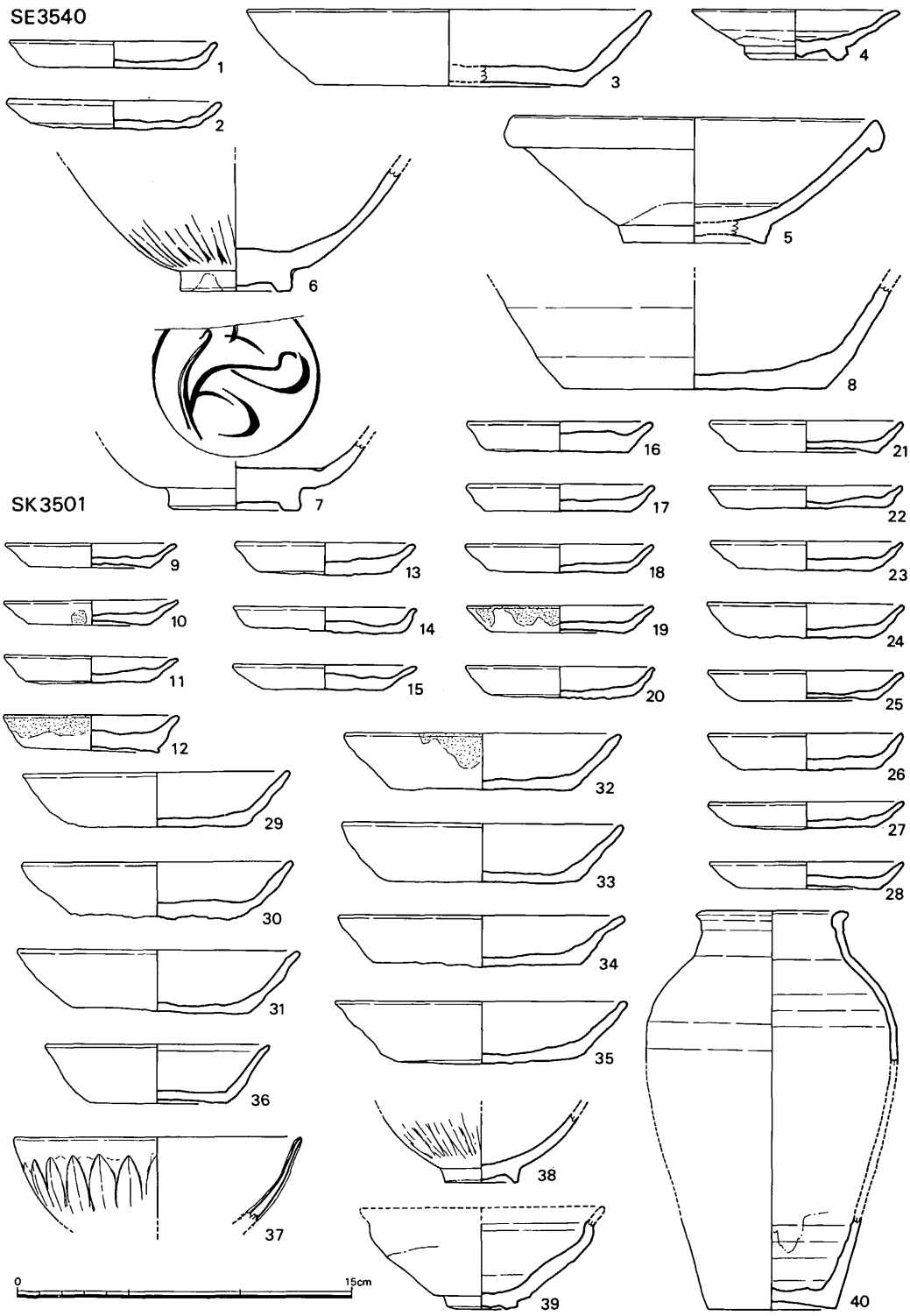
皿ｂ（23～27）　口径6.7cm～7.7cm、器高1.7cm～2.2cm、底径4.5cm～5.2cm。全て糸切りで、24を除いて内底をナデ、外底に板状圧痕を有する。

杯ａ（28・29）　口径11.8cm～12.3cm、器高2.5cm～2.8cm。底部は糸切りで板状圧痕を有する。いずれも内面には油煙が付着し、灯火器として使用されている。

SE3540出土土器・陶磁器（第57図・図版61　別表）

土師器

皿ａ（1・2）　口径9.2cm～9.6cm、器高1.2cm。1は糸切り、2はヘラ切り離しである。い



第57図　SE3540・SK3501出土土器陶磁器実測図

ずれも内底はナデて、外底に板状圧痕を有する。

杯a(3)　口径18.0cm、器高3.4cmの大形の杯である。糸切りで板状圧痕を有する。

須恵器

鉢(8)　暗灰白色の胎土には砂礫を含む。底部はヘラ切りで、外面体部はヘラ削り調整する。鉢の底部と考えられ、内底には墨状のものが認められる。

中国陶磁器

白磁

皿(4)　内面の見込を輪状にカキ取るタイプである。III類。

椀(5)　IV類の椀であるが、高台の削り出しにやゝ特徴があり上底風になっている。体部下位と底部は露胎である。

青磁

椀（6・7）　龍泉窯系で、6の体部外面には鎬蓮弁、7の内底には片切彫りの花文を有する。いずれも高台畳付と外底は露胎。

SK3501出土土器・陶磁器（第57図・図版62　別表）

土師器

皿a（9～28）　口径7.7cm～9.2cm、器高1.0cm～1.6cm。全て糸切りで、16・17を除いて板状圧痕を有する。10・12・19には油煙が付着。

杯a（29～35）　口径11.9cm～13.0cm、器高2.3cm～2.8cm。底部は糸切りで29・31を除いて板状圧痕を有する。32の外面に油煙が付着している。

中国陶磁器

白磁

皿（36）　口縁部を削り露胎とし、他は全面施釉する口禿の皿である。

青磁

小椀（38）　龍泉窯系の小椀III類。高台の先端は露胎。外面体部の蓮弁は厚い釉のため不鮮明。

椀（37）　白色の胎に淡青色の釉を厚くかける。蓮弁は細く、鎬は丸味をもつ。龍泉窯系III類。

陶器

天目（39）　暗灰色のやゝ粗い胎にガラス質の黒釉が厚く施され、茶色釉が禾目状になる。いわゆる禾目天目とよばているもの。体部の下半と底部は露胎。

壺（40）　茶褐色土層出土のものと合成し復原作図したものである。砂粒を余り含まない茶褐色の胎にやゝ光沢のある茶褐色ないし灰褐色の釉をうすく施す。体部と頸部との境にはわずかな屈曲がある。

SK3464出土土器（第58図　別表）

土師器

皿a（1～3）　口径8.3cm～9.2cm、器高0.9cm～1.2cm。底部は糸切りで、1・2には板状圧痕を有する。

SK3506出土土器・陶磁器（第58図　別表）

土師器

皿a（10～13）　口径7.2cm～9.0cm、器高1.0cm～1.3cm。全て糸切りで板状圧痕を有する。12には油煙が付着。

杯a(14)　口径12.5cm、器高3.0cm。底部は糸切り、板状圧痕を有する。

中国陶磁

白磁

皿(15)　灰白色の胎に黄味のある白色釉をうすく施す。体部下位から底部は露胎でこげ茶色に変色。V類である。

椀(16)　玉縁をもたず、口縁部を内弯させるII類の椀である。白色の胎に透明感のある黄白色釉をうすくかける。光沢があり焼き上がりは良好である。体部下位と底部は露胎。

SK3507出土土器（第58図・図版62　別表）

土師器

皿a（4・5）　口径9.2cm～9.7cm。器高1.3cm～105cm。ヘラ切りで板状圧痕を有する。

杯a(6)　口径14.7cm、器高2.9cm。糸切りで板状圧痕を有する。

丸底の杯（7～9）　口径15.0cm～15.4cm。器高3.1cm～3.3cm。内面のミガキは不明。底部は糸切りで板状圧痕を有する。

SK3529出土土器・陶磁器（第58図・図版62　別表）

土師器

皿a(17)　口径9.0cm、器高1.1cm。底部は糸切りで板状圧痕を有する。

杯a（18～22）　口径13.3cm～15.2cm。器高2.5cm～2.9cm。底部は糸切りで板状圧痕を有する。18・20・21には油煙が付着している。

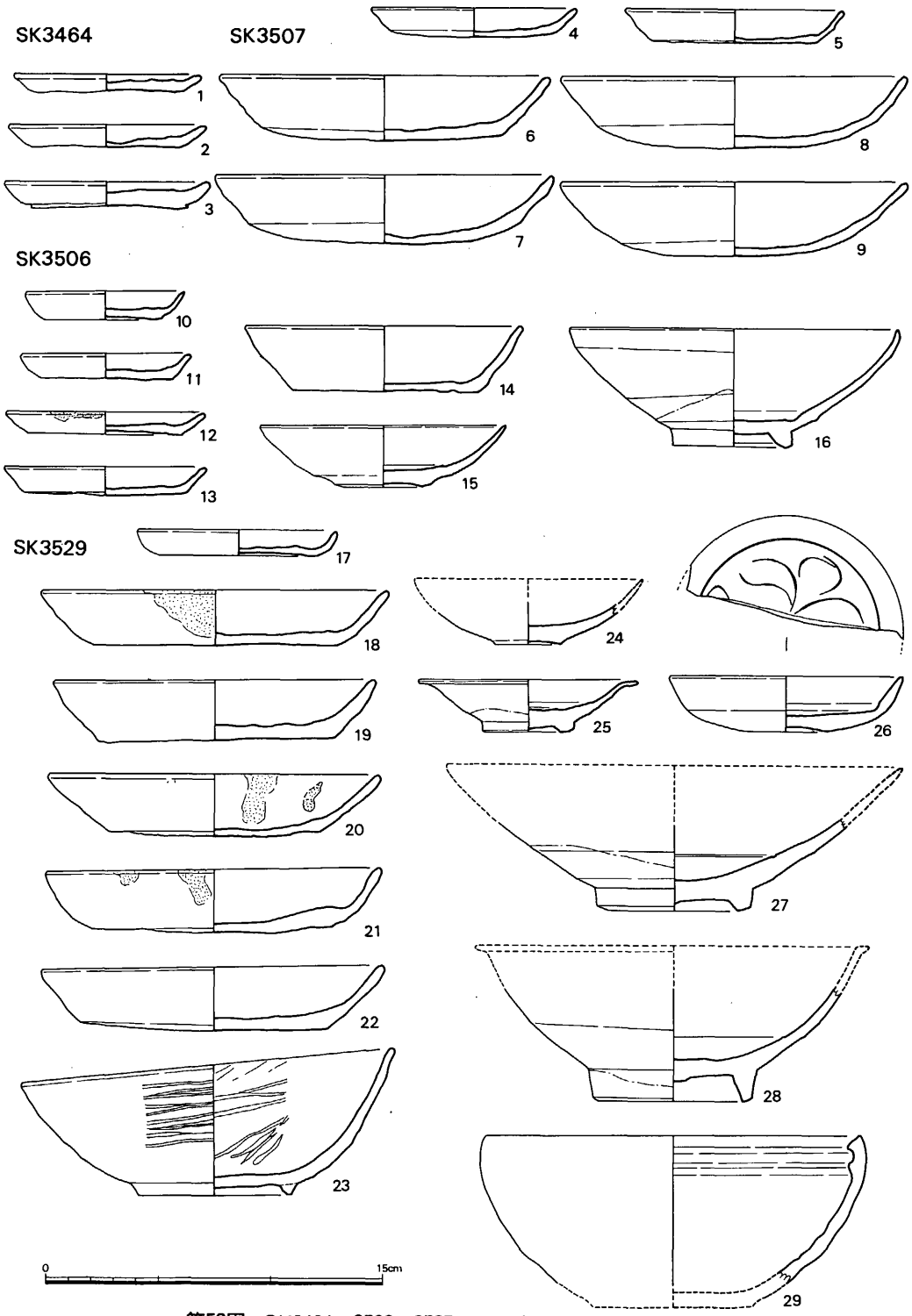
瓦器

椀（23）　口径16.7cm、器高5.9cm。淡灰色の胎土はわずかに砂粒を含む。焼成は良好で内外面に粗いミガキを施す。

中国陶磁器

白磁

皿（24～26）　24は淡茶白色の胎にやゝ黄褐味のある白色釉をうすく施す。体部下位と底部は露胎。25は内面見込を輪状にカキ取る。口縁部を細く外方に引き出す。体部下位と底部は露



第58図　SK3464・3506・3507・3529出土土器・陶磁器実測図

胎。26は白色の胎に黒い微粒子が混る。灰色味のある白色釉は厚目に施される。内底にはヘラによる花文を描く。底部は釉を削り取り露胎とする。

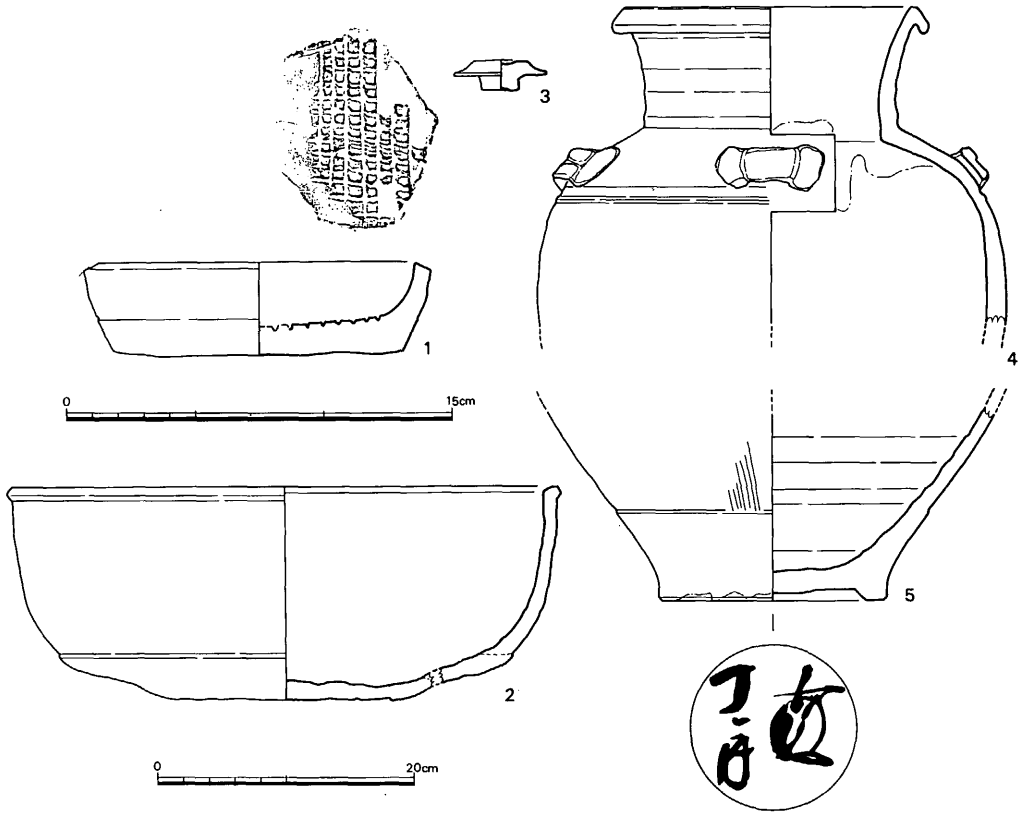
椀（27・28）　27はSD3500出土の61の白磁椀と同じである。内面の見込との境には浅い段を有する。わずかに灰色味のある胎には黒い微粒子が混る。体部下半と底部は露胎となる。28はⅤ－３・c類。

陶器

鉢（29）　口径22.4cm。茶褐色の胎は粗く無釉の陶器である。口縁部の内面には二条の凸帯を巡らす。

その他の遺構出土陶磁器（第59図・図版63　別表）

土師質土器



第59図　その他の遺構出土土器・陶磁器実測図

下し皿(1)　砂粒を多く含む胎土は茶褐色を呈し、土師質に焼成されているが、硬質である。下し目の刻目は浅いが正格子に入れられる。底部は糸切りである。土師質としたが陶器に近い。

鉢(2)　口径43.2cm。器高17.0cm。胎土には砂粒の混入が目立ち粗い。口縁端部は折り曲げて丸くする。煤などの付着がみられず、出土した状況からすると埋置されて使用された事も十分考えられる。

中国陶磁器

白磁

蓋(3)　完形品である。外面は透明に近い黄白色釉がかかり、内面は露胎である。

四耳壺（４～５）　灰白色の胎にやゝ灰色味のある光沢をもつ白色釉がうす目にかかる。４の外面は全面にかかるが、内面は口頸部から体部上位まで流しかけられた様に施釉されている。５は底部を除いて全面に釉がかかっているが、内面はやゝ茶色味を帯びている。高台の内面には「花押」様の墨書があるが、判読できない。

茶灰色土層出土土器（第60図・図版64・65　別表）

黒色土器

蓋(9)　撮を欠失する他はほぼ完形である。体部から口縁部は丸味をもち、口縁部には身受けの返りはない。内・外面の全面にわたって丁寧なヘラミガキが施され、内面はヘラミガキの後、漆黒色に燻されている。胎土もほとんど砂粒を含まず精選された、きわめて精良な土器である。これまで出土例が少なく貴重である。どの器種に伴なう蓋であるのかは判断し難い。

土師器

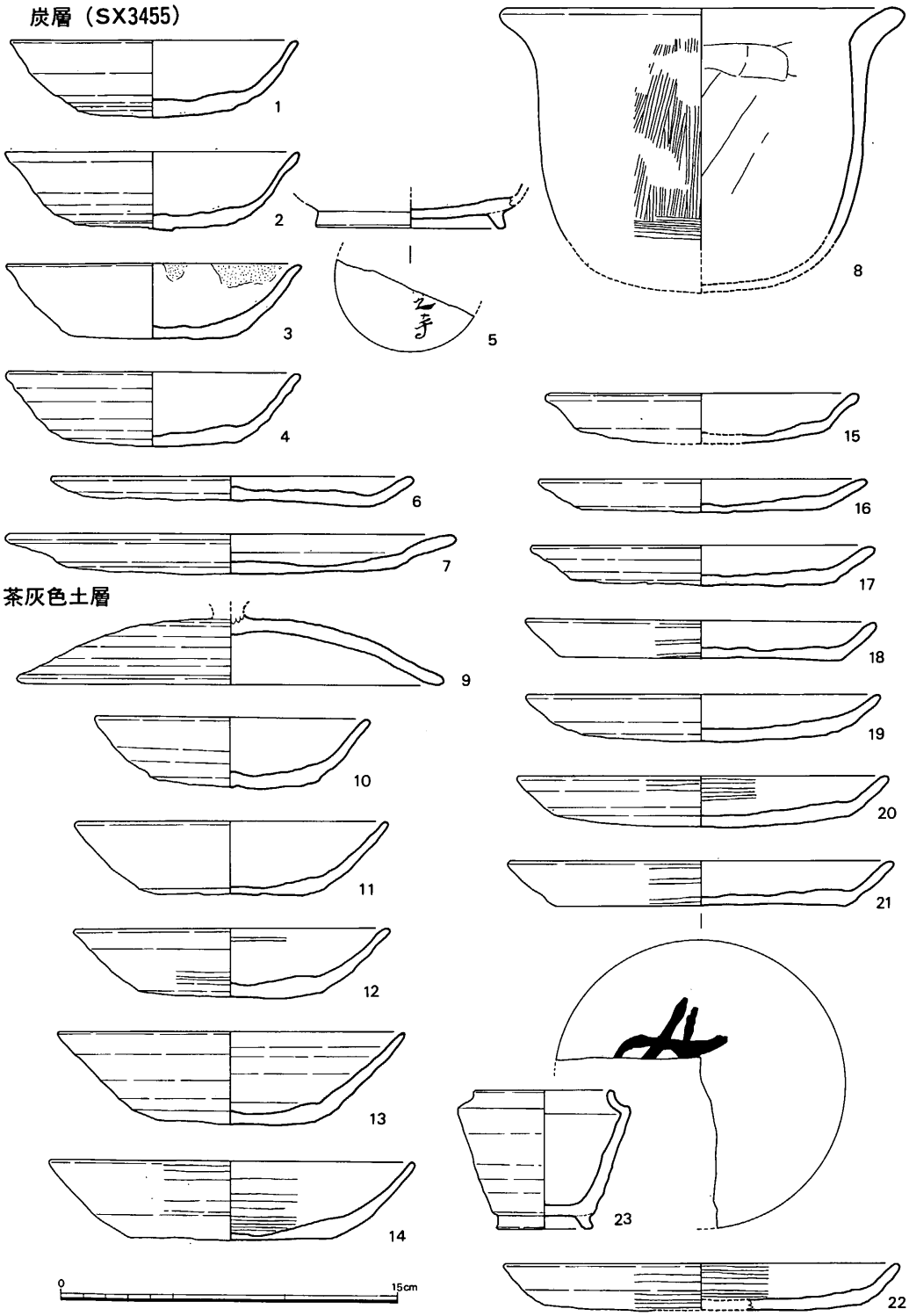
杯（10～14）　10・11の内外面はヨコナデで、外底はヘラ切り難しのまま未調整であるが、12・14はヨコナデ後丁寧なヘラミガキを施し、外底は回転ヘラ削り再調整している。また13は内外面をヨコナデし、外底部をヨコ方向にヘラ削り再調整している。外底を含む全面に密に習書をしている。とくに外面は黒く塗った様になっており、個々の文字を判読することが不可能である。いずれも胎土、焼成ともきわめて良好である。

皿（15～22，ａ）　口径14.0cm～17.8cm。器高1.5cm～2.3cm。19・21・22は外底を除いた内外面をヘラミガキし、外底はヘラ削り調整する。淡茶色および淡赤茶色を呈し、胎土・焼成とも良好な土器である。21・ａの外底には墨書があるが判読できず。

壺（23）　口径6.2cm、器高6.2cmの有高台の壺である。外面の体部はヨコナデ後ヘラミガキを施す。

炭層（SX3455）出土土器（第60図・図版64）

杯（１～５）　１～４は無高台。５は有高台である。１～４は口径12.9cm～15.0cm、器高3.3cm～3.5cm。１・２・４は体部の内外面を強くヨコナデしており、ロクロ目が顕著に残る。３・４は類似した形態を示し、うすく引き出された体部は口縁部を肥厚させ丸くする。外底はヘラ



第60図　炭層（SX3455）・茶灰色土層出土土器実測図

切り未調整である。3の口縁部から体部にかけては油煙が付着。1・2は金鼓の鋳型と共伴の土器である。5は有高台の杯の底部片である。内底には不鮮明であるがミガキがある。また高台の内面には「□之寺」の墨書銘がある。3・4は出土例の少ないもので年代的な位置付けを大宰府出土土器の標式遺構であるSE400(9世紀前半)の前段階のものとし、8世紀末～9世紀初頭頃に考えたい。

皿（6・7）　口径16.1cm～20.0cm、器高1.3cm～1.8cm。体部の内外面をヨコナデし、6の内底はヨコナデ後ヘラミガキする。外底はヘラケズリ再調整する。胎土は精選され焼成良好である。

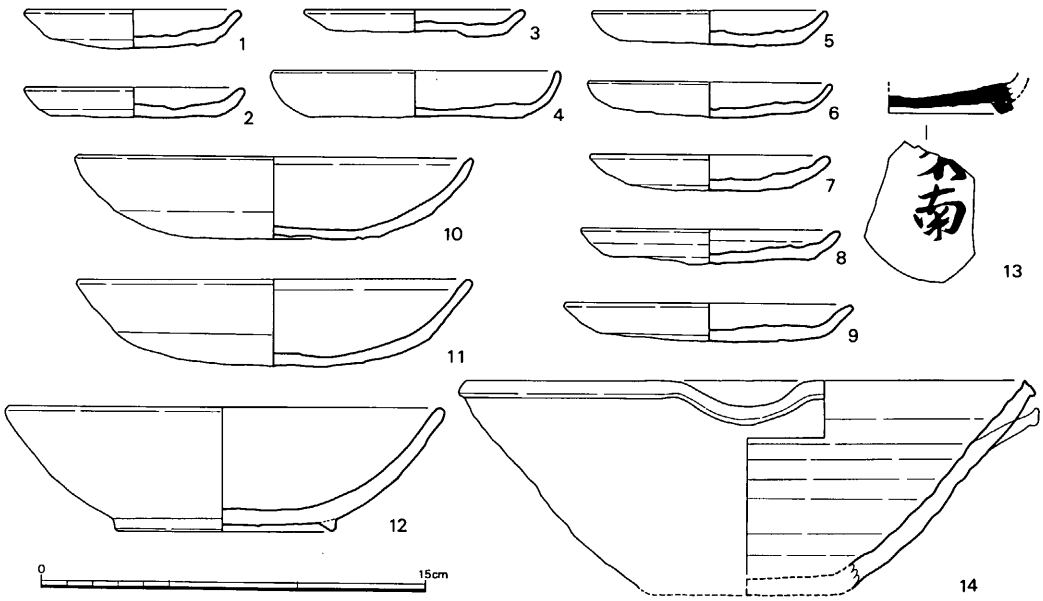
甕(8)　口径18.0cm前後に復原される。体部の最大径は最上位にあり、底部に向ってやゝ丸味をもつ。体部外面は細かい刷毛目調整するが、煤の付着が目立つ。内面は斜上方にヘラ削りする。

黄褐色土層出土土器（第61図・図版63　別表）

土師器

皿a（1～9）　1～4は糸切り、5～9はヘラ切りである。1～4は口径8.5cm～11.2cm、5～9は口径9.1cm～11.3cm、器高1.3cm～1.5cm。5・6を除いて全て板状圧痕をもつ。

丸底の杯（10・11）　口径15.4cm～15.6cm、器高3.2cm～3.4cm。内面はミガキを施す。10の内面には煤の付着がある。



第61図　黄褐色土層出土土器・陶磁器実測図

瓦器

椀(12)　口径17.2cm、器高4.8cmに復原が可能。内面には粗いヘラミガキを施す。灰黒色を呈し、比較的硬質に焼成される。

須恵器

杯(13)　有高台の杯底部片である。高台内面に「□南」の墨書銘がある。

須恵質土器

鉢(14)　口径を30.0cmに復原できる片口の鉢である。口縁部は灰黒色、他は暗灰色を呈する。全体はヨコナデ調整で、体部の内外面にはロクロ目が顕著である。東播系。

黒褐色土層出土土器・陶磁器（第62～65図・図版66～70　別表）

土師器

皿a（5～36）　5～21は糸切り、22～36はヘラ切りである。5～21は口径7.8cm～9.8cm、器高1.1cm～1.9cm。22～36は口径9.0cm～10.8cm。12・16・20・29には油煙が付着。

皿b（1～4）　口径6.6cm～7.5cm、器高1.7cm～2.0cm。4には油煙が付着する。

皿c（37・38・57）　口径9.3cm～10.6cm、器高2.0cmのものと、口径18.3cm、器高3.6cmの大形のものがある。57には油煙が付着。底部の切り離しについては不明である。

杯a（42～55）　口径11.8cm～13.9cm、器高2.8cm～3.1cmの42～50の小形と、口径15.0cm～15.9cm、器高2.5cm～2.9cmの大形に分けられる。全て糸切り。45・47・48～50・53には油煙が付着。

杯c（56）　口径16.6cmに復原される。高台内面には板状圧痕が残る。

小椀（39～41）　口径8.2cm～9.2cm、器高2.2cm～3.1cmである。

壺（58）　口径8.2cm、器高5.7cm。体部から口縁部を丸く内弯させるもので、体部、口縁部はヨコナデであるが、底部は削り調整する。胎土には砂粒を多く含む。淡黄褐色を呈する。

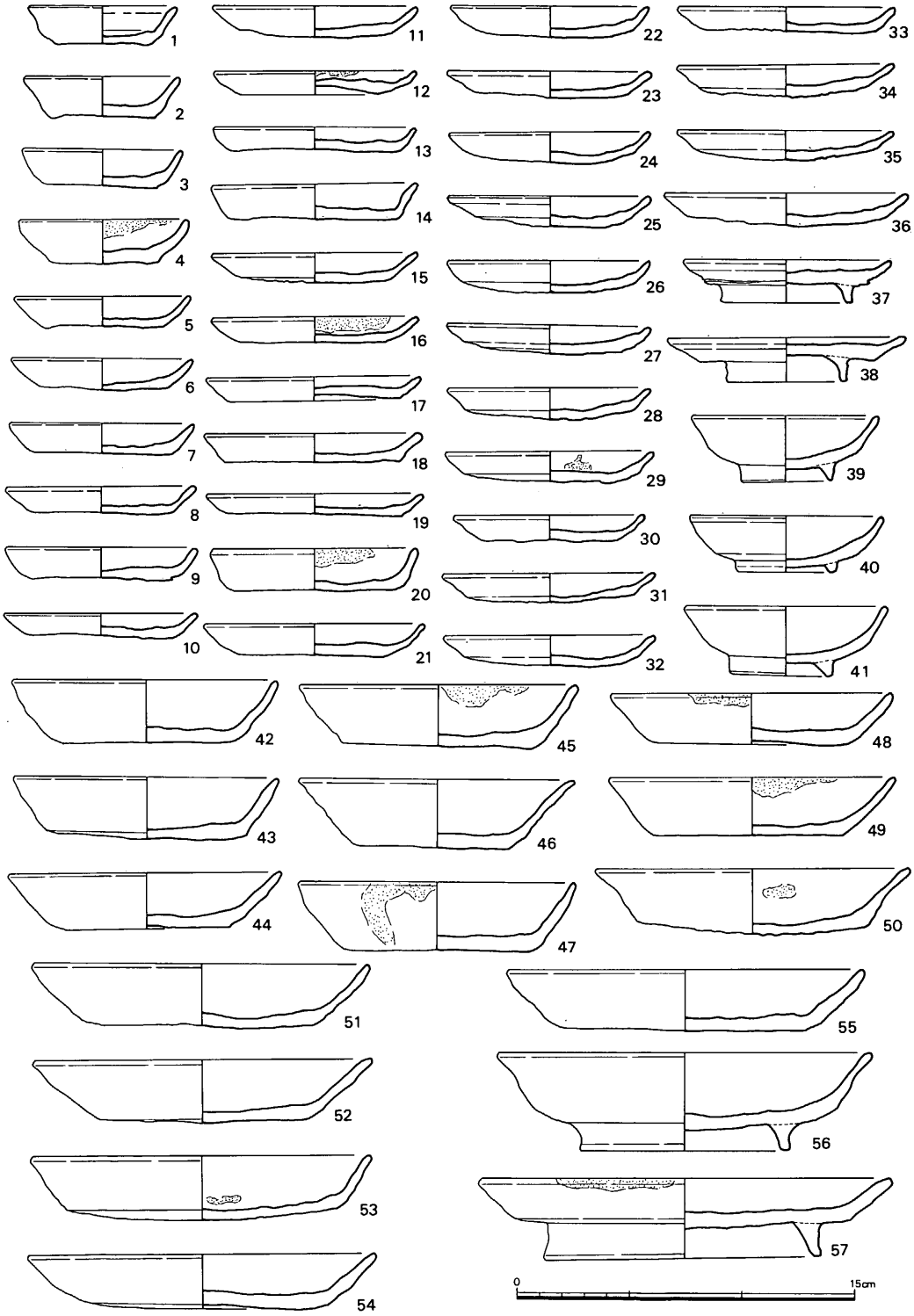
盤（59）　口径18.0cm、器高7.5cmに復原できる。全体の調整はナデによっているが、内底は強い。外底は糸切りで板状圧痕を有する。

器台（60）　接合しないが、杯部と脚部および筒部の一部が出土している。杯部と脚部は意図的に体部中位から口縁部を打ち欠いている。脚部には径0.5cmの穿孔が1個所ある。杯部には油煙が認められる。

瓦器

皿（61）　丸底になった底部はヘラ切りされるが、内外面の全面は粗いヘラミガキする。内面と口縁部は燻されて黒灰色を呈する。

椀（62～68）　口径15.8cm～16.9cm、器高4.7cm～5.5cm。いずれも内外面を粗いヘラミガキする。63・64は口縁部の内外面に燻が残るだけであるが他は内面と外面の口縁部に燻が認められる。



第62図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)

土師質土器

鉢（69）　淡茶褐色を呈する土師質のものである。器面は剝離があり調整は不明。内面には部分的に筋目が残る。口径28.8cm、器高11.2cm、底径12.5cm。

須恵質土器

鉢（70～72）　胎土には若干砂粒を含み粗い胎土のものである。口縁部を黒色、他は灰褐色ないし灰白色に焼成される。70は小形のもので、口径20.6cm、器高5.8cm。70・71は東播系。

緑釉陶器

椀（73）　内面にヘラで花文を描く。内外の全面に黄緑釉がかかる。胎土は灰色を呈する須恵質のもので、精選されている。

中国陶磁器

白磁

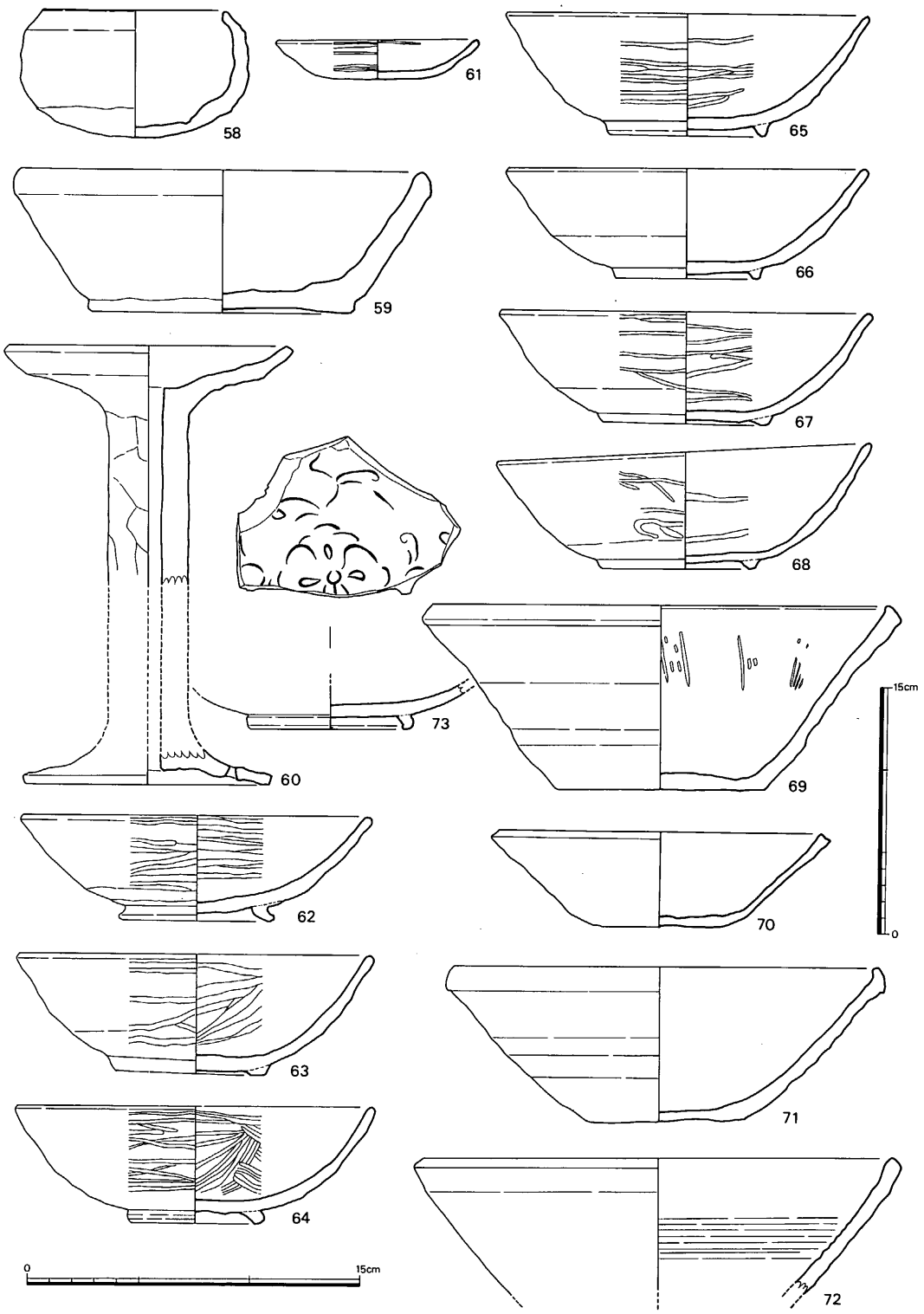
壺（74）　小壺の底部である。白色の胎にやゝ黄味がかった白色釉を施す。外底と内面の体部下位と底部は露胎。

蓋（75）　身付けが直立する蓋である。口縁端を削り露胎とする他は黄味のある白濁釉をうすく全面に施す。

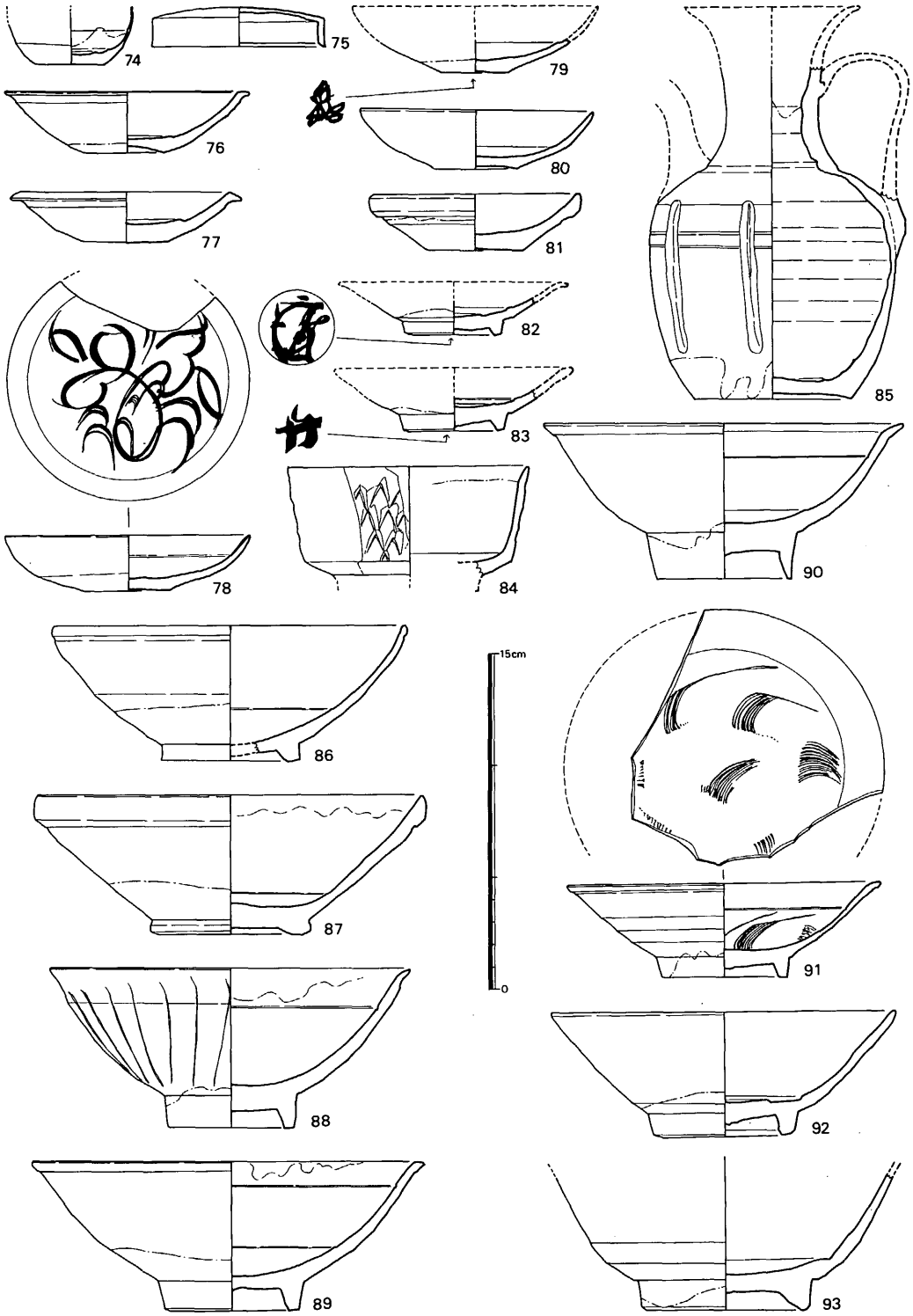
皿（76～83）　76・77は白色の胎に白濁色の釉がうすくかかる。76は体部下位以下、77は底部を露胎とする。Ⅳ類。78～80はやゝ淡茶色を帯びた胎に黄味のある白色釉を施す。78の内底には片切彫の花文を描く。底部は露胎。79・80は体部下位以下は露胎。81は口縁部を玉縁とするタイプで、底部は平底とする。体部と底部は露胎。Ⅱ－２類。82・83は内面見込を輪状にカキ取るⅢ類である。

椀（84・86～93）　84はほぼ直線的な体部・口縁部の小椀である。底部を欠失するが、わずかにその痕跡が認められる。体部外面には花弁を表現した三角形状のものを削り出している。白色の胎にやゝ灰色味のある白色釉をうすくかけ、内面体部と底部それに外面体部下位は露胎とする。86は口縁部に小さな玉縁を有するⅡ－１類である。87はⅣ類で、焼き上がりは良い。88～91はⅤ類で、高い削り出し高台を有する。88の外面体部には線彫りの文様がある。89・90・91は口縁部を折り曲げるタイプで、89・90の内面には二条の沈線がある。91は内面に櫛状工具による花文を描く。白色の胎にやゝ灰色味のある白色釉を施す。92は内面見込を輪状にカキ取るⅧ－２類。93は大形の椀で見込みと体部との境いが明瞭である。白濁色の緻密な胎に光沢のある白濁釉をかける。底部は露胎で、中心部には焼台痕がある。

水注（85）　注口と口頸部および把手を欠失している。把手についてはその痕跡が残っているが、注口については残存破片には痕跡がない。体部には縦位に凹線を入れ、いわゆる瓜胴形としている。淡灰白色を呈するやゝ粗い胎に黄味の強い白色釉をうすく施す。体部下位と底部、それに内面は露胎である。釉下には化粧土をかけ、露胎との境は茶色に発色する。



第63図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)



第64図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)

青白磁

合子（94～96）　94は身受けの返りをもつ合子の蓋である。外面の天井部には型造りの蓮弁をもつ。釉は淡青色を呈し、外面の体部上面のみ施される。95は合子の身で、外面体部には94同様型造り蓮弁をもつ。94・95とは釉調も似ている。96は外面に花文と蓮弁を型造りする。白色の胎に淡青色の釉をうすく施す。口縁部の内面は露胎。

皿（97・98）　薄手のもので、底部を除いた全面に淡青白色の透明に近い釉をうすく施す。底部にはわずかに高台を削り出し、その内面には焼台痕がある。98は体部が大きく開く皿型のものと考えられる。白色の胎に淡青色のガラス質の釉が、高台および底部を露胎とする他は全面に施す。

青磁

皿（99・100・104）　龍泉窯系で、淡灰色の緻密な胎に濃緑色釉が厚目に施される。外底は削り露胎となっている。内底にはヘラと櫛状工具による花文がある。Ⅰ－2類。104は同安窯系で、内底にヘラと櫛状工具による花文を施す。

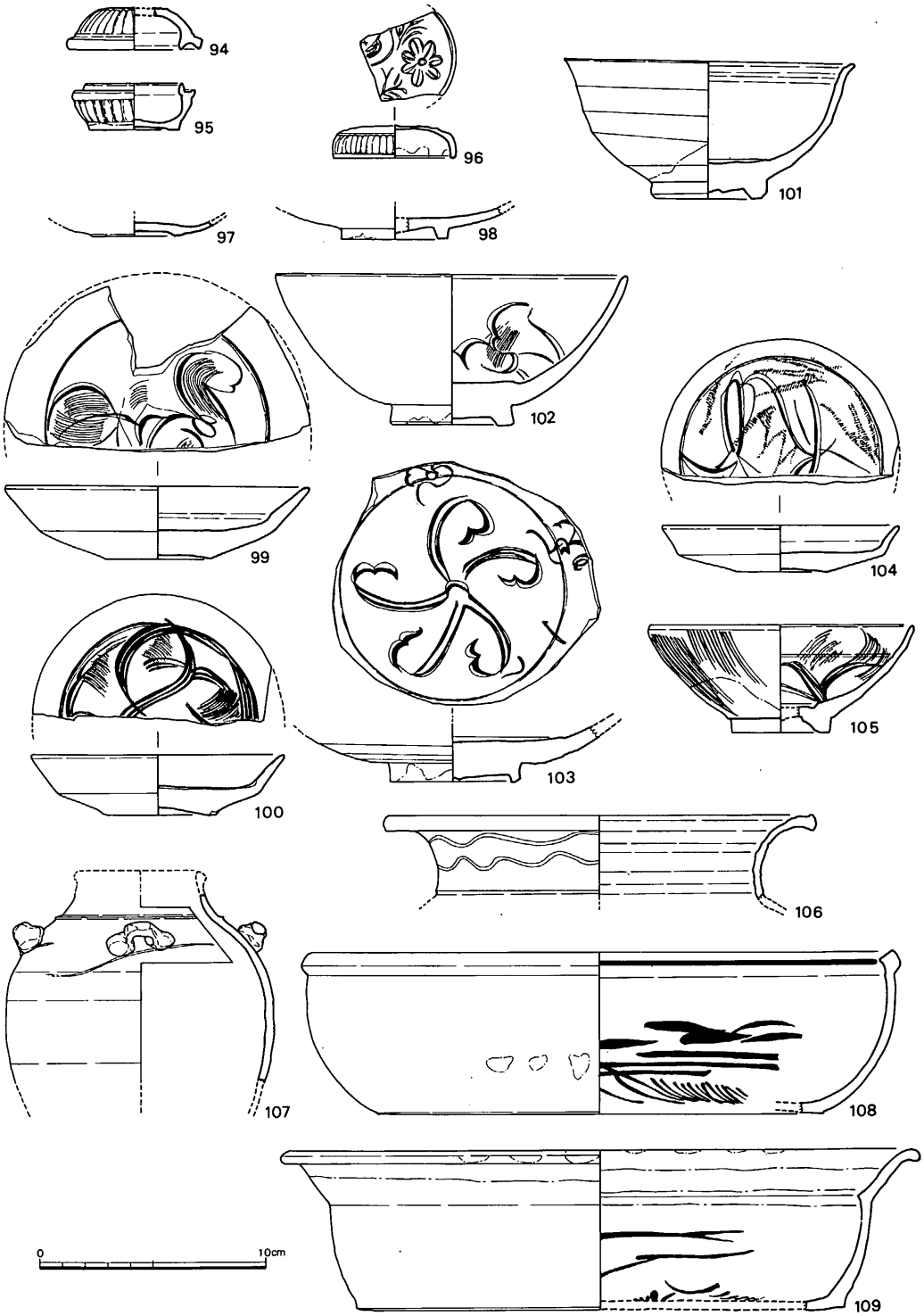
椀（101～103・105）　101は口径12.8cm、器高6.1cm。丸味をもつ体部は口縁部をわずかに外反させる。灰白色の胎はやゝ粗く、淡緑色の釉はうすくかけられる。外面体部中位以下は露胎となる。例としては希有である。102は龍泉窯系で、内面体部にヘラの片切彫りがある。Ⅰ－3類。103は体部が大きく開く椀で、見込と体部に片切彫りの花文がある。灰白色の胎に淡緑色の釉がかかる。高台部および底部は露胎。105は同安窯系の小椀である。体部の内外面にヘラと櫛状工具による文様がある。外面の体部下半と底部は露胎。

陶器

唐三彩（a・b）　黒褐色土層からは2片が出土している。出土した地点はやゝ離れており、直接には接合しない。SE3490出土のものを加えて今回の調査で3点が出土したことになる。器表の外面には緑・黄褐・白の三色が施されている。いずれも沈線が一条みえ、第45次調査例から、肩部と胴部との境付近の破片であることが知れる。1点には小形のメダリオンが貼付されており、45次調査SD1300出土のものと酷似する。このことから、SE3490出土のものを含む3点が第45次調査出土のものと同一個体である可能性は大きい。ただ、SE3490出土のものが火熱を受けている点疑問として残る。

甕（106）　甕の口縁部片である。口径を25.4cmに復原できる。胎土・形態等から日本産として類例がなく、朝鮮系のものと考えられる。胎土は砂粒を含むが精選良で、赤褐色を呈し、焼成も硬質、堅緻である。器表面は暗灰色を呈し、光沢がある。頸部にはヘラによる波状文を入れる。

壺（107）　淡緑褐色釉を内外面にかける四耳壺である。釉は光沢がない。体部上位に波状の沈線を描く。



第65図　黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図(4)

盤（108・109）　口縁部を玉縁状にする108と「く」字状に大きく外反させる109がある。胎土は灰色味があり、砂粒を多く含み、器面に浮き出ている。化粧土の上に黄釉をかけ、釉下に鉄絵を描く。外面体部および底部は露胎である。

茶褐色土層出土土器・陶磁器（第66～68図・図版71～73　別表）

土師器

皿ａ（11～20）　口径7.4cm～9.6cm、器高0.8cm～1.6cm。全て糸切りである。18には油煙が付着。

皿ｂ（１～10）　口径6.0cm～8.0cm、器高1.5cm～2.3cm。底部は糸切りである。

皿ｃ（21・22）　口径8.6cm～9.4cm、器高1.3cm～2.0cm、糸切り。

杯ａ（23～37）　口径12.0cm～14.5cm。器高2.6cm～3.6cm。底部は全て糸切りである。29・36・37を除いた他は板状圧痕を残す。

杯ｃ（38）　口径15.0cm、器高3.6cmに復原される。底部に板状圧痕を残す。皿形であるがここでは杯cとした。

瓦器

椀（39～42）　口径16.8cm～17.8cm、器高4.3cm～6.5cm。内面と外面体部上位に粗いヘラミガキを施す。39は内外に燻しが及んでいるが、40は口縁部のみ、41・42は部分的にしか燻されていない。

須恵器

甕（72・74）　72は復原口径20.8cmの甕片である。胎土には砂粒が少なく精選されている。外面体部には斜位の平行叩きがある。内面の当具痕はナデ消されており、そこにはうすく灰がかぶる。74は73に比べやゝ厚手であるが、精良な土器である。外面体部には横方向の大きめの叩き目、内面には当具痕をナデ消した痕跡がみられる。灰褐色で無釉。

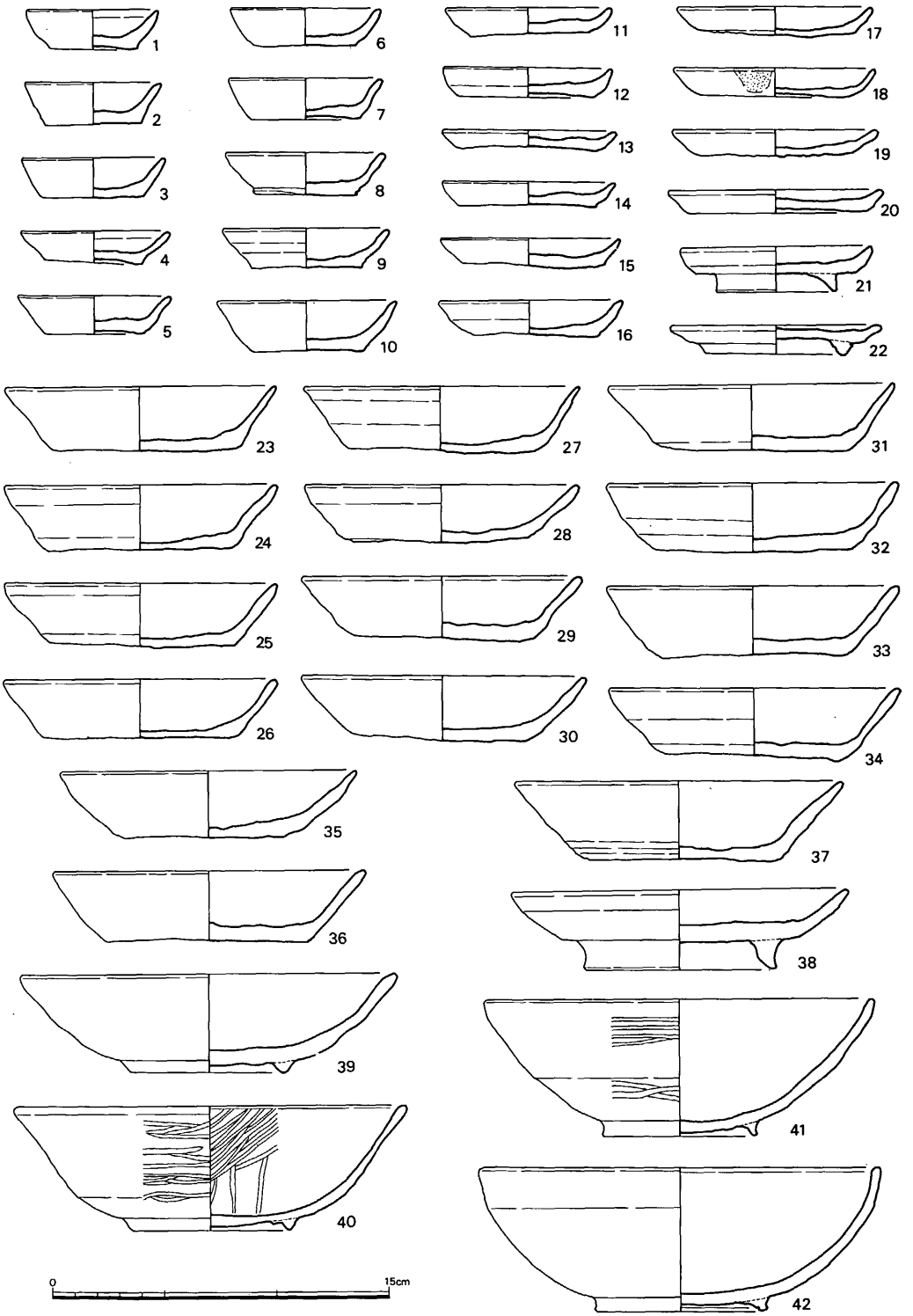
中国陶磁器

白磁

皿（43～49）　口縁部を削り露胎とする口禿の皿である。内外の全面に淡青白色の釉をかける。44は白色の胎にやゝ黄色味のある白色釉を施し、体部下半から底部の釉を削り取る。内面の体部には白色の隆線で割花をつくる。Ⅳ類。45は口縁部を「く」字状に折り曲げる皿で、底部は削り露胎とする。Ⅳ類。48は内面の中位に段をもつII－１類。外面体部下位以下は露胎で、46・47はⅧ類で、46には印花、47にはヘラ描きによる花文がある。灰白色の緻密な胎に緑灰色ないし灰色味のある白色釉をやゝ厚目にかける。46は口縁部を削り口禿とする。いずれも体部下位と底部は露胎。

青磁

皿（50）　内底に櫛状工具とヘラによる文様を施す。灰白色の胎に透明感のある緑色の釉を



第66図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図(1)

かける。体部下位と底部は露胎。龍泉窯系Ⅰ－3・b類。

杯（51・52）　高台先端を削り露胎とする龍泉窯系Ⅲ類。外面の体部には蓮弁があるが厚い釉のため不鮮明となる。52は口縁部に切り込みを入れ輪花をつくる。内面見込みにヘラによる花文を、体部と口縁部には花文および波状文を施文する。白色の胎に淡緑色釉をやゝ厚目にかける。高台内面には輪状の釉カキ取りがある。

椀（53～57）　53は小片である。直立気味の体部と口縁部は端部を丸くする。体部の内外面には丸刀による凹線を入れ蓮弁風にしている。白色の胎に淡緑色の釉を厚目にかける。54はⅢ類で、高台先端を削り露胎とする。厚い釉のため蓮弁は不鮮明で細い。55は口径8.4cm、器高3.5cmの小椀で龍泉窯系Ⅰ－4類。56は鎬蓮弁を有する龍泉窯系の椀Ⅰ－5・b類。57は同安窯系の小椀で口径12.8cm、器高4.7cm。無文で、淡茶灰色の胎にやゝ透明感のある黄緑色釉をかける。体部下位と底部は露胎。

青白磁

合子（58～63）　58～60は合子蓋である。58は直立する身受けをもち、59・60は身受けの返りを有する。58は外面に蓮弁と天井部に花文、圏線状の段を型押しする。黄味の強い淡緑色の釉は内面の口縁部を露胎とする他は全面に施釉。59・60は外面天井部に花文の型押しがあり、60には撮の痕跡がある。内面はいずれも露胎である。61～63は合子の身である。61には幅広、62は細目の蓮弁をそれぞれ型押しする。淡青白色釉は蓋受け部と体部下位・底部を除いて、うす目にかけられる。63は無文で、蓋受け部および体部下位・底部は露胎。

椀（64・65）　64は薄手の小椀片である。見込に浅い片切彫の花文があるが不鮮明。白色緻密な胎に青白色釉が全面に施される。65は体部、口縁部が薄くシャープである。円盤状の高台は内面をわずかに削る。内面見込にはヘラと櫛状工具で施文し、体部にも飛雲様のものを所々片切彫りする。白色緻密な胎に透明感のある淡青白色の釉をうすくかける。底部は削り露胎とする。

日本製陶器

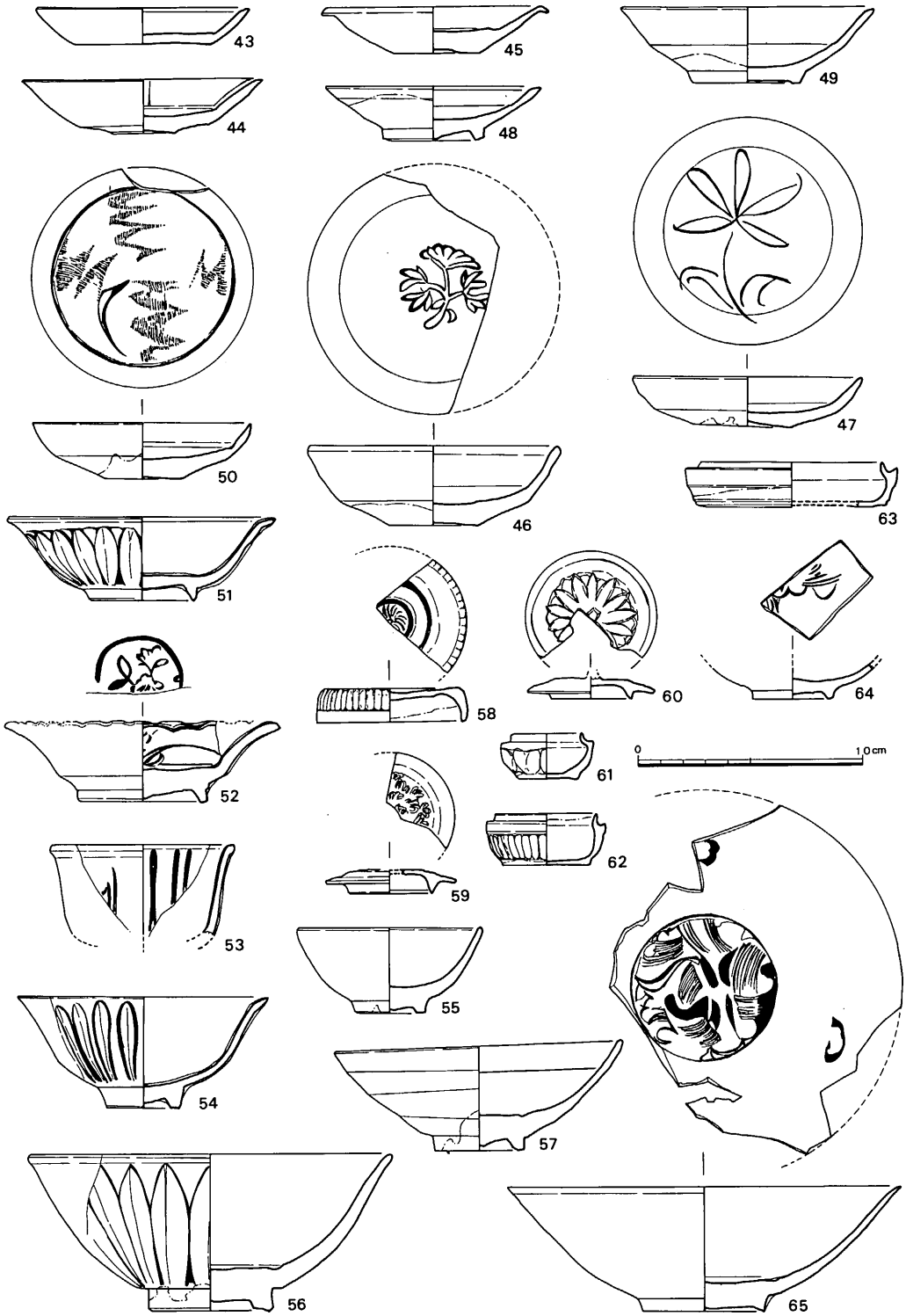
下し皿（67）　内面には細かい下し目を浅く刻む。灰白色のやゝ粗い胎に淡緑色の灰釉を体部に施す。底部は糸切りで露胎。瀬戸産。

鉢（68）　備前産の摺鉢で、内面に8本前後の筋目を入れる。三角形状になった口縁部には自然釉がかかる。片口が一部残存する。

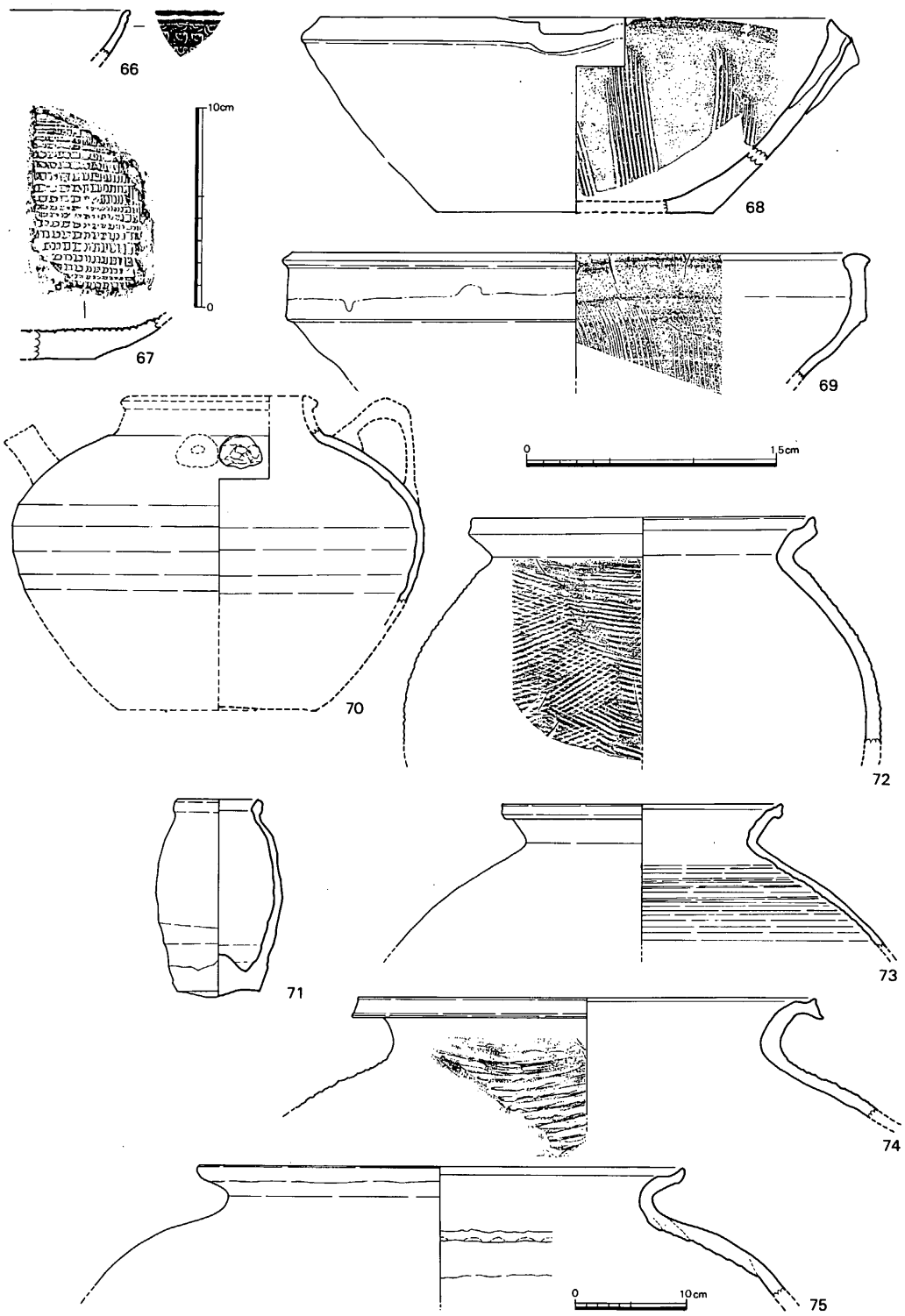
甕（75）　75は常滑産の甕片である。口径21.7cmに復原される。外面体部には斜位の平行叩きが部分的に残っている。口縁部から外面体部には緑味のある灰白色ないし黄灰色の自然釉がかかる。

朝鮮製陶器

椀（66）　新羅焼の椀の口縁部小片である。やゝ内弯気味の口縁は端部が丸味をもつ。外面



第67図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図(2)



第68図　茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図(3)

の端部近くに二条の沈線を入れ、その下に小さな花文状のものを並べ押印する。灰黒色を呈し、無釉である。

甕（73）　「く」字状に屈曲する口頸部は端部を直ないし内傾させる。横ナデにより調整され器肉が非常に薄く、胎土も精選され、焼成も堅緻である。内面にはロクロ目が顕著である。暗青灰色を呈する。

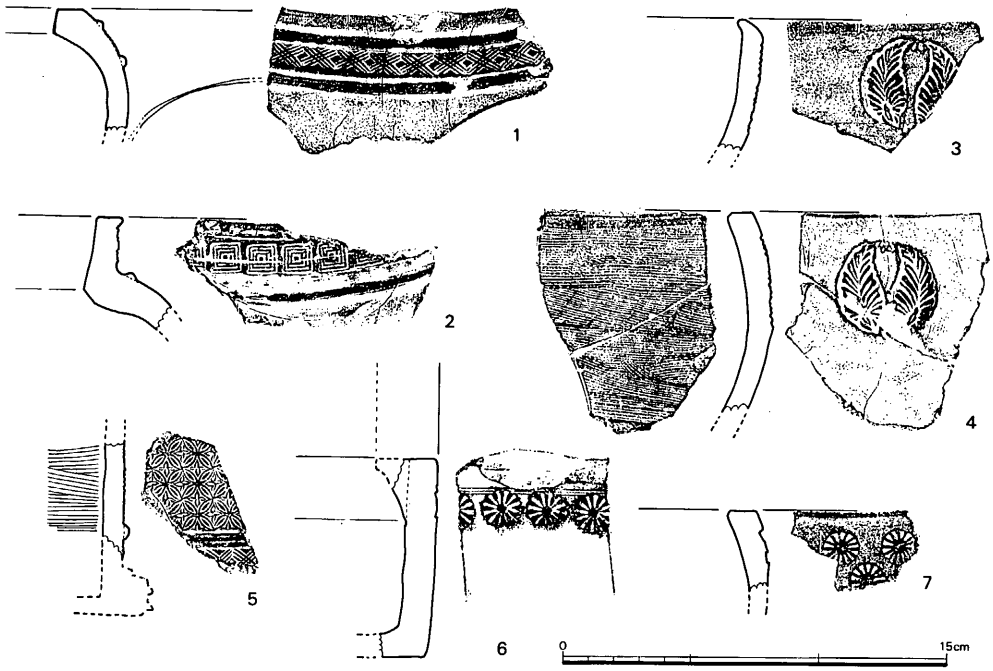
中国製陶器

鉢（69）　口縁部を直立させる摺鉢で、端部を肥厚気味に丸くする。内面には細い筋目を入れる。胎土には砂粒が目立つ。口縁部にはくすんだ茶褐色釉がうすくかかるが、他は露胎で暗褐色に発色する。

水注（70）　褐釉の水注片で、注口部の痕跡を残す。耳は横位で1個痕跡がみられる。類例では2個が一対となっており、それからするともう一個あるものと考えられる。赤褐色の胎には白色砂が混り、光沢のある茶褐色釉は全面にかかる。

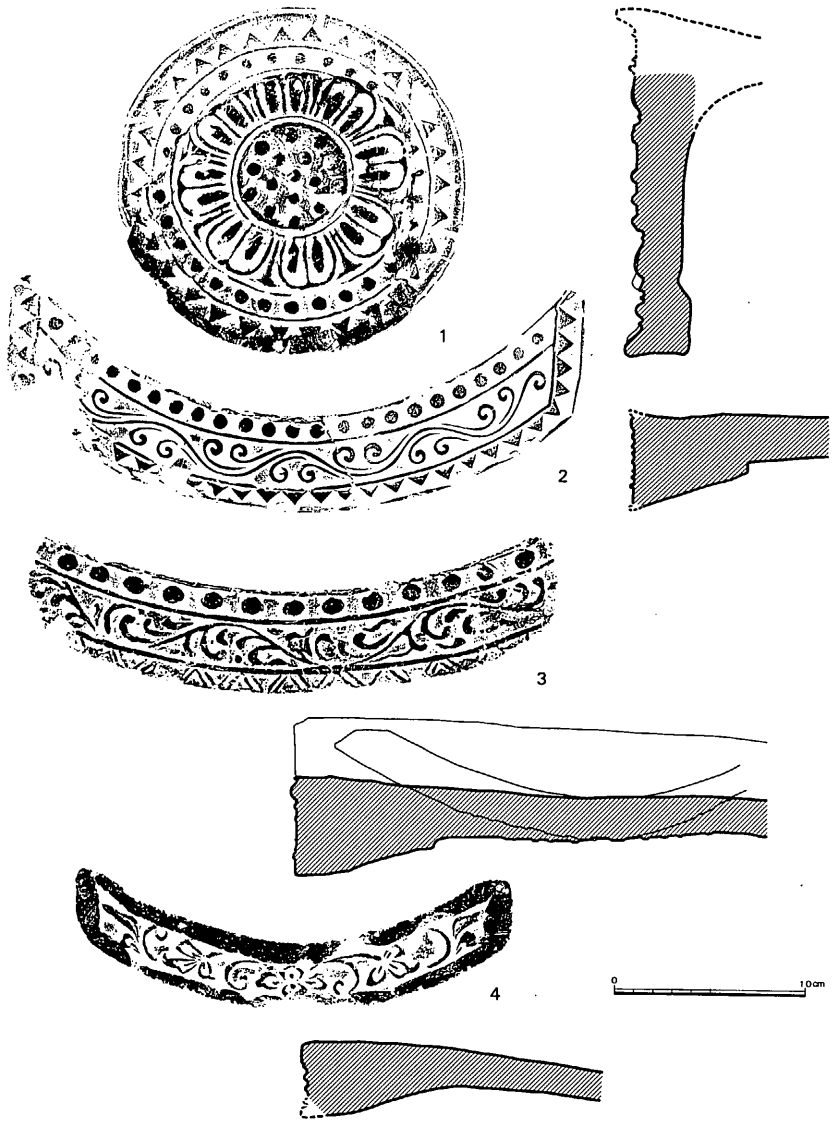
壺（71）　褐釉の小形壺である。内外面の全面に緑褐釉がかかる。底部は焼きヒズミで平坦ではない。底部端に目跡2個がある。

瓦質土器（第69図、図版74）



第69図　各層位出土瓦質土器実測図

鉢（1～7）　1は外面に二条の凸帯を巡らし、凸帯間に三直違文を押印する。また、取手となる窓状の透かしが開けられる。2は口縁部が直立し、外面に雷文を連続して押印する。3・4は外面に上がり藤の文様を押印するが、原体は左右が別のものである。共に同一原体を使用。5は底部に近い破片である。凸帯を挟んで上下に文様を押印する。上方は中心に四葉文をおき、周囲には両端が尖った長円形を組み合わせた七宝繋文を、下方には三直違文をそれぞれ連続さ



第70図　出土軒先瓦拓影・実測図

せる。6は平面が四角形となるもので、口縁部は内側に突出する。外面に浅い沈線を入れて下方に菊花文を押印する。7も外面に日足風の菊花文を押印する。

1・3・4・6は黒褐色土、2・5・7は茶褐色土からそれぞれ出土した。

瓦類（第70図・図版74）

この調査で出土した瓦類は多量の丸・平瓦と軒丸瓦94点、軒平瓦63点、文字瓦12点がある。これらの瓦は各遺構から出土しているが、黒褐色土層から出土したものが多い。また中世の軒瓦は茶褐色土層から主に出土している。軒瓦には奈良時代から室町時代にかけてのものがあるが、第70図－1、2に示した老司Ⅰ式が圧倒的に多く軒丸瓦36点、軒平瓦26点がある。軒丸瓦は複弁八弁蓮華文で、内区中房に1＋5＋10の蓮子を配する。外区内縁には31個の半球形状の珠文を配し、外縁には32個の外向する凸鋸歯文を配する。瓦当裏面の下半部は周縁に沿って一段高くなっている。軒平瓦は扁行唐草文で、瓦当面に主軸となる1本の波状線を入れ、その波文の上下に頭部が旋回する2個の唐草を配している。上外区にはボタン状の大きな珠文23個を配し、下外区と両脇区は軒丸瓦と同様の外向する凸鋸歯文を配している。この他に全形をうかがえる軒平瓦2点を図示した。第70図－3は扁行唐草文で文様の彫りは浅い。上外区には比較的大きな珠文13個を配し、下外区には二重線による線鋸歯文を配する。顎は段顎風にしている。第70図－4は四弁の花文を中心にして、その左右に宝想華文風の花文を配している。顎部は直線顎に近い形状を呈している。関野貞の「日本古瓦文様史」（『日本の建築と芸術』上巻）によると京都府所在の浄瑠璃寺にこれと同笵によるとみられるものが出土しており、興味ある瓦である。文字瓦は出土点数も少なく、特にきわだった傾向は認められない。種類としては「平井」、「佐」、「観世音寺」、「安楽寺」、「門司」などの銘のものがある。

木製品

SD3500黒色土層出土木製品（第71図・図版75）

皿(1)　内外面をロクロ挽きで整えた皿。口径10.4cm、器高2.2cm、底径6.3cm。底部の器肉0.6cm。広葉樹材の横木取り。

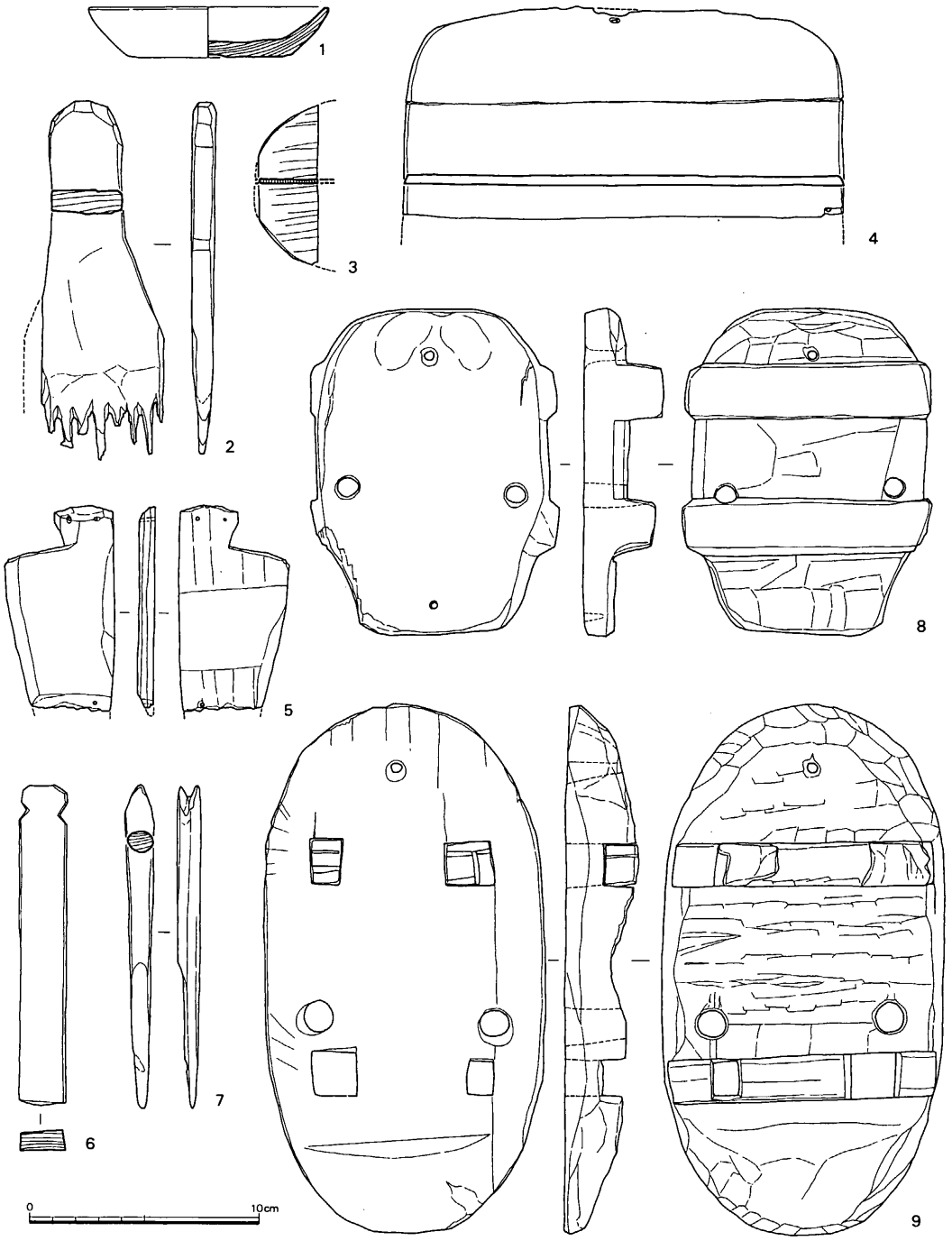
竪櫛状製品(2)　板材を杓子状に整え、下端に8本の歯を設ける。歯は表裏から鋸挽きして、付根をV字に挽き出す。歯は腐食著しく長さは不明。板目材。

円板状木製品(3)　薄板材を小型の円板に整えたもの。周縁は幾分法をつける。中央付近で半分を折損する。一面に平行して刃物痕が認められる。厚さ0.2cm。杉かヒノキの柾目材。

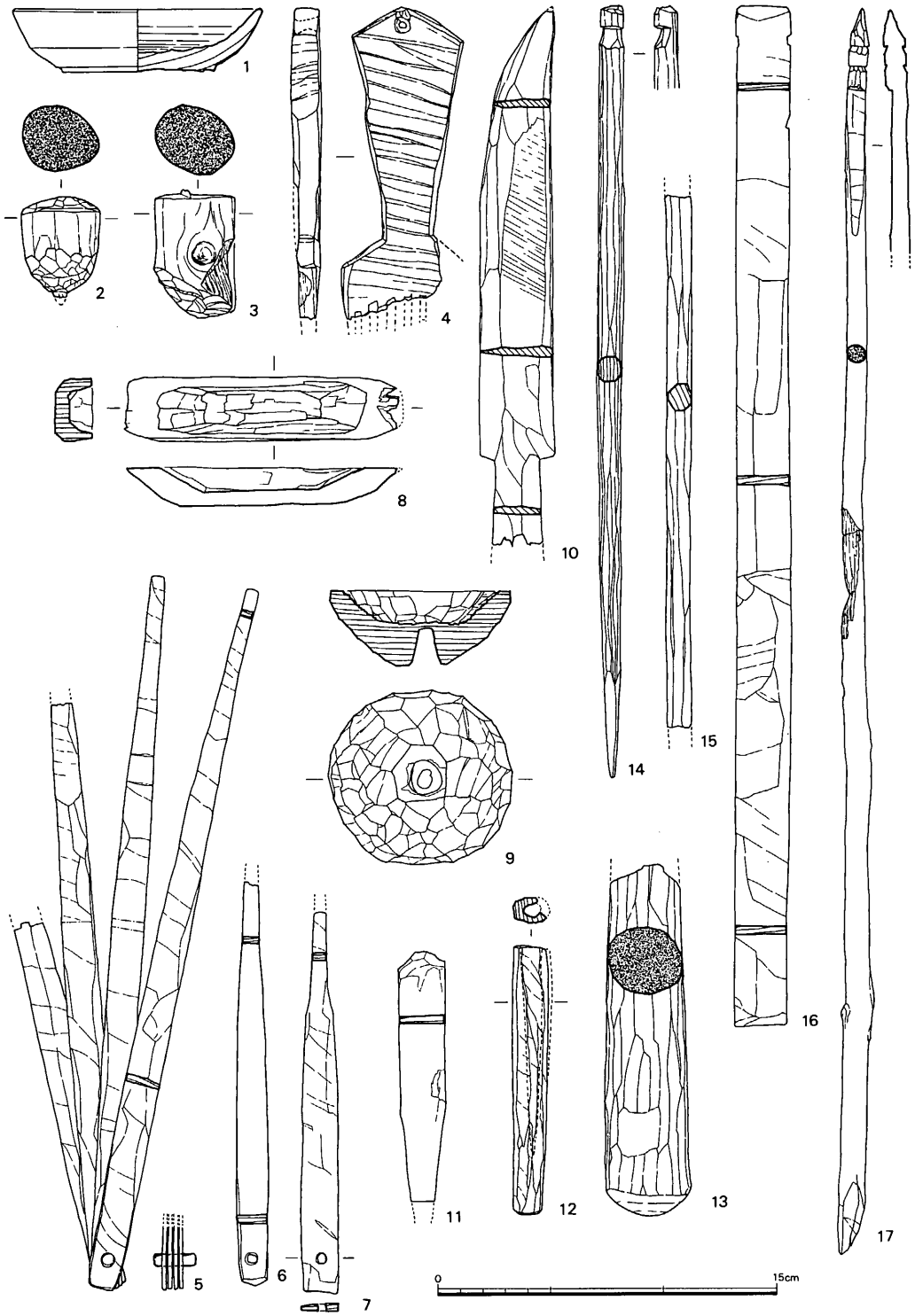
折敷(4)　薄板を方形に削り、さらに四隅を丸く削る。縁部には法をつける。一辺につき1ケ所枠材を取り付ける為の紐孔を穿つ。長さ19.0cm、厚さ0.4cm。

箱物加工板(5)　箱物材を両加工し、三辺に法をつけたもの。上端一方の隅は切り欠きを入れる。裏面には他の部材と接していたのかアタリの痕跡が認められる。樹種不明。板目材。

木簡状製品(6)　長方形の板材の両側面に切り込みを入れ、端部の隅を削り薄くしたもの。木



第71図　SD3500黒色土層出土木製品実測図



第72図　SD3500腐植土層出土木製品実測図(1)

簡の031型式。表裏面とも赤外線テレビで観察したが墨痕すら認めることはできなかった。長さ13.9cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm。板目材。

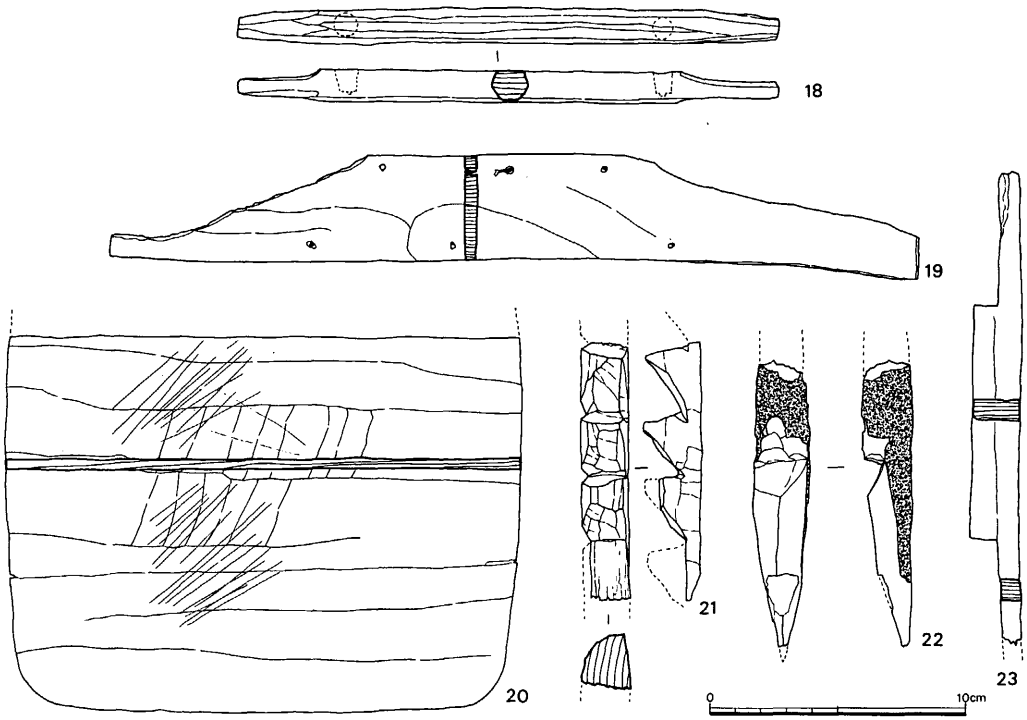
切り込みある櫛状製品(7)　丸棒を下端に向けて細くし、さらに削って尖らせたもの。頭部は断面を扁球状に削り、頂部を山形に削った後、さらに切り込みを入れる。全体に摩滅気味である。長さ14.2cm。身の幅1.0cm。

下駄（8・9）　8は子供用の連歯下駄。台部は踵を細目に削る。紐孔は焼火箸で穿孔する。台の表面には指頭圧痕が明瞭である。長さ14.1cm、台幅9.8cm、厚さ2.0cm。板目材。歯の減り具合からみて左足用か。9は小判形をした露卯下駄。台の裏面は舟底状とならず、中央部分を削り込んで凹ませる。差歯をとめる四ケ所の孔のうち、前歯部には出とさらにくさびが遺存している。長さ22.9cm、台幅12.2cm。板目材。

SD3500腐植土層出土木製品（第72・73図・図版76～78）

皿(1)　ロクロで挽き出したもの。内面にロクロ目が顕著に残る。底部外面は粗く削ったままで、杯部との境には高台状に段を巡らす。内外面に下地塗が部分的に残っている。口径11.1cm、器高2.8cm、底径6.9cm。横木取り。

独楽形製品（2・9）　2は広葉樹の心持材を削り出してつくる。身部は荒く削っただけ。



第73図　SD3500腐植土層出土木製品実測図(2)

下端の心棒は先端を欠損する。残存長4.5cm、頭部の身幅3.5cm。 9は椀形に近く、上面を荒く刳り込む。下端には鉄心をはめ込むための孔を穿つ。径8.0cm、高さ3.3cm。

毬(3)　3は広葉樹心持材の樹皮を剝ぎ砲弾状に整えたもの。先端は乳頭状に削る。全長5.4cm、幅3.5cm。

竪櫛(4)　長方形の板材から剣菱形に近い柄をつくり、一方の小口に歯を挽き出したもの。柄の先端部は面取りし、紐孔を通す。櫛歯は欠損している。切り通し線での歯幅は0.3～0.4cm、歯と歯の間隔は粗い。本来の歯数は9本前後か。

扇（5～7）　5は板目材の薄板を削った骨4枚で、要棒を伴って出土。骨は先端を細目の方形にし、軸部に向かって幅広にする。軸部の端は角を丸く整える。骨は全長31.8cm、厚さ0.2～0.3cm、軸部の幅1.5cm。要棒は長さ1.9cm、径0.6cm。本来は骨9枚からなるものか。 6・7は先端部を欠失する。ともに5に比べて骨は厚手のつくりである。

舟形(8)　長方形の板材の周囲を丁寧に削って整え舟形としたもの。船首部は先端を欠失している。船尾は台形状。船槽の刳りは外面に比べて荒い。現存長12.0cm、幅2.8cm。

刀形(10)　長方形の板材を薄く削って刀形としたもの。背の縁辺は面取りし、刃先はさらに薄く削る。棟関、刃関を刃部と柄部に分ける。柄の中程で切損する。残存長23.8cm、幅3.3cm、棟厚0.4cm。

工具柄(12)　断面が円形に近い丸棒状の柄。柄元から茎孔をくり抜く。欠損部から茎孔の内面を窺うと黒く焦げている。茎を焼き込んで挿入したためと思われる。全長11.9cm、幅1.5cm、厚さ1.1cm、茎孔長9.3cm。

摺子木(13)　心持材の周囲を削った丸棒で、先端部が最も幅広い。その先端は使用のため摩滅気味である。残存長15.7cm、先端部幅3.8cm。

鉤付丸棒製品(14)　丸棒に削った材の一端を削り込んで掛け部を設けたもの。他の先端は細く尖らす。全長33.4cm、径1.1cm。

卒塔婆（11・16・17）　11は薄板材の頭部を圭頭形に削り、下端部の側面をさらに削って尖らす。先端部は欠損する。板目材。12は薄板材を長方形に整え、一方の端近くに切込みを入れて頭部としたもの。頭部の両隅は僅かだが削って整える。板目材。11・16とも赤外線テレビで観察したが墨痕を認めえなかった。したがって卒塔婆とする積極的な根拠はない。17は広葉樹の心持細材を用い、一端に山形頂部・二段の切込み部・額部を設ける。その下方は平に削って身部とする。身部には墨書を赤外線テレビで捉えたが釈文は不明。地中に差し込む基部先端は削って尖らせる。全長110.8cm、基部幅2.3cm、頭部幅1.8cm。

糸巻枠木(18)　丸棒の一面を平に削って断面がアーチ形となるように整え、両端をさらに削って細くする。平坦面には横木を固定する孔を設ける。全長21.5cm、中央幅1.4cm、中央厚1.3cm。

部材(19)　長方形の板材を粗く削って台形状にしたもの。上辺と下辺にそれぞれ3つの目釘孔

を穿つ。うち三ケ所に竹釘が遺存している。全長31.7cm、中央幅4.1cm、厚さ0.5cm。

折敷⑳　薄板を隅丸方形に整えたもの。周縁はほぼ垂直に削る。幅20.1cm、厚さ0.4cm。表面に刃物傷が残っている。

切り欠き部材（21）　角材の一面を連続して切り欠き三角形状の連続突起をつくったもの。切り欠きは鋸で目を入れた後ノミで削り取っている。両端は欠損している。機具の一部であろうがその用途は限定しえない。

杭状製品（22）　樹皮を遺した広葉樹の心持材から二面を山形に削って先端を尖らせたもの。削り込みが始まるところに切り欠きを入れる。頭部にかけて欠損している。

組合せ部材（23）　長方形の板材を用い、両端の一側面を切り欠いて細くしたもの。一端を中途で欠失する。板目材。中央の幅1.9cm、厚さ0.8cm。

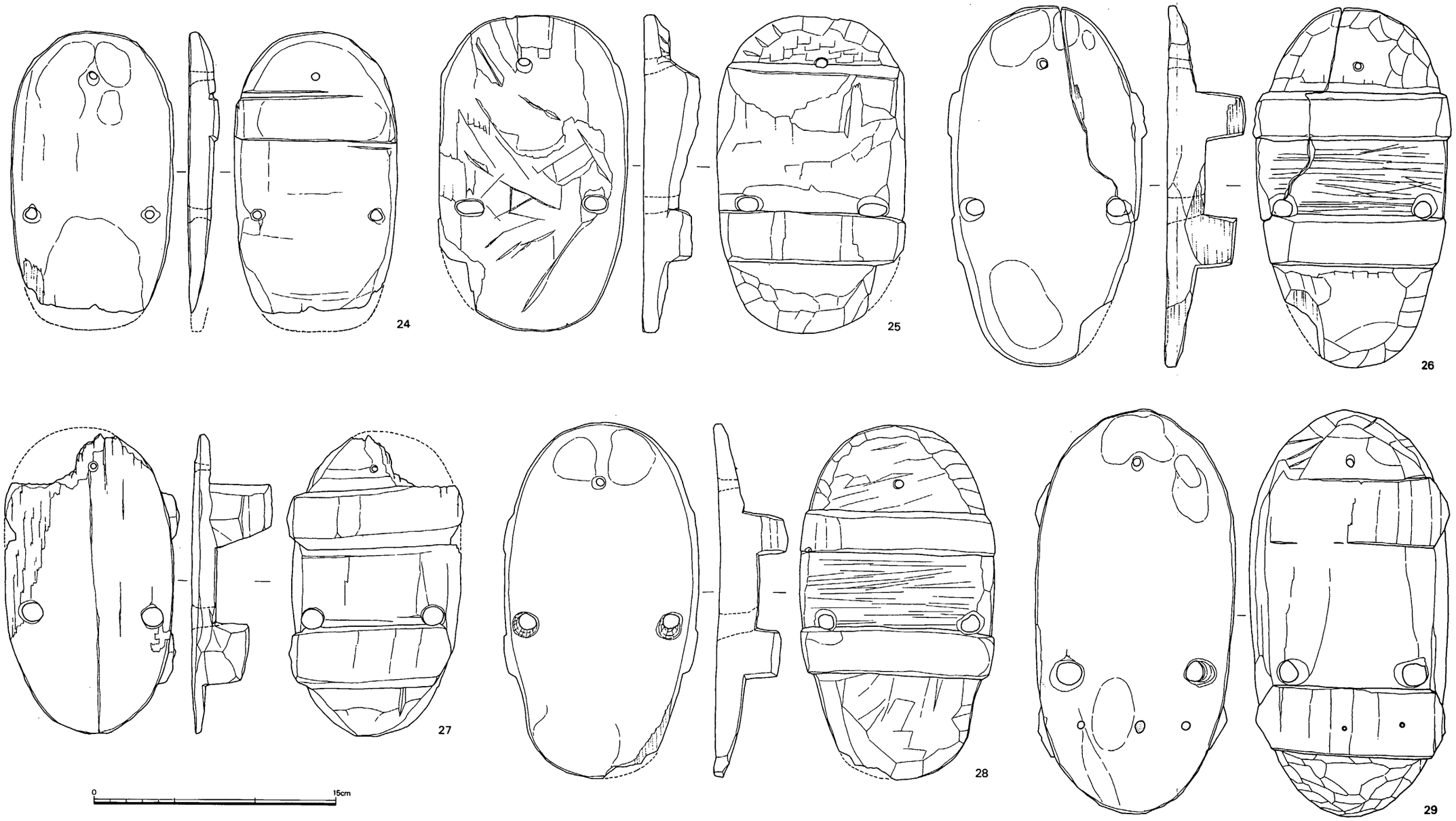
下駄（24～29）　全て連歯の下駄である。24は台部が小判形に近いものである。余ほど使用されていたのであろうか、台部・歯部ともに著しく摩滅している。特に後歯は痕跡すら窺うことができない。鼻緒孔はほぼ垂直に穿たれ、周囲は紐擦れしている。台部幅10.0cm。左足用。25は台部の先端付近を欠失する。板状の台部と比較して歯は厚みのあるしっかりとしたものをつくる。歯の側面は面取りする。後歯の減りが著しい。鼻緒孔の周囲は黒く焦げており、焼火箸による穿孔を窺える。26は幅広い小判形をなす。前歯は通常見られるように台から鋸で挽出さず、後歯付近まで粗く削ったままである。台表には刃傷が認められる。全長19.8cm、台幅11.8cm。27･28は同様の平面形態をしたもので台部より歯部の方が幅広い。また、踵部は先端に比べて尖り気味である。台裏の前後は丁寧に削り、中央部分は鉈によるものか刃傷が走る。27は全長22.1cm、台幅12.1cm。28は全長22.3cm、台幅11.9cm。おそらく一対を為していたと思われる稀な出土例である。29は前後ともやや尖り気味の台部で、また厚みを持っている。歯は25と同じく側面を面取りする。後歯には代表から補強のためか竹ひごが３ケ所打ち込まれている。後歯に比較して前歯の摩滅が著しい。

その他の遺構出土木製品（第75・77図・図版79）

毬(1)　板目角材を用いて周囲に面取りを施した後、両端を削って裁断しようとした未製品。

蓋形木板（２～７）　薄板材を円形もしくはそれに近い形状に整えたもので容器の蓋としたものか。周縁は丁寧に削り７以外は法をつける。最も小さい２は径5.5cmの正円形、厚さ0.2cm。３は8.7×7.8cmの楕円形。厚さ0.3cm。４は中央部分を欠失するが径13.5cmの正円形に復元できる。５もほぼ同じ径で厚さは0.7cm。６は長径5.6cmの楕円形、厚さ0.6cm。７は部分的に欠失するがほぼ同大の正円形で、厚さ0.7cm。木取りは２・４が柾目材、その他は板目材。２・７はSE3495。３・６はSE3525、４・５はSE3510からそれぞれ出土。

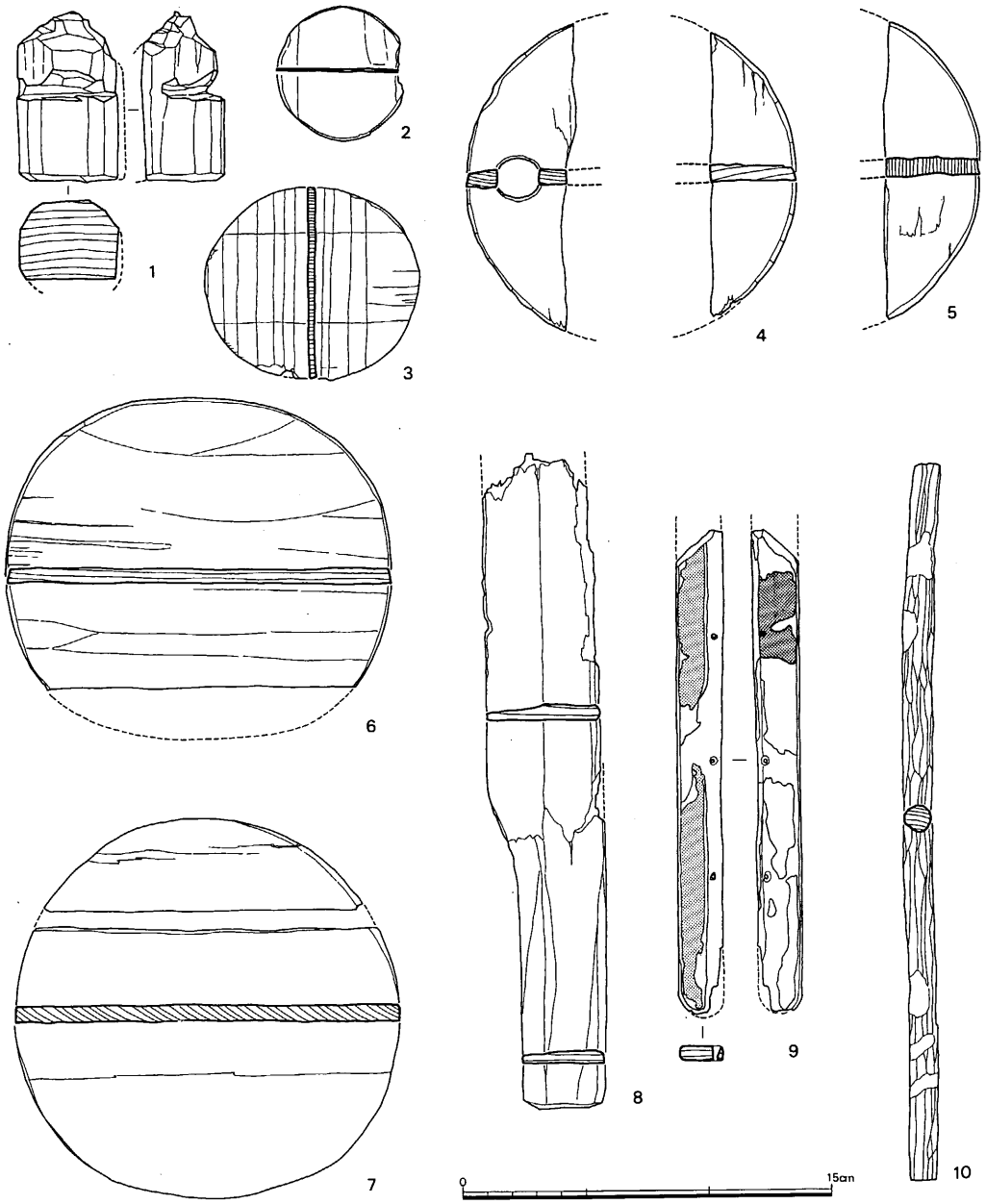
杓子状製品(8)　板目薄板材の周縁を削って杓子状にしたもの。腐植が進み遺存状況が悪い上に欠失部分も多く全形は不明。割板材を用材にしていることからすると建築材からの転用とも



第74図　SD3500腐植土層出土木製品実測図(3)

考えられる。SE3475出土。

漆塗部材(9)　他と組み合わせた部材で、長方形の材を丁寧に削る。残存する一端を見ると角



第75図　その他の遺構出土木製品実測図

を丸く仕上げる。また他と接合するための目釘孔が一側面近くに三ケ所穿たれる。接合面以外の表面には黒漆後朱漆を塗布する。SE3475出土。

丸棒状製品(10)　材を円柱状に削って仕上げたもの。腐植が著しい。全長29.4cm、径1.3cm。SK3485出土。

下駄（11～14）　11・14は連歯の下駄で、12・13は差歯露卯下駄である。11は長円形を呈する台から鋸で歯を挽出す。台裏には刃傷が認められる。全長22.2cm、台幅10.6cm。広葉樹板目材。SK3507出土。14は遺存状態が悪く全体に歪んでいる。台は幅広で踵部を尖り気味につくる。後歯は台から挽出されているが前歯は枘を設けて着装するように出来ている。全長24.9cm、台幅14.3cm。板目材。SD3550出土。12は台裏の中央部がU字状にくぼむ。歯部はともなっていないが高歯を着装していたものである。全長23.1cm、台幅12.0cm。SK3507出土。13は縦断面が舟底状をなす。後歯の摩滅が著しい。枘孔には出枘と楔が遺存していた。また、台表には足裏の圧痕が認められる。全長23.7cm、台幅11.9cm。柾目材。SE3480出土。

金属製品（第76図・図版80）

柳葉形銅製品(1)　全体に薄手のつくりで身の中位ほどから下端部にかけて徐々に細くなる。上端部は剣先状に鋭くとがる。現存長10.9cm、最大幅1.0cm、最大厚1.05cmをはかる。笄か。茶褐色土層出土。これ以外は鉄製品。

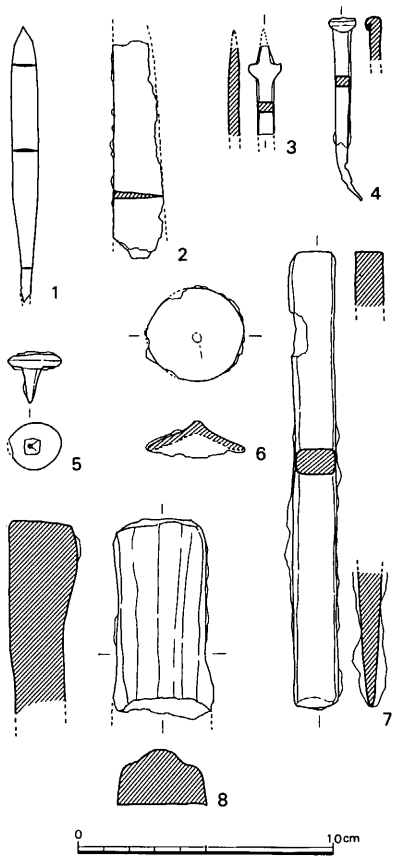
刀子(2)　背が直線的になるもので、切先と基部は欠失する。刃部の欠損が著しい。現存長8.6cm、最大幅2.0cm、最大厚3.05cmをはかる。SX3497出土。

針状製品(3)　先端近くがかえり状に突出するものである。身の断面は四角形を呈す。先端部は欠失するがさほどのびずに収束するものと考えられる。現存長2.5cm、身幅0.6cm、身厚0.4cmをはかる。SD3550出土。

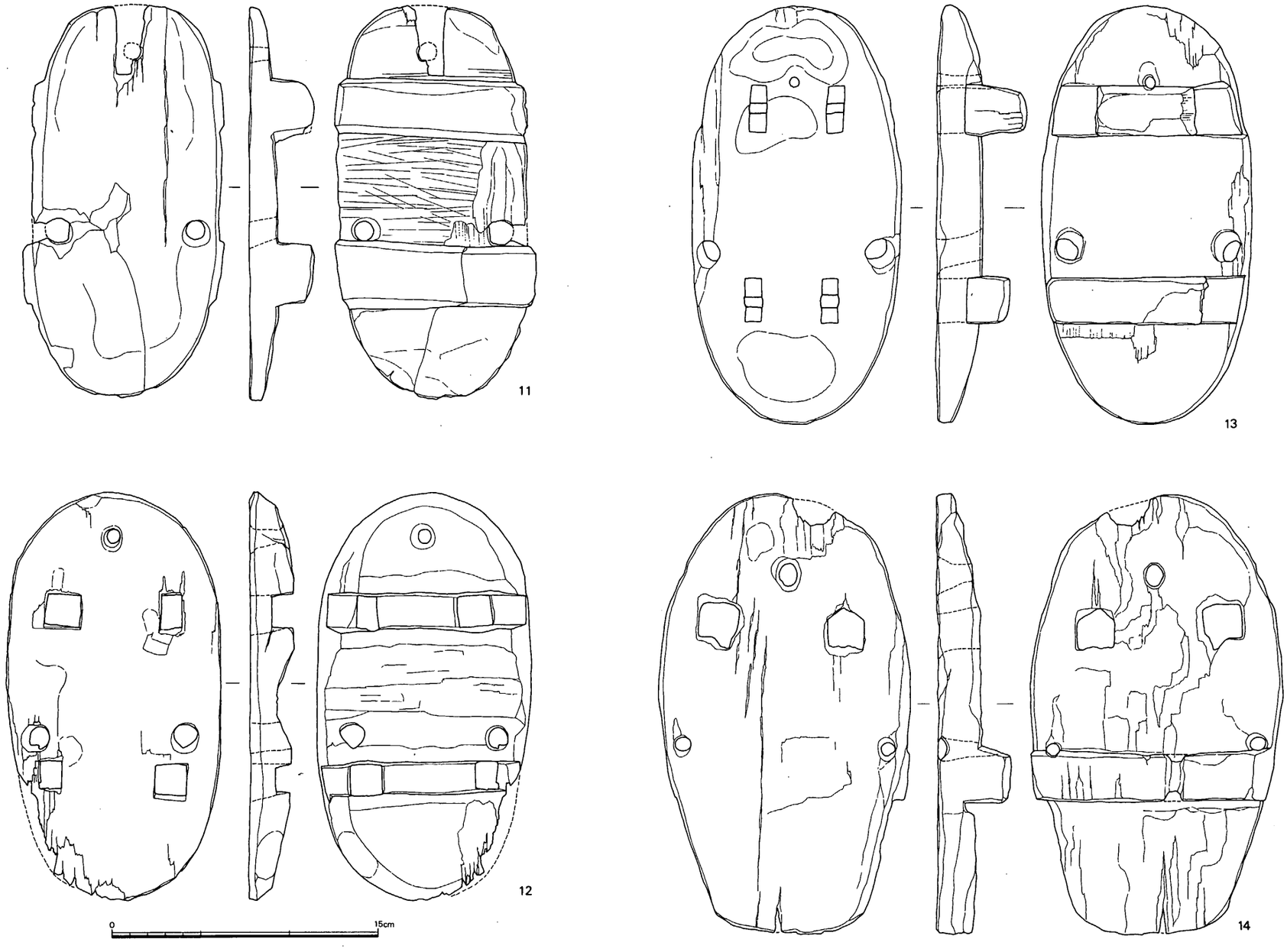
釘(4)　身の先端部の錆化が著しいが完形品である。頭部は折り返しており、身よりも幅広となる。身の断面は四角形となる。全長7.4cm、身は中央部で幅0.5cm、厚さ0.4cmをはかる。

鋲(5)　径2.2cmの頭部に、長さ1.4cmほどの四角錐状の芯がつくものである。全長1.9cmをはかる。茶褐色土層出土。

飾金具(6)　錆化がいちじるしく径3.8cm、高さ1.1cmの



第76図　金属製品実測図



第77図　各遺構出土下駄実測図

笠形に開く形状になるものと考えられる。釘隠しの飾り金具か。SX3536出土。

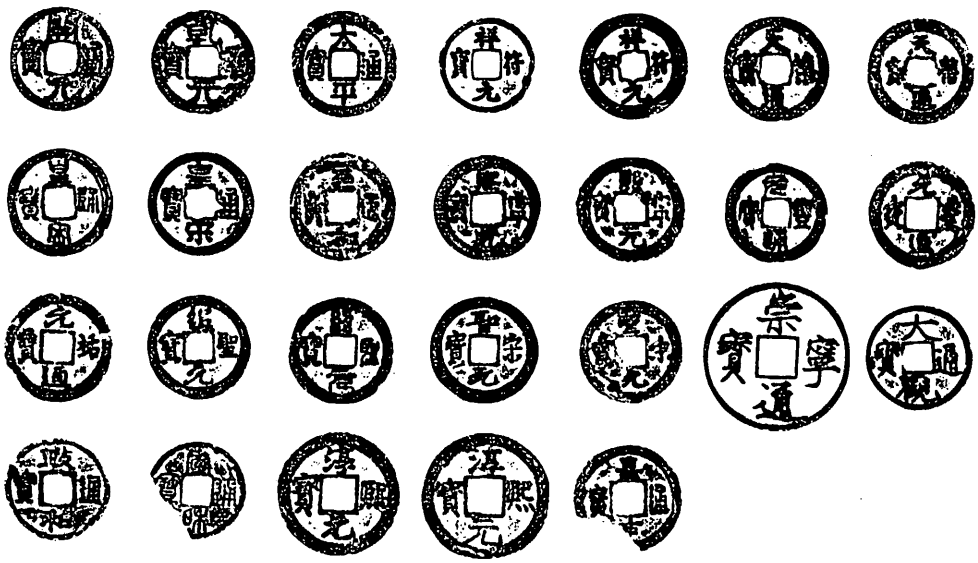
タガネ状製品(7)　頭部近くの縁部を欠くものの、ほぼ完存品である。角棒状を呈し中央部から下端部にかけて薄くなる。身の中央部での断面は隅丸の四角形。長さ18.1cm、中央部幅1.5cm、頭部の厚さ1.1cmをはかる。黒褐色土層出土。

棒状製品(8)　平面は縁部がややくびれた長方形に近い形状となる。表面は身の軸にそって幅1.7cmほどの隆起がみられる。身の縦断面は上端部付近で最大厚をはかり、中央から下端部にかけては均一の厚みをもつ。現存長9.0cm、最大幅3.7cm、最大厚2.7cmをはかる。鋳造品と考えられ、表面の銹は赤化している。茶褐色土層出土。

銅製箸（a）　完存しないが、中途で折損した箸１本が出土している。断面の最大径0.4cmの隅丸方形を呈するもので、先端部はやゝ細くなっている。先端から6.8cmの位置にやゝ間隔をおいて５条の沈線の切り込みを巡らしている。

銅銭（第78図）

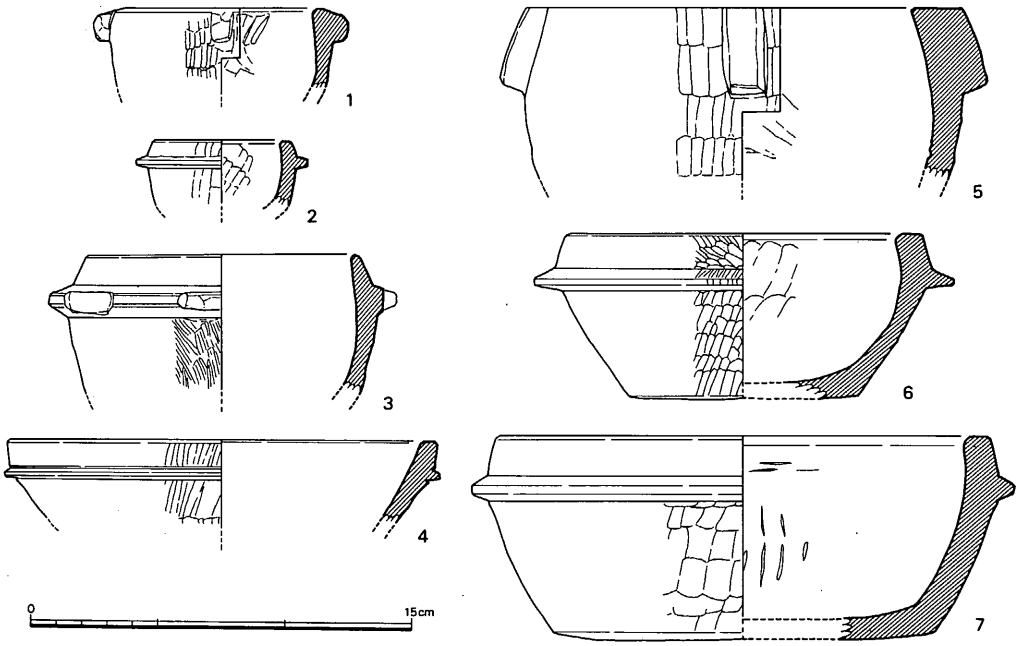
開元通寶から嘉定通寶まで18種、66点が出土した。これらの大半は遺構面を覆う茶褐色土層および最上層の遺構が掘り込まれた黒褐色土層から出土した。出土点数を銭種別にみると皇宋通寶が最も多く11点、次いで元豊通寶８点、淳熙元寶６点がある。また書体によって細分できるものとしては祥符通寶、天禧通寶、皇宋通寶、熙寧元寶、元豊通寶、紹聖元寶、聖宋通寶、淳熙元寶などがある。



第78図　銅銭拓影

石製品

滑石製石鍋（第79図・図版81）　1は縦耳型である。体部はやや内傾ぎみにたちあがる。外面には細かいノミ痕が残り、部分的に研磨を施す。復原口径10.8cm。2は小型品で口径7.3cm。3は体部が内弯するもので、口縁部は他に比べ器壁がうすく、端部は平担面をなさずに丸みをおびる。外面は横方向の削りの後斜め方向に削り、器面を滑らかに仕上げる。鍔は全周の2分の1ほど残存し、鍔外端部に幅4.5cmほどの削り込みが二ケ所に認められる。復原口径14.0cm。外面には煤が付着する。4は体部が斜め上方に直線的にのびる。口径に比して底径が小さくなるもので、鍔は退化している。鍔の付根は溝状の削りを一周させてつくりだす。復原口径22.4cm。5は縦鍔型で鍔は一つが残る。口縁の上端部はほぼ水平になる。復原口径20.6cm。6は底のみを欠失する残りのよいものである。外面のノミ痕は細かい。口縁はやや歪んでおり、径18.8～19.7cm、底径12.0cm、器高8.7cm。外面に煤が付着する。7は6にくらべ体部が直線的である。内面の体部と底部の境は段をなす。復原での口径26.0cm、底径20.0cm、器高10.7cm。4は茶褐色土層、7はSX3527、他は黒褐色土層より出土した。

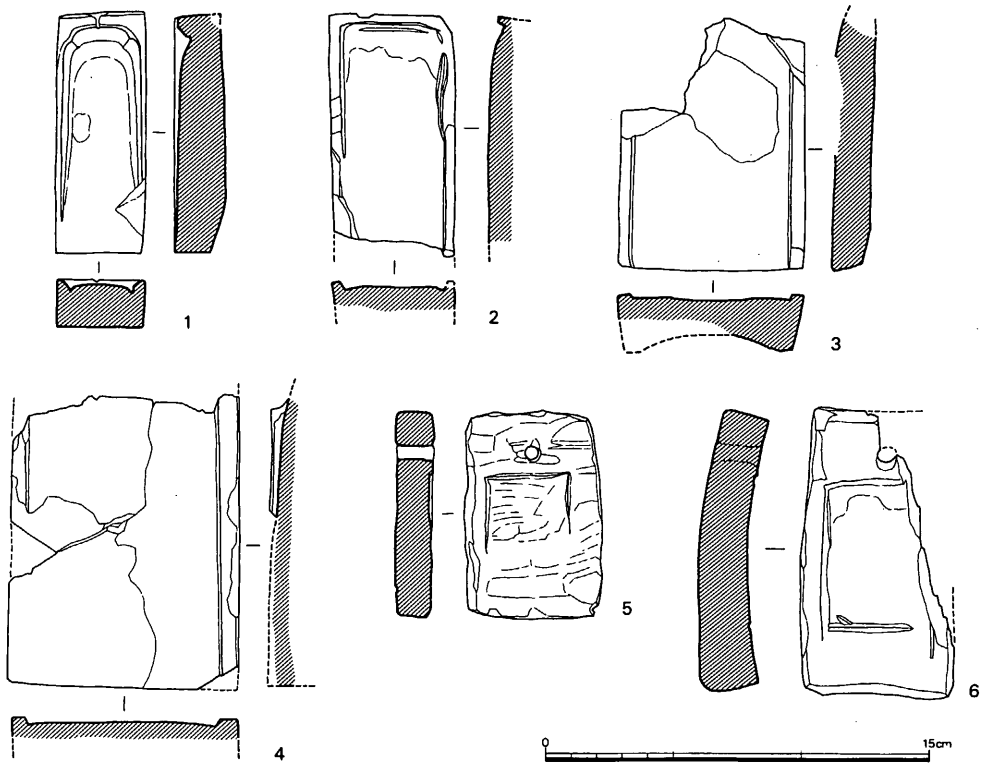


第79図　各遺構・層位出土滑石製石鍋実測図

石硯（第80図・図81版）

長方形硯（1～6）　1は粘板岩を用いた小形のもので、縁部は陸部から徐々に削り込んで海部へ至る為、陸部の後方には縁部を設けない。縁部の先端は桜花状に整える。墨痕付着。長さ9.4cm、幅3.5cm、高さ2.0cm。2も黒色の粘板岩を用いたもので、陸部と先端縁部を欠損する。海部と陸部に明瞭な境はない。海部には一条の溝が刻まれている。裏面は剝離している。幅4.9cm。3・4はともに海部を欠失し、縁部は陸部より僅かに高いだけである。3は裏面をノミで削って凹状にし、両側面を脚とする。灰色粘板岩製。4の裏面は割れて剝落する。小豆色砂岩質。1・3は黒褐色土、2は発掘区北側のピット、4は茶褐色土層より出土。5・6は滑石製石鍋の再利用。周囲を長方形状に整え、硯部はノミで条線を刻んで区画し、海部を僅かに削っただけである。上端部に孔を穿つ。6の外面には煤が付着し、券面には墨が僅かに認められる。5は長さ8.1cm、幅5.4cm、高さ1.4cm。茶褐色土層出土。6は長さ11.7cm、幅6.0cm、高さ2.0cm。黒色砂質土層出土。

その他の石製品（第81図・図版80・82）



第80図　各遺構・層位出土石硯実測図

小形円形容器（１～４）　１は内外面とも丁寧なつくりである。底部外面に三脚を削り出す。口径2.1cm、器高2.0cm。２は合子の身で、口縁部外面に蓋受けの段を巡らす。非常に丁寧に仕上がった優品で成形には轆轤を用いて加工したものかもしれない。口径3.4cm、器高1.5cm。３は二連のもので、内外面に細かい削り痕がみられ底部は平滑である。長径4.3cm、器高1.6cm。４は雑なつくりのもので器肉は厚い。内面は摺鉢状にくぼむ。口径3.1cm、器高2.1cm。

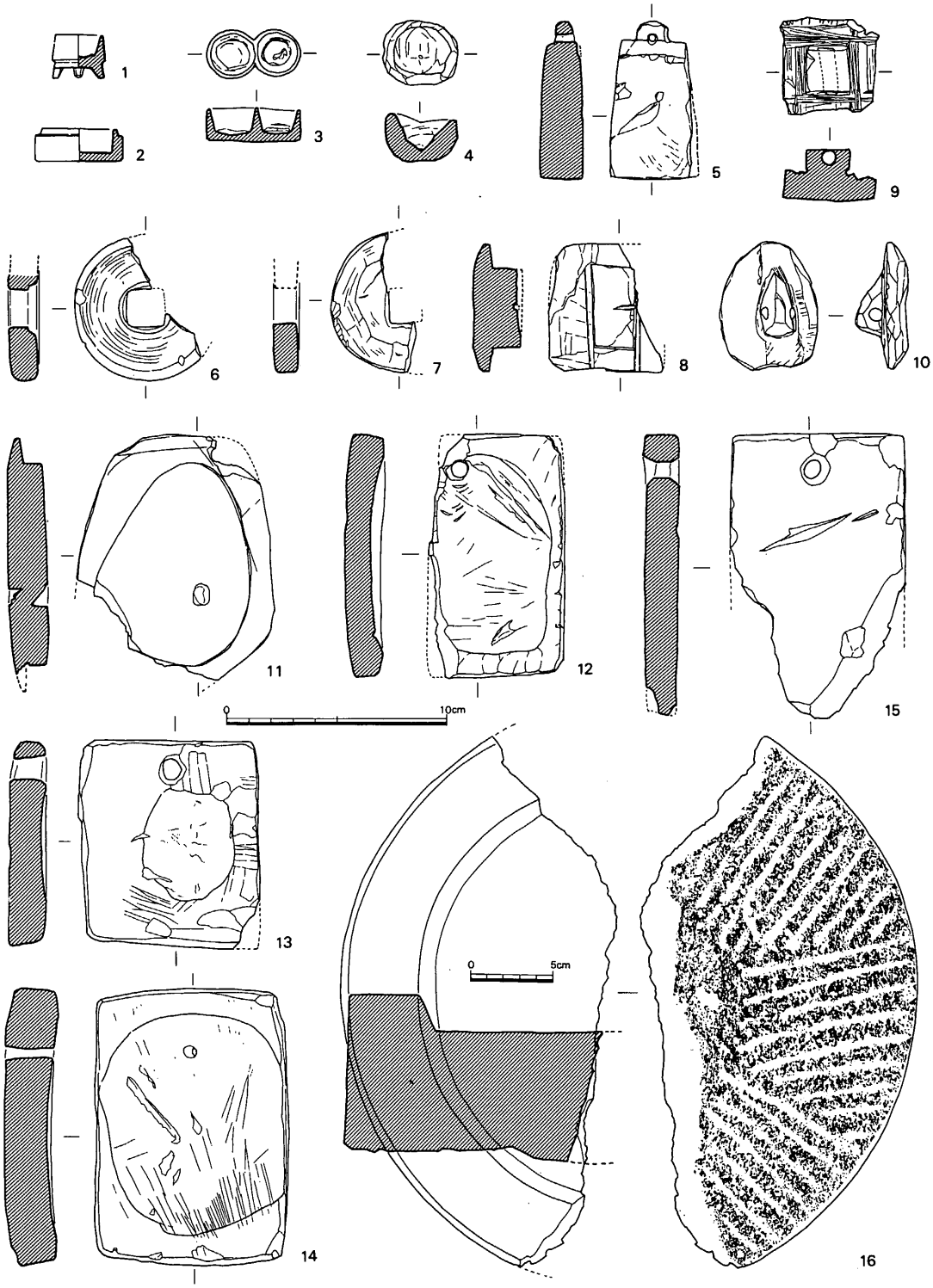
権状製品(5)　身は台形状に整え、上端に孔を設けた鈕をつくる。全体を平滑に仕上げる。一部分欠損する。高7.2cm、鈕高0.9cm、厚さ1.9cm、重さ101g。

有孔円盤（６・７）　中心に孔を穿ち、周囲を円形の環状に整えたもの。縁部の断面は稜をもたず丸い。また表裏とも水平ではなく凹状に曲面をなす。石鍋の再利用であることから鍋の体部の湾曲に合わせたものであろう。６は、表裏に研磨時の擦痕が同心円状に走る。孔は正方形であるが上面は円形にしている。径6.5cm、厚さ1.9cm、孔径1.7cm。７は半分以上を欠損しているが、孔は正方形に復原できる。６に比べて雑な仕上がりである。法量は６にほぼ等しい。さてこの用途について考えてみると仮に孔に棒を通して使用したとすると、紡錘車・火鑽車・薬研の車が考えられる。６のように片面だけ二段孔になっているのは落下防止の為にパッキンをはめ込む目的と考えるのが妥当のようである。そうなると薬研の車は考えにくく、方形孔である点、この時期すでに糸巻が出現している点を考えると紡錘車の必要もなく、どちらかといえば火鑽車の可能性が高い。

スタンプ状製品（８～11）　すべて石鍋の再加工品である。８・９は周囲を方形状に整えたもので、鈕は方形で側面に孔を通す。表面には鈕をつくる際の工具痕が井の字に残る。裏面は石鍋の外面そのままに湾曲し煤が付着したままである。９は、鍋の鍔部分を利用しているため裁断痕は側面のみに認められる。鈕の上部を欠損するが側面に穿たれた小孔をうかがえる。裏面は平滑で両端に法がつく。10は杏仁様に形を整え、鈕は半環状に丸く削る。裏面は平滑で９と同様両端に法をつける。11は不整形で鈕は身より一回り小さいだけである。表裏両面から穿孔したところがあるが、貫通しておらず中途で放棄されている。また鈕の上面には煤が付着している。

硯状製品（12～14）　石鍋再加工品で形状は一見したところ硯のようであるが、硯面となる位置に孔が通っていることからここでは硯状製品としたもので、その用途は限定しえない。これらは、周囲を方形もしくは長方形に近く削って整え、表面をさらに削って浅い凹部をつくっている。13の裏面は平坦であるがそのほかは湾曲面を残したままである。12は全長11.1cm、幅6.1cm、高さ1.6cm。13は全長9.4cm、幅8.0cm、高さ1.7cm。14は全長12.7cm、幅8.6cm、高さ2.5cm。

有孔長方形板(15)　下部を欠損しているが石鍋の底部を利用しているため表裏とも水平で、全体としては長方形に近く整えている。中央の一端に両面から穿った孔がある。



第81図　各遺構・層位出土石製品実測図

石臼⑯　花崗岩製の上臼である。上面の周囲に厚い縁をまわす。下面には9本前後の溝を刻む。中心部は下臼との合わせのためか、出枘状に突出する。取手や物入れの部分は残っていない。

石帯（図版82－ａ）　金鼓の鋳型と共伴する下層の茶灰色土層出土のものである。裏面の一部が欠失するだけで、ほぼ完形である。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmを測る。裏面の3ケ所に2個ずつ対になったかがり穴を穿っている。表面および側面はよく磨かれ光沢を放っている。石材は黒曜石である。

石製獅子（図版82－ｂ）　溝SD1230出土である。頭部および脚部を欠失する。頭部を欠失しているため、動物の種類は不明であるが、体部の状況から観察する限りにおいては獅子である可能性が強い。この座像は高さ2.0cmの台座の上に一体に彫像されている。残存長12.0cm前後、台座を含めた残存像高7.5cm前後を測る。凝灰岩製で、やゝ風化している。

ガラス製品（図版80）

装飾品（ｂ）　厚さ0.2cmのもので、花弁様の文様をもっている。小片であるため形状は不明であるが、裏面が平坦となっていることから、器などに装飾として貼付されたとみられる。明るい空色を呈する。茶褐色土層出土。

小玉（ｃ・ｄ）　ガラス製の小玉5個が出土している。いずれも扁平気味で中心部には穿孔がある。1個を除いて風化が著しく、白くなっている。径は0.6cm～1.7cmである。SD3550・ピットおよび黒褐色土層、茶褐色土層出土である。

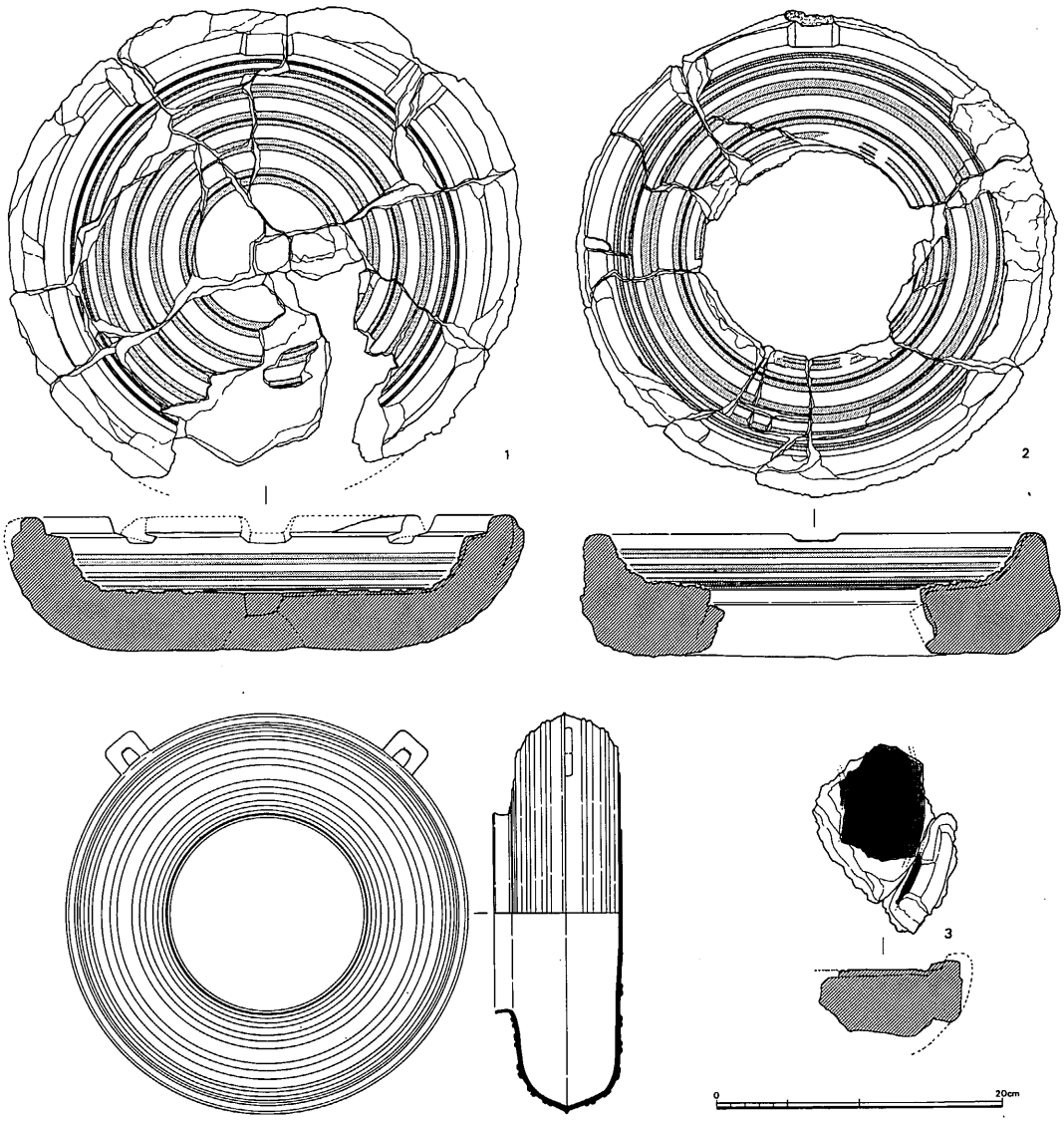
鋳型（第82図・図版83）

金鼓鋳型（1・2）　対となる合わせ外型で、下層整地（茶灰色土）から鋳型面を上に向け両者重なった状態で出土した。金鼓は鰐口と似た銅製の梵音具であるが、鰐口のように下部に口を設けず、撞座と相対する裏面の位置に円口を設けたものである。

1は径36.0cm、高さ9.3cm。粗真土は3cm前後の厚さで砂粒、スサ、籾殻等を混入している。仕上げ真土は厚さ0.3cm鋳面には黒味が塗布されている。周縁上面には段を回し、また3ケ所に幅3cm前後の長方形の刳りをつけている。中央の刳りは湯口で、左右の2つは製品の鈕になるものであろう。鋳面の径は28.2cm、深さ3.9cm。縁部から底面には6条の二重凹線が巡り、底面中央が撞座部分となる。中央部はロクロ軸孔が通っていたためか、後に別の真土を補塡して塞いでいる。2も同様の造りであるが周縁上面には段を巡らさず、また鈕となる刳りも入れていない。中心部には径14.7cmにわたって中空となっている。鋳面はこの中空部の周縁から下方に約1cm折れて丸く収まっている。湯口には溶解物が付着している。3は1と2からの復元図である。鋳型現状での金鼓径21.2cm、幅6.8cm。全体の形状は面の張りが少なく偏平に近い。側面は縁部から接合部にかけて緩く傾斜し山形とする。撞座部にかけて外面は二重の圏線を巡らすが鰐口に通有の圏線による内外の区画は認められない。両耳は片面式であるが形状は不明。

復元した金鼓は、現存の紀年銘を有する金鼓に類例を求めると、現存最古の韓国慶尚南道発見の咸通六年（865）銘金鼓に形状は最も近い。尚、整地層中からはこの鋳型に接して９世紀前後の土師器が出土している。

不明鋳型(4)　円盤状をなすものの破片で、中心付近の形状は不明。真土、粗真土とも砂粒、スサ等を混入。仕上げ真土は0.4cm前後の厚さで黒味が部分的に残存する。鋳面は水平に整え、二条の二重圏線を巡らし、周縁には段をつくる。整地層出土。



第82図　鋳型実測図

小結

以上、遺構と遺物についてその概略を記したが、昭和52年度に実施した第45次調査結果とも考え合わせ、若干の検討を行ないたい。

下表のとおり、今回検出した遺構は大きく３期に分けられ、Ⅰ期と８世紀後半～11世紀後半代、Ⅱ期を12世紀前半代、Ⅲ期を12世紀後半代～14世紀代とすることができる。Ⅰ期とした遺構のうち、SX3455を除いては全て11世紀代にその埋没が認められるものである。SD1300とSD3500の掘削時期の先後関係はSD1300が先行するとみられ、SD3500は11世紀後半代の短期間のうちに掘削され埋没したものと考えられる。SD3550は発掘区の南区で検出したもので、これは北区では検出されなかったことから南区と北区の間あたりから掘削されたと考えられる。これはSD3500より後出のもので第Ⅱ期の初期にあたる。第Ⅲ期になると遺構の密集度が著しく、保存状態も良好である。礎石建物や掘立柱建物それに井戸遺構等の大部分はこの期に属するものである。発掘区の南辺を南北に流れるSD1230は既に第45次調査で検出され、その延長部分になるが、保存状況は良好と云えず、護岸の石組もほとんど残っていなかった。しかしながら少なくとも今回の地域までは確実に続くことが判明し、さらに南方へ延びることが明らかとなった。今回、検出した計５条の溝は時期的に西から東へ移行しており、最終的にSD1230の溝で終る。これら５条の溝が同一性格をもったものかは判然としないが、旧観世音寺の推定寺域内である。これらの溝のうち最古期に属するSD1300は埋没の時期が11世紀後半代にまで下るものであるが、ほぼ真南北方向にあり、きわめて注意される溝である。因にこの溝の位置は観世音寺推定軸線から約102m前後の距離にある。観世音寺の旧寺域内のこの地域に平安末期になって、溝が集中する理由については必ずしも詳らかでないが、14世紀代になって造られる石組の護岸を有するSD1230の区画溝の前段階的性格を有するものと考える事も可能であろう。いずれにしても、伽藍の東辺を画する東面築地に確たる根拠がない現段階において、この地域の性格を云々することはやゝ時期尚早と考えられる。

期別＼主要遺構	建物、柵、井戸、溝、土壙、その他
Ⅰ　期	SD1300、SD3478、SD3500、SD3550、SD3555、SX3455
Ⅱ　期	SE3480、SE3490
Ⅲ　期	SB3460、SB3479、SB3565、SA1230（a・b）、SA1235b、SD1230、SD3520、SD3590、SE3470、SE3475、SE3495、SE3505、SE3525、SE3530、SE3535、SE3540、SK3464、SK3501、SK3506、SK3529

第120次調査

本調査地は観世音寺僧坊地区の北側で、日吉社の南側のすぐ直下に位置する。地番は太宰府市大字観世音寺山ノ井893－３、調査対象地は360㎡である。

観世音寺の伽藍配置については先学の業績に負うところが大きいが、伽藍の北限となる北面築地については、延喜五年の『観世音寺資財帳』に記載された築地南北長を現在の推定南大門を基準として、今回の調査地を通る築地ラインが推定されている。特に北門礎石ではないかとされる一個の礎石が、かつて、この調査地付近より発見されている。幸い昭和63年度にこの地が公有化されるに至り、今回の調査の運びとなった。

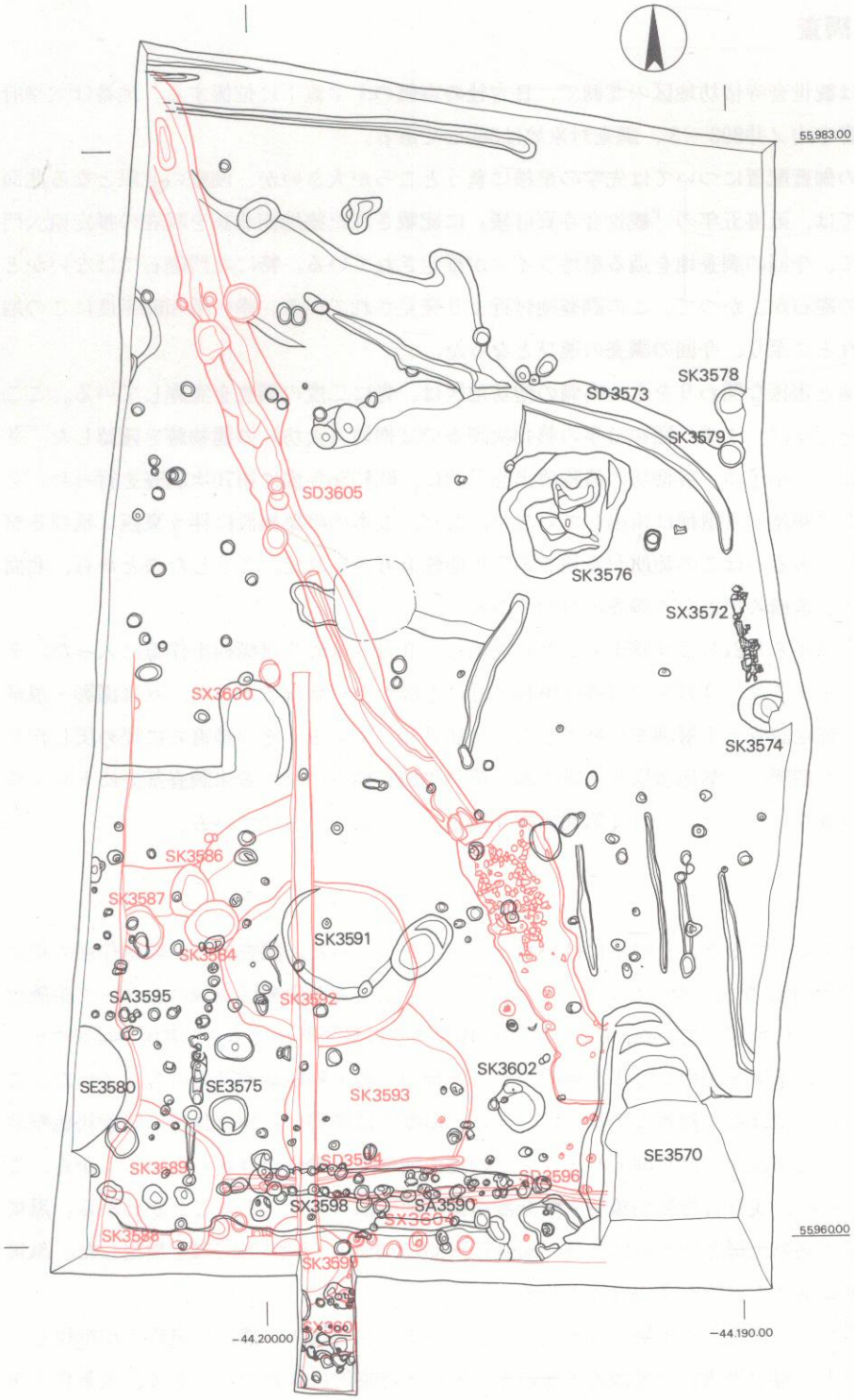
この調査地と密接な関わりをもつ南側の僧坊地区は、先に二度の調査を実施している。ここでその概要を記せば、まず、昭和51年の第43次調査では僧坊（大坊）の建物跡を確認した。さらにその北側で、小子坊・客僧坊の建物検出を目的に、昭和56年度に第70次調査を行った。それら僧坊と直接関連する遺構は検出していない。ただ、五本の暗渠施設に伴う東西に延びる整地面を検出し、あるいはこの範囲が築地である可能性も考えられた。こうしたことから、北面築地に関連する遺構の把握が本調査の目的である。

調査は平成元年８月21日より盛土除去から開始し、９月５日より遺構検出作業に入った。その後は雨天に悩まされ、９月中の調査は実質半月にも満たない状況であった。写真撮影・遺構実測を経て、補足調査と土層調査が終了したのが10月30日である。その後直ちに埋め戻し作業に入った。また期間中、築地遺構を追求の為、第70次調査地点に接する未調査部分にトレンチを設定して調査を行なった。これは第70次調査補足として別項を設けている。

検出遺構

上部の盛土を除去すると、その下には旧耕作土が広がっていた。調査時のこの耕作面の標高は42.80m前後の平坦な面をなしていた。この耕作土を除去すると発掘区全域にわたって茶灰色土が約10㎝程単一に堆積していた。上面には江戸時代後期以降の所産であるL字状の石列やピットなどがあった。茶灰色土中にも平安時代末から近世の土器・陶磁器を多量に含んでいた。これより下層は均一ではなく複雑な堆積状況にある。南側では黒褐色土中央付近に暗黄褐色整地層がみられる。北側はすでに花崗岩バイランドの地山面に達し遺構が存在しないことから、この地山面との境が、現日吉神社の鎮座する丘陵南側の旧裾部ラインであることがわかる。黒褐色土層及び暗黄褐色土層上面からは、井戸SE3570・3575・3580、土壙SK3574を検出した。黒褐色土層には鎌倉時代の遺物を多く含んでいる。

発掘区南側では黒褐色土の下層に淡茶色土層が広がる。西南部の一部には黒色土が堆積している。この黒色土層中の遺物は黒褐色土層の出土遺物と時期的に大差ない。さて、淡茶色土層



第83図　第120次調査遺構配置図

上面には土壙SK3592・3593や数多くのピットが掘り込まれ、その密度は高い。それらは柵SA3590・3595としてまとまるものもある。また、発掘区南端で、この層から和鏡片が出土している。中央部付近までは淡茶色土層には達しておらず、そこからは一段高くなって暗赤褐色土層・暗黄褐色整地土層がある。平安時代後期の土器・陶磁器が出土しているが、遺構の密度は低い。

これらの土層の下層は南側で黄褐色整地層に達し、中央付近は地山に達する。黄褐色整地層は南側一帯に認められ、特に発掘区南端より５mの付近から基壇状に一段の高まりをもってさらに南側発掘区外へと広がっている。奈良・平安時代の遺構が、この黄褐色整地層上面から掘り込まれている。溝SD3594・3605、土壙SK3576・3587・3589・を検出した。中央付近の赤褐色土層下には、焼塩壺が破砕された状態で集中する箇所を検出した。明確な掘り込みは検出できなかった。尚、遺構配置図中のSK3592・3593は中層遺構である。

以上、やや煩雑な様相を呈する層位を各検出遺構と比較しながら整理すると、最上層（茶灰色土）、上層（黒褐色土・黒色土）、中層（淡茶色土・暗赤褐色土・暗黄褐色整地土）、下層（黄褐色整地層）として捉えることができる。なお、これらの層位は第70次調査で捉えた層位と基本的に対応するものである。

以下、層位別に遺構の説明を行なうが、最上層の遺構は江戸時代後期以降のものであり、ここでは省略する。

下層遺構

溝

SD3594　発掘区南側で検出した東西に延びる溝状遺構。東西長5.05m、幅0.15～0.4m、深さ0.1m前後。やや西に向かって傾斜する。西はSK3589と重複し、消滅している。この溝は発掘区南端で基壇状に高まった黄褐色整地層SX3604の北側に沿って掘られている。溝底は地山に達する。SX3604の北を区画する性格を持ったものであろう。埋土は固くしまった茶色土であるが、遺物は土器・瓦の細片が出土したのみである。

SD3596　SX3604上面に掘り込まれた東西溝。東側は上層のSE3570に切られ、その延長は不明。西側も途中で消滅する。東西5.0mが残存。幅0.3m前後、深さ0.1mと小規模である。中層の柵列SA3590と同位置に存在している。SD3594と平行して走るが、層位的にはそれより後出するようである。

SD3605　発掘区西北隅から東南隅方向に斜めに延びる溝である。幅0.8m前後、深さ0.2～0.3mで、溝底は凹凸が激しい。東南部分は幅が広がり、溝底の凹凸はさらに著しくなる。埋土には平安時代の遺物が含まれている。奈良・平安時代前期の遺構は、この溝を境にして東北部には広がらない。

土壙

SK3587　発掘区西壁で検出した長円形の土壙。長径1.05m、短径0.85m、深さ0.13mと浅

い。埋土は明茶褐色土。出土遺物は少ない。

SK3589　発掘区西南隅部で検出した落ち込み。幅は2.5m以上、深さ0.3m。埋土は茶灰色の粘質土。埋土中より暗渠に用いる土管が出土した。直接この遺構に伴うものではない。この他、奈良時代の土師器・須恵器が出土。

SK3599　発掘区の南端拡張区で検出した長円形土壙。径1.8m、深さ0.4m前後。淡茶色土下層でSX3604に掘りこむ。粘性を強く帯びた埋土で、瓦や小石を多数含む。

不明遺構

SX3600　発掘区中央寄りで検出。黄褐色整地層上で焼塩壺の破片が多量に散乱していた。その範囲は東西約4.0m、南北3.0m程で厚さは約0.1m。それらを取り上げたところ、さらに下層から長円形の浅い土壙を検出した。焼塩壺破片はこの土壙内にも堆積している。こうしたことから上面の焼塩壺の集中範囲と長円形土壙に一括して遺構番号を付した。土壙は南北2.1m、東西1.5m、深さ0.9m。埋土中から奈良時代後半の土器片も出土。

中層遺構

SA3590　発掘区南端の東西に並ぶ柵状遺構。柱穴は東西に長い落ち込みの内側に掘り込まれている。径0.2～0.3m、深さ0.3m前後。6間分を検出。柱間寸法は一定でなく0.9～0.1m。

SA3595　発掘区の西南隅部で検出した南北に延びる柱穴列。長さ6.5mを検出したが、南側はさらに発掘区外へ続く。柱穴の規模、柱間間隔にはばらつきがある。

SA3606　SA3595の北側部分で検出した西へ延びる柱穴列。SA3595をこえて東ではその延長がないことから一連のものか。西側は調査区外へ延びる1.6mの長さを検出。柱穴の径は0.2m前後、深さ0.1～0.2m。

土壙

SK3592　発掘区南側の、淡茶色土層の下層で検出した円形に近い土壙。南北径3.5m、東西径4.0m、深さは0.2m。底面はフラットで地山面に達している。埋土中より土師器・須恵器の小片が出土した。

SK3593　発掘区南側で検出した隅丸方形状の土壙。北壁側はSK3592に切られ、南壁側はSD3594の上部を切る。東西径3.9m、南北径3.5m、深さ0.2m前後。底面はフラットで地山面に達する。

SK3602　発掘区東南部で検出した土壙。平面形は長円形に近い形状で長径1.0m、短径0.9m、深さ0.3m前後。土師器がまとまって出土している。

上層遺構

SE3570　発掘区東南隅で検出。掘形の規模は不明。桶側であろうか、竹タガが遺存していた。

SE3575　円筒状の素掘りの井戸で、径0.9m、深さ1.9m。底面に小ピットあり。

SE3580　発掘区西南部で掘形の一部分を検出したのみで、井戸枠は調査区外にあり未発掘。

出土遺物

下層遺構出土土器

SD3594出土土器（第84図　別表）

須恵器

蓋(1)　口径19.4cm。天井部と体部の境は明瞭で、縁部の屈曲は強い。外天井部回転ヘラ削り。

SK3587出土土器（第84図）

須恵器

高杯(2)　脚部のみ残存。脚裾部径14.0cm。外面に絞り目が顕著である。

SK3589出土土器（第84図　別表）

須恵器

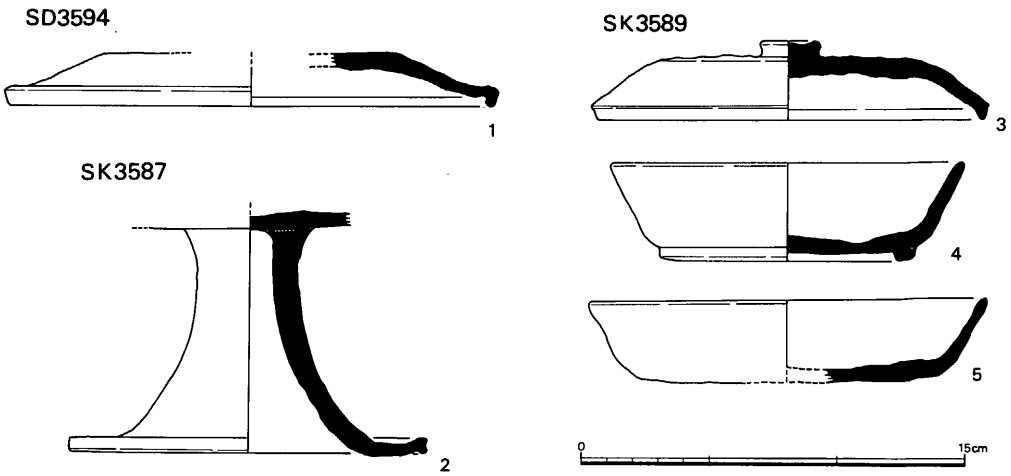
蓋(3)　口径15.2cm、器高3.1cm。縁部の屈曲は弱い。端部は断面三角形状。外天井部はヘラ切り離しのままである。

杯（4・5）　4は口径13.8cm、高台径10.0cm、器高3.9cm。高台は低く底部と体部との境は削りを加える。外底部は切り離しのままである。5は口径15.6cm、底径11.6cm、器高3.2cm。体部と底部の境は丸みを帯びる。外底部はヘラ削り離しのままである。

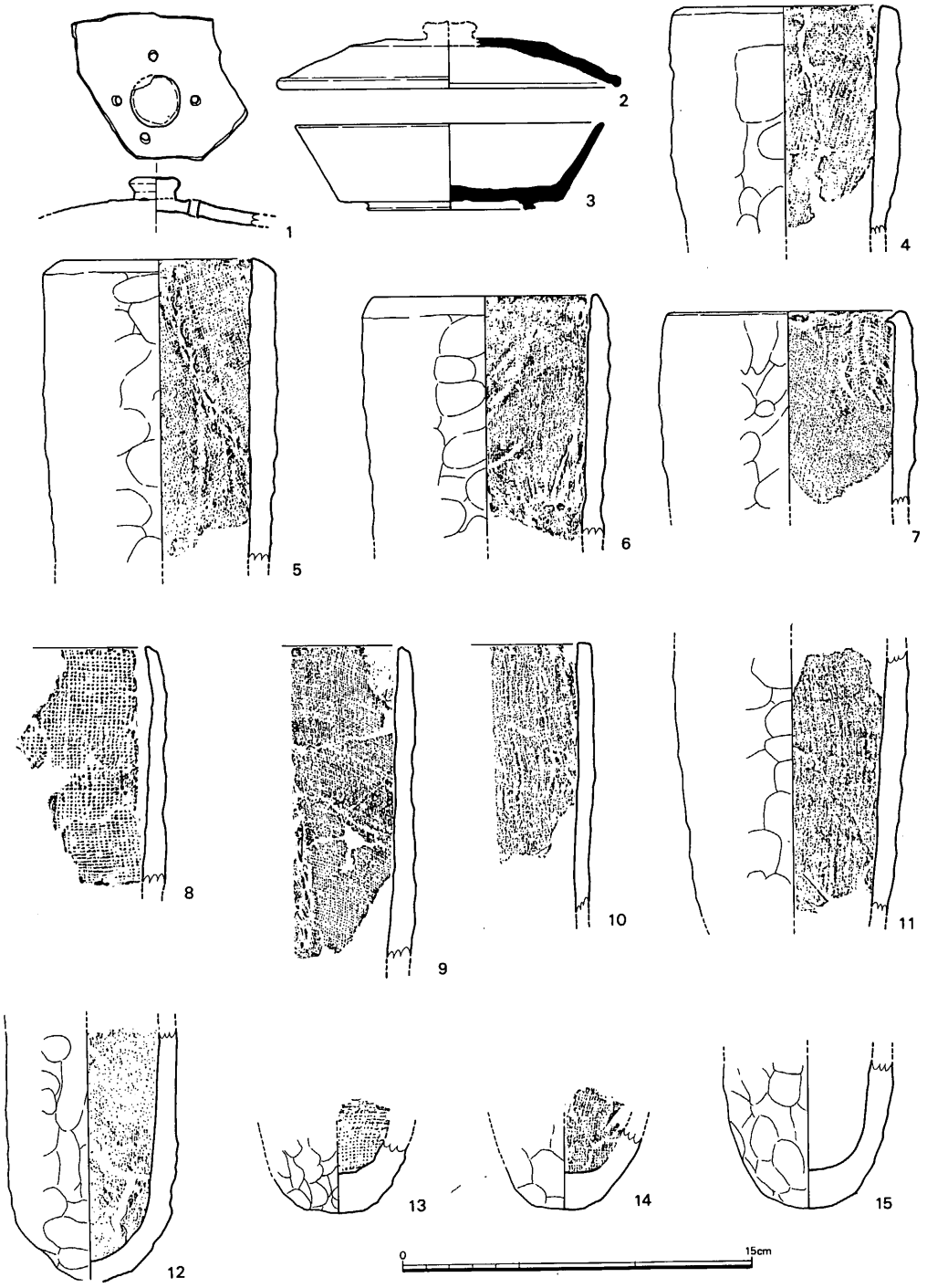
SX3600出土土器（第85図・図版84・85　別表）

土師器

蓋(1)　蓋の破片である。撮の周囲に径0.3cmの穿孔が4個ある。この孔は焼成前に施されたもので、当初からその用途を意図して製作されたことは明らかである。しかしながら、その用途



第84図　下層遺構SD3594・SK3587・SK3589出土土器実測図



第85図　下層遺構SX3600出土土器・塩壺実測図

については全形が不明であるため判断し難いが、香爐の蓋の可能性が考えられる。

須恵器

杯蓋(2)　復原口径14.8cmの杯蓋である。天井部はヘラ削り未調整で体部との境は余り明瞭でない。口縁の端部は丸味をもっている。

杯(3)　浅い杯部に低い高台を貼付する。復原口径13.2cm、器高3.7cm。内底はナデ調整する。

塩壺（4～15）　パンケースにして約7箱分が出土した。これまでの調査でこの様に多量、かつ、まとまって出土したのは今回が初めてである。現段階ではその全てについて整理、検討していないので詳細については今後に俟つとして、ここではその概略を記す。

4～11は口縁部および体部片であり、12～15は底部片である。いずれも胎土中には砂粒を多く含み、型造りで外面に指による押えの凹凸と内面には布目を有する。赤褐色で硬質に焼成されている。これらは布目の精・粗によって大きく3種に分かれる。すなわち、Ⓐ非常に粗いもの、Ⓑやゝ粗いもの、Ⓒ非常に細かいものに分けられる。Ⓐは8・13・14。Ⓑは5・7・9、Ⓒとしては4・6・10・11がある。

中層遺構出土土器

SK3576出土土器・陶磁器（第86図・図版85　別表）

土師器

皿a(1)　口径9.7cm、器高1.3cm。ヘラ切りで板状圧痕を有する。底部は凹凸が著しい。底部の中心には径0.5cmの穿孔がある。焼成前になされたものか。

丸底の杯（2・3）　口径14.9cm、器高3.4cm～3.6cm。内面にはミガキがある。

中国陶磁器

白磁

椀(4)　口縁部に断面三角形の玉縁を有するⅣ－1・b類。灰白色の釉は体部下位から底部にはかからない。

SK3593出土土器（第86図　別表）

土師器

皿a（5～7）　口径9.2cm～9.4cm、器高1.0cm～1.5cm。ヘラ切りで板状圧痕を有する。

丸底の杯(8)　口径15.2cm、器高3.4cm。内面をミガキ調整する。

瓦器

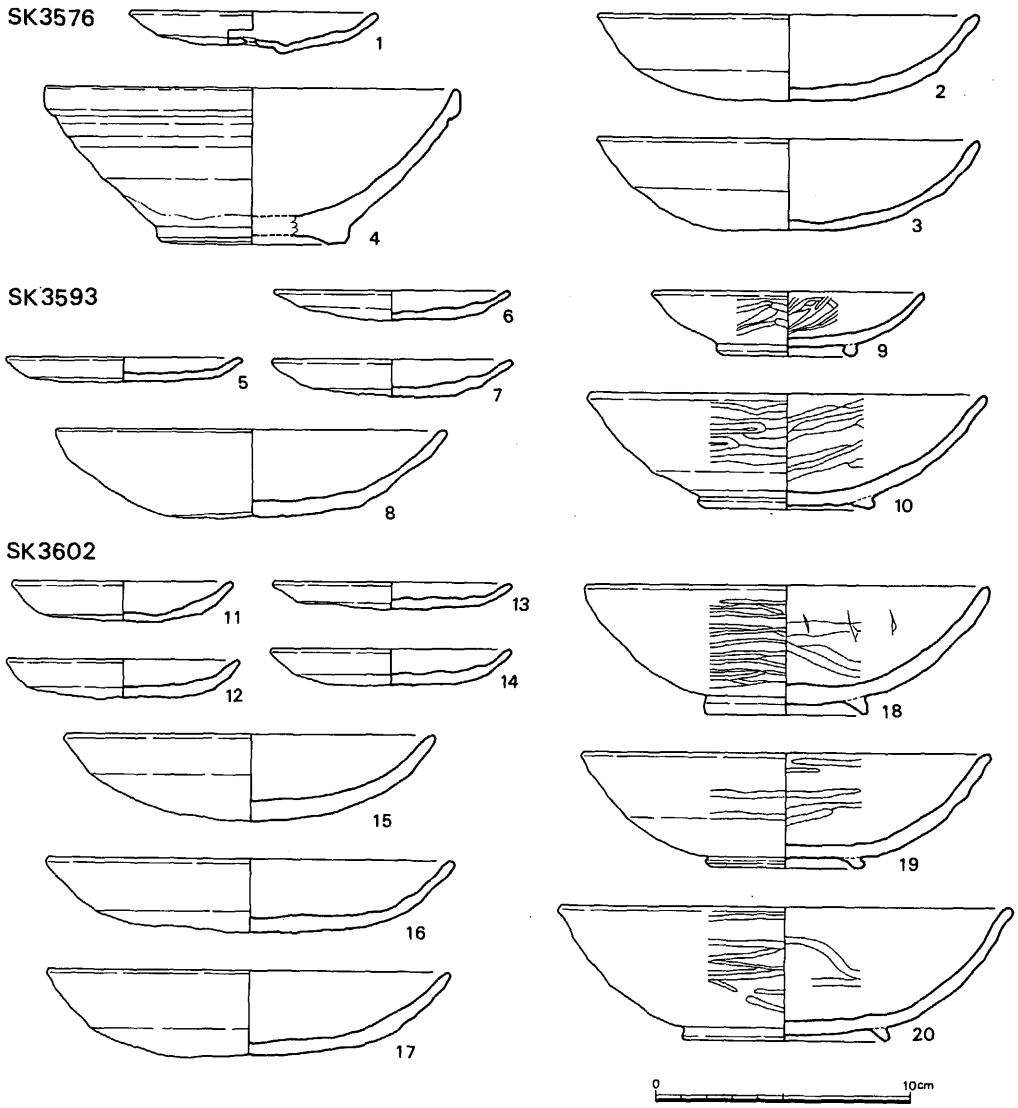
椀（9・10）　9は口径10.6cm、器高2.5cmの小形の椀であるが、器形は丸底風の皿形のものに高台を貼付したものである。内外面に粗いヘラミガキを施し、内面と外面の口縁部を黒灰色に燻す。10は口径15.6cm、器高4.5cmである。内外面に粗いヘラミガキを施し、外面と口縁部の内面を燻す。

SK3602出土土器（第86図　別表）

土師器

皿ａ（11～14）　口径8.6cm～9.5cm、器高1.1cm～1.6cm。全てヘラ切りで、11を除いて板状圧痕を有する。

丸底の杯（15～17）　口径14.4cm～15.9cm、器高2.9cm～3.5cm。内面にミガキを施す。



第86図　中層遺構SK3576・3593・3602出土土器・陶磁器実測図

瓦器

椀（18～20）　口径15.8cm～17.8cm、器高5.1cm～5.3cm。いずれも体部の内外面を粗いヘラミガキするが、18には内面にヘラ先の当り痕がある。19は内面と口縁部外面、20は口縁部の内外面にそれぞれ燻しがある。

上層遺構出土土器

SE3570出土土器・陶磁器（第87図・図版85　別表）

土師器

皿ｂ（１・２）　口径6.4cm～7.3cm、器高1.7cm。糸切りである。

杯ａ(3)　口径12.4cm、器高2.7cm。糸切りである。

中国陶磁器

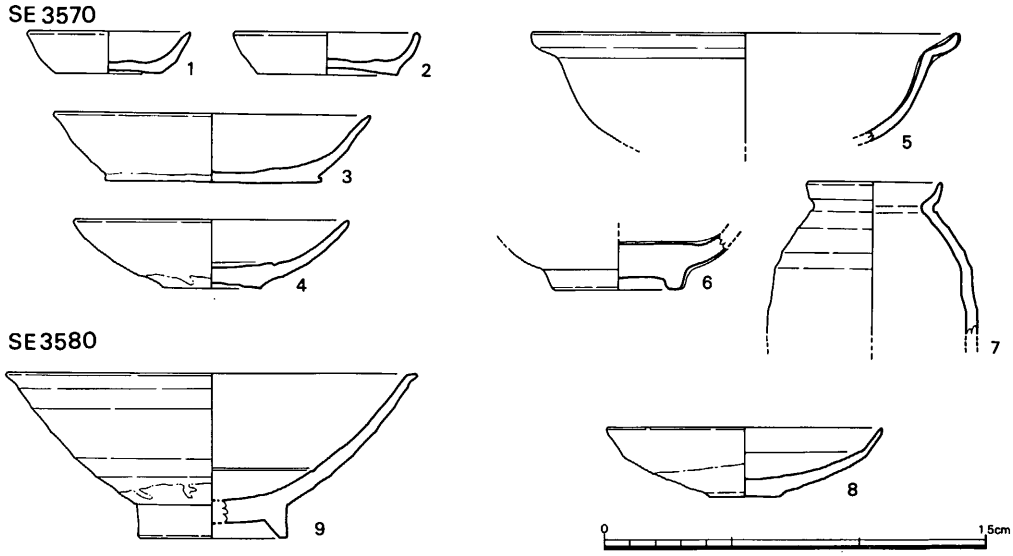
白磁

皿(4)　やゝ灰色味のある白色の胎にやゝ黄白色釉をかける。外面の体部下位と底部は露胎である。

青磁

椀（５・６）　５は丸味をもつ体部と「く」字状に屈曲外反させる口縁部を有する。白色の胎にやゝ厚目に灰緑色釉を施す。６は龍泉窯系椀Ｉ類の底部片である。

陶器



第87図　SE3570・3580出土土器・陶磁器実測図

壺(7)　口頸部を「く」字状に屈曲外反させる小形の壺片である。灰白色の胎に灰色味のある緑色釉をうすくかける。体部の内面は露胎となる。

SE3580出土陶磁器（第87図）

中国陶磁器

白磁

皿(8)　灰白色のやゝ粗い胎に黄白色釉をかける平底のⅥ－１・a類である。外面体部下位から底部は露胎。

椀(9)　細く高い高台をもつⅤ－３・c類である。白色の胎に透明性のある白色釉をかける。外面体部下位から底部は露胎とする。

その他の遺構出土土器・陶磁器（第88図・図版85　別表）

須恵器

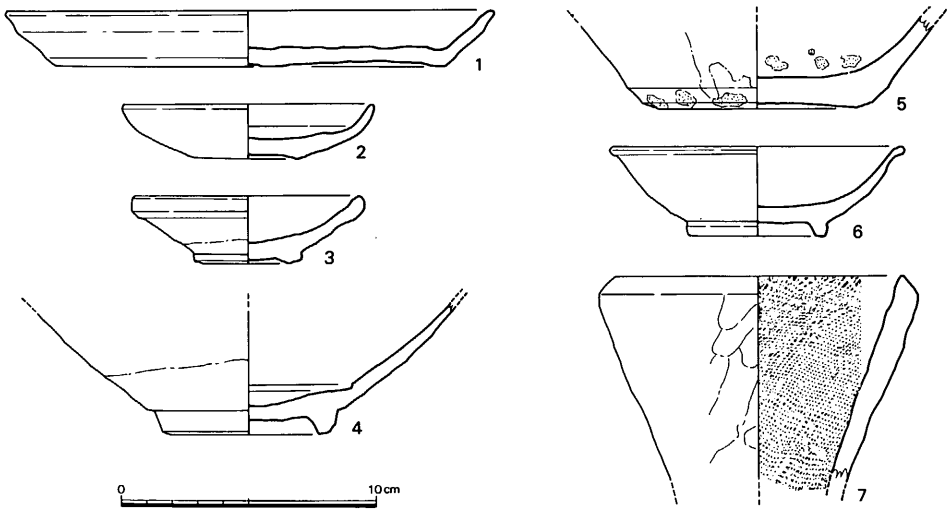
皿(1)　口径19.2cm、器高2.2cmの大形に類する。内外面横ナデで、底部はヘラ切り未調整。SX3581出土。

中国陶磁器

白磁

皿（２・３）　体部中位を屈曲気味に内弯させるⅧ類である。この類には見込みに花文を施すものが多いが、これは無文である。灰白色の胎に白濁釉を厚目に施す。SX3597出土。３は口縁部を玉縁状に肥厚させるⅡ－２類。外面体部下半から底部を露胎とする。SX3581出土。

椀(4)　内面見込を輪状に釉カキ取りするⅧ類。白色の胎に灰白色の釉をかける。外面体部下



第88図　その他の遺構出土土器・陶磁器・塩壺実測図

位と底部は露胎。SX3581出土。

青磁

椀(5)　越州窯系のII－3類。白化粧土をかけその上にやゝ黄色味のある緑色釉を施すが、風化が著しく当初の釉調はない。内面と外面の体部下端の露胎部分に目跡を残す。SX3581出土。

朝鮮製陶磁器

椀(6)　口縁端部を丸くする小形の椀である。淡灰色の胎は砂粒を多く含む粗いもので、内外面の全面に濃緑色の釉を施す。内面に目跡2個が破片中にある。SX3603出土。

土師質土製品

塩壺(7)　内面に粗い布目を有する型造りの焼塩壺である。外面は指おさえによる凹凸があり、口縁部は三角形状に端部を薄くする。

黄褐色整地層出土土器・土師器（第89図・図版86　別表）

須恵器

杯（1・2）　高台付杯である。ヨコナデ・ナデ調整で、外傾する体部・口縁部は直線的である。

壺(3)　短頸の壺である。底部と体部との境界が不明瞭で、ほぼ球形を呈する。体部の内外面をヨコナデし、外面の底部は回転ヘラ削り調整する。胎土には若干砂粒を含み、焼成良好な土器である。

甕(4)　外反させる口縁部は断面四角で端部近くに小さな凸帯を巡らす。この凸帯の下位には凸帯に平行に「□賀□」のヘラ書の陰刻文字がある。文字は深く、力強く刻まれ、達筆である。近年、大宰府および牛頸窯跡群等の周辺遺跡の調査で、ヘラ書き印刻文字の資料が増加しており、その資料の多くは郡・郷名を記したものである。今回、出土の破片からは3文字が認められ、中央の「賀」は明瞭であるものの、その前後の文字は一部のみで判読できない。仮にこれを郡・郷名として大宰府管内にこれを求めると、「遠賀郡（筑前）」「那賀郡（日向）」「周賀郷（肥前）」「那賀郷（壱岐）」「賀周郷（肥前）」「賀駄郷（筑後）」があるが、前・後に残った文字の一部から判断すると先の郡・郷名はいずれも該当しない。また人名等の可能性もあり、今後さらに検討を加えたい。

中国陶磁器

青磁

椀（5・6）　越州窯系で、5は「蛇ノ目」高台を有する通例のものでI類である。淡灰白色の緻密な胎にやゝ黄色味がかった緑色釉を施す。高台畳付は露胎状にし、目跡8個が破片中にある。6はII類で、やゝ粗い胎に黄緑釉を施す。内底と外底に目跡がある。

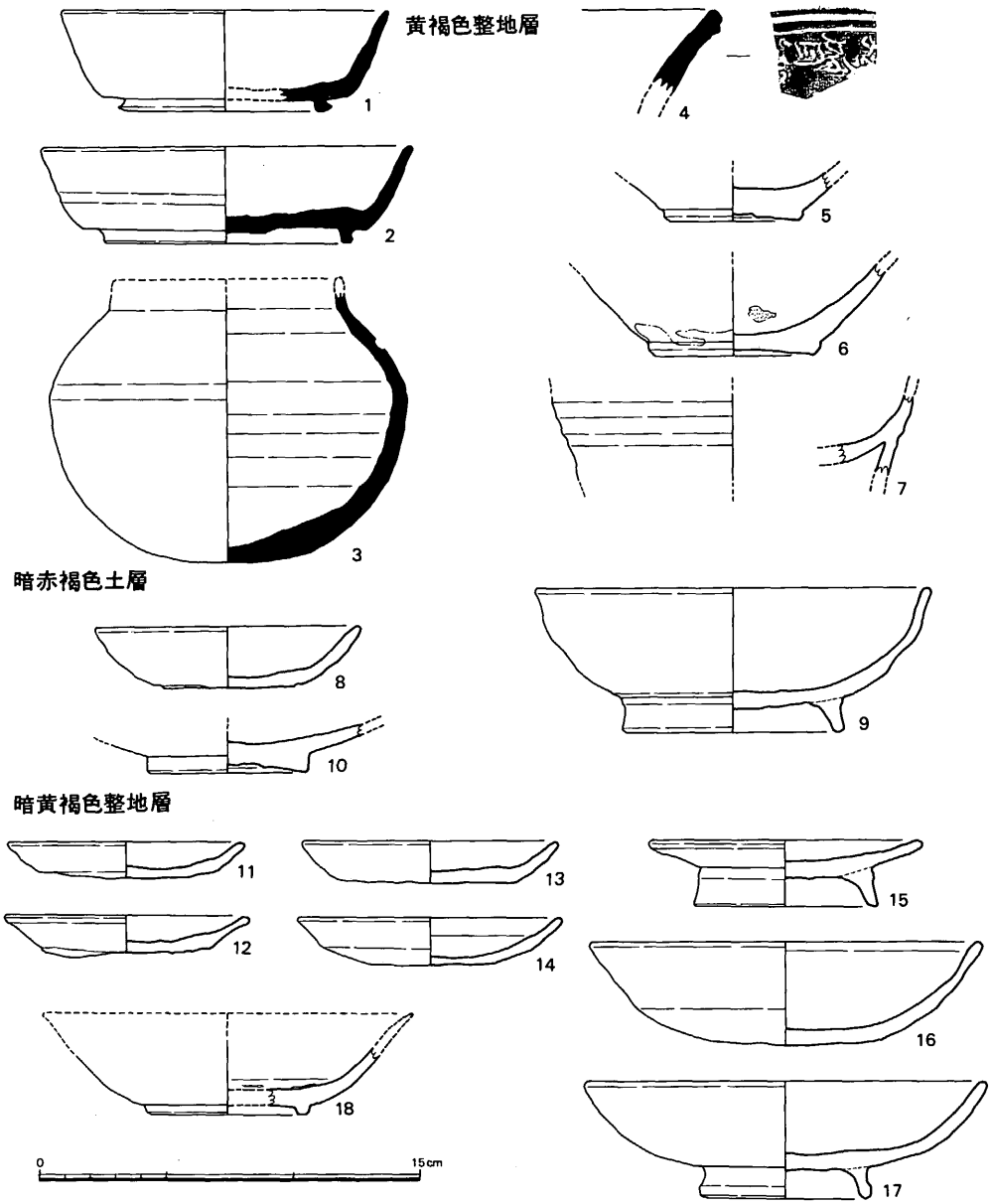
香爐(7)　灰白色の胎にくすんだ緑色の釉を施す。破片には全面に施釉されており、胎土・釉調から越州窯系の香爐として今回は報告する。

暗赤褐色土層出土土器・陶器（第89図・図版86　別表）

土師器

杯(8)　口径10.4cm、器高2.4cm。底部はヘラ切りである。

椀(9)　口径15.6cm、器高5.7cm。体部は丸味をもち口縁部はやゝ外返気味に直上にのびる。高



第89図　黄褐色整地層・暗赤褐色土層・暗黄褐色整地層出土土器・陶磁器実測図

台は高く開いている。

緑釉陶器

椀(10)　「蛇ノ目」高台の椀ないし皿の底部片とみられるが、ここでは椀とした。釉が剝落したためか、全く施釉の痕跡はみられない。内面および外面の体部はヘラミガキされている。

暗黄褐色整地層出土土器・陶磁器（第89図　別表）

土師器

皿ａ（11～14）　口径9.3cm～10.4cm、器高1.5cm～1.9cm。ヘラ切りで板状圧痕を有する。

皿ｃ(15)　口径10.8cm、器高2.6cm。皿部に比較して高い高台を有する。底部にはヘラ切り痕を残す。

丸底の杯(16)　口径15.4cm、器高4.1cm。底部の押し出しは大きく、丸味も半円状となる。内面にはミガキを施す。

椀(17)　丸底の杯に高台を貼付したものである。内面にはミガキを施す。口径15.8cm、器高4.7cm。

中国陶磁器

青磁

椀(18)　全面施釉の輪状高台を有する越州窯系Ｉ－２類。内面と高台畳付に目跡を残す。

黒色土層出土土器・陶磁器（第90図・図版86　別表）

土師器

皿ａ（１～６）　１～３は糸切り、４～６はヘラ切りである。１～３は口径8.7cm～9.0cm、器高1.1cm。４～６は口径9.0cm～9.4cm、器高1.5cm～1.6cm。板状圧痕をもつ。

杯ａ（７・８）　口径15.4cm～16.2cm、器高3.0cm～3.1cm。糸切りで、板状圧痕を有する。

瓦器

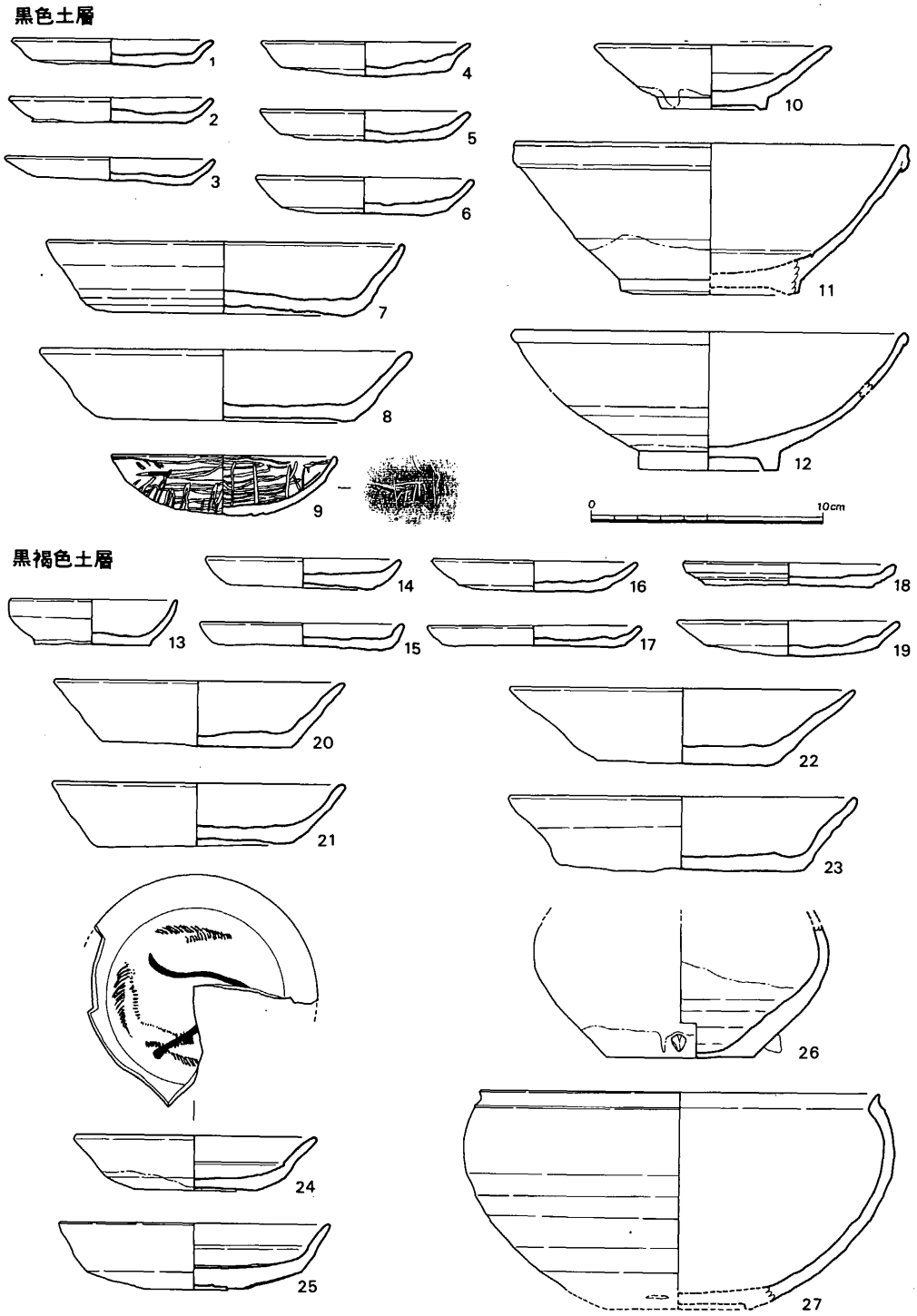
皿(9)　口径9.7cm、器高2.7cmの丸底になった皿である。内外面には粗いが格子状のヘラミガキが施される。全面に燻しがあり、黒灰色を呈する。外面の底部と体部の境い付近にヘラ書きによる印刻の文字様のものがある。

中国陶磁器

白磁

皿(10)　低い高台を有し、内面に段をもつII－１類である。白色の胎に灰色味の白色釉をかける。体部下位および底部は露胎。

椀（11・12）　11は口縁部三角形状の玉縁を有するⅣ－１・a類。12は図上完形品で、口縁部に小さな玉縁を有するII－１類。やゝ黄色味のある白色釉をかけ、外面の体部下位と底部を露胎とする。



第90図　黒色土層・黒褐色土層出土土器・陶磁器実測図

黒褐色土層出土土器・陶磁器（第90図・図版86　別表）

土師器

皿ａ（14～19）　14～18は糸切り、19はヘラ切りである。14～18は口径8.4cm～9.2cm、器高1.0cm～1.4cm。底部に板状圧痕を有する。19は口径9.6cm、器高1.5cm。

皿ｂ⒀　口径7.2cm、器高2.0cm。糸切りで板状圧痕を有する。

杯ａ（20～23）　口径12.5cm～12.6cm、器高2.8cm～2.9cmの20・21と口径15.0cm、器高3.2cm～3.3cmの二種がある。22は口径に比して底径が小さい。いずれも糸切りで、22・23には板状圧痕を有する。

中国陶磁器

青磁

皿（24・25）　24は内面にヘラと櫛状工具により施文する同安窯系のＩ－１・b類。25は龍泉窯系で無文である。緑色釉は厚目に施され、底部は露胎。

青白磁

水注（26）　白色の緻密な胎に、青味のある白濁釉を施す。全形は不明であるが、水注と考えた。体部の下位から底部は露胎で、内面も体部下半以下は露胎となる。体部の下位に小さな突起状のものが１個破片中にみられるが、意識的に貼付されたものであるかは定かでない。

褐釉陶器

鉢（27）　赤茶色の緻密な胎に白化粧土をかけ、その上に茶褐色釉を全面に施す。底部は欠失しているが類例から碁笥底の底部と考えられる。体部下位に重ね痕がある。

茶灰色土層出土土器（第91図・図版87　別表）

土師器

皿ａ（７～10）　口径9.0cm～9.2cm、器高0.8cm～1.2cm。ヘラ切りで９を除いて板状圧痕を有す。

皿ｂ（１～６）　口径7.2cm～7.8cm、器高1.6cm～2.4cm。糸切りで2・3には板状圧痕がある。

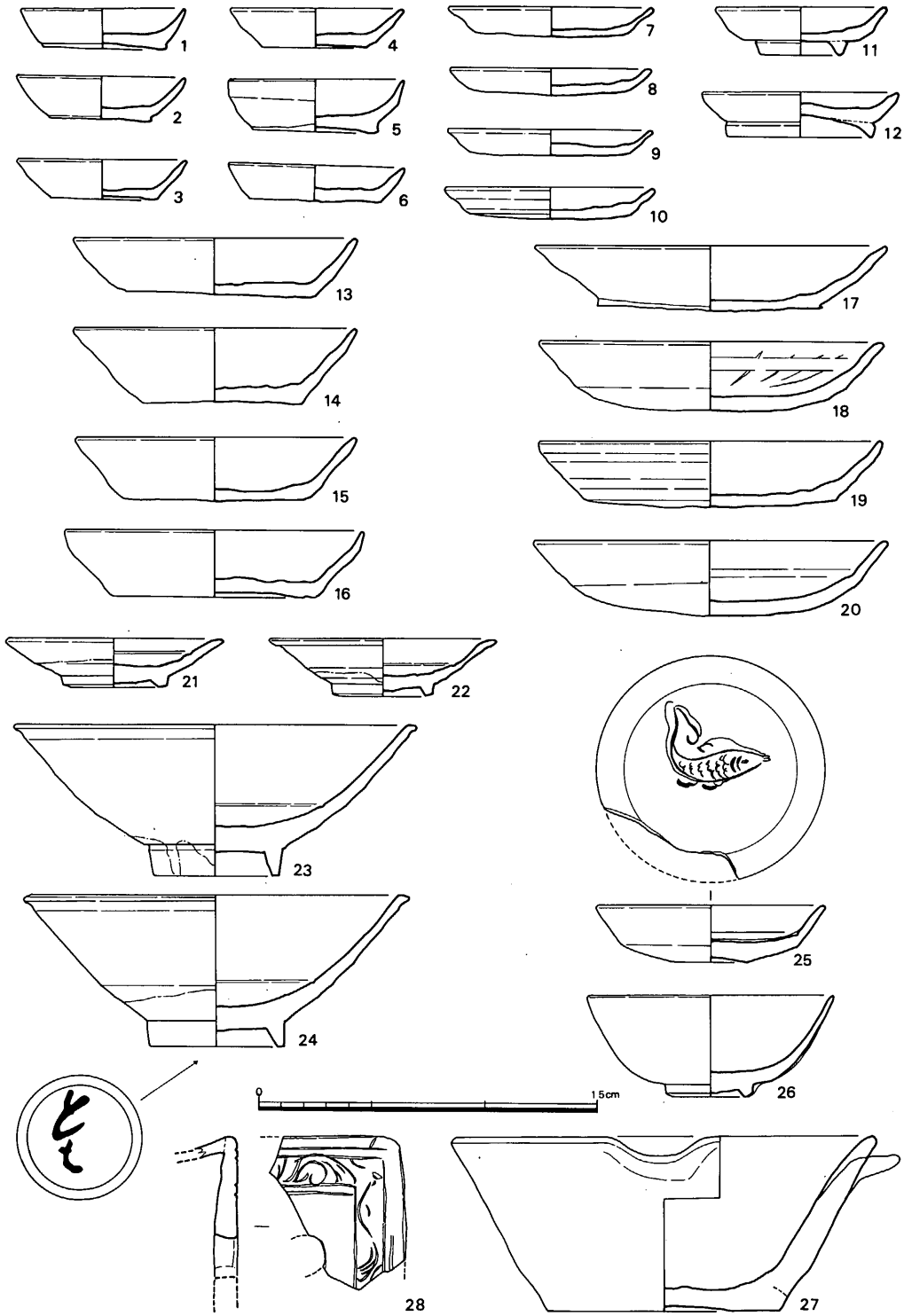
皿ｃ（11・12）　口径7.6cm～8.6cm、器高2.0cm～2.2cmである。

杯ａ（13～17）　口径12.5cm～13.2cm、器高2.6cm～3.4cmの13～16と口径15.6cm、器高2.9cmの17がある。全て糸切りで、14を除いて板状圧痕を有する。

丸底の杯（18～20）　口径15.2cm～15.7cm、、器高2.9cm～3.3cm。内面はミガキを施し、18にはコテ当て痕がある。

須恵質土器

鉢（27）　復原口径18.8cm、器高7.8cmの片口の鉢である。胎土には砂粒を多く含む。暗灰色を呈するが、いわゆる東播系のものとは全く異なる。全体はヨコナデ・ナデ調整で外底は未調整である。



第91図　茶灰色土層出土土器・陶磁器実測図

中国陶磁器

白磁

皿（21・22）　内面の見込みを輪状に釉カキ取りするⅢ類である。

椀（23・24）　口縁端部を平坦にし、細く高い高台のⅤ類である。灰色味を帯びた白色釉をうすく施す。23は高台部まで釉が垂下している。23の高台内には「とと」と判読できるひらカナの墨書がある。

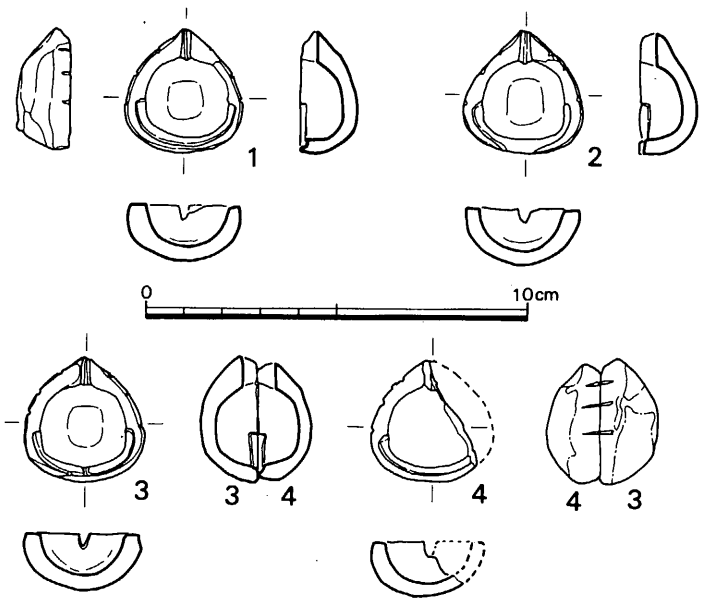
青磁

皿（25）　灰色の胎に灰色味のある透明性の緑色釉をやゝ厚めに施す。外底は露胎で茶灰色に発色している。龍泉窯系のⅠ類である。

椀(26)　龍泉窯系の椀Ⅰ－1類の小椀である。灰白色の胎に透明性のある灰緑色の釉がやゝ厚めにかかる。高台畳付から底部は露胎となる。

高麗青磁

陶枕（28）　陶枕とみられる小破片である。本片は一部上面部が残っていることから、陶枕の側面部の破片と思われる。周縁に沿って二重の画線が細く彫られ、その間には唐草文が配される。この彫り込まれた画線と唐草文には本来、黒ないし白の象嵌を施すものであろうが、本片にはその痕跡はない。また、丸味のある透しが一部残っているが形状については不明である。内外面の全面に灰緑色の釉がかかるが、白く風化した状況を呈する。



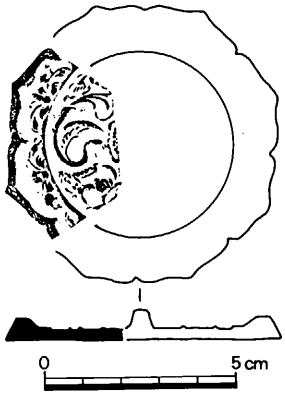
第92図　鈴鋳型実測図

鋳型（第92図・図版88）

鈴　1～4はいずれも木型に真土を貼り付けた後、同じ原型からつくられた鋳型外型である。左右対となり、このうち3・4は合い印が一致することから同一個体と思われる。下端部は口となる段を設ける。3は中央付根は階段状に中子とつながる。上端には鈕となる深い溝が切られている。おそらくは湯口を兼ねるものであろう。

八稜鏡（第93図・図版88）

径7.6cmに復原できる八稜鏡の破片で、全体の約¼程度が残存する。鈕を欠失しているため径については必ずしも正確ではない。縁は余り高くなく、上面はわずかに内傾する。鳳凰様の鳥と瑞花をもち、鈕の周囲には蓮華文を配する。鏡面厚0.3cm、縁厚0.6cmで、平安中・後期の遺物と共伴する。栃木県男体山々頂遺跡出土の瑞花双鸞八稜鏡に文様は類似しており、これは平安前期に年代が位置付けられている。（「古鏡の美－出土鏡を中心に－」福井県立博物館第5回特別展図録1986）

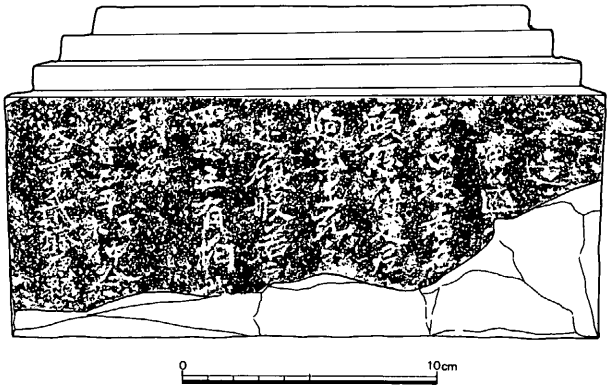


第93図　八稜鏡拓影・実測図

宝篋印塔（第94図・図版88）

宝篋印塔の基礎石（台座）である。4つの段を設けているが、周縁は面取りをせずそのままである。最下段はほぼ正方形で31.2×31.7cmであり、頂部までの高さは17.3cmである。凝灰岩製で、側面および上面は面を平滑にするが、底面は打ち欠いたままの未調整である。一面には銘文がノミで印刻されているが、風化が著しく、また、欠失した個所もあり判読困難なところもある。

銘文から、これが顕慈禅定居士を供養するために造立された宝篋印塔であった事がわかる。1行目の「奉造□」の欠失した部分は「立」でほぼ間違いなく、2行目の「宝篋」に続く文字は「印塔」の可能性が強い。3行



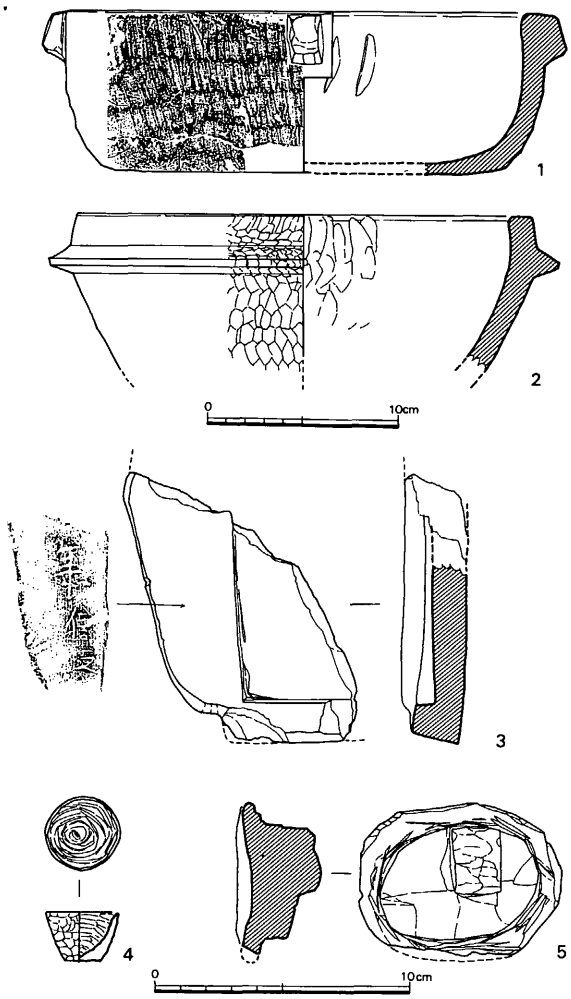
第94図　宝篋印塔基礎石拓影・実測図

目の「右志趣者為」の下に１字存するのかについては不明である。６行目の「速履般若□」の最後の１字は「之」の可能性が強い。７行目の「四恩三有□□」の「有」に続く１字は「拘」と読むこともできる。８行目は他の文字よりやゝ大きく、２文字が認められるものの風化が著しく判読できないが、前文とは連続せず、後の文と関連するものと考えられる。９行目は「□□□丁未仲冬」とやゝ小さ目に刻されており、明瞭でないが字形から「峠正平」と判読できる。正平は南朝年号で丁未は正平22年となり、西暦1367年である。10行目は願主すなわち造立者名で「大宰府少貳藤原頼□」である。この時期に該当する少貳氏で「頼」の字を有する人物として、６代頼尚と８代頼澄がいる。頼尚は歴代の中でも、とりわけ勇猛果敢な武将として知られた人物である。彼は応安４年（1371）年に没している。また、頼澄は頼尚の子であるが、７代冬資と兄弟関係にあるものの必ずしもその関係は詳らかでないところも多い。頼澄は南朝方についており、残した年号も南朝年号である。正平は南朝年号であることからすると、建立者は頼澄である可能性が大きい。黒褐色土層出土。

奉造□立カ
宝篋□
右志趣者為
顕慈禅定居士
迥出生死之
速履般若□之カ
四恩三有□拘□
□
□
□峠
□正
□平カ
釘仲冬
大宰少貳藤原頼
□澄カ

滑石製品（第95図・図版88）

石鍋（１・２）　１は取手を有するもので、底径が大きく口縁部が直立して立ち上がる石鍋の古式タイプである。外面にノミ痕を残すが、内面はノミ痕を消す。灰黒色の石材を使用。２は体



第95図　滑石製品実測図

部が丸みを帯びるもので、鍔を有す。外面に細かいノミ痕が認められる。灰褐色の石材を使用する。ともに茶褐色土層より出土。

硯(3)　石鍋残片を用いてつくったもので、硯尻部が遺存する。全形を知り得ないが、残存する側面、硯尻端面をみるかぎり、全体は不整形であったと思われる。ただ、硯面は台形状に頭部へ向かってやや開き気味か。縁部は硯尻で0.8cmの高さをはかるが、側面をみるかぎり上面の高さは一定ではない。その縁部上面に「年信之」と銘文が刻まれる。裏面と硯尻端面は削り調整、その他は平滑にする。茶灰色土層出土。

容器(4)　小形のもので口径2.9cm、底径1.4cm、器高1.9cmをはかる。内面は螺旋状に底部まで削っているため、断面V字となる。底部外面は平滑である。黒褐色土層出土。

スタンプ状製品(5)　石鍋の再利用品。全形を亀甲状に近く整えたもので、取手を鈕として利用する。周縁部をさらに削って薄くする。裏面は石鍋のカーブがそのまま残っており内弯している。表面に煤付着。長径7.9cm、高さ3.3cm。SK3593出土。

小結

今回の調査では、奈良期、平安後期、中世前期の各期の遺構を検出したが、特に顕著な遺構は検出していない。ただ、遺構のまとまりや整地層との対応関係からこの地の旧地形をある程度追求することができる。奈良・平安前期に限ってみると、調査区の北西から南東へ斜めに走るSD3605より以東ではこの期の遺構は見いだせず発掘区南側に集中しており、また、下層整地層（暗黄褐色整地層）もこの溝より以東には広がっていない。そうしてみると、この溝は、北から派生する丘陵の裾近くを流れていた流路である可能性が高く、これより以東は当時開墾されていなかったようで、丘陵がすぐ迫っていたのかも知れない。その後は、少なくとも13世紀頃までには、SD3573付近まで開墾されているようである。

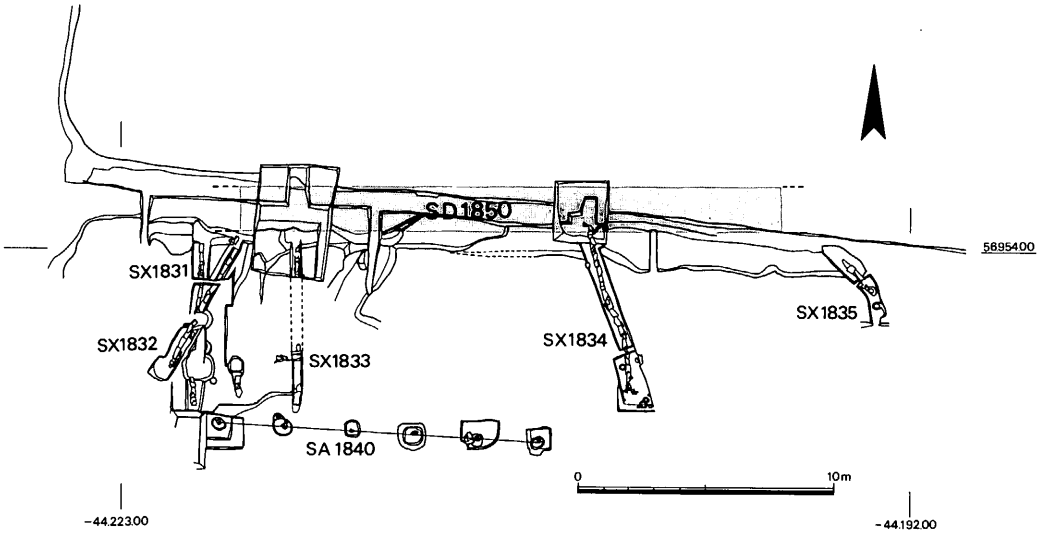
次に、今回の調査の主目的である北面築地について言及しておく。

北面築地推定ラインはかりに現南大門礎石が当初の位置を保っていたとして、観世音寺資財帳に記載された65丈（195m）を現南大門礎石の位置から北へとると、発掘区の北半部分にあたる。しかし、付近のみならず発掘区全域でも築地基壇痕跡や、雨落ち溝等の遺構は見いだせなかった。また、前述したように旧地形を考慮すると、築地をおく余地はなかったようである。したがって、今回の調査の結果では、築地はさらに南に構築されていた可能性が考えられる。

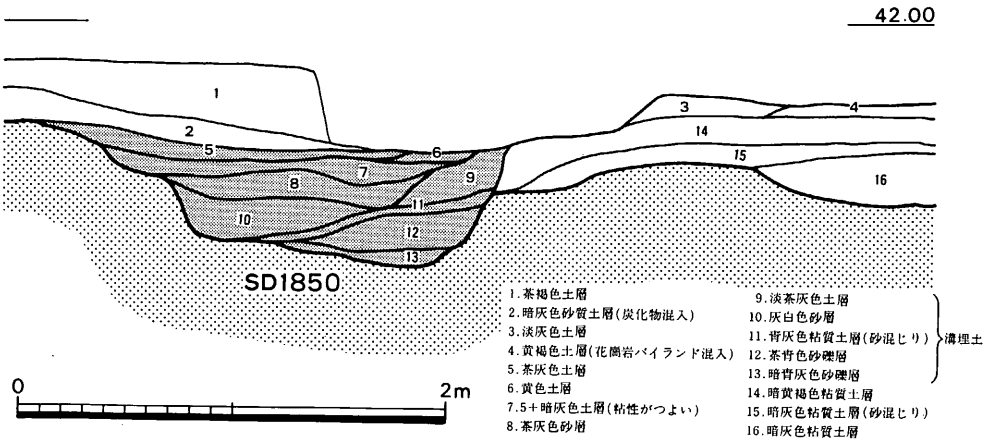
また、SX3600から多量の製塩土器（焼塩壺）が出土し、隣接する第70次調査の溝SD1830からも多量に見つかっている。観余地音寺へ焼塩壺のまま遠地から運ばれて来た後、この付近で堅塩が取り出され、廃棄されたものとすれば、この付近に厨的性格の施設が考えられる。そうして施設は主要伽藍を囲む築地外に置かれていたことがと予想され、前述の傍証となり得るところかもしれない。

第70次補足調査

第120次の補足調査で、最下層の整地層がさらに南側へ広がっていることが判明し、同時に東西溝と思われる段落ちをその整地層除去後検出した。先に南側で実施した第70次調査では発掘区北端で、東西溝SD1850を検出したが、その南岸を確認しただけである。そこで両地区での遺



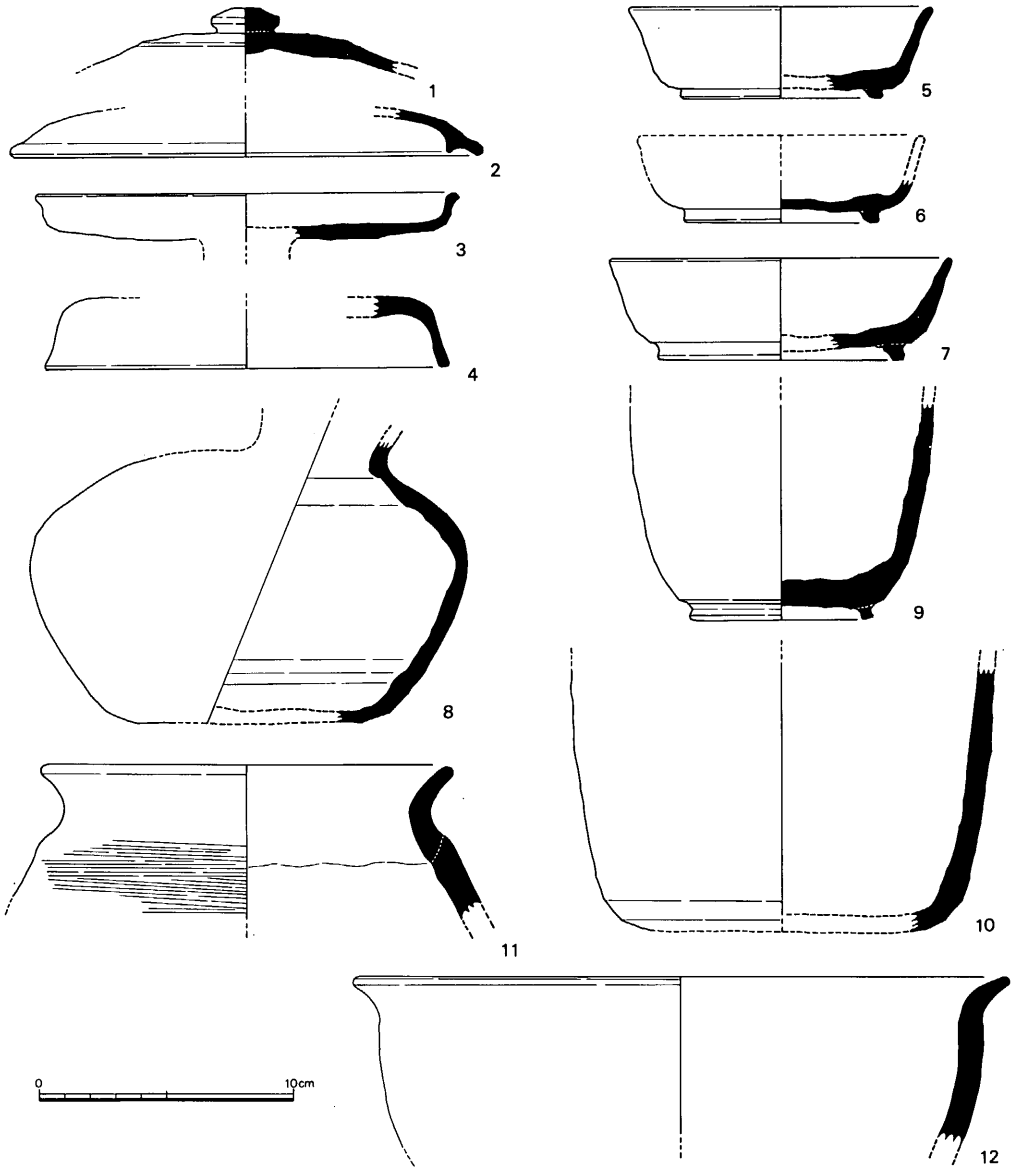
第96図　第70次補足調査遺構配置図



第97図　SD1850土層断面図

構が互いにどのような関係にあるのか、詳しく検討する必要から、第70次調査で民家の塀の保護の為発掘を留めておいた未掘部分にトレンチを設定することにした。

トレンチは、第70次調査で検出した暗渠遺構との関連もさぐる為、暗渠遺構にかかる部分を選んで東と西に２本設定した。



第98図　SD1850出土土器実測図

検出遺構

溝

SD1850　西トレンチでも第120次調査と同じく黄褐色整地土の下層から検出した。第70次調査検出のSD1830下層にあたる。東トレンチでは南岸のみ検出。西トレンチで溝幅2.2m、深さ0.65m、下層は砂礫層、上層には粘質土が堆積している。下層から土器片多数出土。

出土遺物

SD1850出土土器（第98図・図版89）

須恵器

蓋（1・2・4）　1は外天井部が回転ヘラ削りである。2は身受けの返りを有し、返りは口縁端面を超えてはいない。4は壺蓋、天井部に回転ヘラ削りを加える。口径16.0cm。

杯（5～7）　高台は外底部周縁よりやや内側に貼付され、外底部は回転ヘラ削りを施す。底部周縁は丸味を帯びる。

高杯(3)　杯部の立ち上りは高く、縁部は外方に肥厚気味である。口径16.6cm。

壺（8～10）　8は平瓶。体部最下位に手持ちヘラ削りを施す。9・10の体部下半は回転ヘラ削りである。10の内面には漆が付着する。

甕（11・12）　11は口径16.2cm。同時期の土師器甕と似た形態で、外面も叩き後、粗い横方向の刷毛目を施す。内面の当具痕はナデ消す。

小結

今回の補足調査は、第120次調査に引き続いて、再度築地遺構の手がかりを得るために実施したものである。ここでは第120次調査の所見と照らしながら簡単にまとめてみたい。

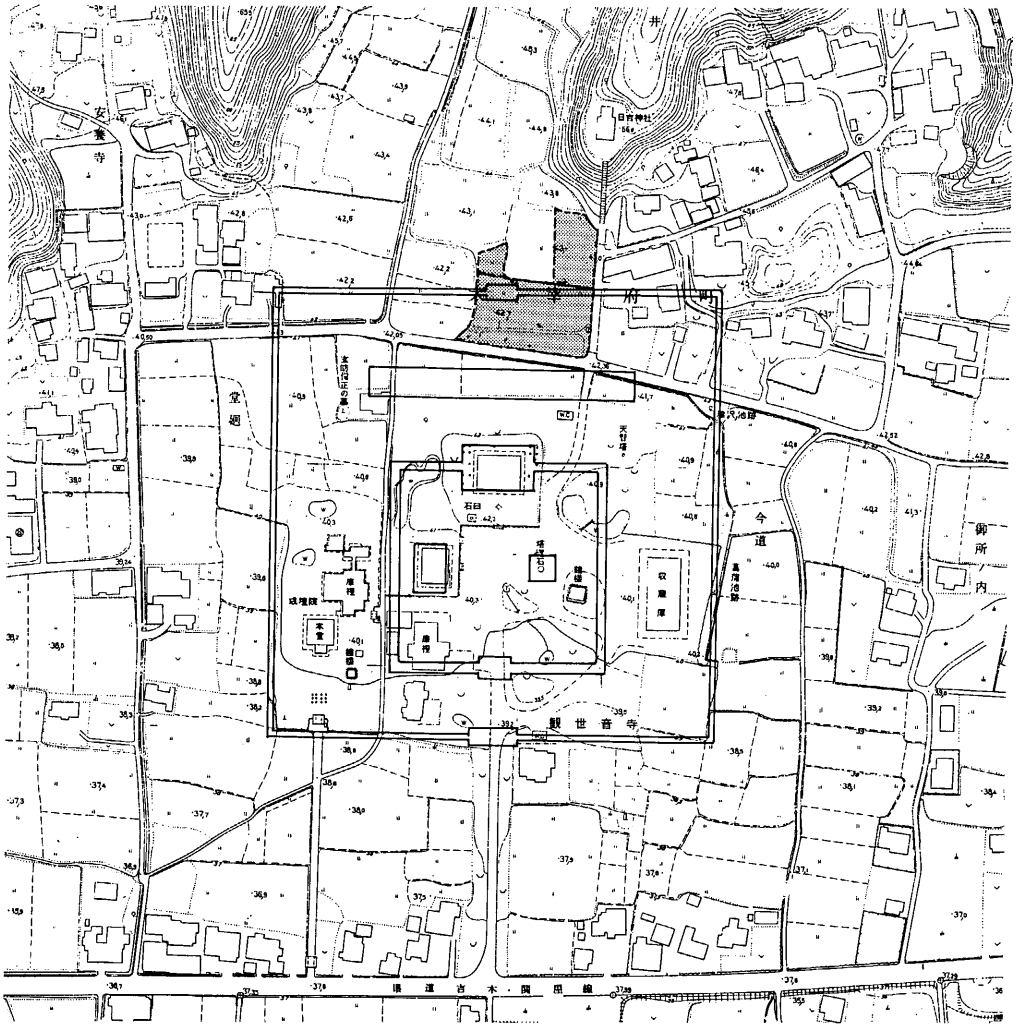
今回、検出した東西溝SD1850の溝幅と消長年代を把握することができた。溝幅はその北肩を第120次調査の私道部分にいれたトレンチでも確認しているため、今回と合わせ2ケ所での判断であるが、約2m前後である。溝の方位は、現状では講堂礎石と同様に1°近く東偏する。

次に溝の消長時期についてふれてみると、溝中から出土した土器は8世紀半ばを降らないものであった。また、第120次調査の南端から広がる8世紀後半代の整地層が、溝の上部を覆っている。溝の掘削時期は明らかにしえないが、少なくとも8世紀後半までは存続していたとみなすことができる。整地後は、SD1830として同位置に改修されている。したがって、SD1830・1850は同一機能を果たしていたと思われる。

また、南側の濁茶色整地層中にあって、この溝に接続した数条の暗渠施設は、2度改修が行われており、溝の改修に対応するものであろう。今回この暗渠におかれた整地層を掘り下げてみたところ、わずかだが、版築状に粘質土と砂層が、互層をなしていることを確認した。なお、

この数条の暗渠施設は長さが6.5m前後で、暗渠を設けた部分は、後に9世紀中頃の土壙が堀込まれる以前は土壙等の遺構が存在せず、幅6m程のベルト状に空白地帯となっている。

こうしたことから、東西溝SD1830と数条の暗渠施設の性格は、第120次の調査結果と合わせてみた時、観世音寺北面築地と深く関わる遺構である可能性が一段と高くなったといえよう。ただ、延喜五年の資財帳からの北面築地推定ラインより、南へ約20m近くのずれを生じることになり問題が残る。第99図は南面築地が現在の推定ラインとした場合での主要伽藍配置図である。いまだ現時点に於いては南大門、南面築地が確定しておらず、最終的な解決は将来に譲ることにする。



第99図　観世音寺伽藍配置想定図

別　表

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
SD3333（第115次調査）								
土師器　皿a								
1	2	8.2	7.3	1.0		○	○	○
皿b								
1	1	6.4	4.5	1.5		○	○	○
杯a								
1	3	12.0	8.3	3.1		○		○
2	4	12.8	9.2	3.0		○	○	○
SD3334								
杯a								
1	7	12.0	7.4	2.8		○	○	○
2	8	12.0	7.0	2.7		○	○	○
3	9	12.0	6.7	2.5		○	○	○
4	10	(12.4)	8.1	3.0		○	○	○
5	11	12.4	7.3	3.0		○	○	○
SD3336								
土師器　皿a								
1	13	8.2	6.2	1.3		○	○	
2	14	8.3	6.3	1.2		○	○	○
杯a								
1	15	(11.8)	(8.2)	2.7		○	○	○
2	16	(11.8)	(7.6)	2.9		○	○	○
3	17	11.8	7.8	2.4		○	○	○
4	18	(12.0)	(8.0)	3.0		○	○	○
5	19	12.0	7.8	2.5		○	○	○
6	20	(12.2)	(7.8)	2.5				
SE3350								
土師器　皿a								
1	23	7.9	6.2	1.5		○		
2	24	8.0	5.9	1.5		○	○	○
3	25	8.2	6.0	1.3		○	○	○
皿b								
1	22	(6.6)	4.3	2.0		○	○	○
杯a								
1	26	12.4	8.9	2.7		○		
2	27	12.6	8.5	2.8		○	○	○
黒質砂質土								
土師器　皿a								
1	1	7.8	6.0	2.4		○	○	○
2	2	8.0	5.8	1.7		○	○	○
3	3	8.0	5.9	1.0		○	○	○
4	4	8.9	6.1	1.1		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へラ	糸		
5	5	8.2	6.2	1.5		○	○	○
6	6	8.2	6.0	1.3		○	○	○
杯a								
1	7	11.8	7.6	2.8		○	○	○
2	8	11.8	7.9	3.0		○	○	○
3	9	12.0	8.0	2.6		○	○	○
4	10	12.1	7.5	2.9		○	○	○
5	11	12.4	7.4	3.0		○	○	○
6	12	12.5	8.1	2.7		○	○	○
7	13	12.5	8.2	3.0		○	○	○
8	14	12.5	8.3	2.7		○	○	○
9	15	12.6	8.5	2.8		○	○	○
10	16	12.6	8.5	2.8		○	○	○
11	17	12.8	7.5	2.9		○	○	○
12	18	12.8	8.1	2.8		○	○	○
13	19	12.8	8.7	3.0		○	○	○
14	20	12.8	8.9	2.8		○	○	○
15	21	12.8	9.0	2.5		○	○	○
16	22	13.0	7.4	2.9		○	○	○
17	23	13.0	9.1	2.6		○	○	○
18	24	13.0	9.3	2.7		○	○	○
19	25	13.0	9.0	2.6		○	○	○
茶褐色土層								
土師器　皿a								
1	29	7.6	5.3	1.4		○	○	○
2	30	7.8	6.0	1.3		○	○	○
皿b								
1	28	7.2	4.7	2.0		○	○	○
黒色粘質土層								
土師器　皿b								
1	1	7.0	4.8	1.8		○	○	○
杯a								
1	2	12.4	7.2	2.7		○	○	○
2	3	12.8	8.4	2.9		○	○	○
3	4	13.2	9.4	2.7		○	○	○
茶褐色粘質土層								
土師器　皿a								
1	5	(7.2)	(5.3)	1.3		○	○	○
2	6	8.0	5.0	1.3		○	○	○
皿b								
1	7	(6.4)	4.8	1.8		○	○	○
2	8	(7.3)	(5.0)	1.9		○	○	○
杯a								
1	9	12.0	7.8	2.7		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	10	12.2	7.5	2.9		○	○	
3	11	12.2	7.8	3.0		○	○	○
4	12	12.3	8.1	3.0		○	○	○
5	13	12.5	7.8	2.7		○	○	○
6	14	(12.6)	(7.4)	3.0		○	○	○
7	15	12.6	7.9	2.9		○	○	
8	16	12.7	8.0	2.8		○	○	○
9	17	13.2	7.7	3.4		○	○	○
10	18	(13.4)	(9.4)	2.8		○	○	○
SD3400（第117次調査）								
土師器　皿a								
1	3	9.8	7.8	1.2	○		○	○
2	4	10.3	7.3	1.8	○		○	○
3	5	11.2	8.0	1.9	○		○	○
4	6	11.2	7.5	2.4	○		○	○
5	7	11.4	7.2	2.7	○		○	○
皿c								
1	1	12.0	7.2	2.0	○		○	○
2	2	12.6	7.7	2.5	○		○	○
杯								
1	8	11.5		3.3	○		○	○
2	9	11.6		2.9	○		○	○
3	10	11.8		3.3	○		○	○
4	11	12.2		3.0	○		○	○
椀								
1	13	12.9	7.5	5.3	○			○
2	14	14.4	7.9	5.4	○		○	
3	15	14.6	7.9	5.6	○		○	
4	16	15.3	9.2	5.8	○			○
黒色土器B　皿								
1	17	11.5	7.6	2.7				
椀								
1	18	14.9	7.9	6.1				
2	19	16.8	9.0	7.6				
SD3430								
土師器　皿a								
1	1	9.6	6.8	1.5		○	○	○
2	2	9.5		1.2	○		○	○
3	9	9.5	6.4	2.0	○		○	○
4	3	9.7		1.2	○		○	○
5	4	9.8		1.5	○		○	○
6	5	9.8		1.4	○		○	○
7	6	9.9		1.1	○		○	○
8	7	10.2		1.4	○		○	○
皿c								

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ ラ	糸		
1	8	12.8	7.7	2.6	○		○	○
杯								
1	10	10.8	7.3	3.1	○		○	○
2	11	15.0	10.6	2.5	○		○	○
丸底の杯								
1	12	14.5		3.2		○	○	
2	13	15.2		3.9	○		○	
3	14	15.2		3.9	○			
4	15	15.4		3.0	○			○
椀								
1	16	12.4	7.2	4.9				
1	20	(20.0)						
黒色土器B　椀								
1	21		6.7					
瓦　器　皿								
1	22	9.9		1.9				○
2	23	11.2		2.2				
SD3440（下層）								
土師器　皿a								
1	1	9.0	6.2	1.2		○	○	○
2	2	9.5	7.2	1.5	○		○	○
3	3	9.5		1.3	○		○	
4	4	9.6		1.6	○		○	○
杯a								
1	5	14.8	10.7	2.4	○		○	○
2	6	15.1	8.8	3.0	○		○	○
3	7	15.6	9.4	2.9	○		○	○
杯c								
1	8	12.6	6.6	3.5		○		
丸底の杯								
1	9	15.4		3.1	○		○	○
2	10	15.7		3.4	○		○	
瓦　器　椀								
1	11	17.2	7.4	5.7				
（上層）								
土師器　皿a								
1	24	9.0	7.6	1.1		○	○	
2	25	9.1	7.9	1.2		○	○	○
3	26	9.0	7.0	1.0		○	○	○
4	27	9.1		1.5	○		○	○
5	28	9.1		1.1	○		○	○
6	29	9.2		1.5	○		○	○
7	30	9.4		1.4	○		○	○
8	31	9.7		1.5	○		○	○
9	32	10.2		1.9	○		○	

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
10	33	10.5		1.3	○		○	○
丸底の杯								
1	34	14.2		3.5	○			○
2	35	14.4		3.4	○			
3	36	15.0		3.0	○		○	○
4	37	15.4		3.3	○			○
5	38	15.4		3.0	○			○
6	39	15.6		3.6	○			○
瓦　器　皿								
1	40	10.4		1.9	○			○
椀								
1	41		4.8					
2	42	15.6	4.8	4.8				
3	43	16.2	7.0	5.4				
4	44	16.5	7.1	5.6				
SE3410								
土師器　皿a								
1	9	9.6		1.4	○		○	○
2	10	7.6		1.5	○		○	○
3	11	10.5		1.5	○		○	○
杯a								
1	12	14.7	9.3	2.9		○	○	○
丸底の杯								
1	13	15.2		3.4	○			
SE3415								
土師器　皿a								
1	17	9.2		1.4	○		○	○
2	18	10.0		1.0	○			
3	19	10.0		1.2	○		○	○
4	20	10.0		1.5	○		○	○
5	21	10.2		1.0	○		○	○
6	22	10.4		1.3	○		○	○
丸底の杯								
1	24	13.4		3.5	○			
椀								
1	25	(14.0)	6.8	4.3	○		○	○
SE3420								
土師器　皿a								
1	26	8.3	6.8	1.0		○		
2	27	8.4	6.8	1.0		○	○	○
3	28	8.7	6.9	1.1		○	○	○
4	29	8.8	7.2	1.4	○		○	○
丸底の杯								
1	30	15.2		3.5	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	31	15.5		2.7	○		○	○
瓦　器　椀								
1	32	16.6	6.5	5.6				
SE3425								
土師器　皿a								
1	1	8.1		1.2	○		○	○
2	2	8.8		1.5	○		○	○
3	3	9.6		1.6	○		○	○
杯a								
1	4	13.6		2.6	○		○	○
2	5	13.6		2.4	○		○	○
3	6	14.6		2.4	○		○	○
丸底の杯								
1	7	15.2		3.3	○		○	
SK3401								
土師器　皿a								
1	1	8.6		1.6	○		○	○
2	2	8.7		1.3	○		○	○
3	3	8.8		1.4	○		○	○
4	4	8.8		1.3	○		○	○
5	5	8.8		1.4	○		○	○
6	6	8.9		1.4	○		○	○
7	7	8.9		1.4	○		○	○
8	8	8.9		1.5	○		○	○
9	9	8.9		1.4	○		○	○
10	10	9.2		1.6	○		○	○
11	11	9.2		1.6	○		○	○
12	12	9.2		1.5	○		○	○
13	13	9.3		1.5	○		○	○
14	14	9.4		1.6	○		○	○
15	15	9.5		1.6	○		○	○
16	16	9.6		1.5	○		○	○
17	17	9.6		1.4	○		○	○
18	18	9.6		1.7	○		○	○
19	19	9.6		1.4	○		○	○
20	20	9.7		1.4	○		○	○
丸底の杯								
1	21	15.5		3.5	○		○	
甕								
1	22	(27.2)						
瓦　器　椀								
1	22	16.0	7.1	5.3				

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
SK3404								
土師器　皿a								
1	15	9.3		1.2		○	○	○
2	16	9.4		1.3		○	○	○
3	13	9.4	5.7	1.4		○	○	○
4	14	10.2	6.4	1.5		○	○	○
5	11	9.0	5.8	1.4	○		○	○
6	12	9.4	6.1	1.1	○		○	○
7	17	9.5		1.5	○		○	
8	18	9.6		1.4	○		○	○
丸底の杯								
1	19	15.2		3.5	○		○	○
2	20	15.2		3.2	○			
3	21	15.4		3.6	○		○	○
4	22	15.5		3.4	○		○	
5	23	15.8		3.4	○		○	○
SK3429								
土師器　皿a								
1	24	10.8	7.8	1.6	○		○	○
2	25	10.8	7.4	2.1	○		○	○
皿c								
1	26	12.4	7.6	2.4	○		○	
瓦器椀								
1	27	14.6	7.2	5.3	○			
SK3438								
土師器　皿a								
1	1	9.8		1.0	○		○	○
杯c								
1	2	13.9	6.6	3.2	○		○	
丸底の杯								
1	3	13.7		3.1	○		○	○
2	4	15.6		3.5	○		○	○
3	5	(15.6)		3.5	○		○	○
SK3447								
土師器　皿a								
1	10	8.2	5.5	1.2		○	○	○
2	11	8.9	7.9	0.9		○	○	○
3	12	9.2	7.7	1.2		○	○	○
4	13	9.0		1.3	○		○	○
5	14	9.2		1.1	○		○	○
杯a								
1	15	11.7		2.3		○	○	○
2	16	15.7		2.9		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SX3384								
土師器　皿b								
1	1	5.4	4.0	1.7		○		
2	2	6.1	4.3	1.5		○		
3	3	6.1	4.3	1.6		○	○	
4	4	6.4	4.7	1.9		○		○
5	5	6.4	4.3	2.0		○	○	○
6	6	6.5	4.4	1.8		○		
7	7	6.5	4.6	2.0		○		○
8	8	6.6	4.8	1.8		○	○	○
9	9	6.6	4.8	2.0		○		
10	10	6.6	4.9	2.0		○		
11	11	6.6	4.9	2.0		○		○
12	12	7.6	4.0	2.0		○		○
13	13	7.6	4.3	2.1		○		○
14	14	7.6	5.7	2.1		○		
15	15	8.1	5.4	2.0		○	○	
16	16	8.3	5.6	1.9		○	○	
杯a								
1	17	11.6	6.9	3.7		○	○	○
2	18	12.1	7.3	3.1		○		
3	19	12.3	7.9	3.0		○	○	○
4	20	12.4	7.2	2.8		○	○	○
5	21	12.4	8.3	2.8		○	○	○
6	22	12.4	6.7	2.9		○	○	○
7	23	12.4	7.6	3.0		○	○	○
8	24	12.4	7.0	3.1		○	○	○
9	25	12.5	6.5	3.1		○	○	○
10	26	12.5	6.9	3.0		○	○	○
11	27	12.6	6.9	3.2		○	○	○
12	28	12.8	7.8	3.1		○	○	○
13	29	12.8	7.4	3.2		○	○	
14	30	13.0	7.5	3.0		○	○	○
15	31	13.1	8.0	3.1		○		
16	32	13.2	7.9	3.0		○	○	○
17	33	13.2	7.8	3.1		○	○	○
18	34	13.2	8.1	3.4		○	○	○
19	35	13.3	9.1	3.0		○	○	
20	36	13.4	6.7	2.8		○	○	○
21	37	13.4	8.0	3.0		○		
22	38	13.4	8.8	3.1		○	○	○
23	39	13.7	9.4	2.7		○	○	○
24	40	15.2	8.9	4.4		○		
25	41	16.5	10.1	3.9		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
SX3486								
土師器　皿a								
1	21	9.1	8.1	8.0		○	○	○
杯a								
1	22	15.6	11.0	3.0		○	○	○
黒色土層								
土師器　皿a								
1	5	7.6	5.4	1.1		○	○	○
2	6	7.6	5.6	1.1		○	○	○
3	7	8.0	6.1	1.1		○	○	○
4	8	8.0	6.4	1.5		○	○	○
5	9	8.4	6.4	1.1		○	○	○
6	10	8.4	6.6	1.2		○	○	○
7	11	9.0	7.3	0.9		○	○	○
8	12	9.2	7.3	1.1		○	○	○
9	13	9.6	7.2	1.0		○		
10	14	8.4		1.1	○		○	○
11	15	8.9		1.3	○		○	○
12	16	8.9		1.3	○		○	○
13	17	9.3		1.3	○		○	○
14	18	9.4		1.2	○		○	○
15	19	9.7		1.3	○		○	○
16	20	9.8		1.4	○		○	○
17	21	10.0		1.3	○		○	○
18	22	10.4		1.5	○		○	
皿c								
1	23	9.0	6.6	2.5				
2	24	9.7	6.0	2.3			○	○
杯a								
1	25	11.9	7.8	2.4		○	○	○
2	26	12.2	7.1	2.6		○	○	○
3	27	12.4	7.7	2.9		○	○	○
4	28	12.4	7.6	2.8		○	○	
5	29	12.5	8.5	2.7		○	○	○
6	30	13.5	8.8	3.0		○	○	○
7	31	14.5	10.7	2.6		○	○	○
8	32	15.3	10.6	2.7		○	○	○
9	33	15.3		3.5	○		○	○
杯c								
1	35	19.0	11.4	3.2		○	○	
椀								
1	36	14.8	6.6	4.5		○		
2	37	14.8	7.3	5.2				
瓦器　椀								
1	40	9.6	5.6	2.8				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へラ	糸		
2	41	16.8	7.4	5.1				
3	42	18.0	7.2	6.2				
4	43	(17.6)						
暗褐色土層								
		土師器	皿a					
1	1	7.4	4.8	1.4		○	○	○
2	2	7.8	6.5	1.2		○	○	○
3	3	7.9	5.4	1.1		○	○	○
4	4	8.1	6.9	1.5		○	○	○
5	5	8.1	6.1	1.2		○	○	○
6	6	8.1	6.1	1.2		○	○	○
7	7	8.1	5.2	1.0		○	○	○
8	8	8.2	5.9	1.1		○	○	
9	9	8.4	6.2	1.1		○	○	○
10	10	8.7	6.7	1.2		○	○	
11	11	8.8	6.7	0.9		○	○	○
12	12	9.2	7.6	1.1		○	○	
			杯a					
1	13	12.0	8.8	2.4		○	○	○
2	14	12.2	7.5	2.5		○	○	○
3	15	12.6	6.8	3.1		○	○	
4	16	13.0	8.3	2.7		○	○	
5	17	13.2	8.4	2.9		○	○	○
6	18	13.8	7.7	3.4		○	○	○
		瓦質土器						
1	89	(31.0)						
		須恵質土器　鉢						
1	90	(25.4)						
2	91	(24.8)	10.3					
SD1230（第119次調査）								
		土師器	皿a					
1	3	8.0	7.0	1.0		○	○	○
2	4	8.4	6.7	1.2		○	○	○
3	5	8.6	6.2	0.9		○	○	○
4	6	8.7	7.0	0.9		○	○	○
5	7	8.7	6.7	1.1		○	○	○
6	8	8.8	5.9	1.1		○	○	○
			皿b					
1	1	6.4	5.1	1.7		○		○
2	2	(7.8)	5.4	1.9		○	○	○
			杯a					
1	9	11.9	7.8	2.7		○	○	
2	10	12.0	7.9	2.6		○	○	○
3	11	12.7	8.1	2.6		○	○	○
4	12	12.8	7.8	2.5		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
5	14	13.6	9.2	2.7		○	○	○
杯b								
1	13	13.0	7.8	3.1		○	○	○
SD1300								
土師器　皿a								
1	1	10.2		1.6	○		○	○
丸底の杯								
1	2	15.3		3.0	○			○
2	3	15.6		3.2	○			○
瓦　器　皿								
1	4	9.8		2.2		○		
椀								
1	5	17.1	7.5	5.5				
鉢								
1	6	(21.8)		4.8				
SD3478								
瓦　器　椀								
1	28	10.3	5.2	3.1				
2	29	15.9	6.4	4.6				
SD3500下層腐植土								
土師器　皿a								
1	1	8.7		1.2	○		○	○
2	2	8.7		1.3	○		○	
3	3	8.9		1.2	○		○	○
4	4	8.9		1.5	○		○	○
5		9.0		1.2	○		○	○
6		9.0		1.2	○		○	○
7	5	9.0		1.2	○		○	
8		9.1		1.4	○		○	
9		9.1		1.4	○		○	○
10		9.1		1.0	○		○	○
11	6	9.2		1.5	○		○	○
12	7	9.2		1.6	○		○	○
13	8	9.3		1.5	○		○	○
14		9.4		1.2	○		○	○
15	9	9.4		1.2	○		○	○
16	10	9.4		1.4	○		○	○
17	11	9.4		1.5	○		○	○
18	12	9.4		1.5	○		○	○
19	13	9.5		1.3	○		○	
20	14	9.5		1.6	○		○	○
21	15	9.6		1.8	○		○	○
22		9.6		1.3	○		○	○
23		9.6		1.4	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
24	16	10.0		1.5	○		○	○
丸底の杯								
1		14.6		3.2	○			○
2		14.6		3.1	○			○
3		14.6		3.2		○		○
4		14.8		3.0	○			○
5	17	14.9		3.9	○		○	○
6		14.9		3.1	○			○
7		14.9		3.2	○			○
8	18	14.8		3.3	○			○
9	19	14.8		3.3	○			○
10		15.0		3.2	○			○
11		15.1		3.1	○			○
12		15.1		3.1	○			○
13		15.1		3.2	○			○
14		15.1		3.3		○		○
15	20	15.2		3.3	○			○
16	21	15.2		3.2	○			○
17		15.2		3.2	○			○
18		15.3		3.0	○			○
19		15.3		3.2	○			○
20		15.3		3.5	○			○
21	22	15.4		3.1	○			○
22		15.4		3.3	○			○
23		15.4		3.3	○			○
24		15.4		3.4	○			○
25		15.4		3.5	○			○
26	23	15.4		3.5	○			○
27		15.4		3.6	○			○
28	24	15.5		3.2	○			○
29		15.5		3.2	○			○
30		15.5		3.3	○			○
31	25	15.5		3.4	○			○
32		15.5		3.5	○			○
33	26	15.6		3.2	○			○
34	27	15.6		3.2	○			○
35		15.6		3.2	○			○
36		15.6		3.3	○			○
37		15.6		3.3	○			○
38		15.6		3.4	○			○
39		15.6		3.3	○			○
40	28	15.6		3.5	○			○
41		15.6		3.5	○			○
42		15.6		3.5	○			○
43		15.7		3.1	○			○
44		15.7		3.6	○			○
45		15.7		3.4	○			○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
46	29	15.8		3.4	○			○
47		15.8		3.1	○			○
48	30	15.8		3.2	○			○
49	31	15.9		3.4	○			○
50	32	15.9		3.3	○			○
51		15.9		3.0		○		○
52		15.9		3.3	○			○
53		15.9		3.5	○			○
54		16.0		3.0	○			○
55		16.0		3.2	○			○
56	33	16.0		3.3	○			○
57	34	16.0		3.5	○			○
58		16.0		3.5	○			○
59		16.0		3.6	○			○
60		16.1		3.2	○			○
61		16.1		3.5	○			○
62		16.1		3.6	○			○
63	35	16.2		3.6	○			○
瓦　器　椀								
1	37	(14.4)	6.4	4.7				
2	38	15.8	6.7	4.9				
3	39	16.6	5.8	5.2				
4	40	16.5	6.2	5.4				
5	41	(16.8)	6.6	5.2				
6	42	17.5	6.1	5.2				
須恵器　杯								
1	46	13.3	6.9	3.3				
SD3500上層黒色土								
土師器　皿a								
1	63	9.1	7.8	1.1		○	○	○
2	64	9.2	8.0	1.0		○	○	○
3	65	10.0	7.3	1.5		○	○	○
4	66	9.0		1.6	○		○	○
5	67	9.2		1.1	○		○	○
丸底の杯								
1	68	14.6		3.3	○			○
2	69	15.0		3.1	○			○
3	70	15.2		3.0	○			○
4	71	15.2		3.1	○			○
5	72	15.4		3.5		○		○
6	73	15.6		3.5	○			
瓦　器　椀								
1	74	(17.3)	(7.2)	5.5				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ ラ	糸		
SD3520								
土師器　皿a								
1	2	8.2	5.8	1.2		○		○
2	3	8.4	7.6	0.9		○		○
3	4	8.6	6.7	1.2		○		○
4	5	9.2	8.4	1.2		○		○
皿c								
1	6	10.1	5.5	1.5		○		
杯a								
1	7	13.3	8.3	2.9		○		○
蓋								
1	8	(15.0)						
SD3550								
土師器　皿a								
1	1	9.0		1.2	○		○	○
2	2	9.0		1.3	○		○	○
3	3	9.1		1.2	○		○	○
4	4	9.1		1.1	○		○	○
5	5	9.1		1.1	○		○	○
6	6	9.3		1.3	○		○	○
7	7	9.3		1.2	○		○	○
8	8	(9.5)		1.2	○		○	○
9	9	9.6		1.5	○		○	○
10	10	9.6		1.2	○		○	○
11	11	10.0		1.5	○		○	○
12	12	10.3		1.6	○		○	○
皿c								
1	13	10.0	5.8	2.5			○	○
丸底の杯								
1	14	14.8		3.3	○			○
2	15	14.9		2.9	○			
3	16	15.2		3.4	○			○
4	17	15.4		3.4	○			○
5	18	(15.7)		3.6	○			○
鉢								
1	19	(28.6)	(7.0)	18.8				
SD3555								
土師器　皿a								
1	1	8.4	6.8	1.0		○	○	○
2	2	8.4	7.3	1.0		○	○	○
3	3	9.0	6.6	1.2		○	○	○
4	4	9.2	6.7	1.3		○	○	
5	5	9.8	8.0	1.0		○	○	○
6	6	9.9	8.1	1.2		○	○	○

番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へラ	糸		
7	7	8.6		1.1	○		○	○
8	8	8.9		1.5	○		○	○
9	9	9.0		1.0	○		○	○
10	10	9.0		1.1	○		○	
11	11	9.0		1.1	○		○	
12	12	9.8		1.4	○		○	○
13	13	10.4		1.5	○		○	○
杯a								
1	14	13.8		2.5	○		○	○
2	15	15.3	12.0	2.8	○		○	○
丸底の杯								
1	16	15.2		2.8	○			○
2	17	15.3		3.3	○			○
3	18	16.0		3.3	○		○	○
4	19	16.0		3.9	○		○	
杯c								
1	20	17.7	9.1	4.5	○		○	
2	21	(25.3)	(15.0)	5.1			○	○
瓦　器　椀								
1	22	9.0	5.0	2.7				
2	23	16.4	6.6	4.8				
SE3475								
土師器　丸底の杯								
1	1	14.7		3.2	○			○
2	2	15.0		3.6	○			○
SE3495								
土師器　皿a								
1	13	8.0	6.2	1.0		○	○	○
2	14	8.4	7.0	1.2		○	○	
3	15	9.2	7.0	0.9		○	○	○
4	16	9.6	7.5	1.0		○	○	○
SE3505								
土師器　皿a								
1	17	8.2	6.8	1.0		○	○	○
2	18	9.0	7.0	1.2		○	○	○
3	19	9.4	7.3	1.3		○	○	○
4	20	9.6	7.9	0.9		○	○	○
5	21	10.2	7.8	1.5		○	○	○
杯a								
1	22	15.5	11.6	3.2		○	○	○
SE3525								
土師器　皿a								
1	24	8.9	6.5	1.3		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
SE3480								
土師器　皿a								
1	1	8.6	6.3	1.3		○	○	○
2	2	9.0	7.3	1.0		○	○	○
3	3	9.4	7.6	1.3		○	○	○
4	4	9.6	7.6	1.2		○	○	○
5	5	9.6	7.0	1.6	○		○	○
6	6	9.2	7.1	1.4	○			
7	7	9.4	7.4	1.3	○		○	○
8	8	11.2	8.8	1.4	○		○	○
杯a								
1	9	15.0	13.3	2.5		○	○	○
2	10	16.6	10.8	3.0		○		○
丸底の杯								
1	11	16.6		2.9	○			○
土師質土器　鍋								
1	19	(43.8)						
SE3530								
土師器　皿b								
1	20	6.9	5.0	1.8		○		
SE3535								
土師器　皿b								
1	23	6.7	4.5	1.7		○	○	○
2	24	6.9	4.6	2.1		○		
3	25	7.5	5.2	1.7		○	○	○
4	26	7.5	5.0	2.2		○	○	○
5	27	7.7	4.8	1.6		○	○	○
杯a								
1	28	11.8	8.2	2.5		○	○	○
2	29	12.3	8.2	2.8		○	○	○
SE3540								
土師器　皿a								
1	1	9.2	7.2	1.2		○	○	○
2	2	9.6		1.2	○		○	○
杯a								
1	3	(18.0)	(12.0)	3.4		○	○	○
SK3501								
土師器　皿a								
1	9	7.7	5.5	1.1		○	○	○
2	10	7.8	5.5	1.1		○	○	○
3	11	7.8	5.6	1.2		○	○	○
4	12	7.8	6.0	1.6		○	○	

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
5	13	8.0	5.9	1.5		○	○	○
6	14	8.1	6.4	1.0		○	○	○
7	15	8.2	5.3	1.1		○	○	○
8	16	8.3	6.3	1.4		○	○	
9	17	8.4	6.4	1.2		○	○	
10	18	8.4	6.0	1.3		○	○	○
11	19	8.4	5.9	1.1		○	○	○
12	20	8.4	6.4	1.4		○	○	○
13	21	8.6	6.4	1.4		○	○	○
14	22	8.6	7.2	1.0		○	○	○
15	23	8.6	6.0	1.3		○	○	○
16	24	8.7	5.9	1.5		○	○	○
17	25	8.7	6.2	1.4		○	○	○
18	26	8.8	6.1	1.6		○	○	○
19	27	8.8	6.4	1.1		○	○	○
20	28	9.2	6.2	1.2		○	○	○
杯a								
1	29	11.9	7.1	2.5		○	○	
2	30	12.2	7.4	2.5		○	○	○
3	31	12.3	7.8	2.7		○	○	
4	32	12.3	8.0	2.5		○	○	○
5	33	12.6	8.6	2.6		○	○	○
6	34	12.8	8.3	2.3		○	○	○
7	35	13.0	8.0	2.8		○	○	○
SK3464								
土師器　皿a								
1	1	8.3	6.9	0.9		○	○	○
2	2	(8.9)	6.8	1.0		○	○	○
3	3	9.2	7.0	1.2		○		
SK3506								
土師器　皿a								
1	10	7.2	5.1	1.3		○	○	○
2	11	7.6	5.8	1.2		○	○	○
3	12	8.9	6.8	1.0		○	○	○
4	13	9.0	7.3	1.3		○	○	○
杯a								
1	14	12.5	8.3	3.0		○	○	○
SK3507								
土師器　皿a								
1	4	9.2		1.3	○		○	
2	5	(9.7)		1.5	○		○	
杯a								
1	6	14.7	10.6	2.9		○	○	○
丸底の杯								

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へラ	糸		
1	7	15.0	12.3	3.1	○		○	○
2	8	15.4		3.2	○			○
3	9	15.4		3.3	○			○
SK3529								
土師器　皿a								
1	17	9.0	7.0	1.1		○	○	○
杯a								
1	18	13.3	10.6	2.5		○	○	○
2	19	14.4	10.5	2.7		○	○	○
3	20	14.8	9.4	2.8		○	○	○
4	21	15.0	10.7	2.9		○	○	○
5	22	15.2	11.0	2.9		○	○	○
瓦器　椀								
1	23	16.7	6.8	5.9				
炭層（SX3455）								
土師器　杯								
1	1	12.9	7.0	3.9	○		○	○
2	2	13.1	7.2	3.5	○			○
3	3	13.1	7.4	3.4	○		○	○
4	4	15.0	7.8	3.3	○		○	○
皿								
1	6	16.1	12.9	1.3	○			
2	7	20.0	15.6	1.8	○		○	
甕								
1	8	(18.0)						
茶灰色土層（下層整地層）								
黒色土器A　蓋								
1	9	18.9						
土師器　杯								
1	10	12.2	7.1	3.2	○			
2	11	(14.0)	(8.2)	(3.2)	○			
3	12	14.1	8.2	3.1	○			
4	13	15.6	9.0	4.2	○		○	
5	14	16.4	9.0	3.6	○			
皿								
1	15	(14.0)	(11.3)	(2.2)				
2	16	(14.8)	(11.4)	(1.5)				
3	17	15.3	11.8	1.8				
4	18	(15.6)	(12.6)	1.7				
5	19	(15.8)	(13.6)	(2.1)				
6	20	(16.6)	(13.2)	2.3				
7	21	17.2	13.0	2.0				
8	22	17.8	14.0	(2.1)				
壺								

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へラ	糸		
1	23	6.2		6.2				
黒褐色土層								
土師器　Ⅲa								
1	5	7.8	5.3	1.4		○	○	○
2	6	8.0	5.7	1.4		○	○	○
3	7	8.2	6.1	1.4		○	○	○
4	8	8.4	6.4	1.2		○	○	○
5	9	8.2	6.5	1.4		○	○	○
6	10	8.6	6.5	1.1		○	○	○
7	11	9.0	6.7	1.4		○	○	○
8	12	9.0	6.2	1.1		○	○	
9	13	9.0	7.6	1.1		○	○	○
10	14	9.1	7.6	1.6		○	○	○
11	15	9.2	6.8	1.3		○	○	○
12	16	9.2	6.3	1.2		○	○	○
13	17	9.5	7.5	1.1		○	○	○
14	18	9.6	7.9	1.3		○	○	○
15	19	9.6	7.0	0.9		○	○	○
16	20	9.6	7.1	1.9		○	○	○
17	21	9.8	6.4	1.5		○	○	○
18	22	9.0		1.4	○		○	○
19	23	9.0		1.2	○		○	○
20	24	9.0		1.4	○		○	○
21	25	9.0		1.4	○		○	○
22	26	9.0		1.4	○		○	○
23	27	9.0		1.3	○		○	○
24	28	9.1		1.4	○		○	○
25	29	9.3		1.4	○		○	○
26	30	9.5		1.2	○		○	○
27	31	9.5		1.3	○		○	○
28	32	9.5		1.3	○		○	
29	33	9.6		1.1	○		○	○
30	34	9.6		1.4	○		○	○
31	35	9.7		1.3	○		○	○
32	36	10.8		1.5	○		○	○
Ⅲb								
1	1	6.6	4.2	1.8		○	○	○
2	2	7.0	4.6	1.8		○	○	○
3	3	7.0	5.1	1.7		○		○
4	4	7.5	4.9	2.0		○	○	
Ⅲc								
1	37	9.3	5.9	2.0			○	
2	38	10.6	5.4	2.0			○	
3	57	18.3	12.3	3.6			○	○
小椀								
1	39	8.2	4.2	3.0				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	40	8.6	4.4	2.2				
3	41	9.2	4.0	3.1				
杯a								
1	42	11.8	7.6	2.8		○	○	○
2	43	11.8	8.8	2.8		○	○	○
3	44	12.1	7.4	2.5		○	○	○
4	45	12.2	8.4	2.8		○	○	
5	46	12.2	7.9	2.8		○	○	○
6	47	12.2	8.2	3.1		○	○	○
7	48	12.5	8.3	2.3		○	○	○
8	49	12.6	8.4	2.6		○	○	○
9	50	13.9	10.2	2.9		○	○	○
10	51	15.0	9.5	2.8		○	○	○
11	52	15.1	9.2	2.8		○	○	
12	53	15.2	12.1	2.9		○	○	○
13	54	15.5	10.7	2.5		○	○	○
14	55	15.9	10.6	2.7		○	○	○
杯c								
1	56	(16.6)	9.4	4.4		○	○	○
壺								
1	58	(8.2)		(5.7)		○		
盤								
1	59	(18.0)		7.5		○	○	○
器台								
1	60	13.1						
瓦　器　椀								
1	62	15.8	7.1	4.9				
2	63	16.1	6.8	5.4				
3	64	16.2	6.2	5.3				
4	65	(16.4)	7.2	5.5				
5	66	(16.4)	(6.5)	5.0				
6	67	(16.8)	7.5	5.1				
7	68	16.9	6.9	5.3				
土師質土器　鉢								
1	69	(28.8)	(12.5)	11.2				
須恵質土器　鉢								
1	70	20.5		5.8		○		
2	71	(26.5)	(9.5)	9.4		○		
3	72	(25.4)						
茶褐色土層								
土 師 器　皿a								
1	11	7.4	5.4	1.3		○	○	○
2	12	7.6	6.0	1.3		○	○	
3	13	7.8	6.6	0.8		○	○	○
4	14	7.8	6.1	1.1		○	○	
5	15	8.0	6.4	1.3		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
6	16	8.2	5.5	1.6		○	○	
7	17	8.6	6.9	1.3		○	○	○
8	18	9.0	6.6	1.3		○	○	○
9	19	9.2	6.8	1.2		○	○	○
10	20	9.6	8.0	1.0		○	○	○
			Ⅲb					
1	1	6.0	4.0	1.8		○		
2	2	6.0	4.3	1.9		○		
3	3	6.4	4.6	1.8		○	○	○
4	4	6.7	4.4	1.5		○		
5	5	6.8	4.4	1.7		○	○	
6	6	6.8	4.6	1.7		○	○	○
7	7	6.8	4.9	1.8		○	○	
8	8	7.0	4.6	1.9		○	○	
9	9	7.4	5.0	1.8		○	○	○
10	10	8.0	5.0	2.3		○	○	○
			Ⅲc					
1	21	(8.6)	(5.3)	2.0		○	○	○
2	22	9.4	6.3	1.3		○	○	
			杯a					
1	23	12.0	8.5	2.9		○	○	○
2	24	12.1	8.2	3.0		○	○	○
3	25	12.1	8.2	3.0		○	○	○
4	26	12.2	8.6	2.6		○	○	○
5	27	12.2	8.1	3.1		○	○	○
6	28	12.3	8.0	2.6		○	○	○
7	29	12.5	8.0	2.9		○	○	
8	30	12.7	7.9	3.0		○	○	○
9	31	12.7	8.7	3.0		○	○	○
10	32	13.0	8.8	3.1		○	○	○
11	33	13.0	8.1	3.1		○	○	○
12	34	13.0	7.7	3.2		○	○	○
13	35	13.2	7.1	3.2		○	○	○
14	36	13.9	8.8	3.1		○		
15	37	14.5	8.5	3.6		○	○	
			杯c					
1	38	(15.0)	8.5	3.6		○	○	○
		瓦　器　椀						
1	39	16.8	7.0	4.3		○		
2	40	17.5	7.0	5.5				
SD3594（第120次調査）								
		須恵器　杯蓋						
1	1	(19.4)						

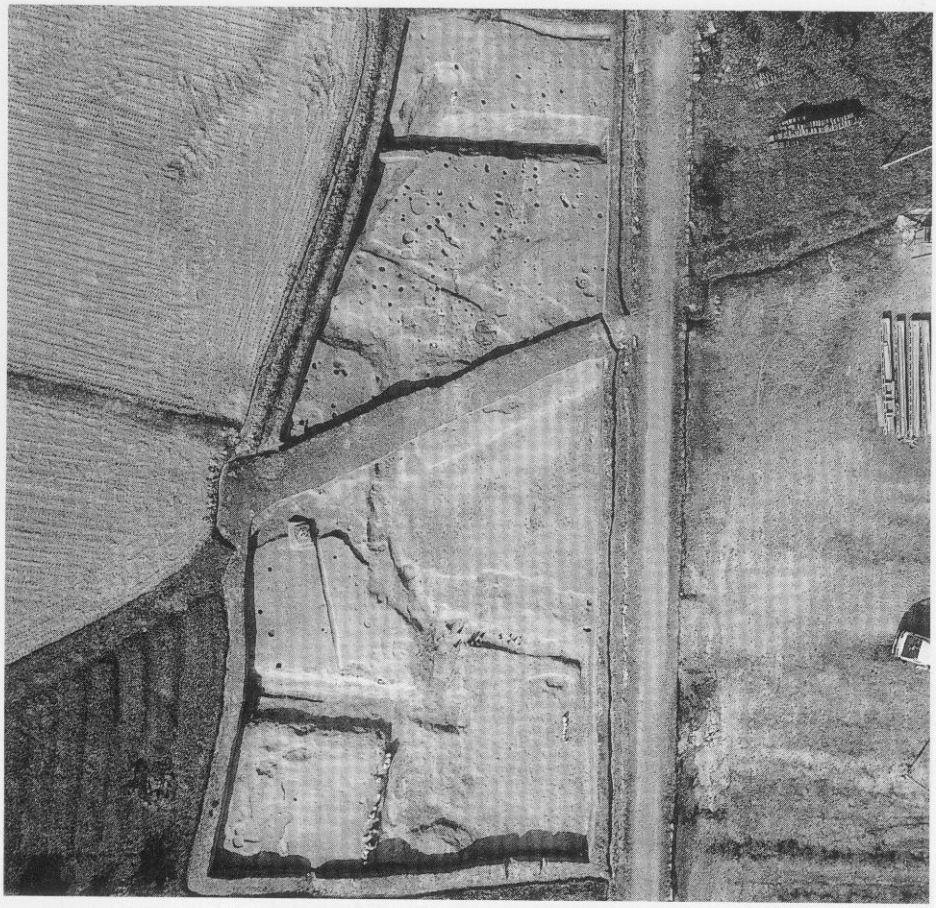
番　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SK3587								
須恵器　高杯								
1	2		(14.0)					
SK3589								
須恵器　杯蓋								
1	3	15.2		3.1	○			
杯身								
1	4	13.8	10.0	3.9	○			
2	5	(15.6)	(11.6)	3.2	○			
SX3600								
須恵器　杯蓋								
1	2	(14.8)			○			
杯身								
2	3	(13.2)	7.2	3.7	○			
SK3576								
土師器　皿								
1	1	9.7		1.3	○		○	○
丸底の杯								
1	2	14.9		3.4	○			
2	3	14.9		3.6	○			
SK3593								
土師器　皿								
1	5	9.2		1.0	○		○	○
2	6	9.2		1.2	○		○	○
3	7	9.4		1.5	○		○	○
丸底の杯								
1	8	15.2		3.4	○			○
瓦器　椀								
1	9	10.6	5.4	2.5				
2	10	15.6	6.9	4.5				
SK3602								
土師器　皿								
1	11	8.6		1.6	○			
2	12	9.1		1.5	○		○	○
3	13	9.4		1.1	○		○	○
4	14	9.5		1.5	○		○	○
丸底の杯								
1	15	(14.4)		3.5	○			○
2	16	15.9		2.9	○			○
3	17	15.9		3.4	○			○
瓦器　椀								

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
1	18	(15.8)	6.1	5.1				
2	19	(16.0)	6.2	4.5				
3	20	17.8	8.1	5.3				
SE3570								
土師器　皿b								
1	1	6.4	4.1	1.7		○		
2	2	7.3	5.5	1.7		○		
杯a								
1	3	12.4	8.4	2.7		○	○	
SX3581								
須恵器　皿								
1	1	19.2	15.2	2.2	○			
黄褐色整地層								
須恵器　杯								
1	1	(12.8)	(8.4)	4.0	○			
2	2	14.6	9.7	3.9	○			
暗赤褐色土層								
土師器　杯								
1	8	(10.4)	5.0	2.4	○		○	
椀								
1	9	(15.6)	8.7	5.7	○			
暗黄褐色整地層								
土師器　皿a								
1	11	9.3		1.5	○		○	○
2	12	9.6		1.6	○		○	○
3	13	10.0		1.6	○		○	○
4	14	10.4		1.9	○			○
皿c								
1	15	10.8	7.2	2.6	○			
丸底の杯								
1		15.4	11.8	4.1	○			○
椀								
1	17	(15.8)	6.9	4.7	○			
黒色土層								
土師器　皿a								
1	1	(8.7)	7.0	1.1		○	○	○
2	2	8.8	6.7	1.1		○	○	
3	3	9.0	6.8	1.1		○	○	○
4	4	9.0	7.2	1.5	○		○	○
5	5	9.0	7.4	1.5	○		○	○
6	6	(9.4)	7.2	1.6	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
杯a								
1	7	15.4	11.2	3.1		○	○	○
2	8	16.2	11.0	3.0		○	○	○
瓦　器　皿								
1	9	9.7		2.7				
黒褐色土								
土師器　皿a								
1	14	8.4	6.2	1.3		○	○	○
2	15	8.8	7.8	1.1		○	○	○
3	16	(9.0)	(6.4)	1.4		○	○	○
4	17	9.2	8.0	0.9		○	○	○
5	18	(9.2)	(7.2)	1.0		○	○	○
6	19	9.6	7.8	1.5	○		○	
皿b								
1	13	7.2	5.0	2.0		○	○	○
杯a								
1	20	12.5	8.1	2.9		○	○	
2	21	12.6	8.4	2.8		○	○	
3	22	15.0	7.5	3.3		○	○	○
4	23	15.0	10.0	3.2		○	○	○
茶灰色土層								
土師器　皿a								
1	7	9.0	7.0	0.8		○		○
2	8	9.0	7.0	1.2		○	○	○
3	9	9.0	7.0	1.1		○	○	
4	10	9.2	7.2	0.9		○	○	○
皿b								
1	1	7.2	5.6	1.8		○		
2	2	7.5	4.6	2.0		○		
3	3	7.6	4.8	1.8		○	○	
4	4	7.7	4.8	1.7		○	○	
5	5	7.8	5.6	2.4		○	○	○
6	6	7.8	5.0	1.6		○	○	○
皿c								
1	11	7.6	3.7	2.2		○	○	
2	12	8.6	6.4	2.0		○	○	
杯a								
1	13	12.5	8.5	2.6		○	○	○
2	14	12.5	7.0	3.4		○		
3	15	12.6	8.2	2.8		○		○
4	16	(13.2)	9.0	3.0		○		○
5	17	15.6	10.1	2.9		○	○	○
丸底の杯								
1	18	(15.2)		3.1	○			○
2	19	(15.0)		2.9	○			

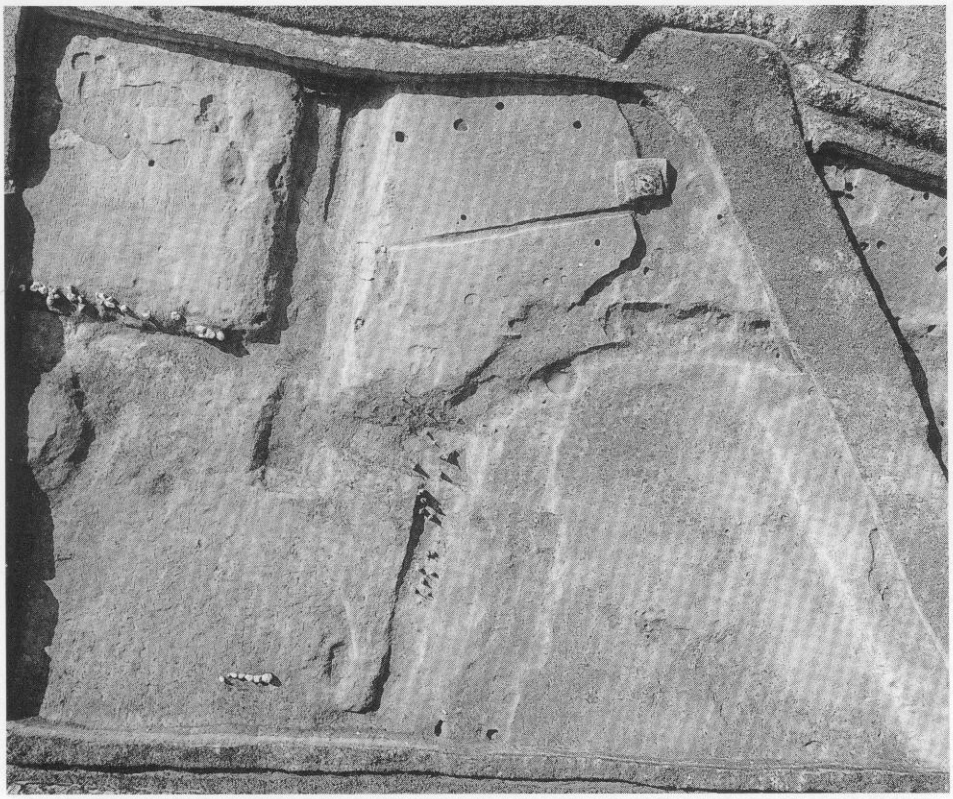
番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					へ　ラ	糸		
3	20	15.7		3.3	○			
SD1850（第70次補足調査）								
須恵器　蓋								
1	1	(18.6)						
2	4	(16.0)						
杯身								
1	5	(12.0)	(8.0)	3.6	○		○	
2	6		(7.6)		○		○	
3	7	(13.6)	(9.6)	4.0	○		○	
高杯								
1	2	(16.6)						
壺								
1	9		(7.2)		○			
1	11	(16.2)						

図　版

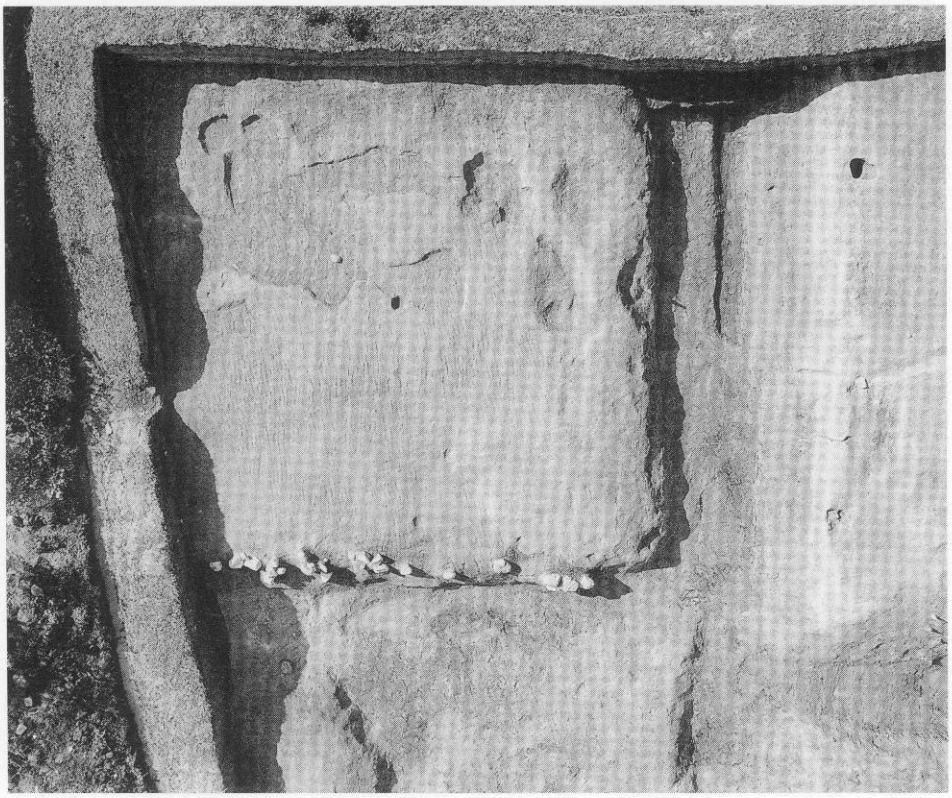


第115次調査区全景（空中写真）

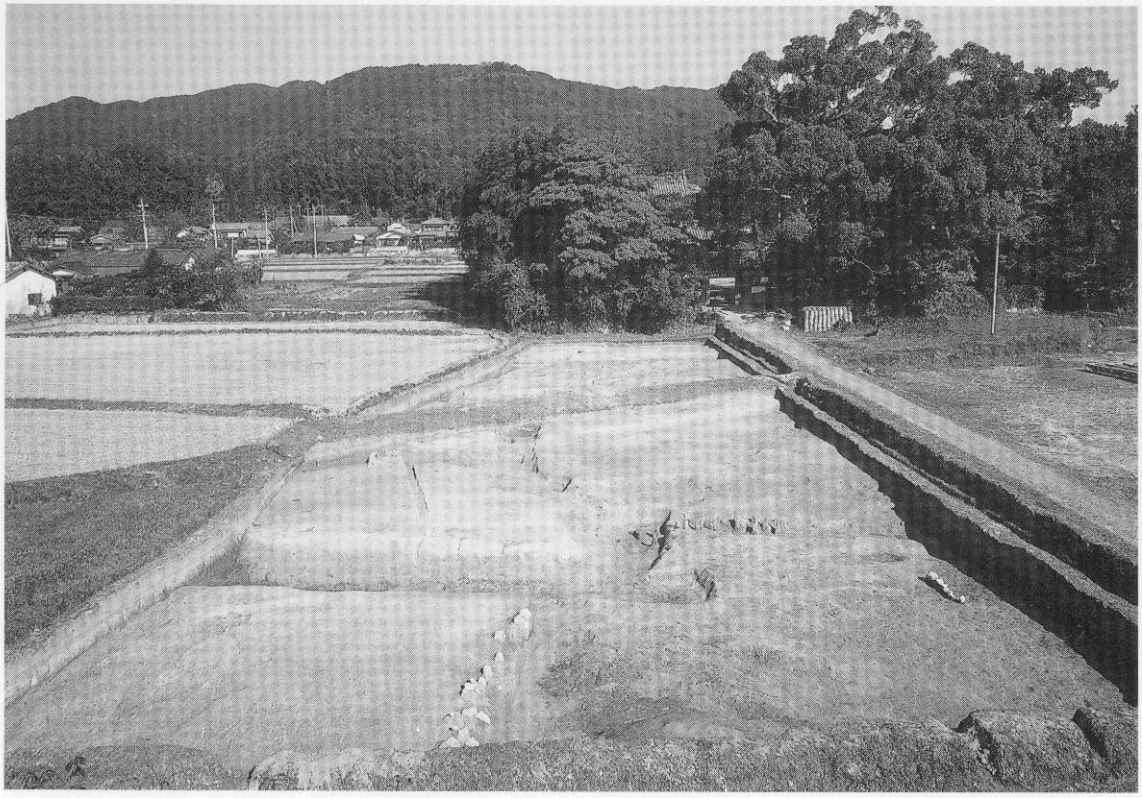
第115次調査区北半部（空中写真）



第115次調査区南半部(空中写真)

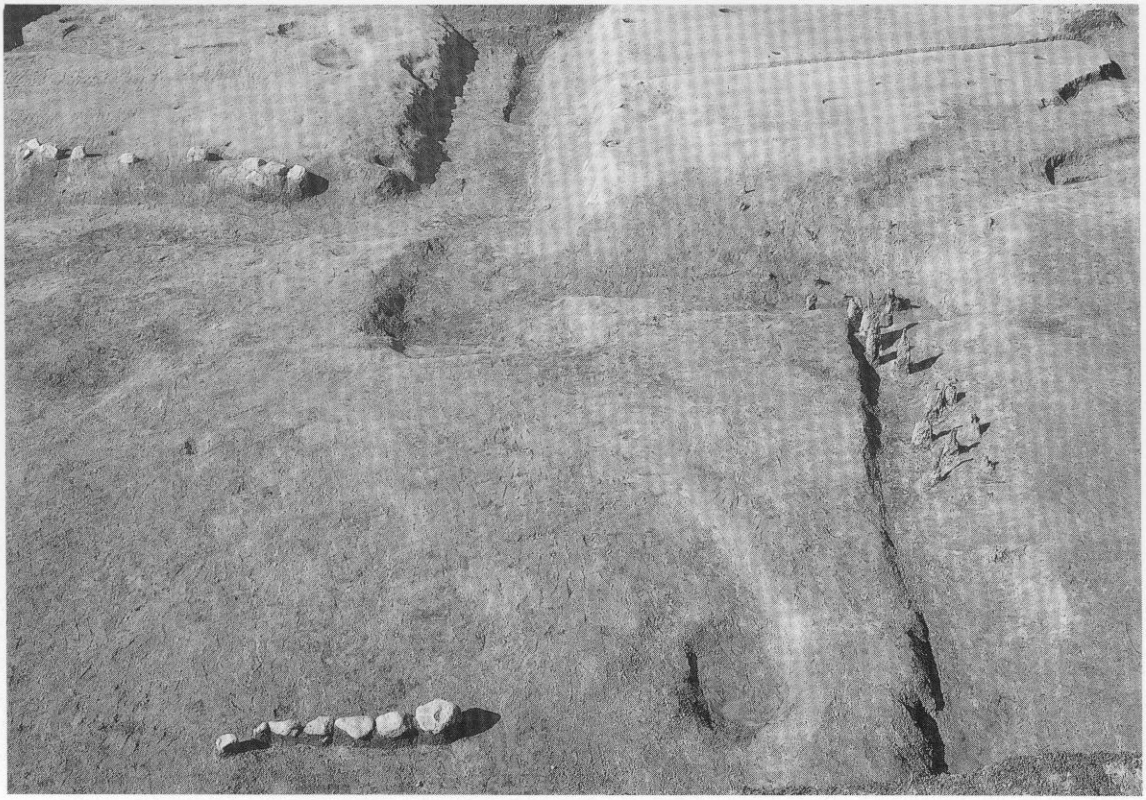


第115次調査区溝SD3333で囲まれた区画(空中写真)

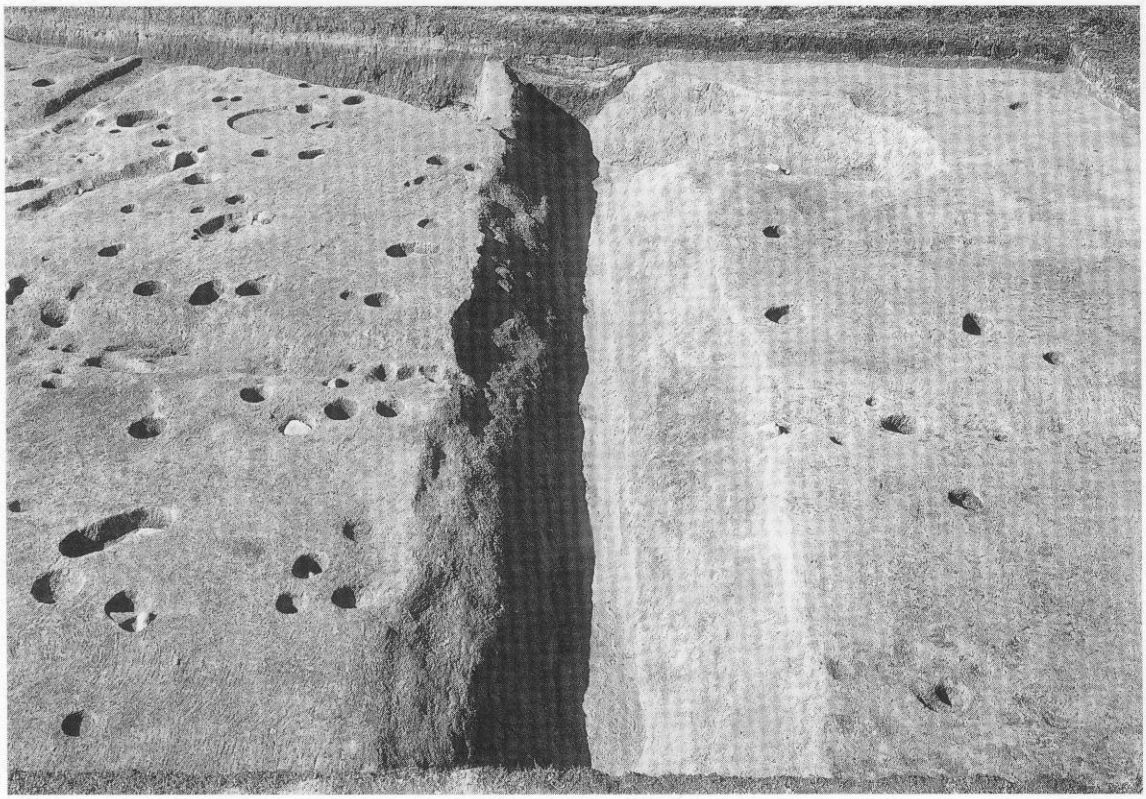


第115次調査区全景（南から）

第115次調査区北半部（東から）

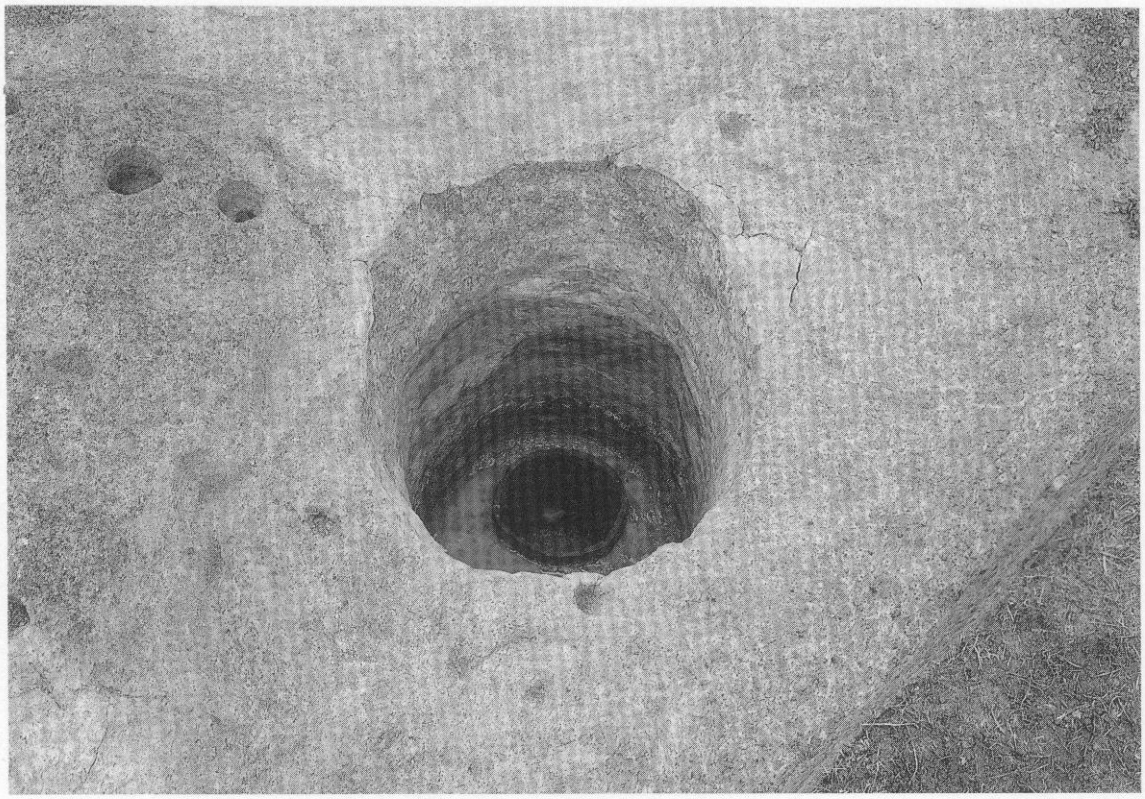


溝SD3333・3355など（東から）

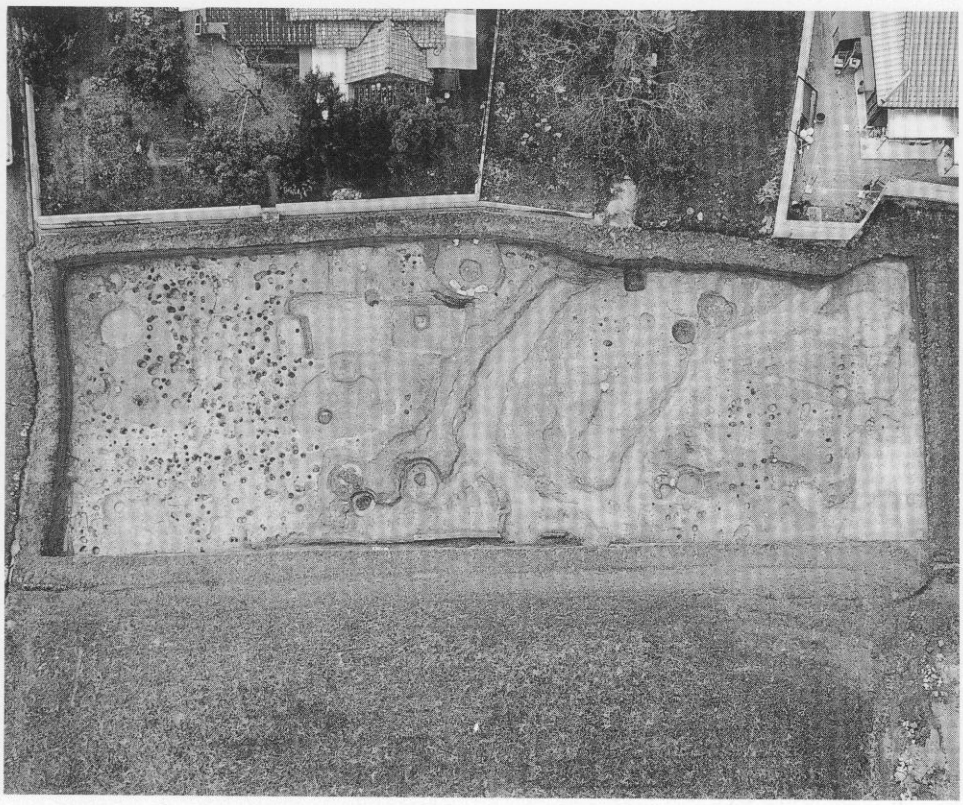


溝SD3340（東から）

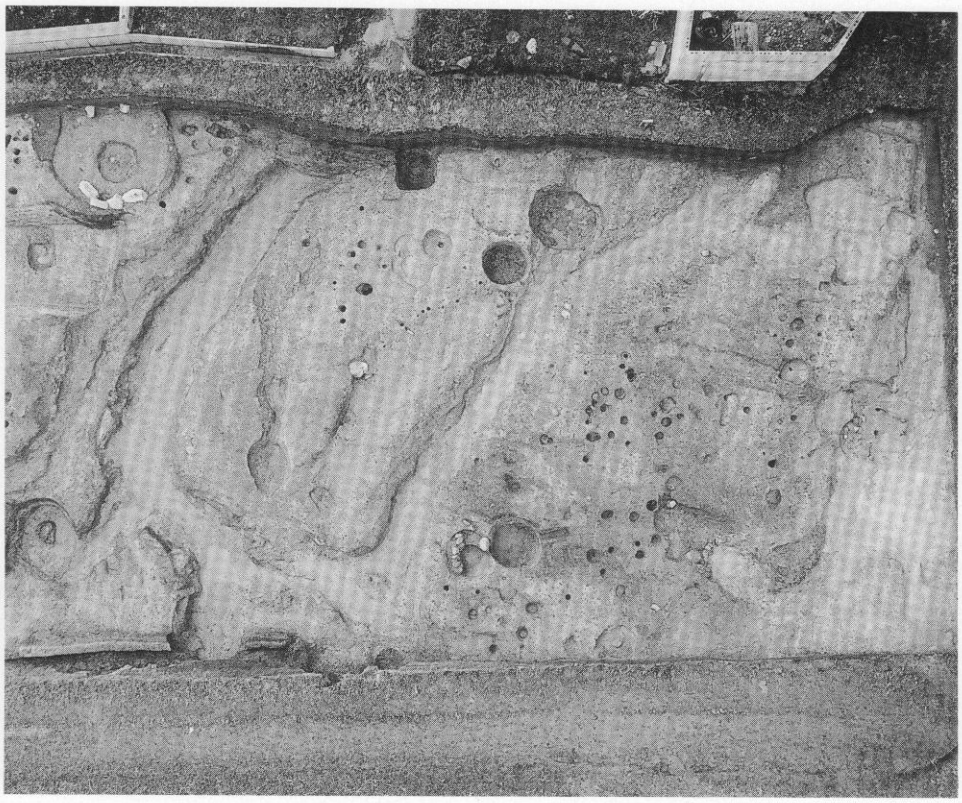
井戸SE3350竹を突き立てた状況（南から）



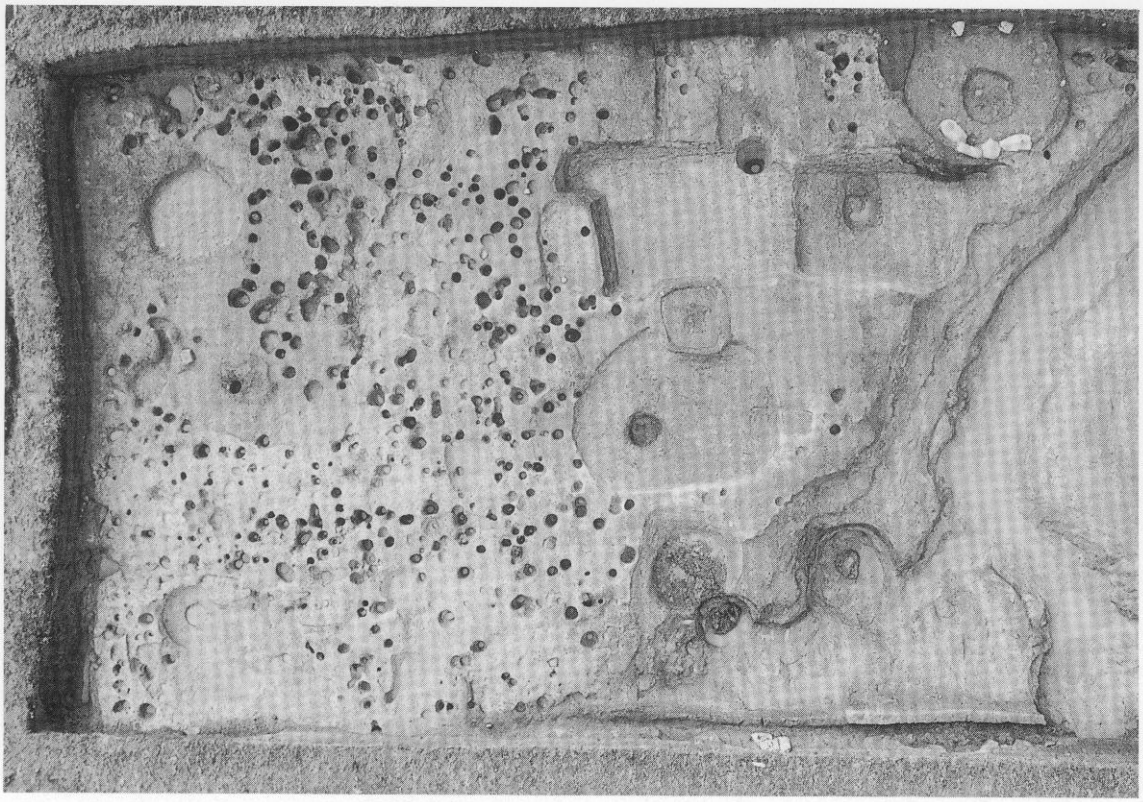
井戸SE3350完掘状況（南から）



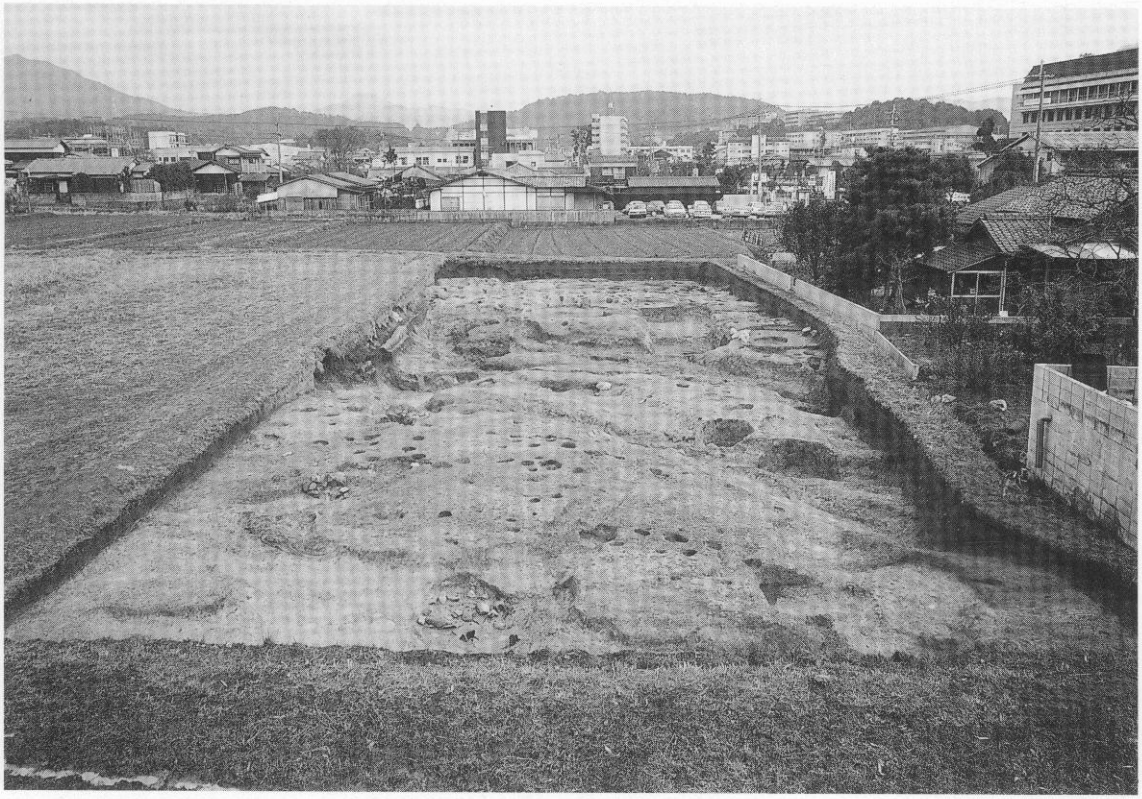
第117次調査区全景（空中写真）



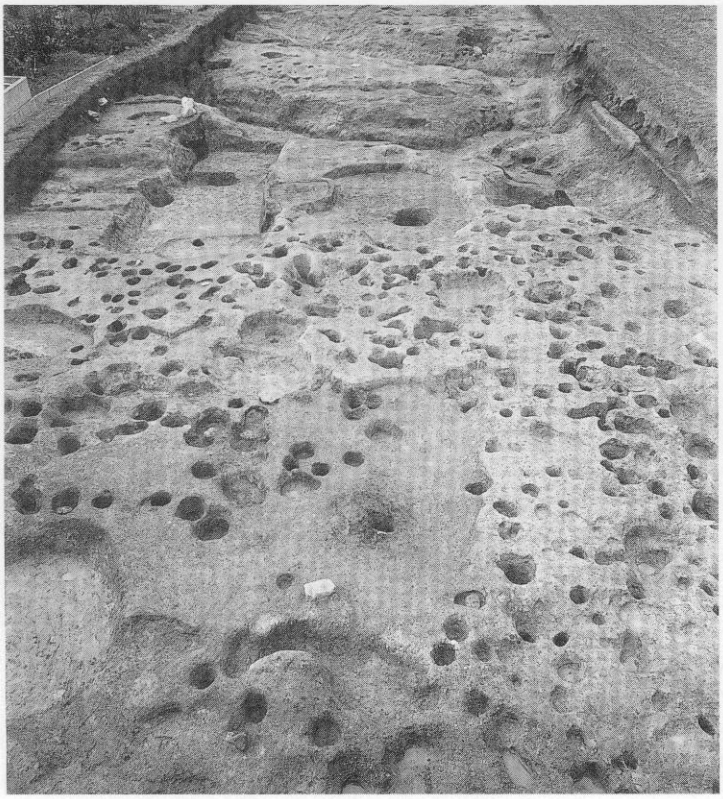
第117次調査区西半部（空中写真）



第117次調査区東半部（空中写真）



第117次調査区全景（西から）



第117次調査区全景（東から）

溝SD3400（北東から）

溝SD3430・3440（北東から）

井戸SE3370（南から）

井戸SE3375(東から)

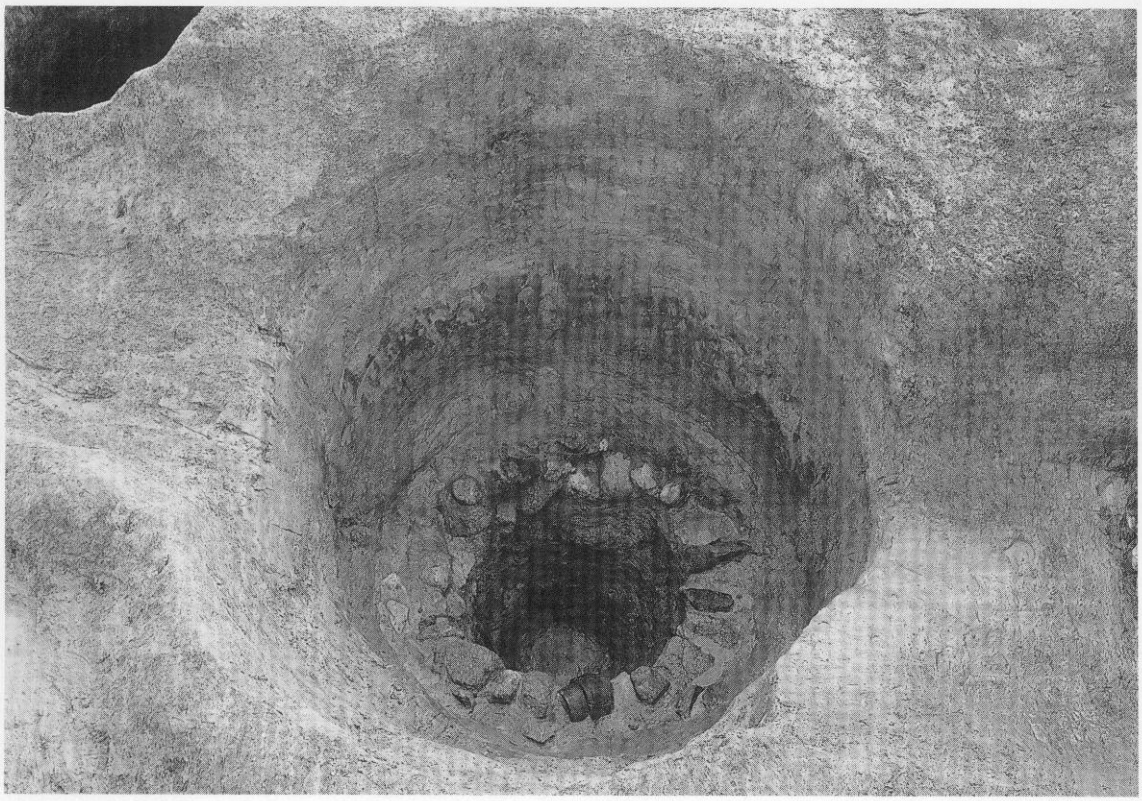
井戸SE3380・3385(北から)

井戸SE3380（北から）

井戸SE3390（東から）

井戸ＳＥ3395（南から）

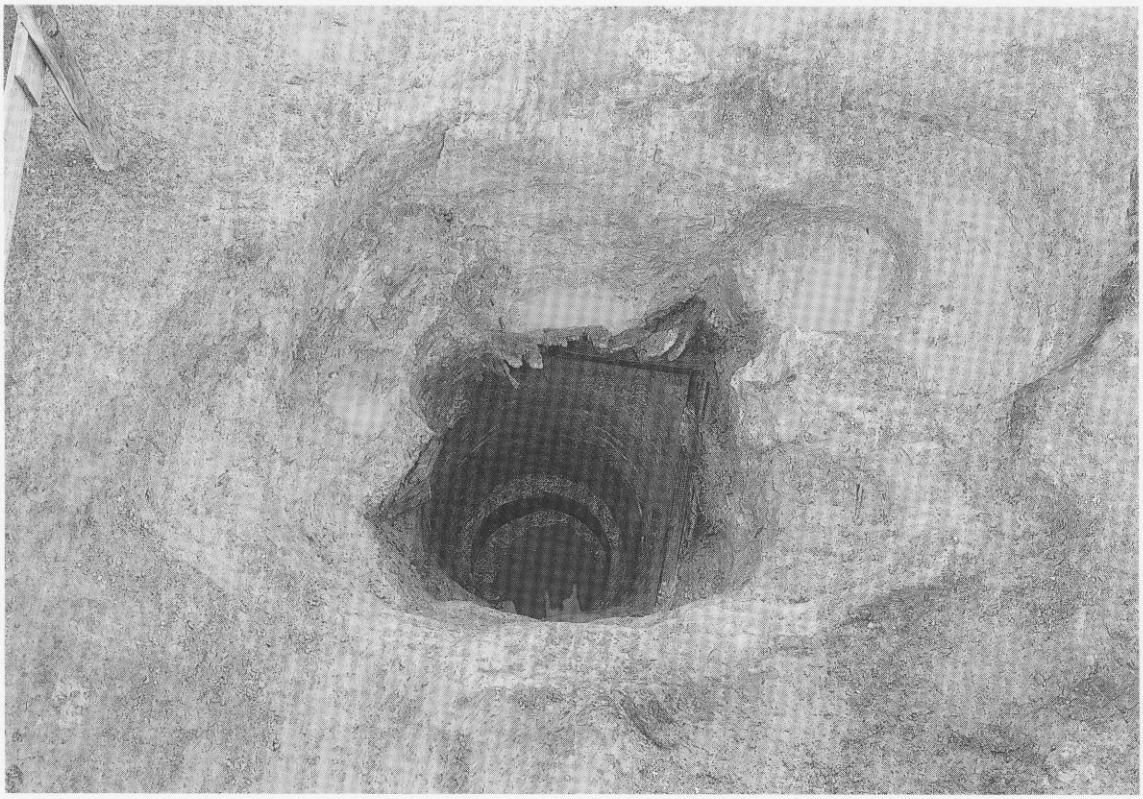
井戸SE3405（北東から）



井戸SE3410（西から）

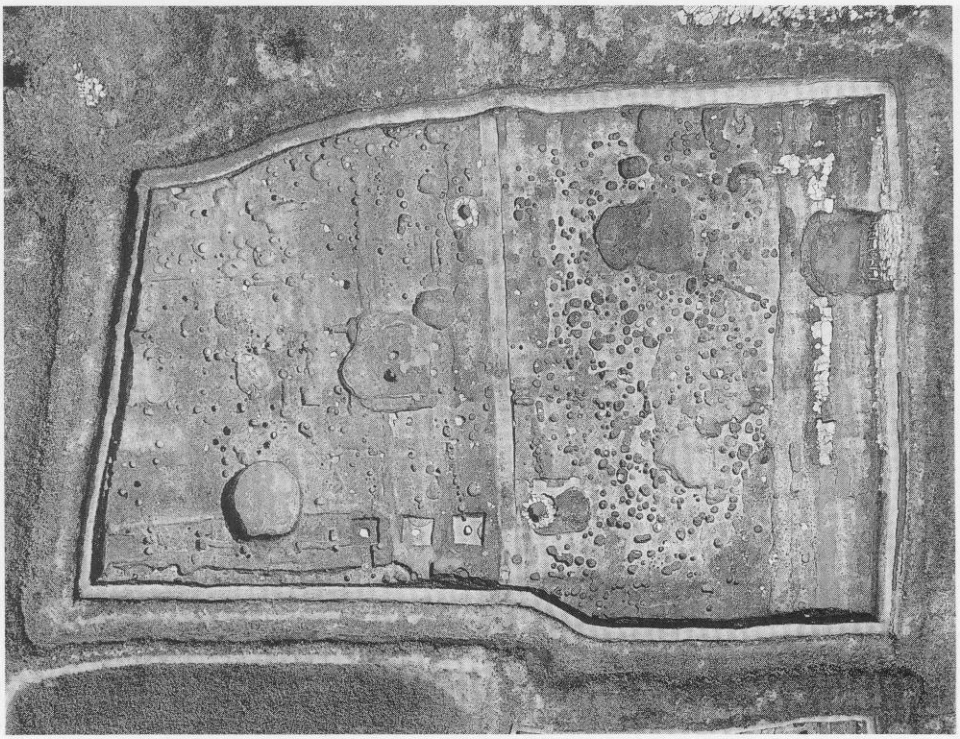
井戸SE3410（南東から）

井戸SE3415・3420（北から）

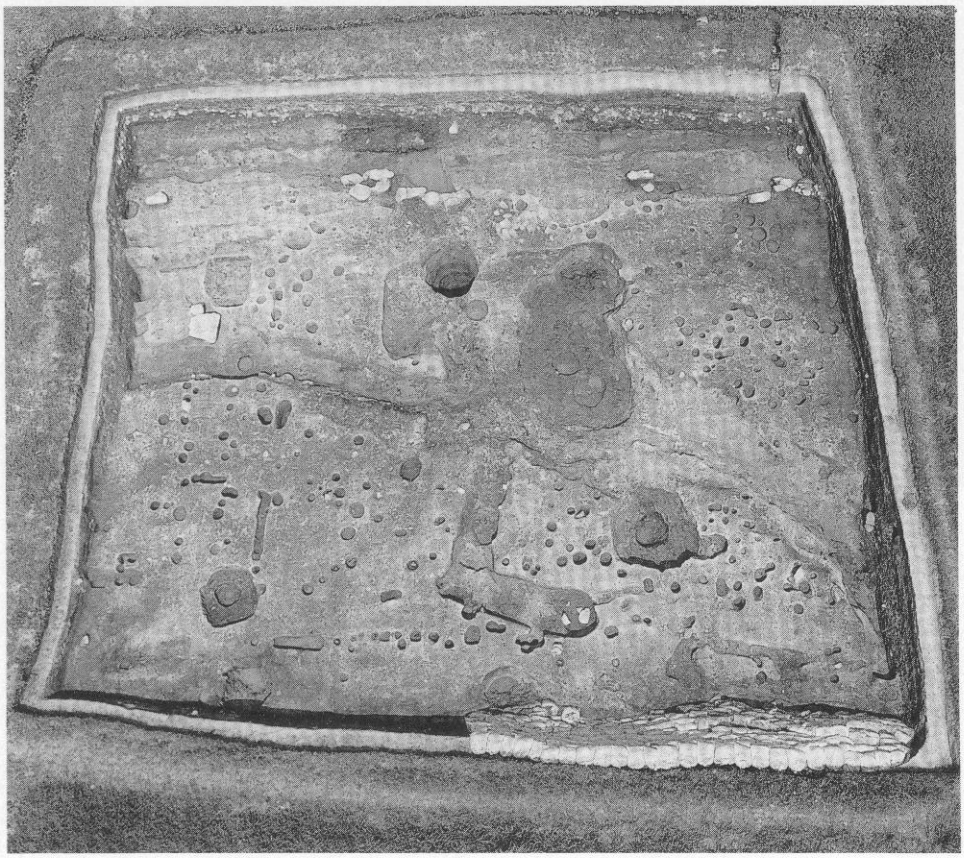


井戸SE3441（南から）

第119次調査区全景（空中写真）

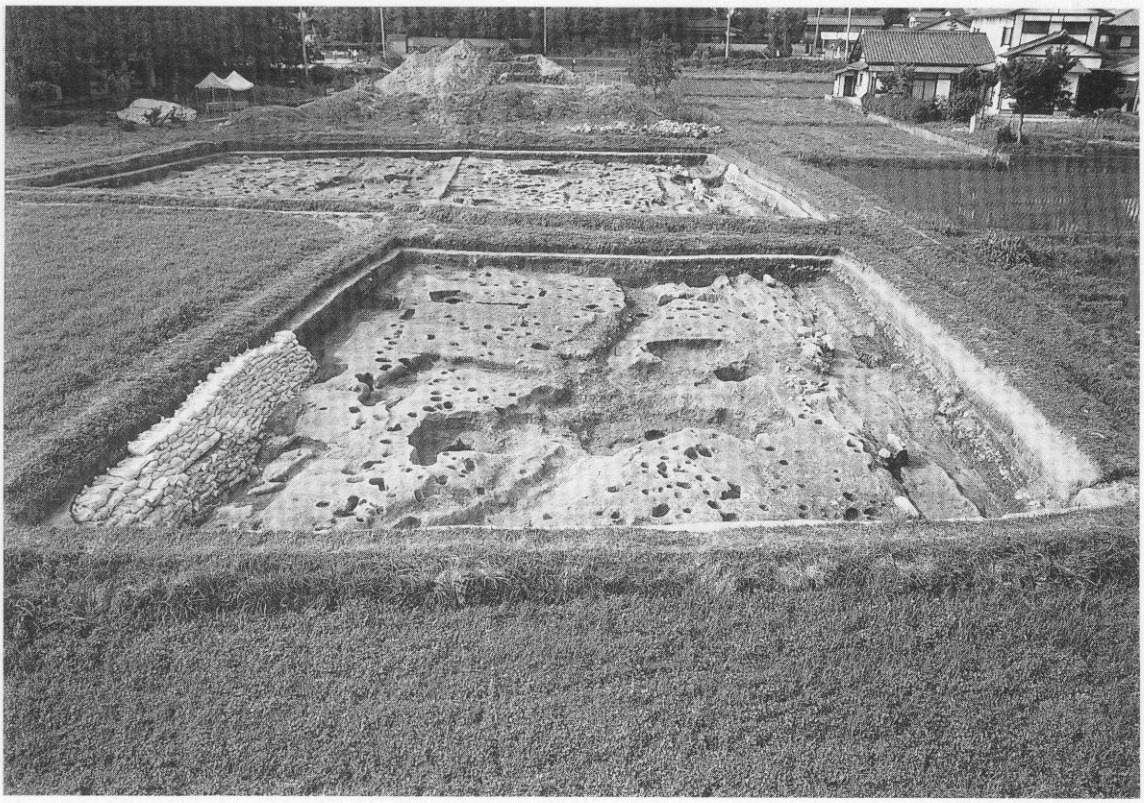


第119次調査北区全景（空中写真）



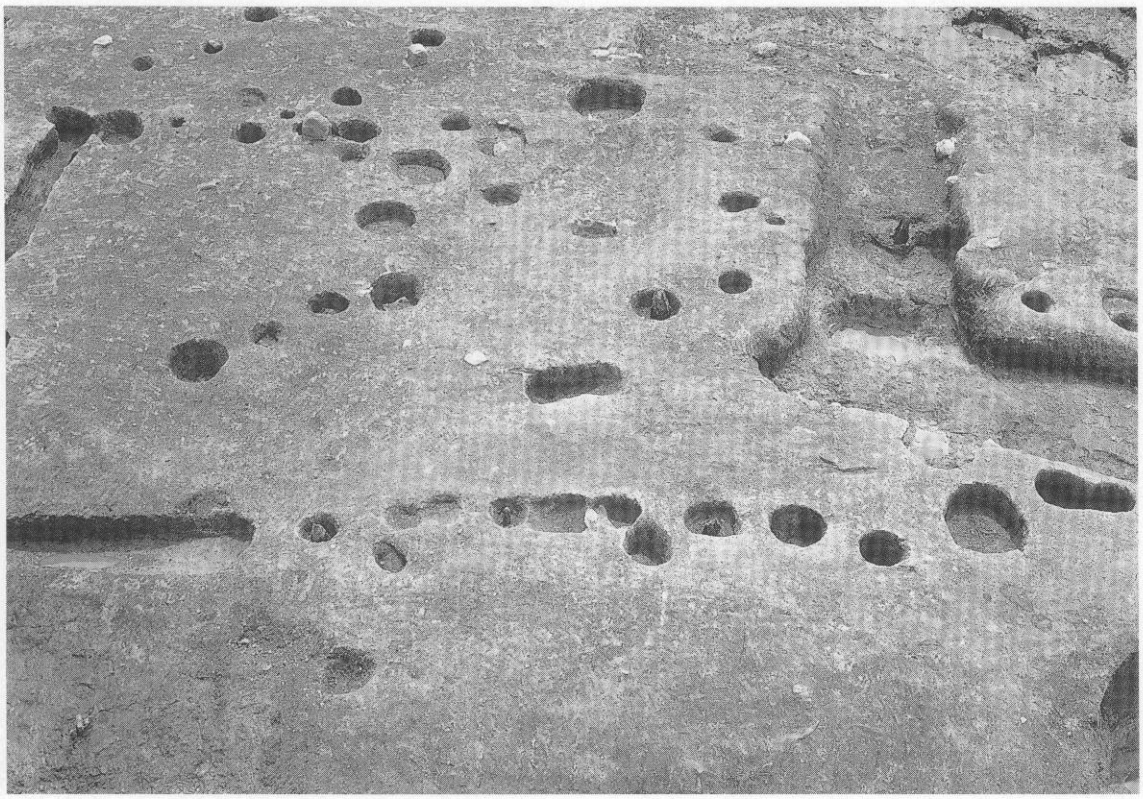
第119次調査南区全景（空中写真）

第119次調査区全景（北から）



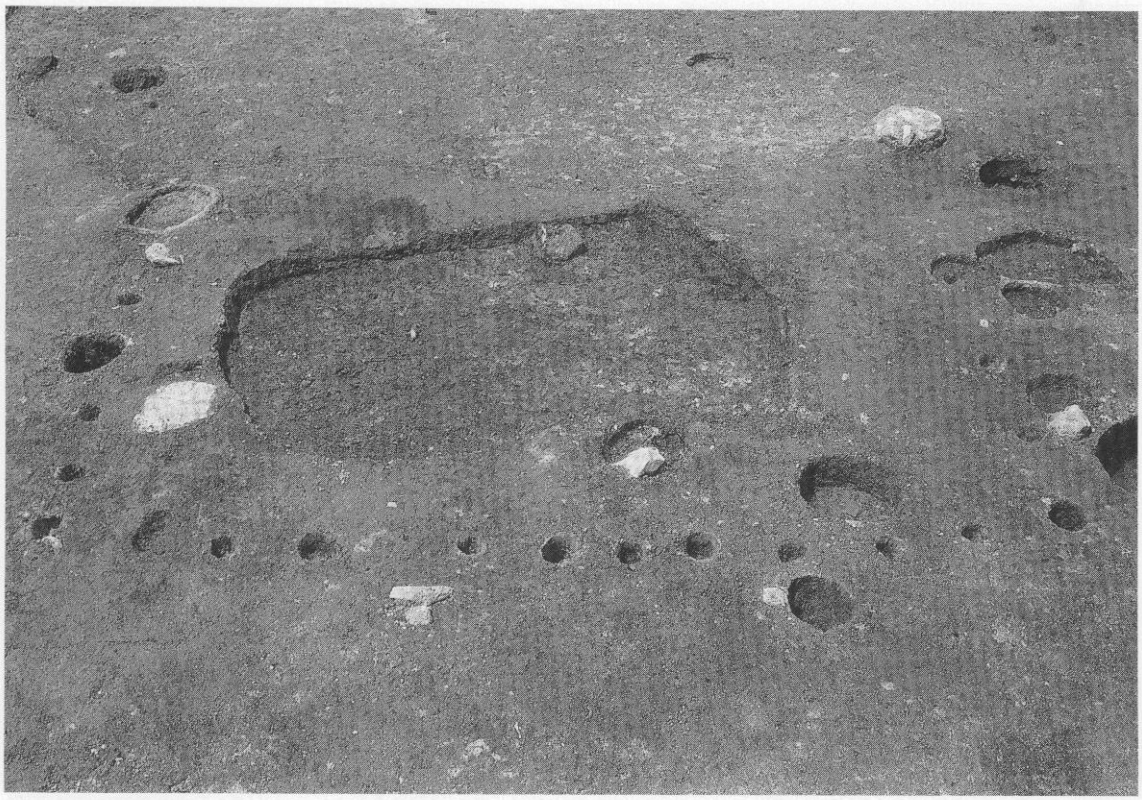
第119次調査区全景（南から）

礎石建物SB3460・柵SA3527（北から）

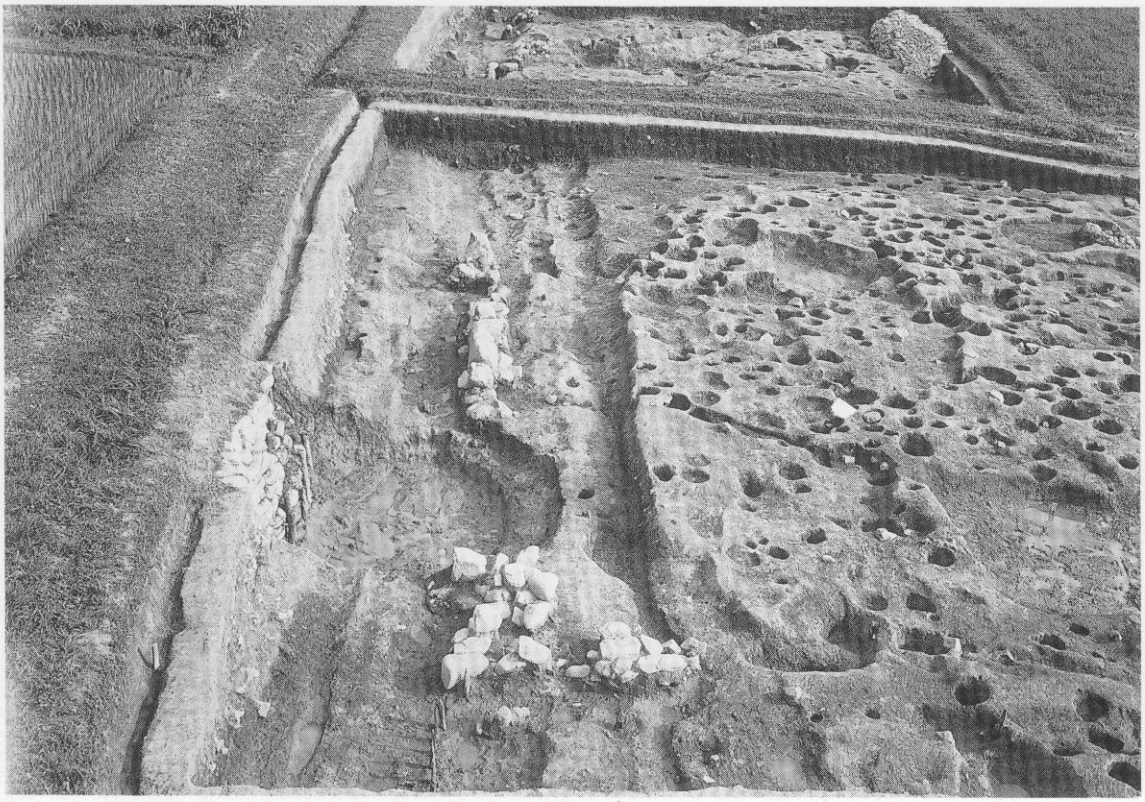


掘立柱建物SB3461（西から）

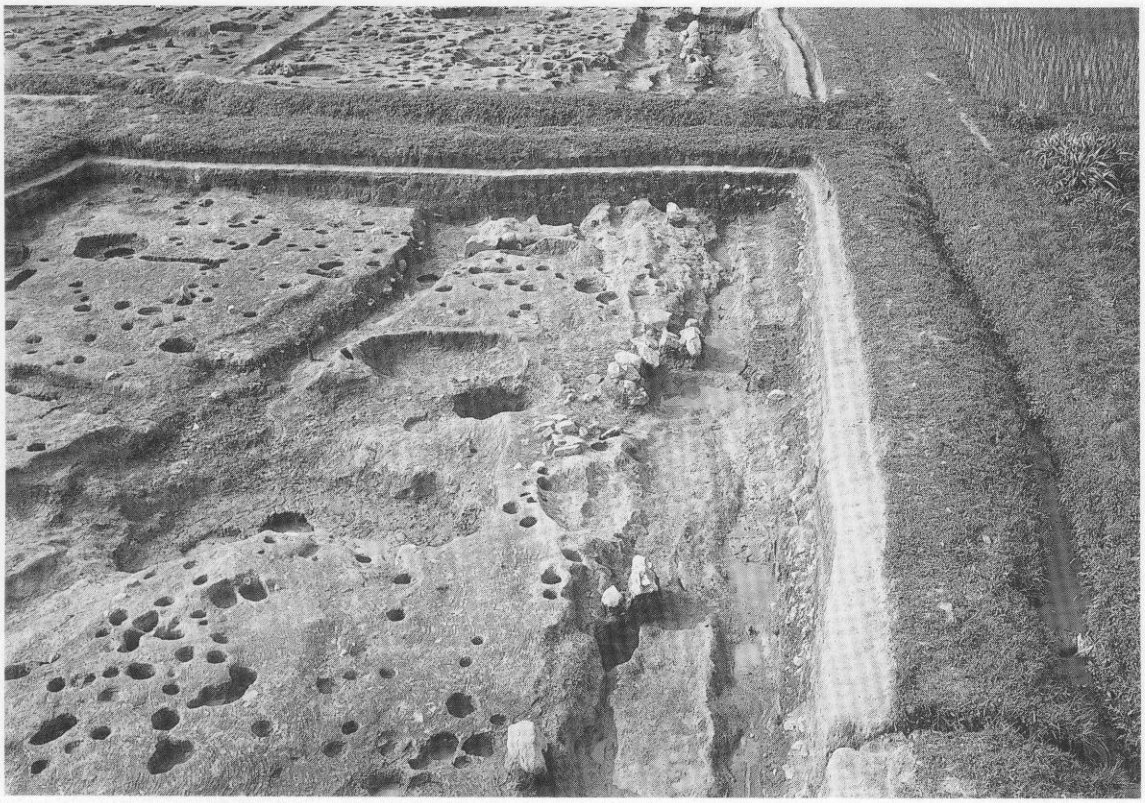
掘立柱建物ＳＢ3565（南から）



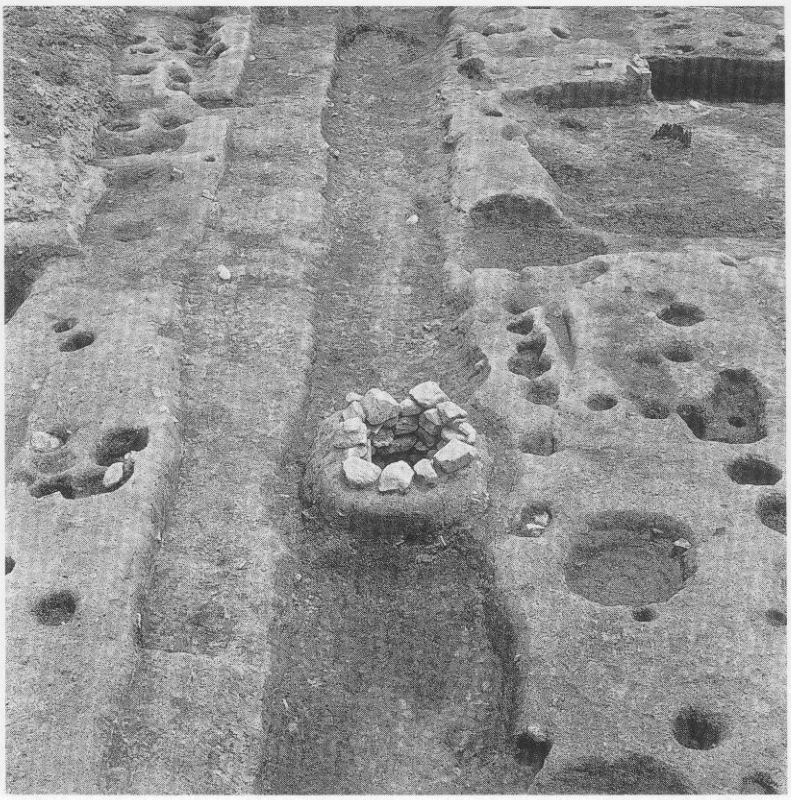
柵SA3561（西から）



溝SD1230・3520 $\frac{A}{B}$（北から）

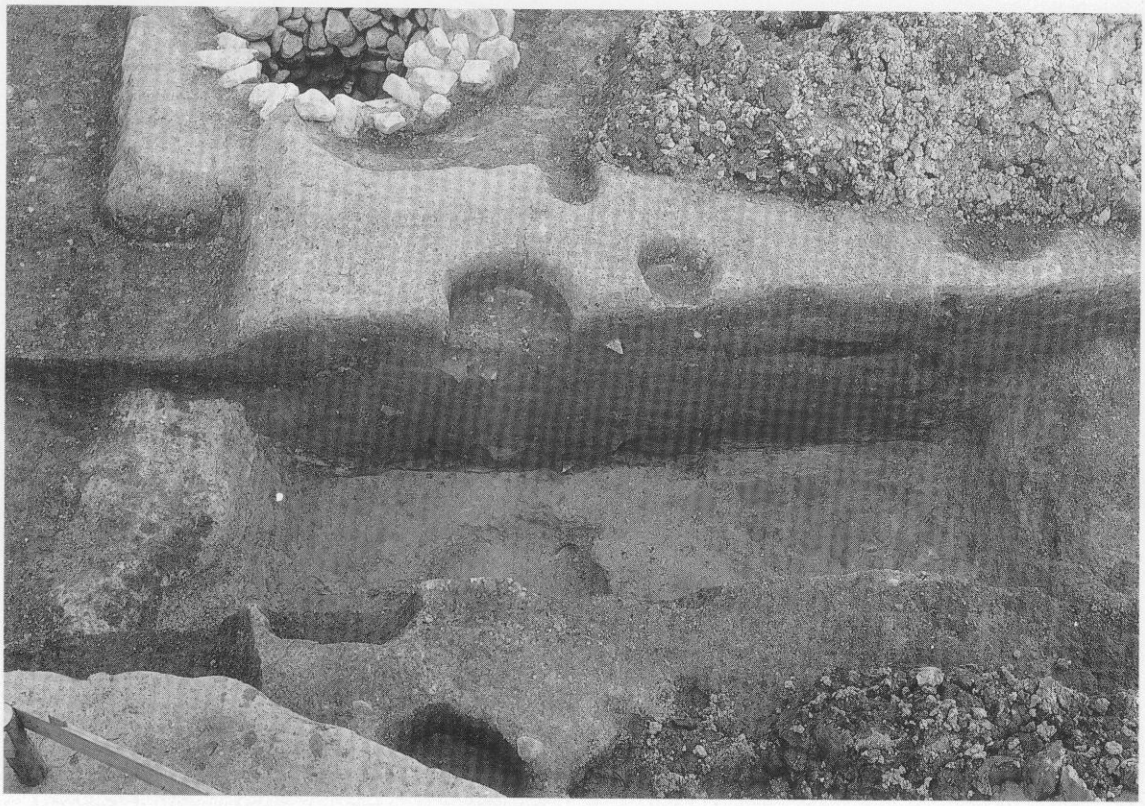


溝SD1230・3520 $\frac{A}{B}$（南から）

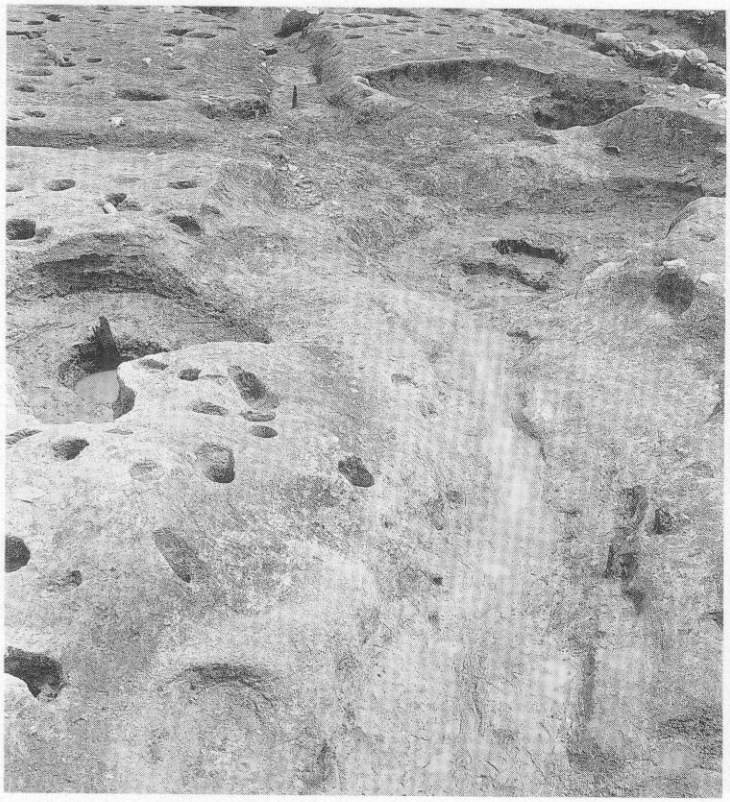


溝SD1300（北から）

溝SD3500（北から）

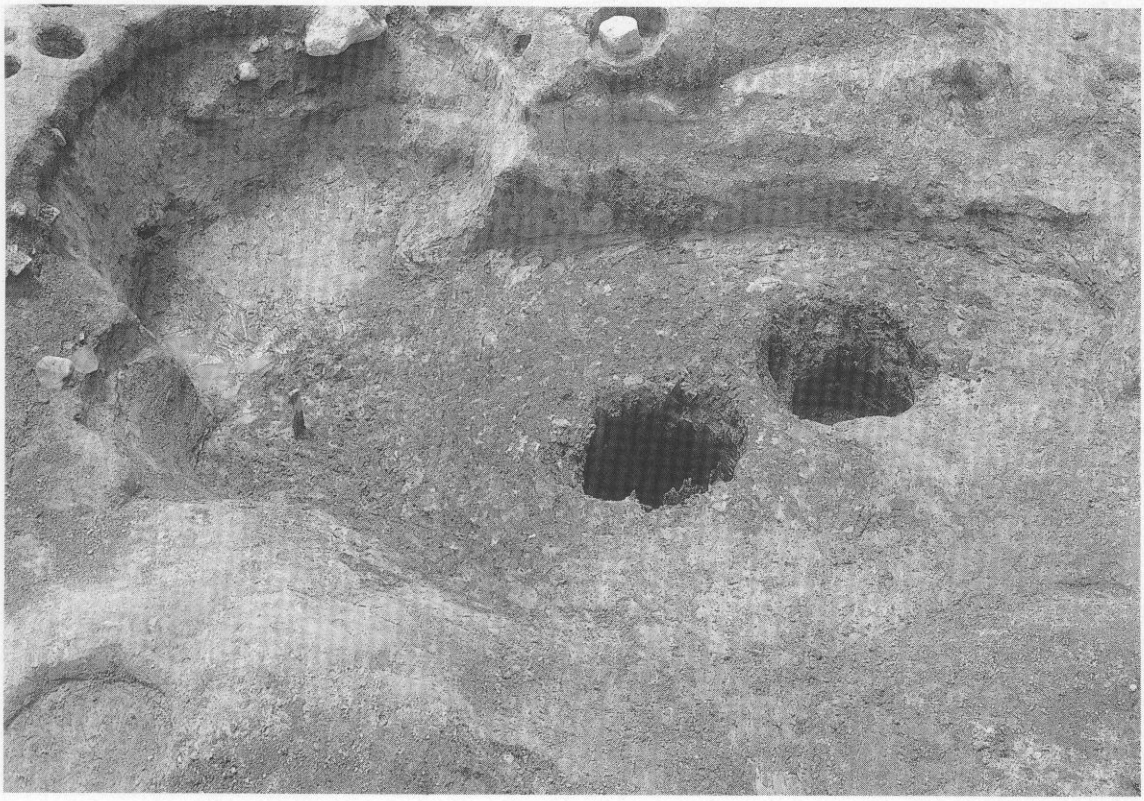


溝SD3500（南から）



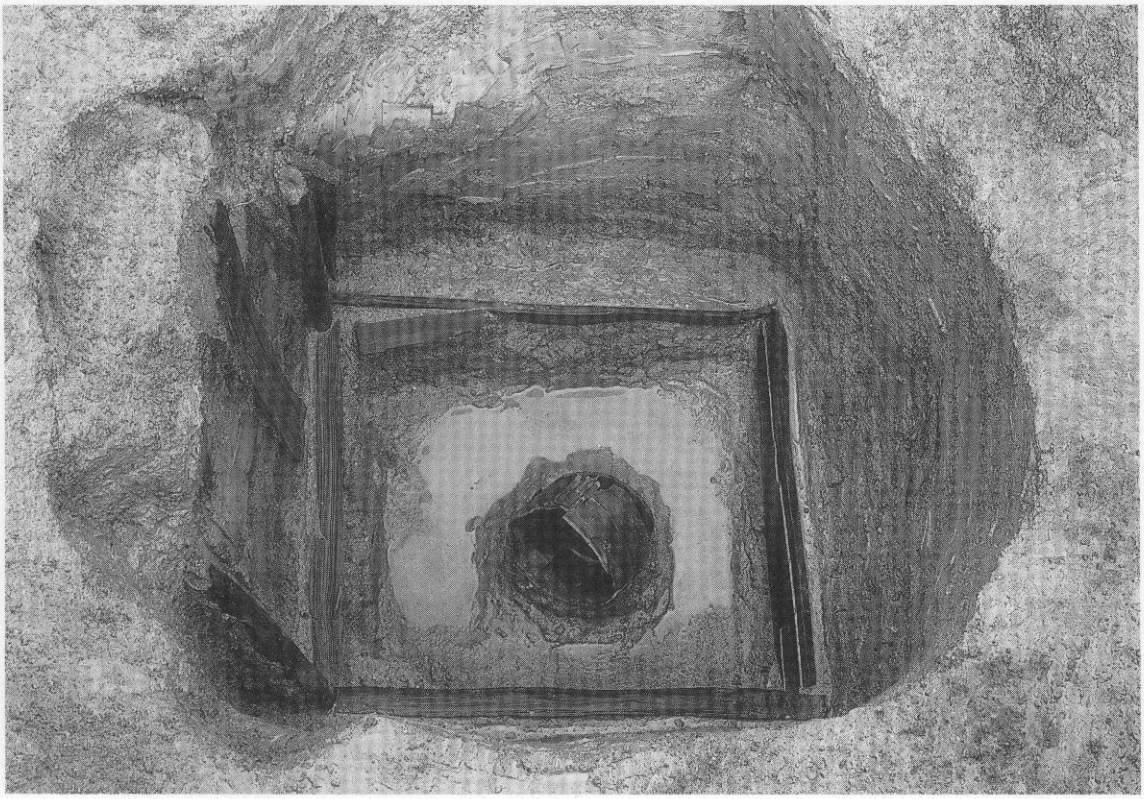
溝SD3550（南から）

井戸SE3465（南から）

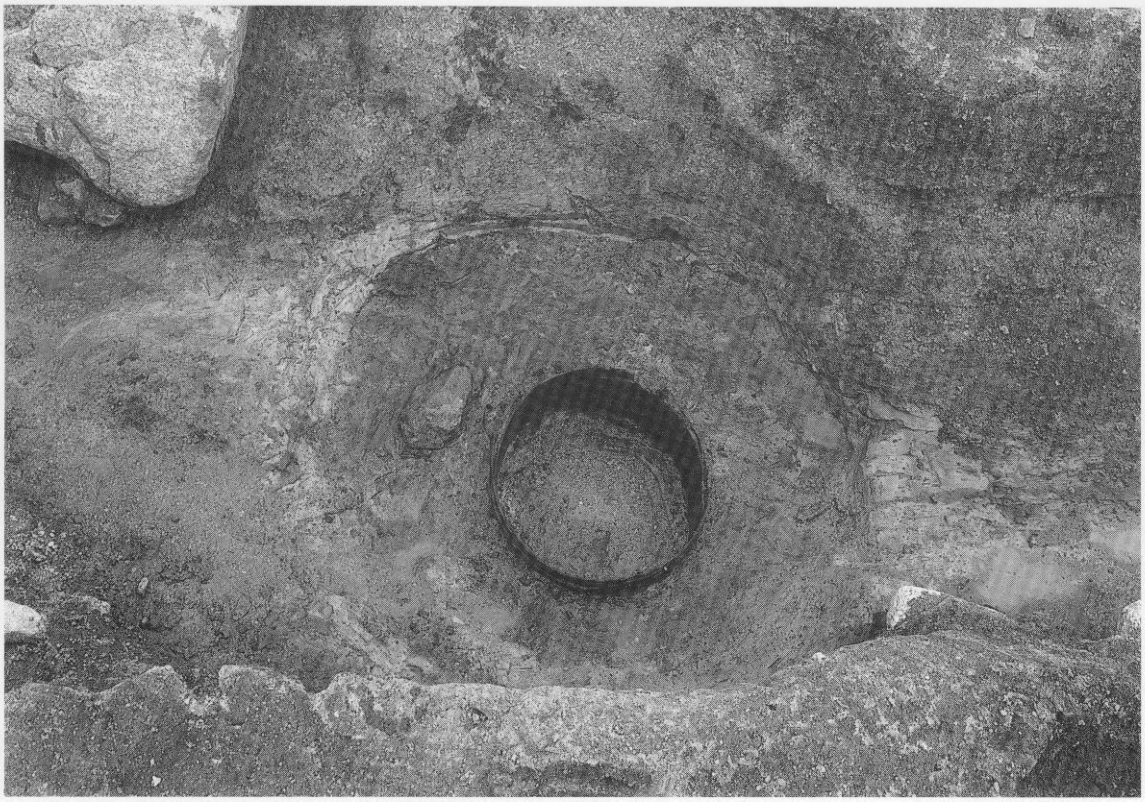


井戸SE3470・3475（南から）

井戸SE3470（南から）



井戸SE3480（西から）



井戸SE3490（西から）

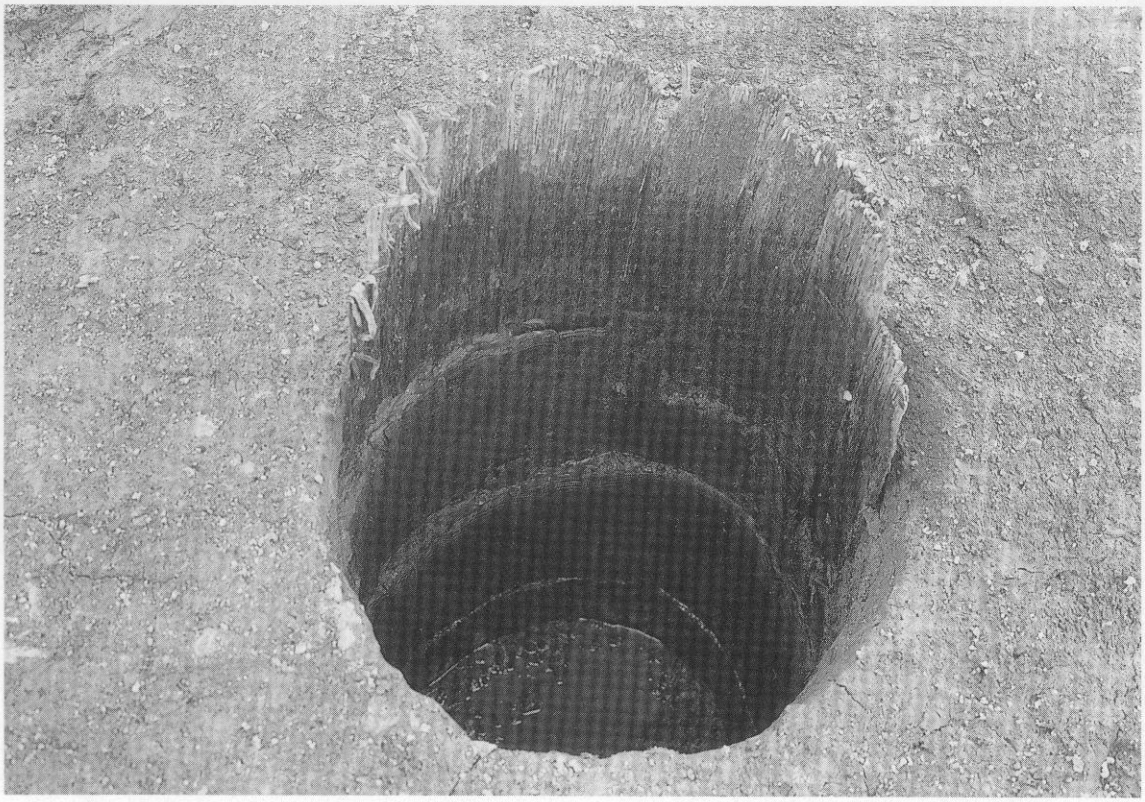
井戸SE3495（北から）

井戸SE3505（西から）

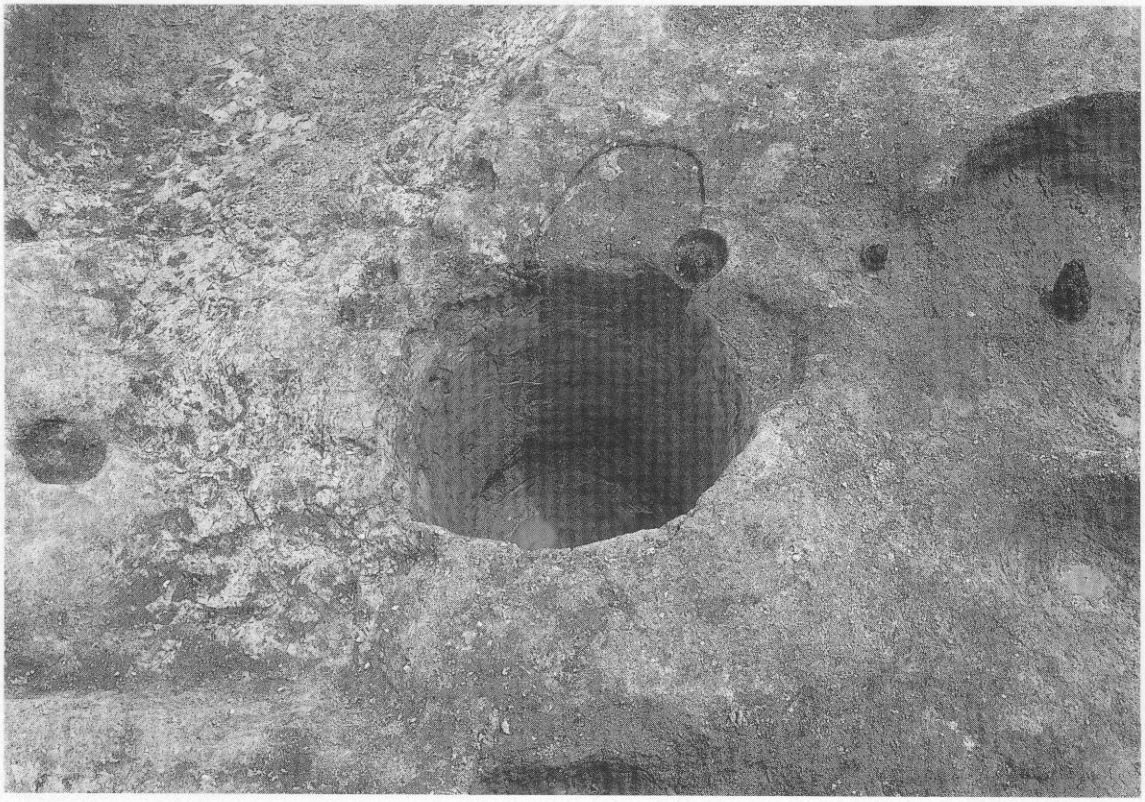
井戸SE3515（西から）

井戸SE3525（北から）

井戸SE3530（南から）



井戸SE3535（北から）



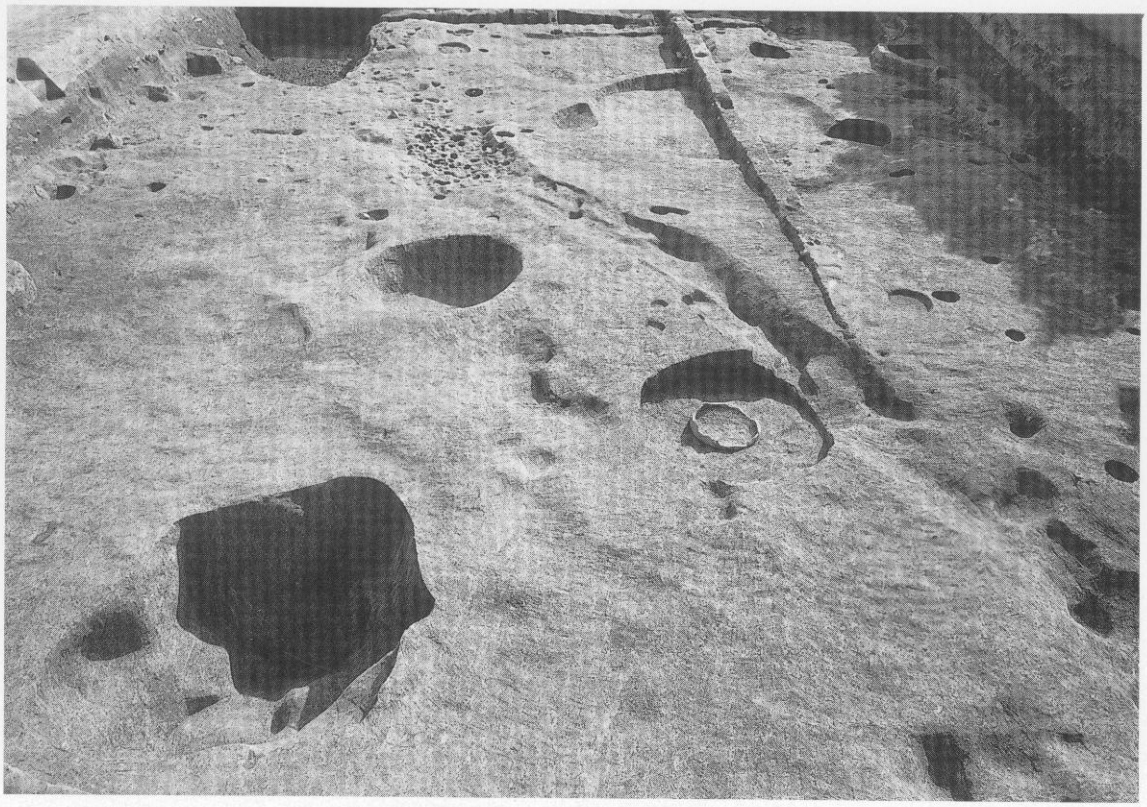
井戸SE3545（北から）

第120次調査区上層遺構全景（北から）

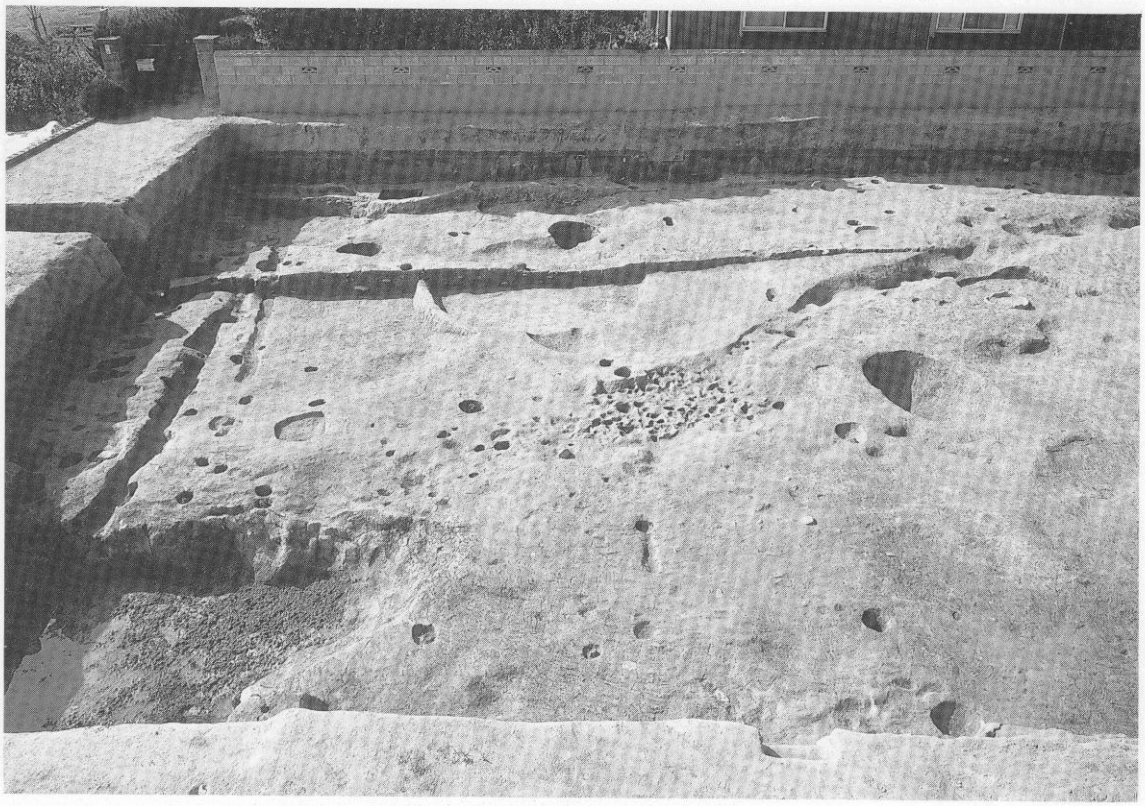
第120次調査区南半部中層遺構（東から）

第120次調査区中層遺構　柵SA3590・3595(南から)

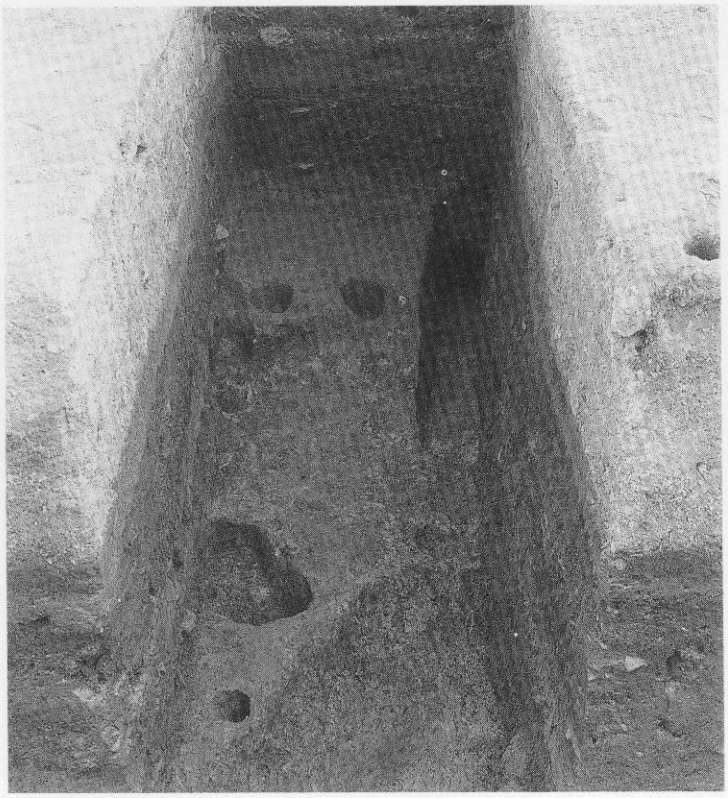
第120次調査区下層遺構全景(南から)



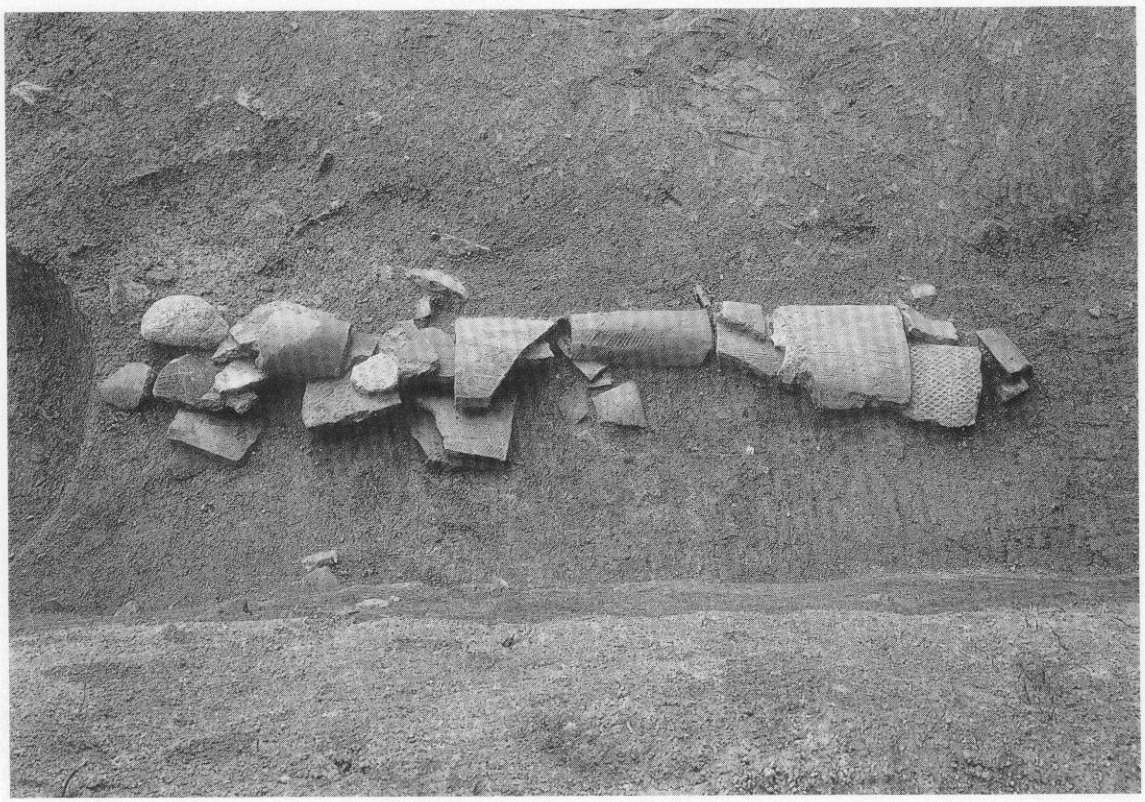
第120次調査区下層遺構全景（北から）



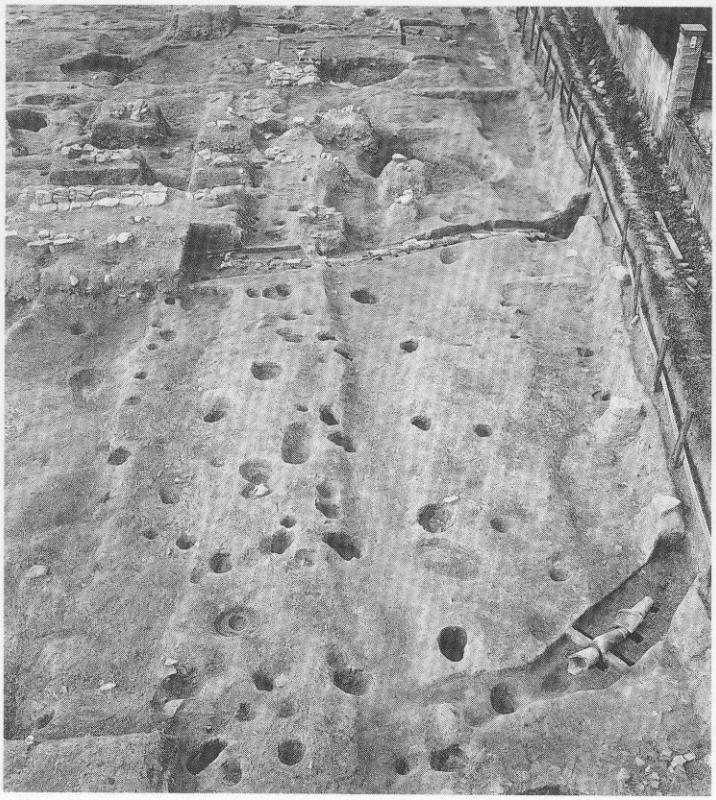
第120次調査区南半部下層遺構　溝SD3605など（東から）



第120次調査区南側拡張区
（北から）

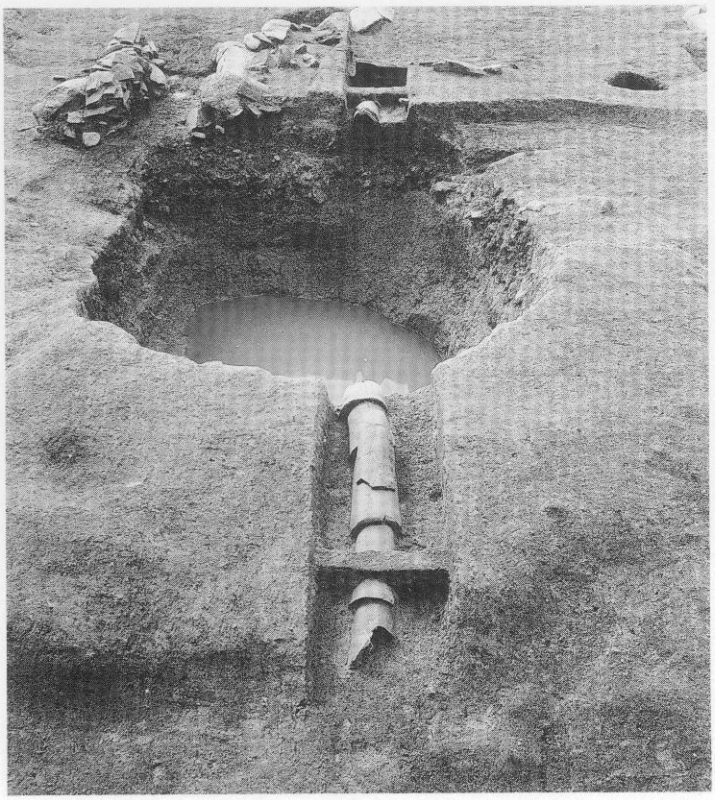


暗渠状遺構SX3572（東から）

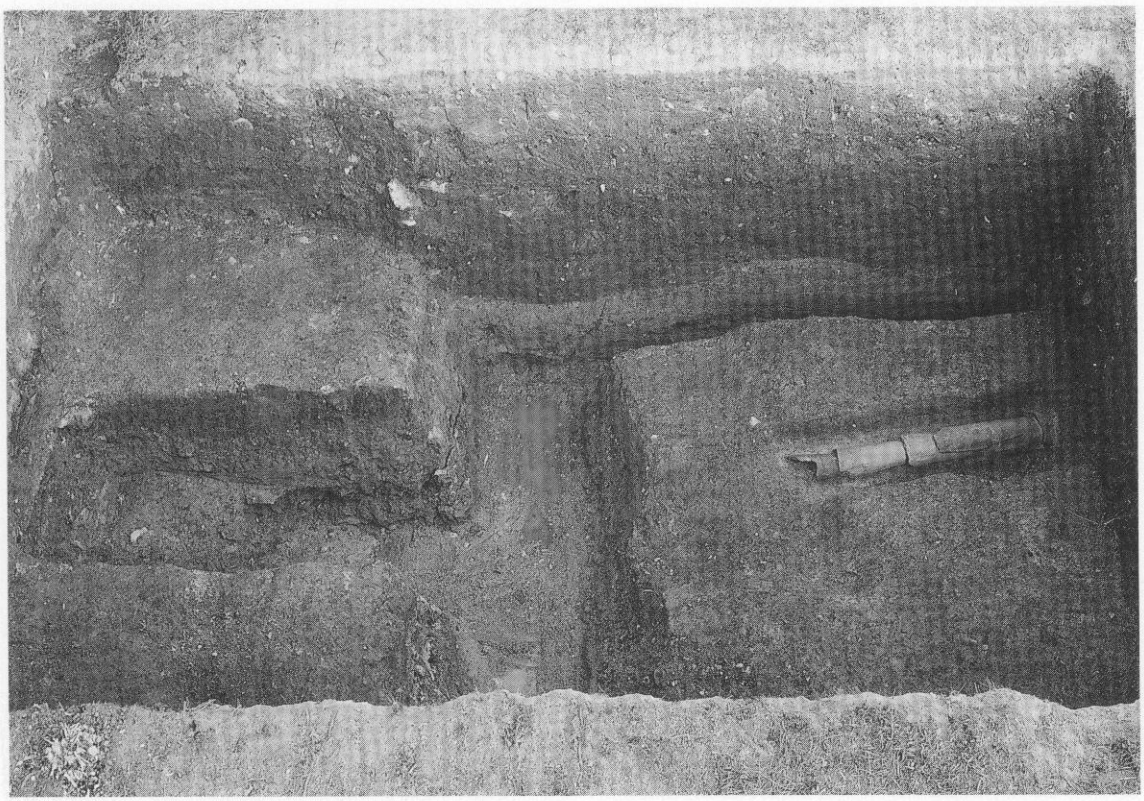


第70次調査区暗渠施設全景
（東から）

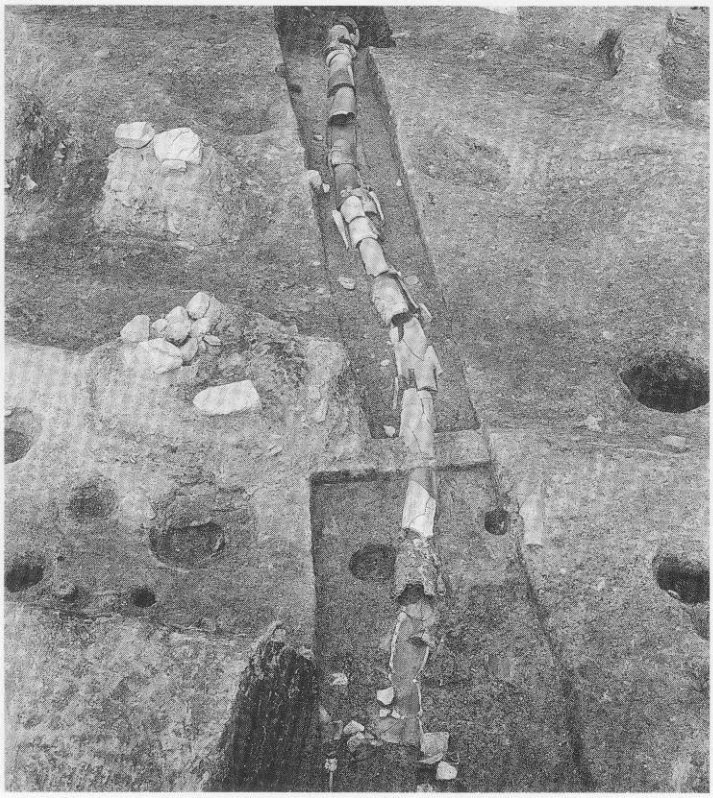
第70次調査区暗渠施設SX1832・1833（東から）



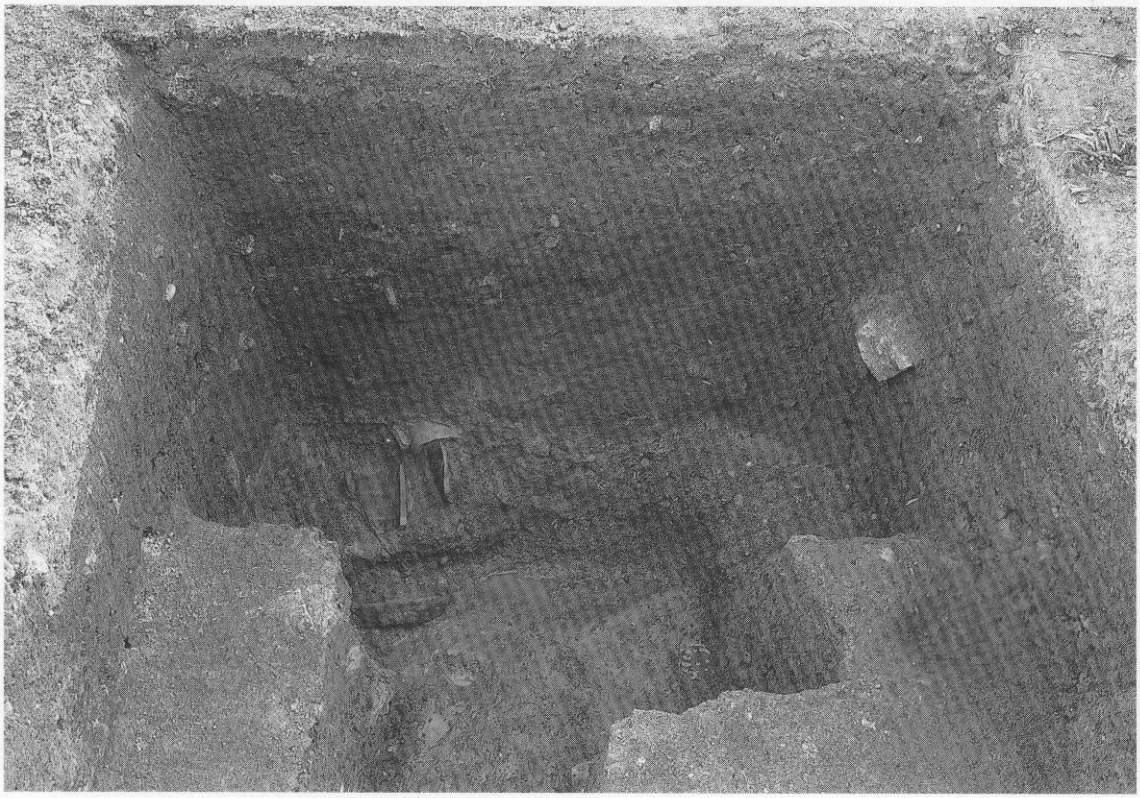
第70次調査区暗渠施設ＳＸ1833
（北から）



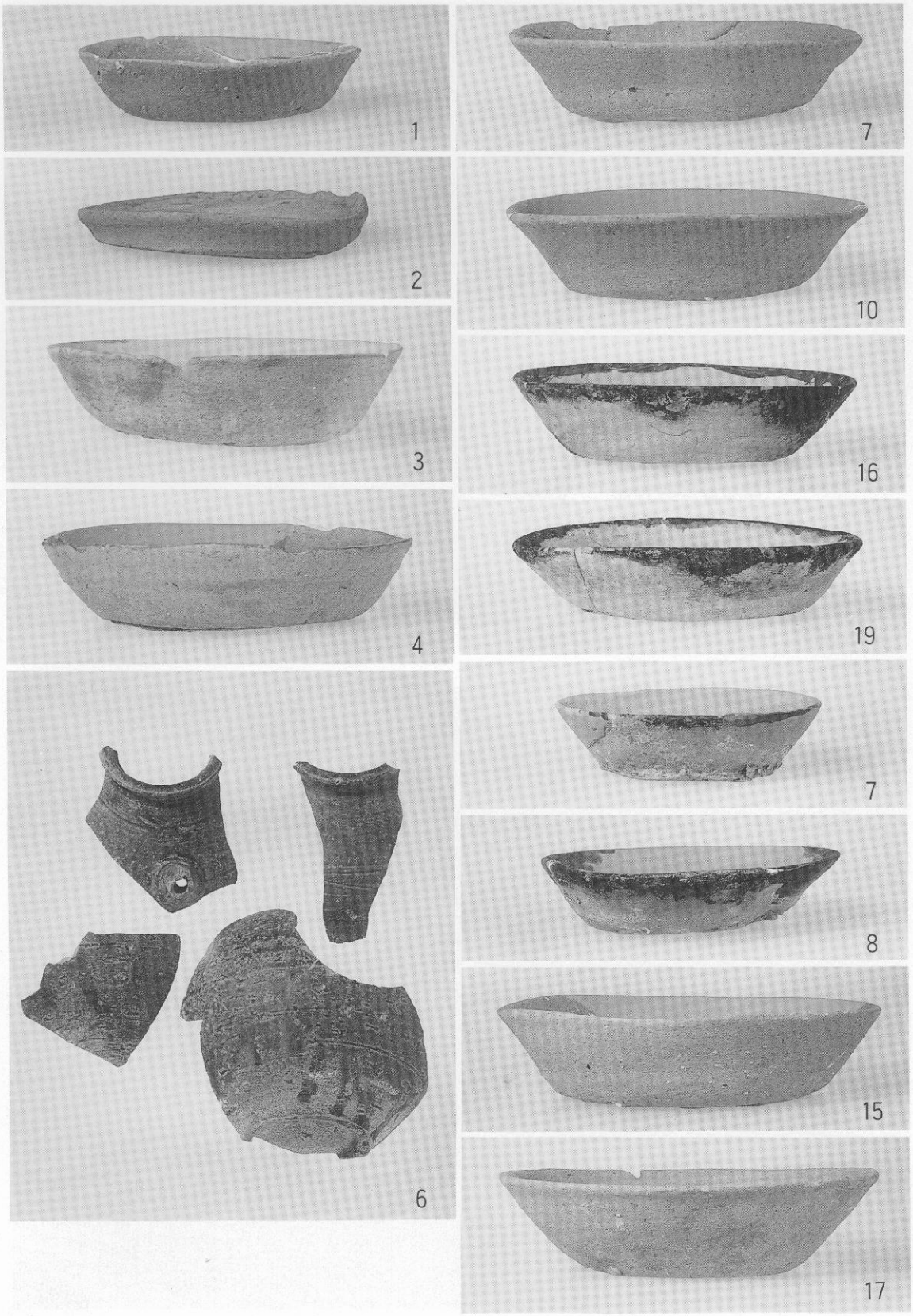
第70次補足調査区暗渠施設ＳＸ1833と溝ＳＤ1850（西から）



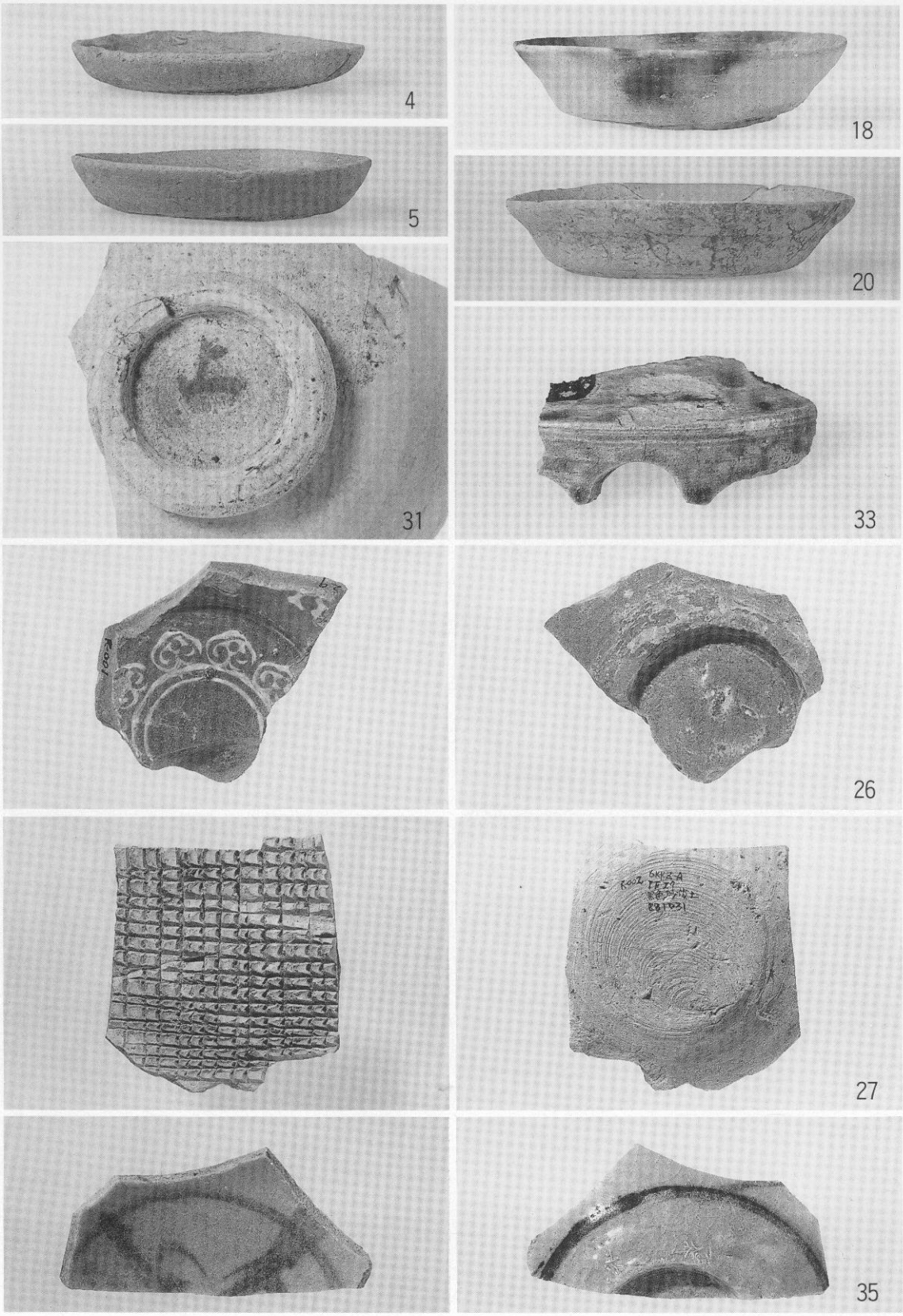
第70次調査区
暗渠施設SX1834
（北から）



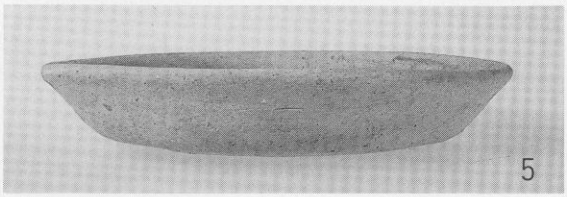
第70次補足調査区暗渠施設ＳＸ1834と溝ＳＤ1850（北から）

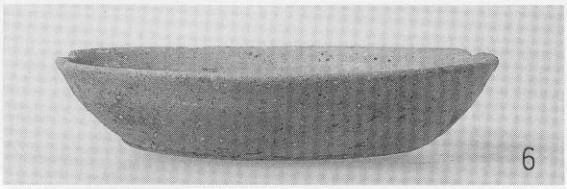


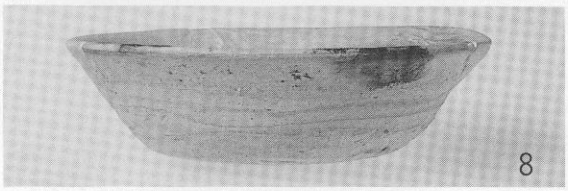
第115次調査　SD3333・3334・3335・3376・3350
黒色粘質土層、茶褐色粘質土層出土土器・陶磁器

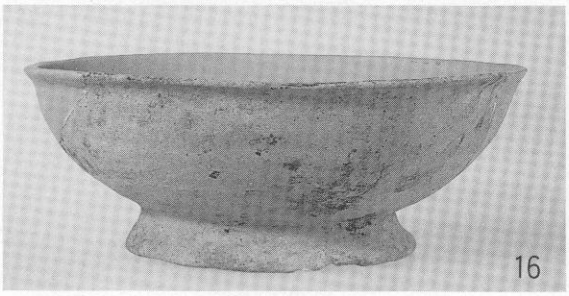


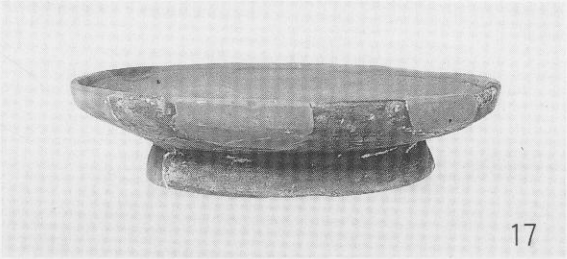
第115次調査　黒色砂質土層、茶褐色土層、暗褐色土層
出土土器・陶磁器

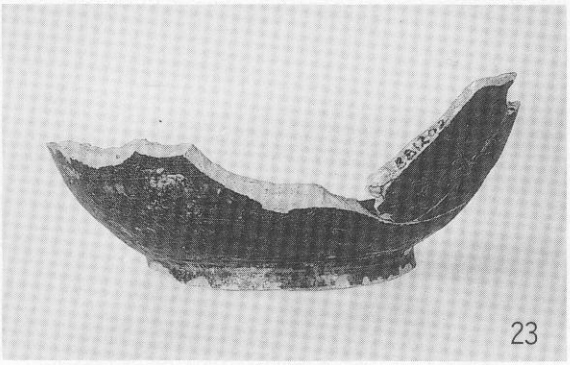




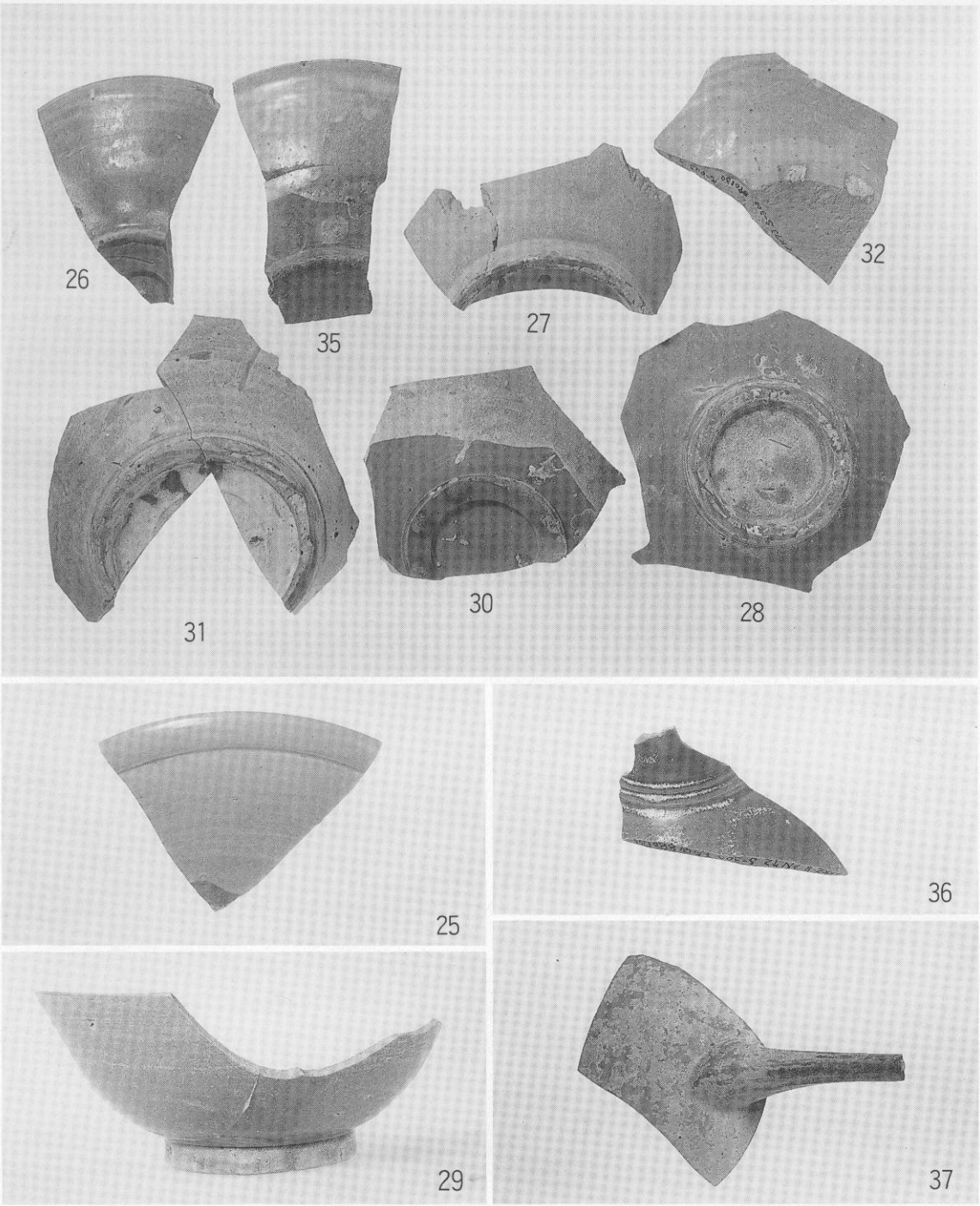




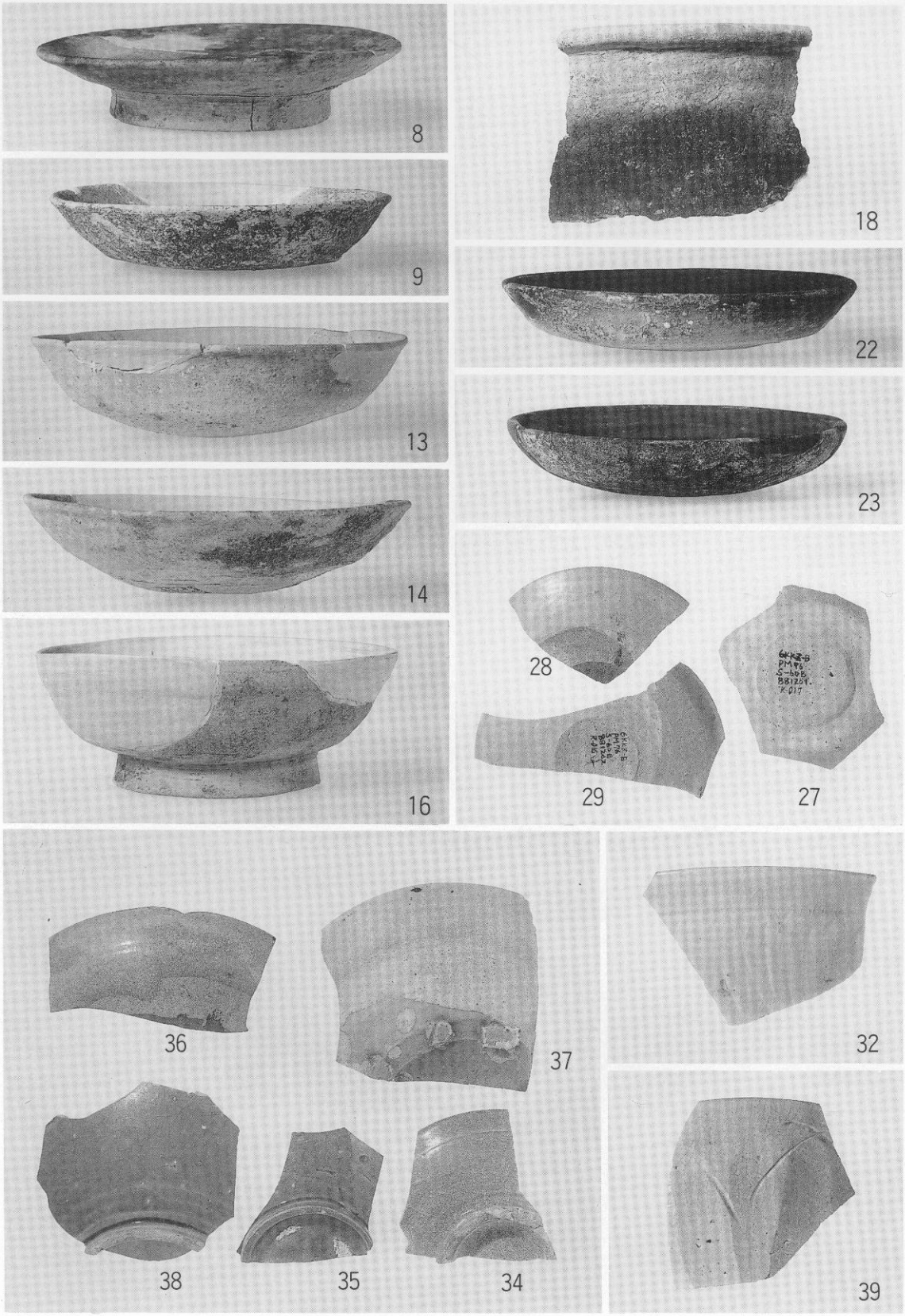




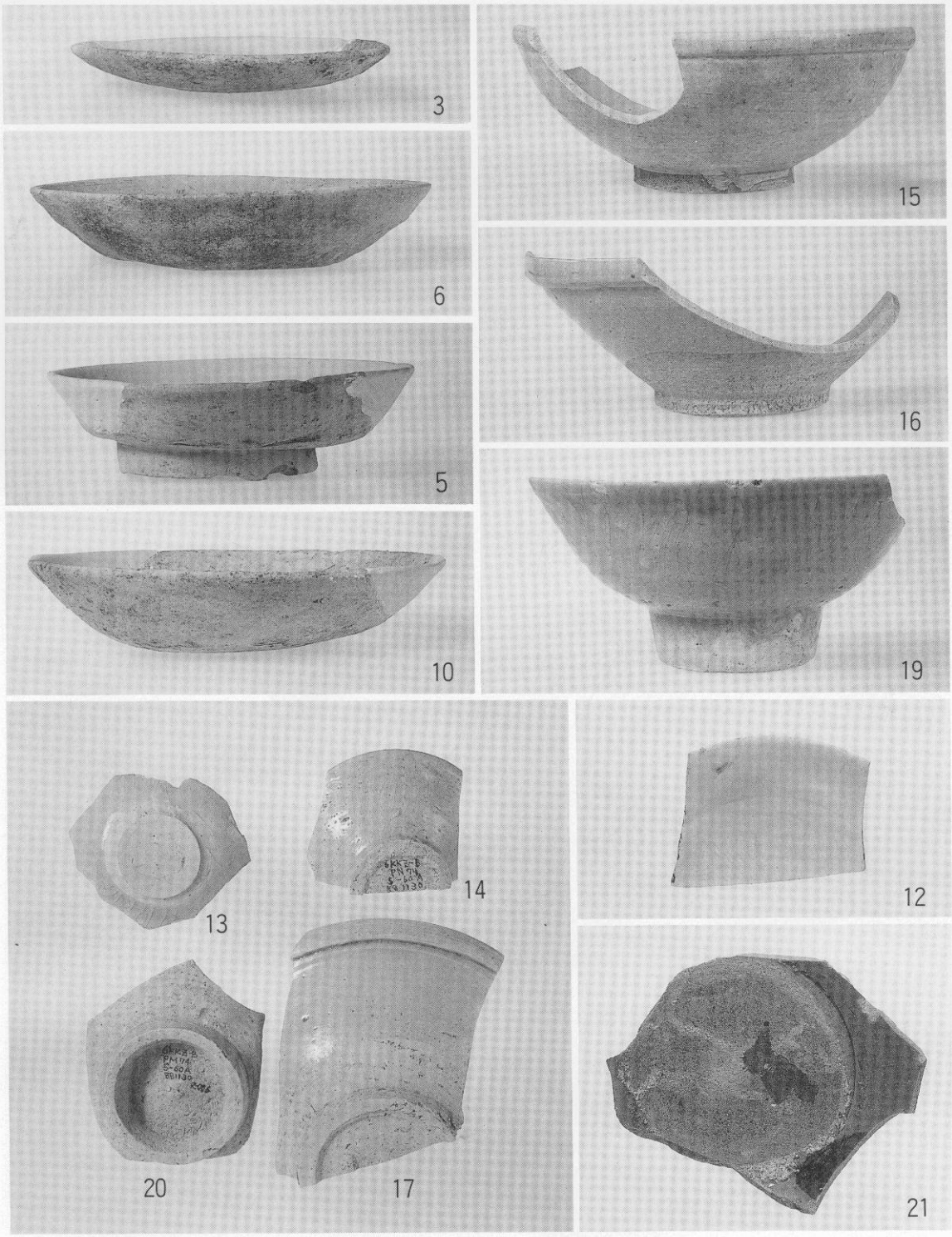
第117次調査　SD3400出土土器・陶器



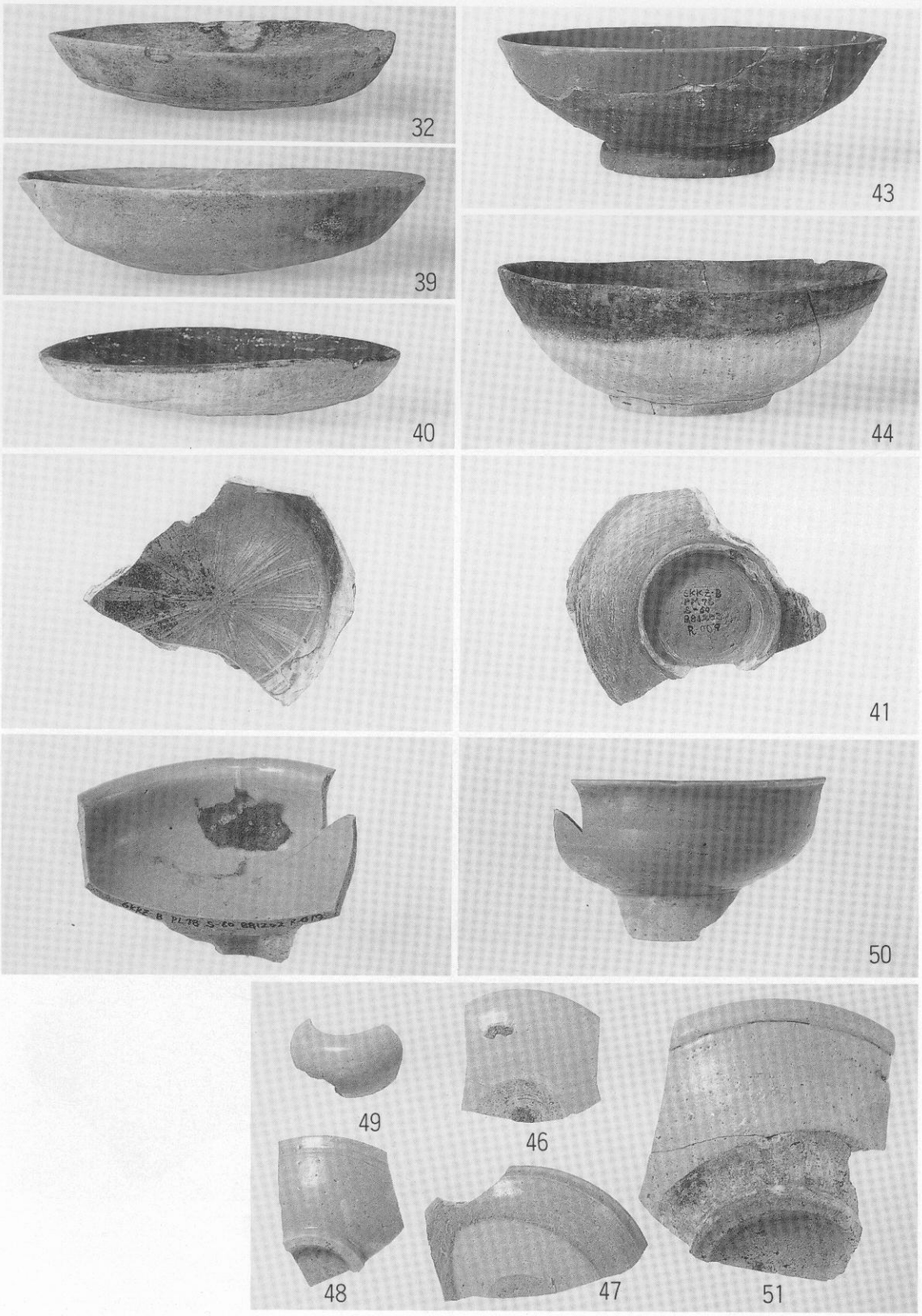
第117次調査　SD3400出土陶磁器



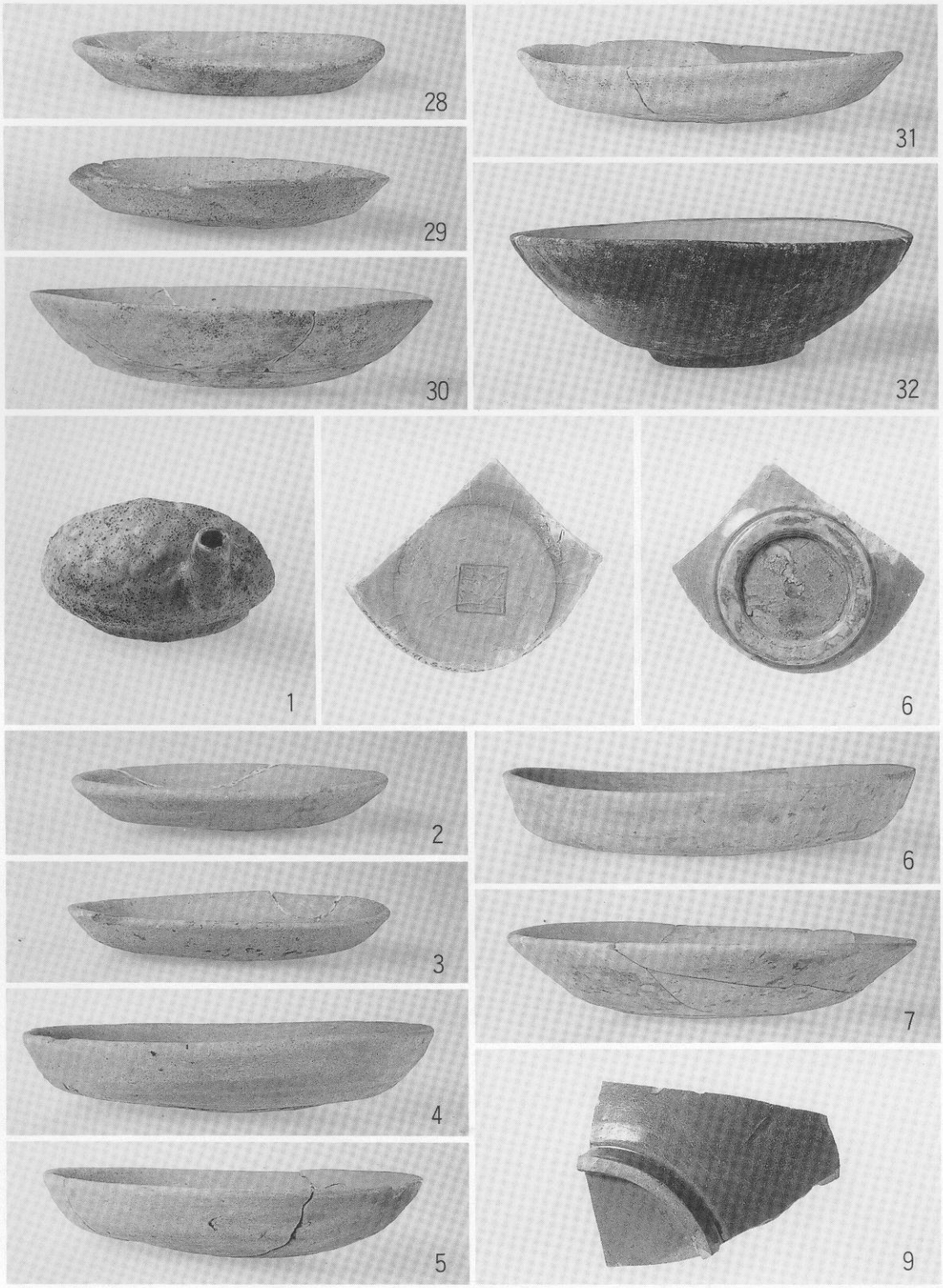
第117次調査　SD3430出土土器・陶磁器



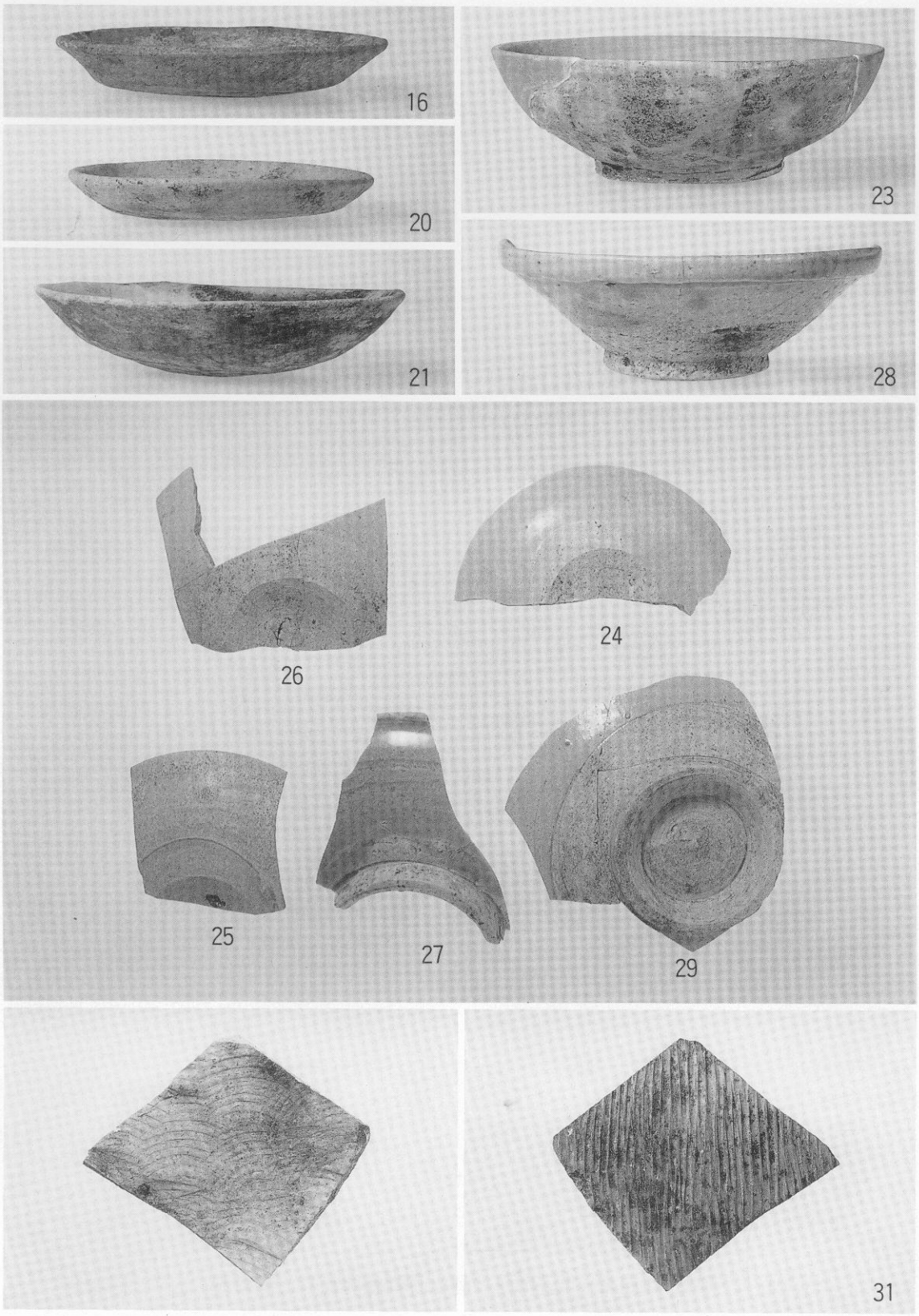
第117次調査　SD3440下層出土土器・陶磁器



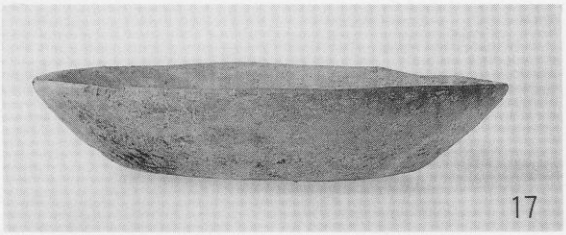
第117次調査　SD3440上層出土土器・陶磁器

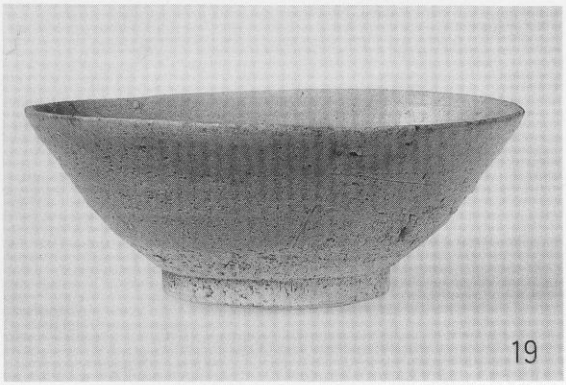


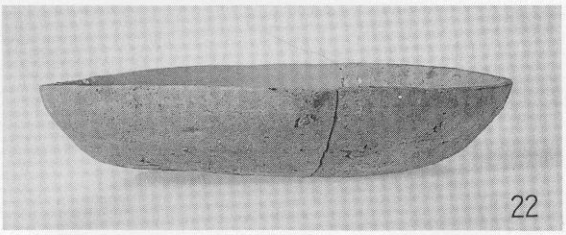
第117次調査　SE3390・3420・3425出土土器・陶磁器

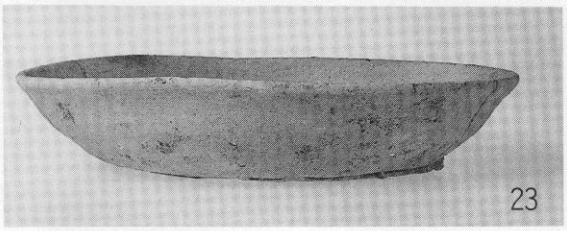


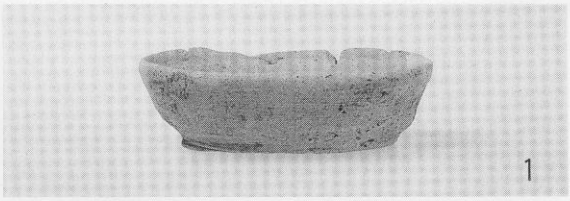
第117次調査　SK3401・3429出土土器・陶磁器

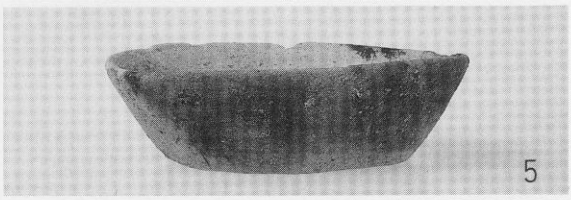


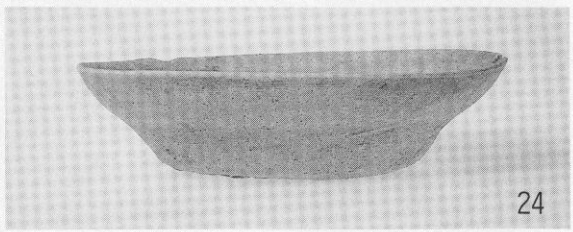


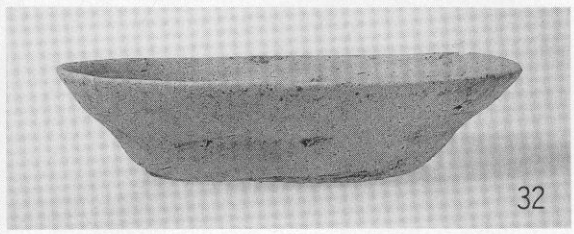


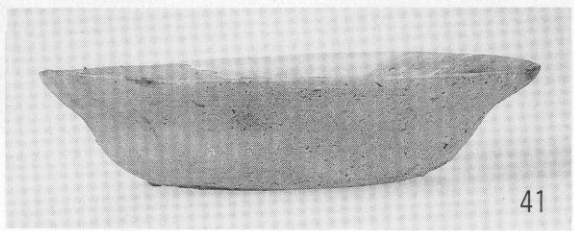




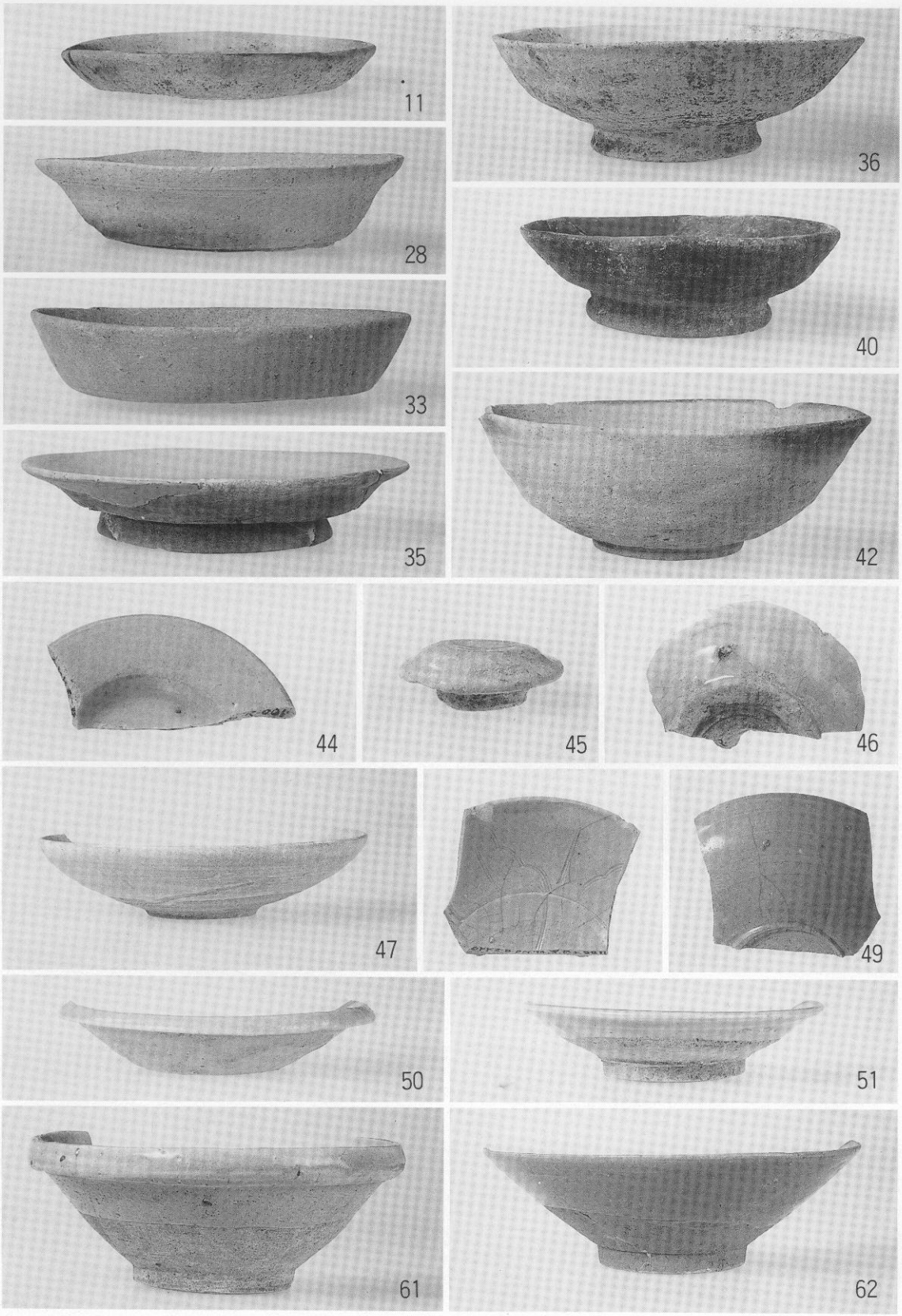




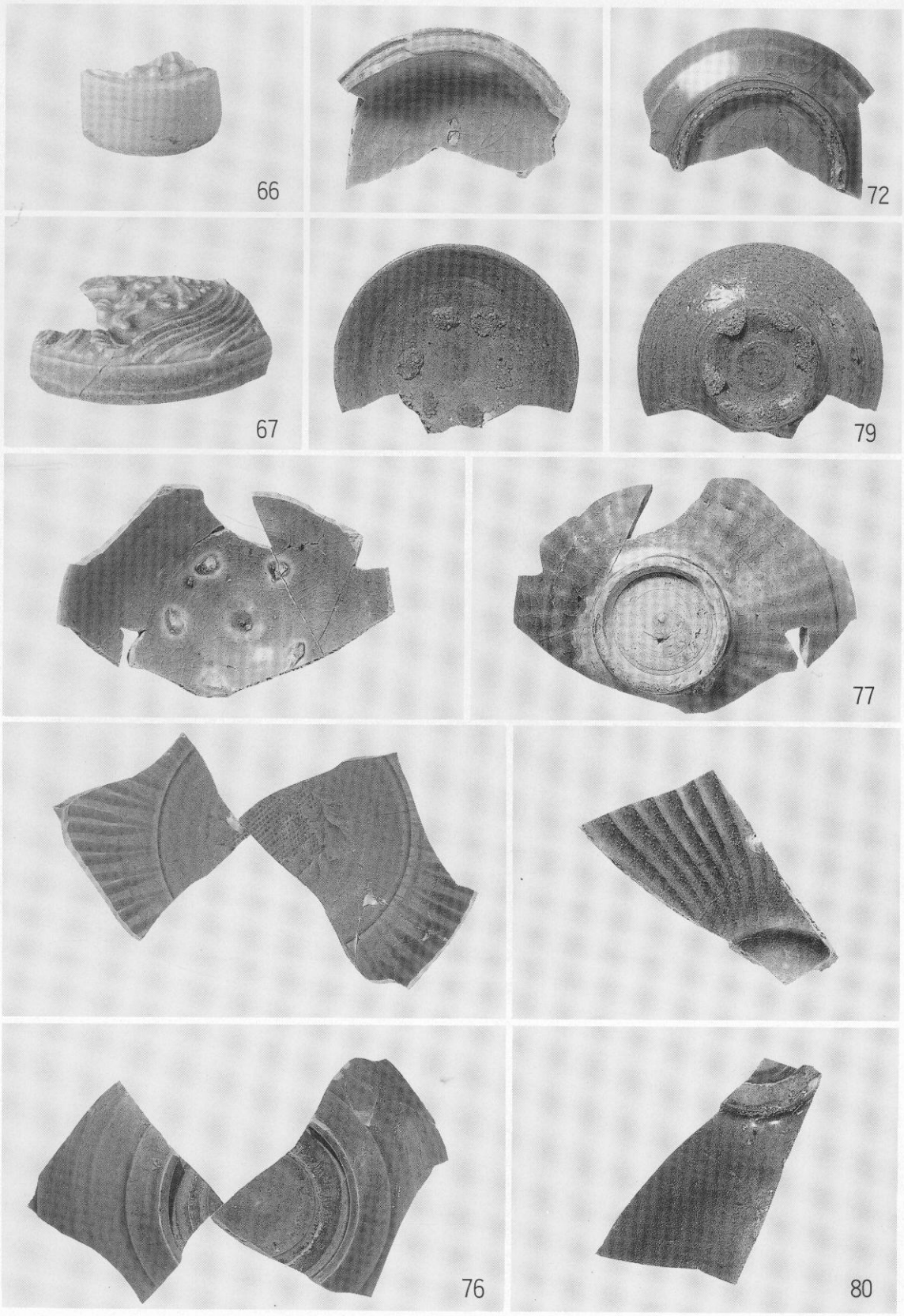




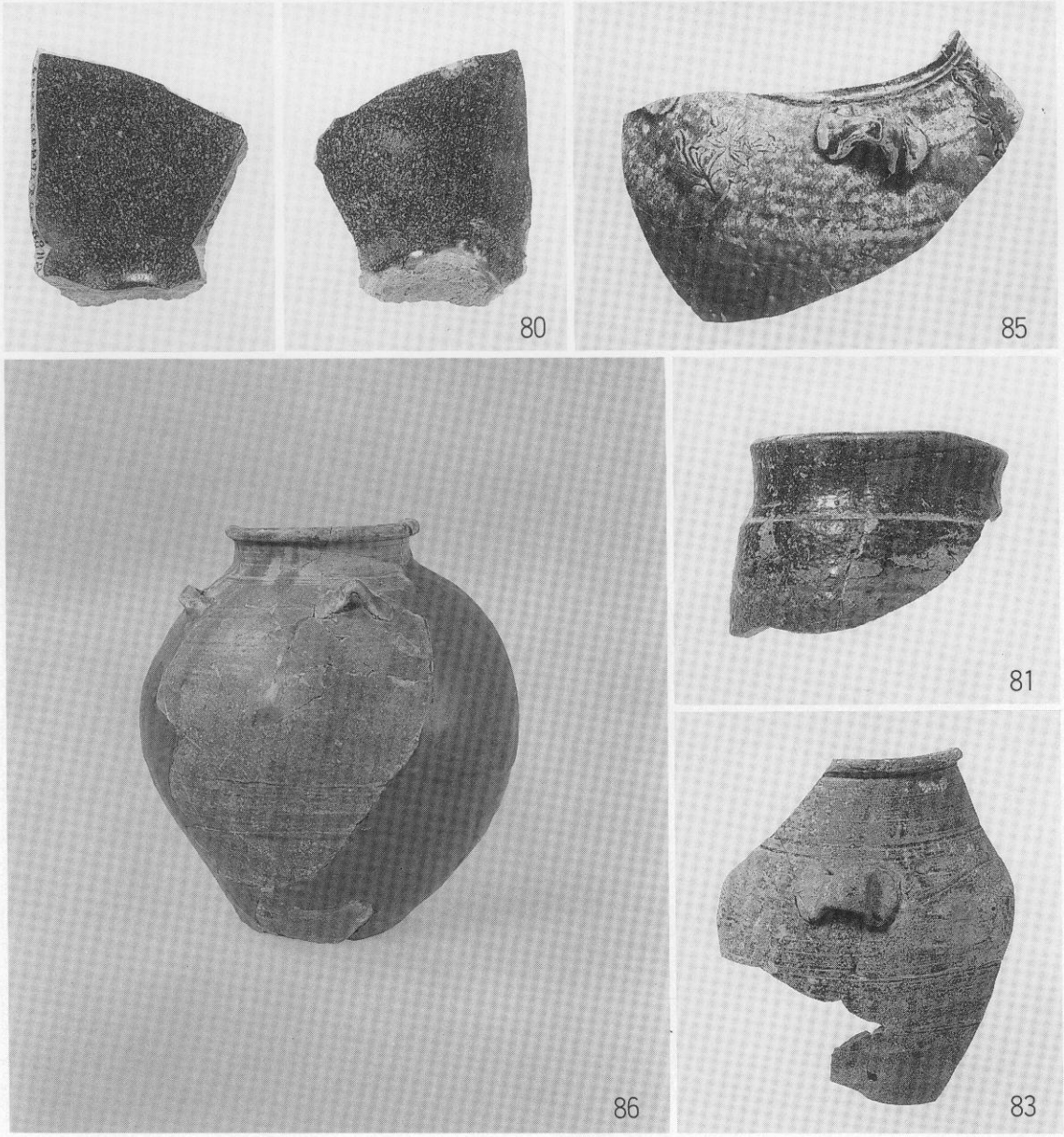
第117次調査　SK3447・SX3384・3486出土土器



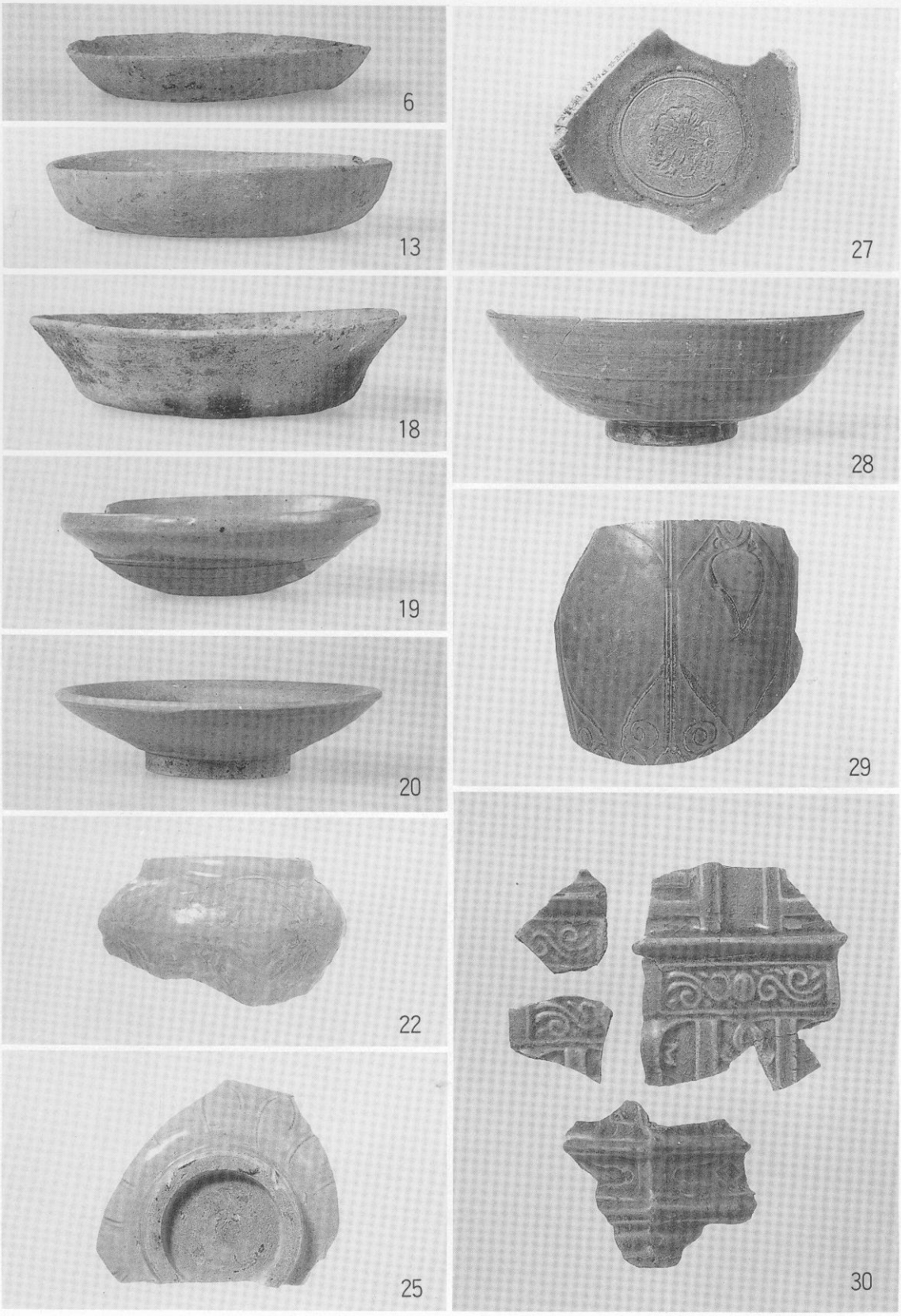
第117次調査　黒色土層出土土器・陶磁器



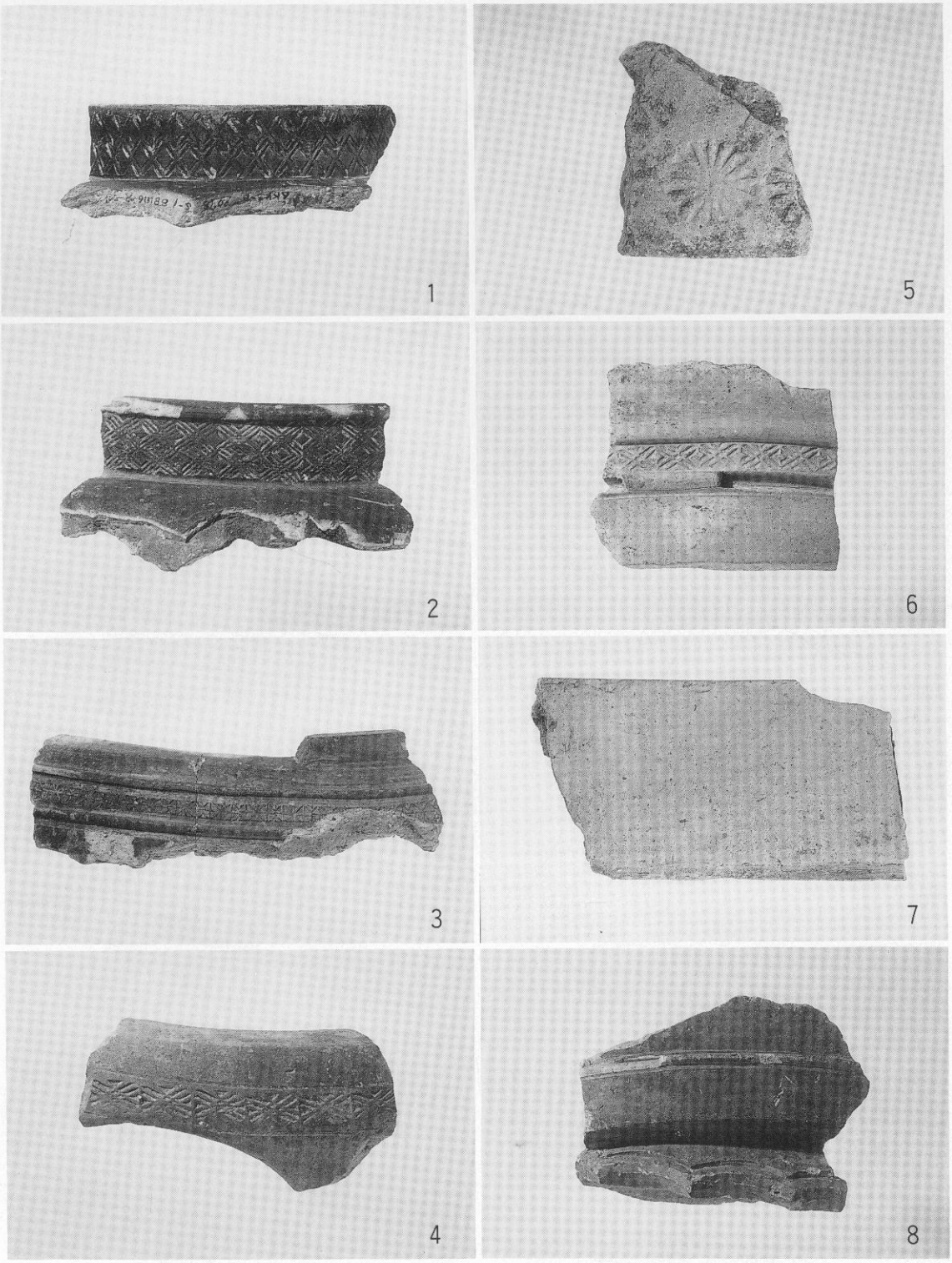
第117次調査　黒色土層出土陶磁器



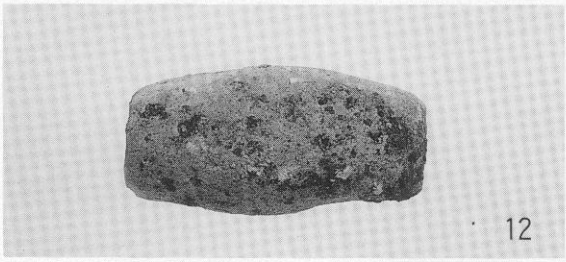
第117次調査　黒色土層出土陶器

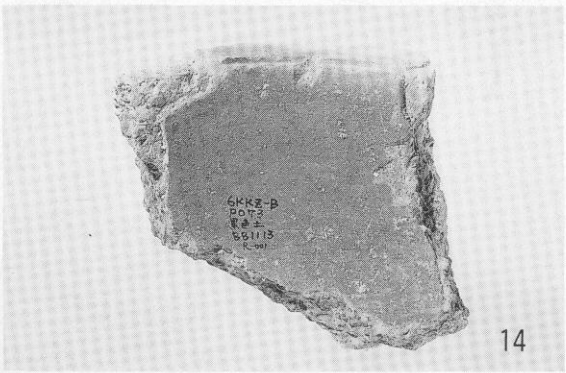


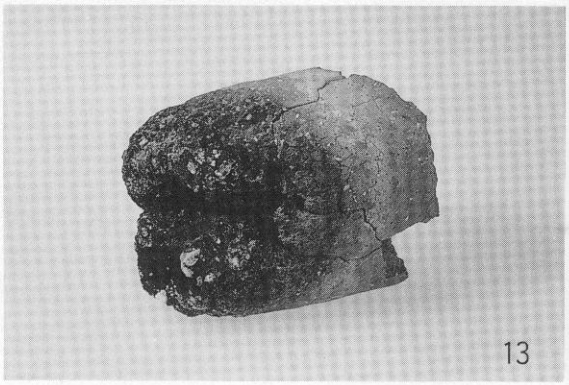
第117次調査　暗褐色土層出土土器・陶磁器

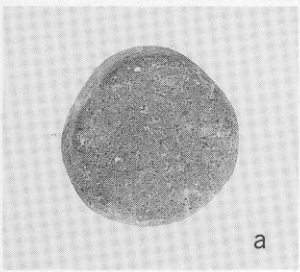


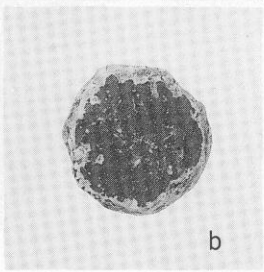
第117次調査　瓦質土器



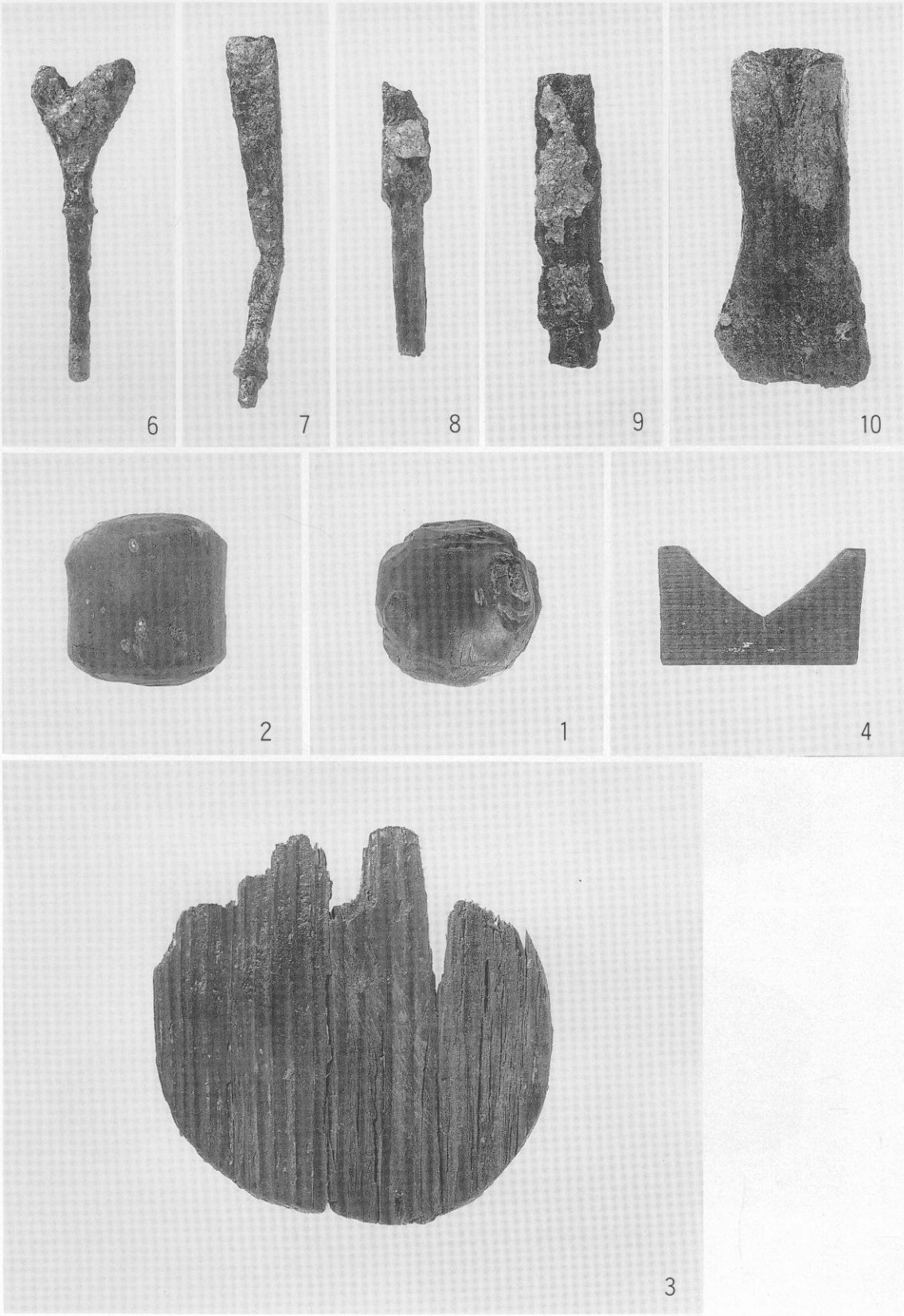




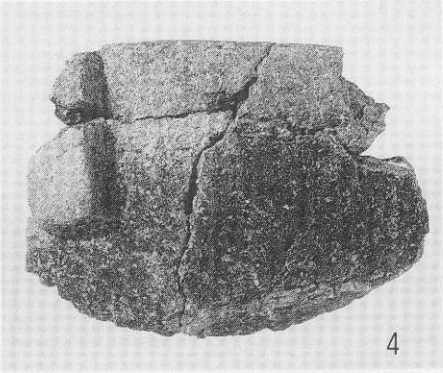


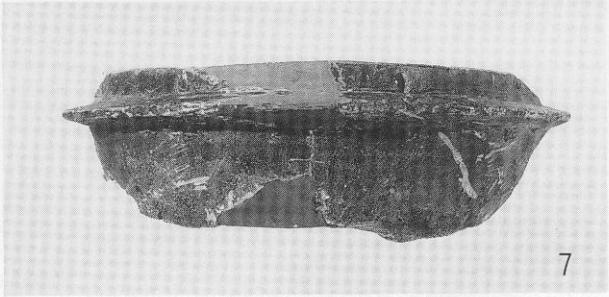


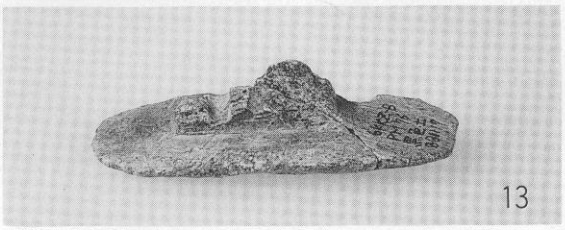
第117次調査　軒丸瓦、文字瓦、土製品

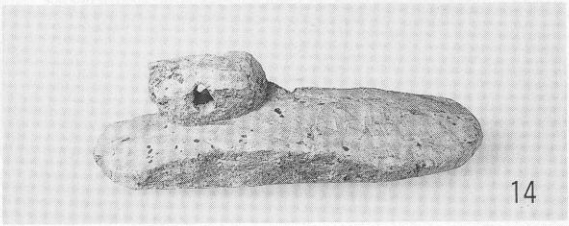


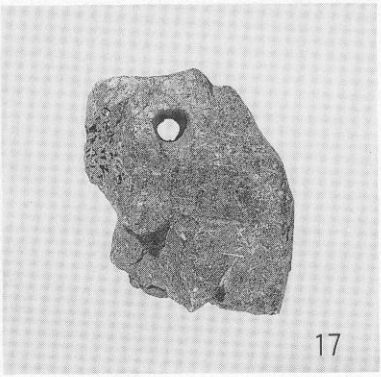
第117次調査　金属製品、木製品

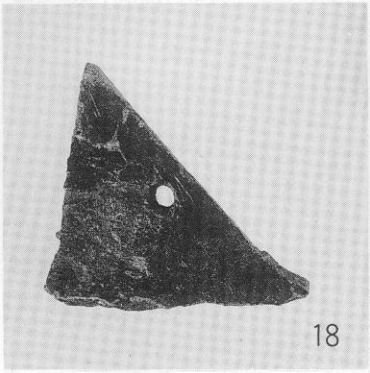


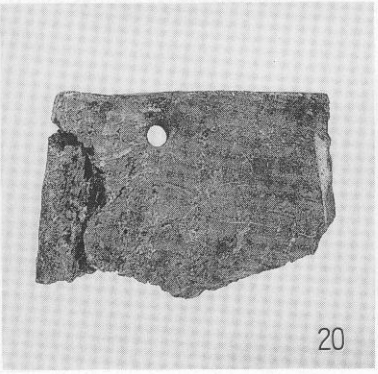


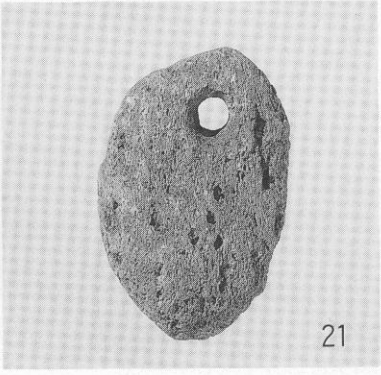




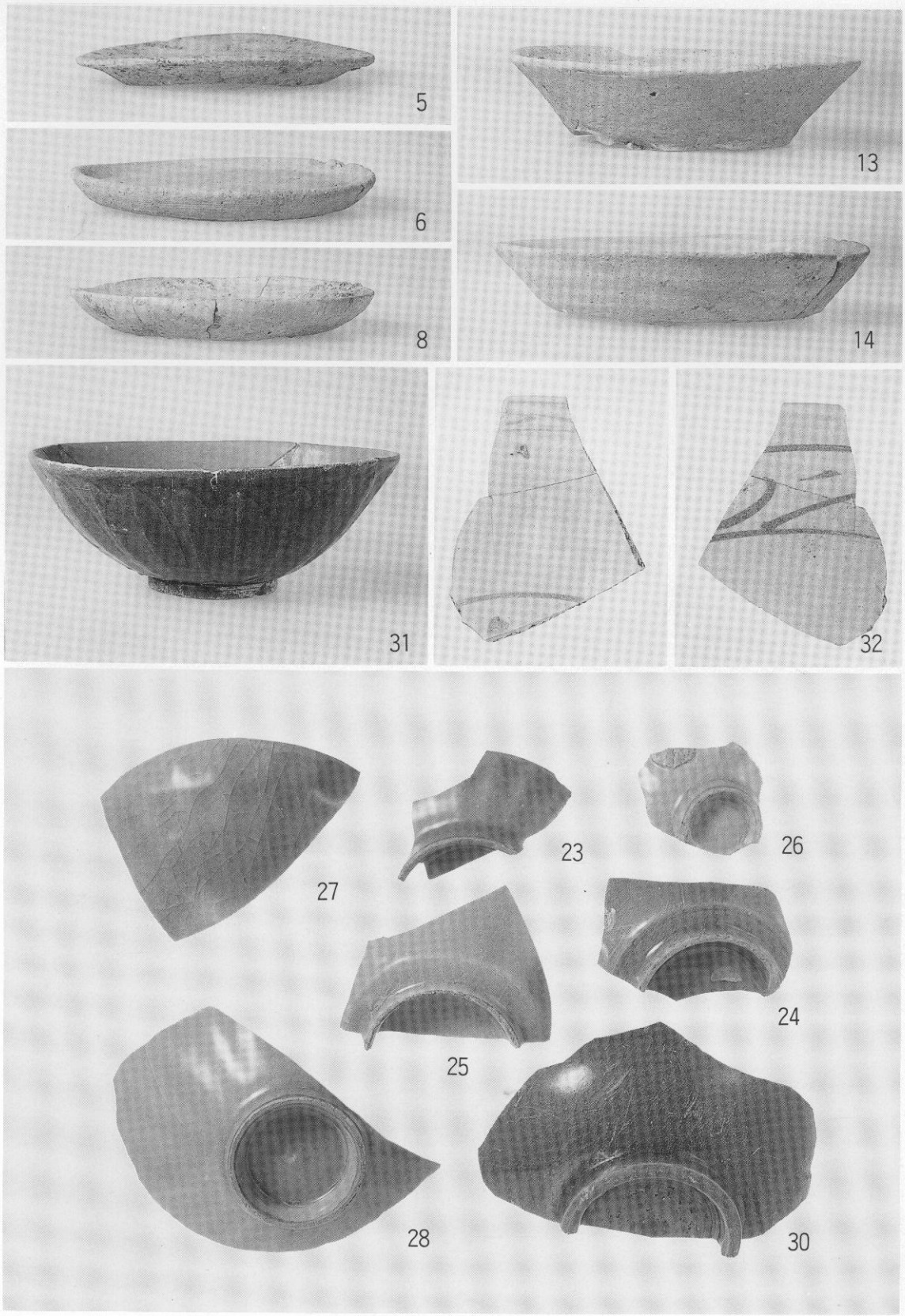




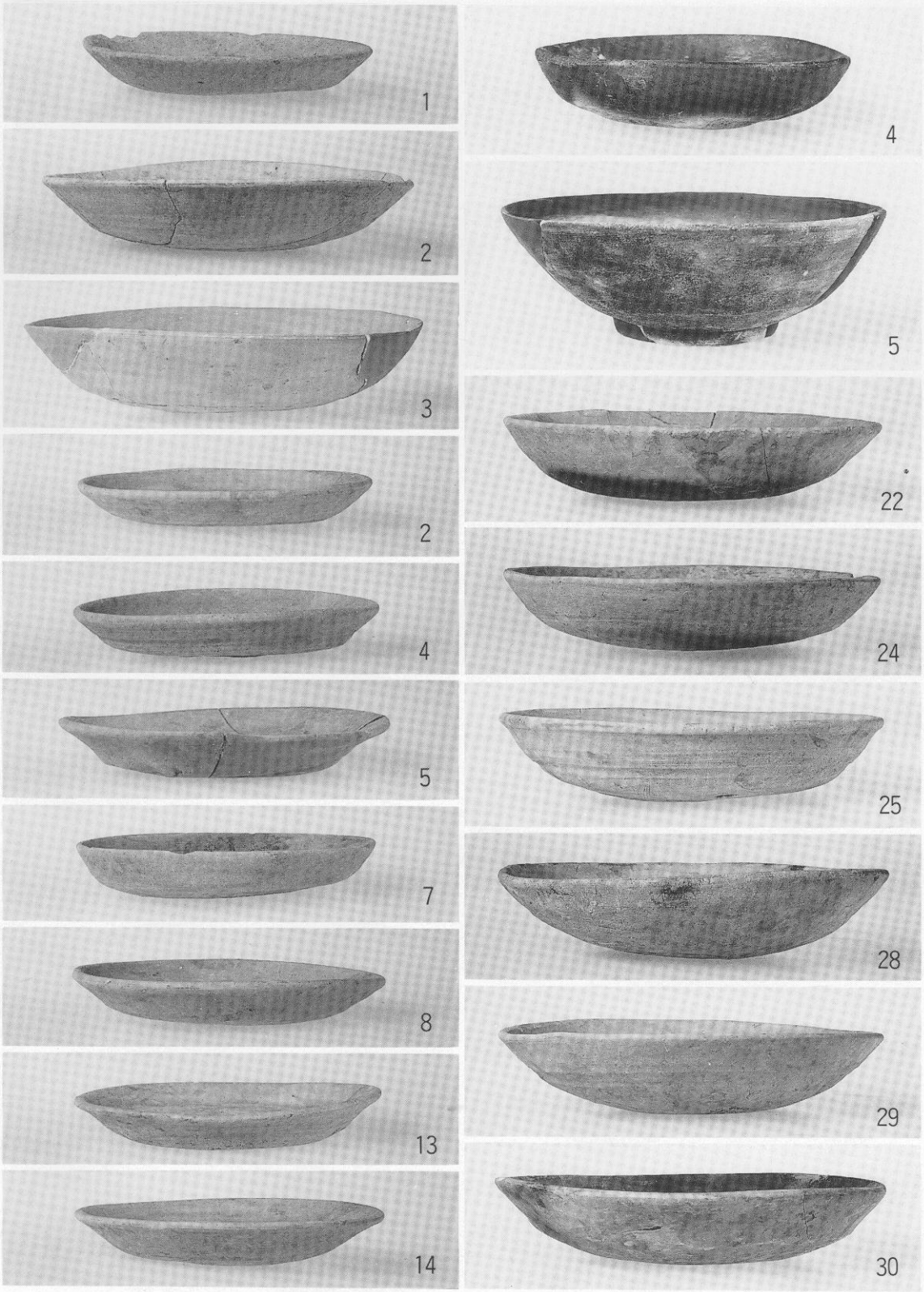




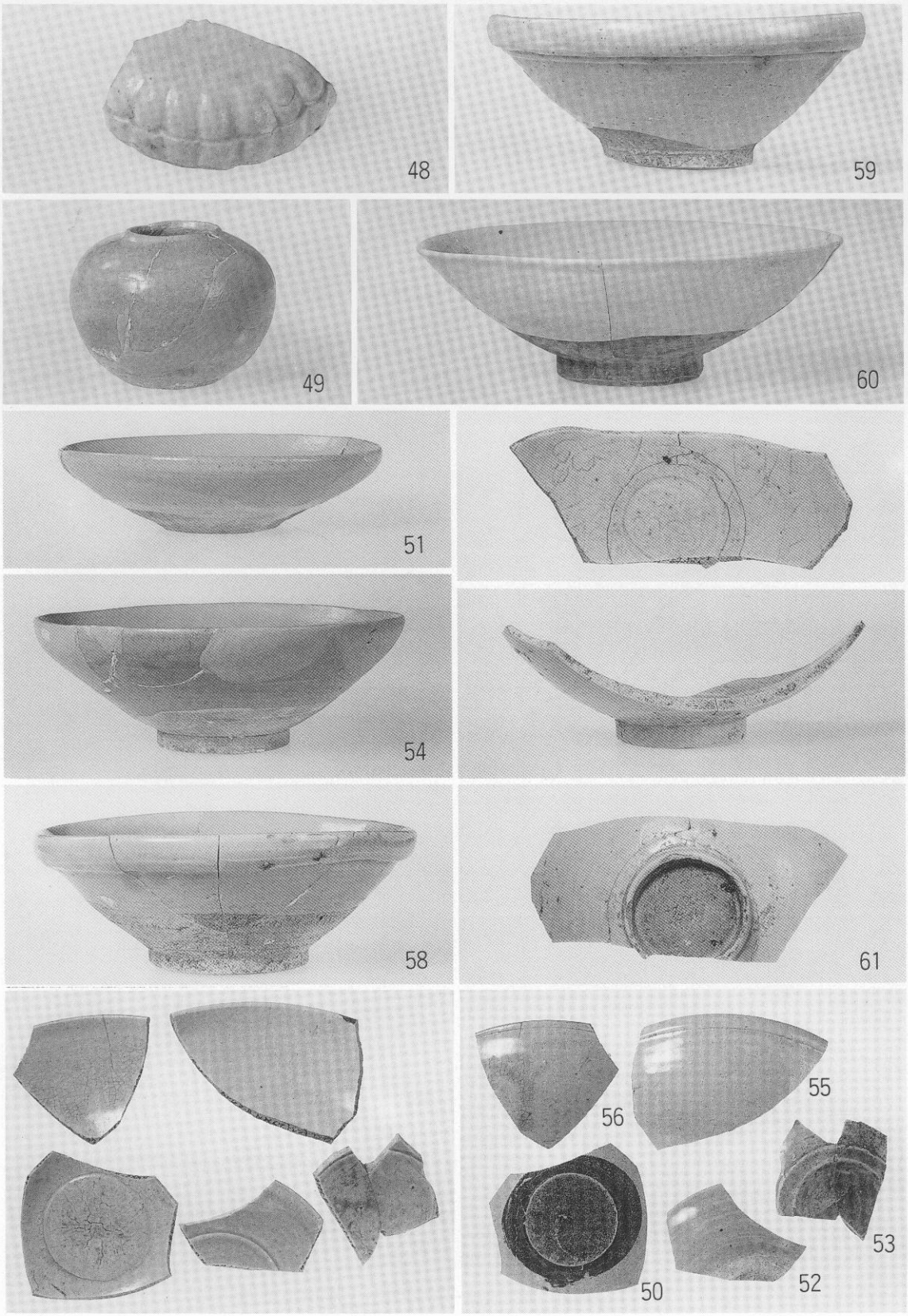
第117次調査　石鍋、石硯、石製品



第119次調査　SD1230出土土器・陶磁器



第119次調査　SD1300・3500腐植土層出土土器



第119次調査　SD3500腐植土層出土陶磁器

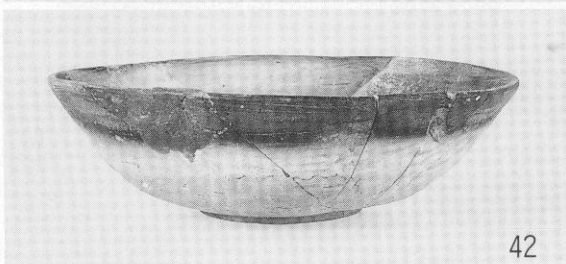
37

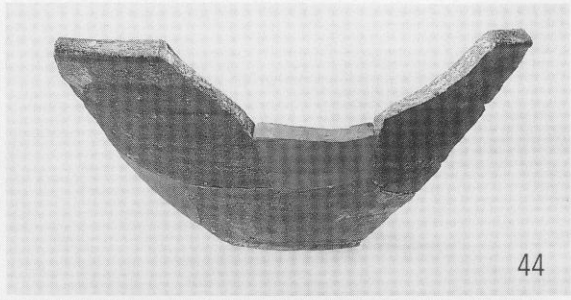
38

39

40

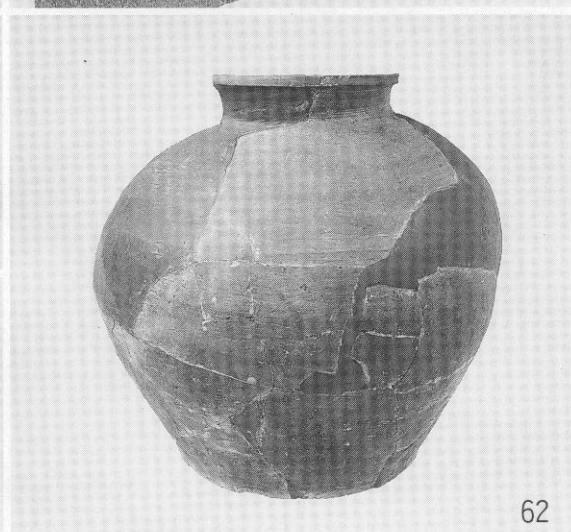
41


42

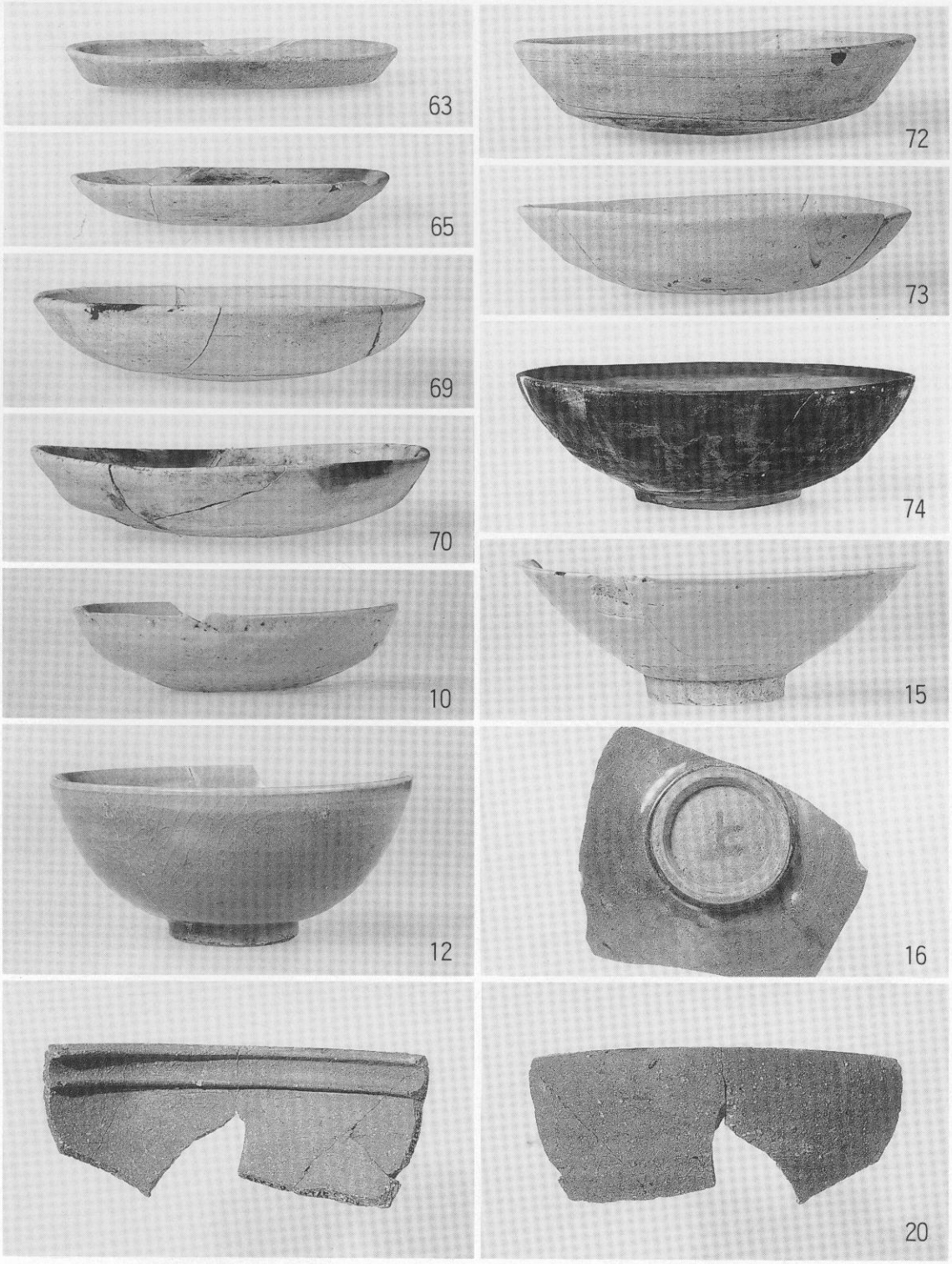

44

45

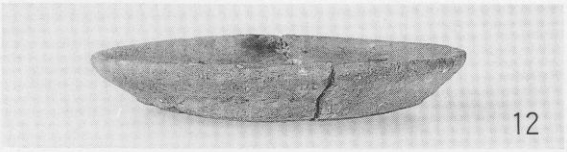
47

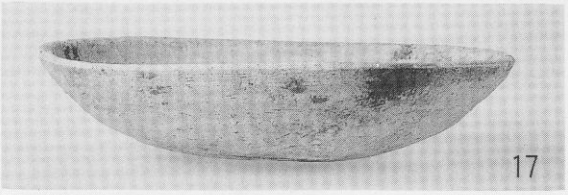

62

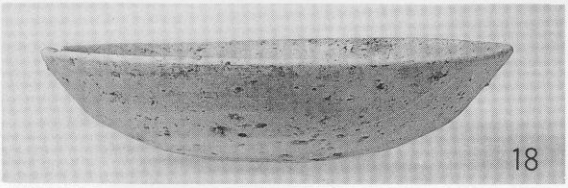
第119次調査　SD3500腐植土層出土土器・陶器

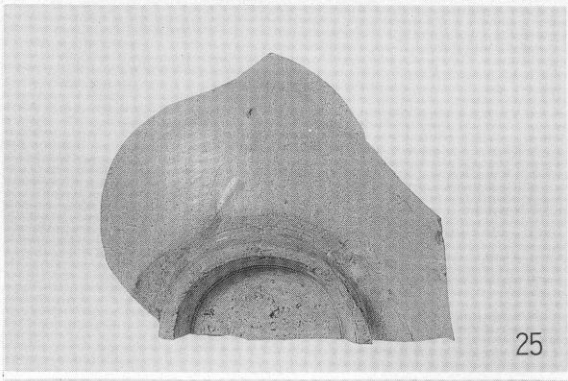


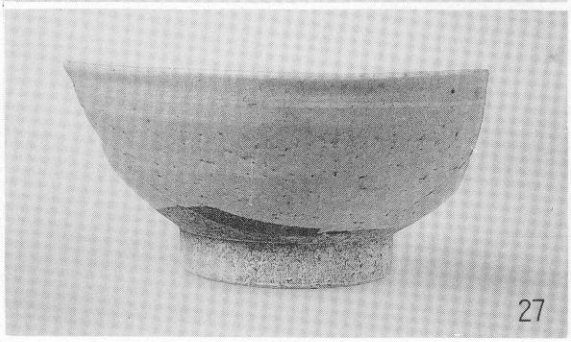
第119次調査　SD3500上層、SD3520出土土器・陶磁器

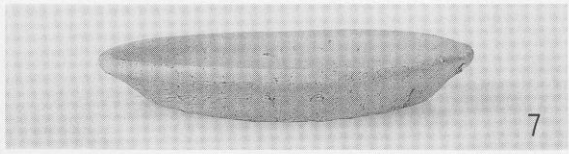


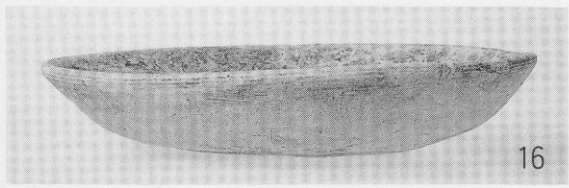


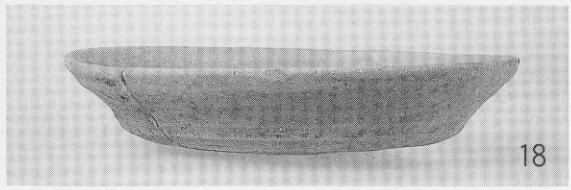


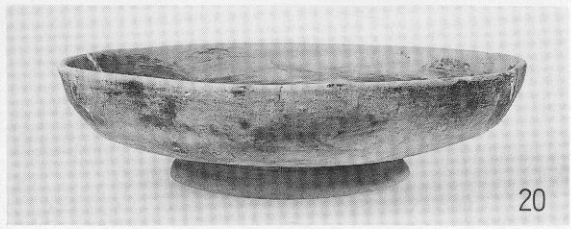


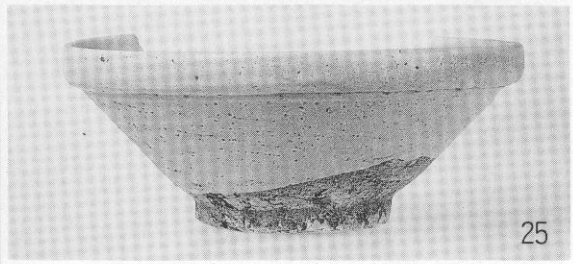


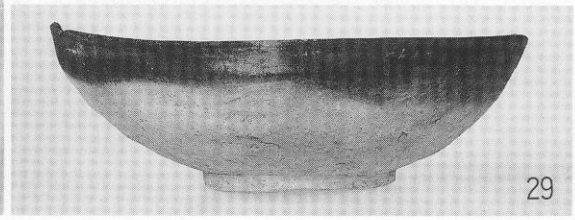




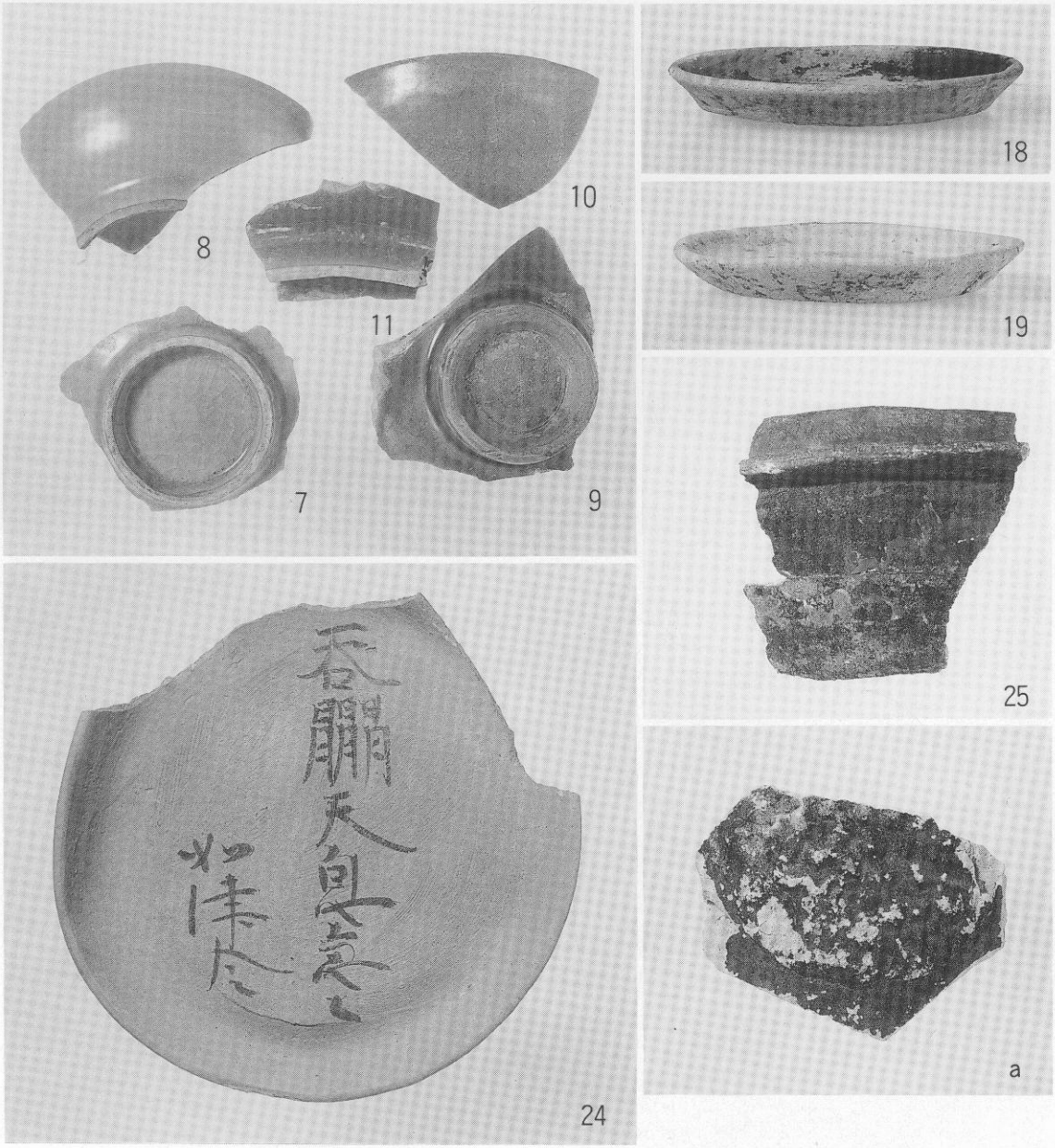




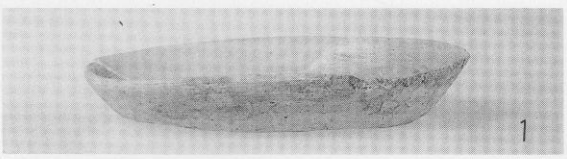


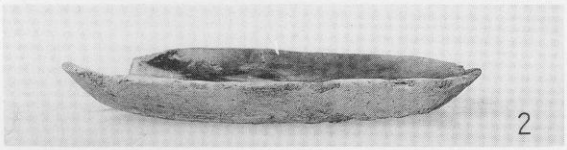


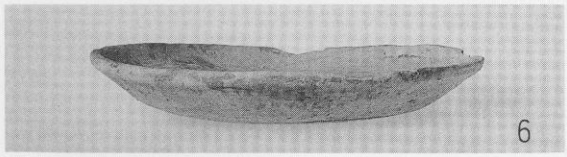
第119次調査　SD3550・3555・3478出土土器・陶磁器

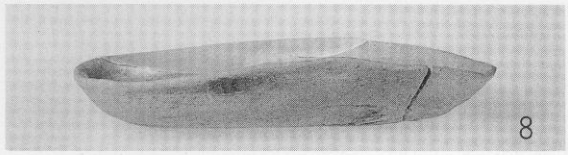


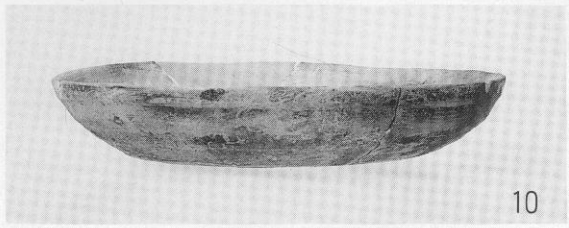
第119次調査　SE3475・3490・3495・3505・3525出土土器・陶磁器

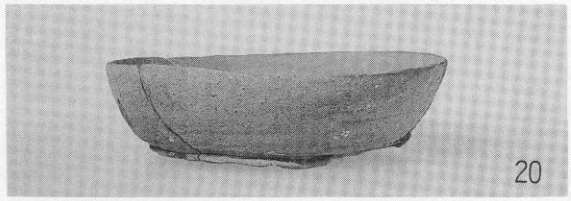


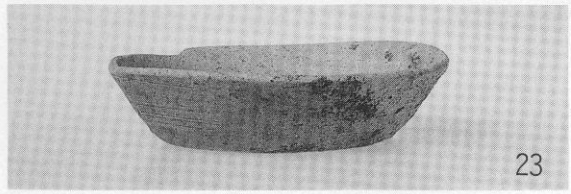


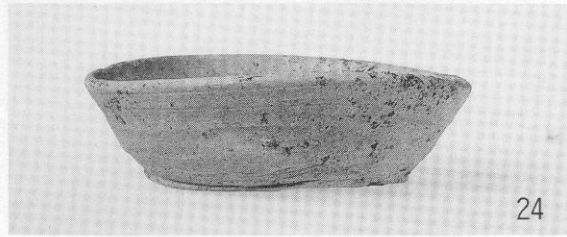


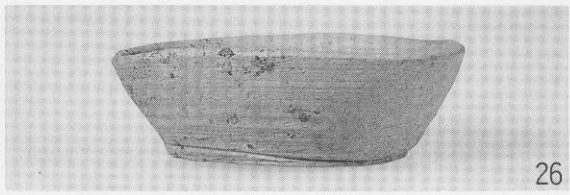


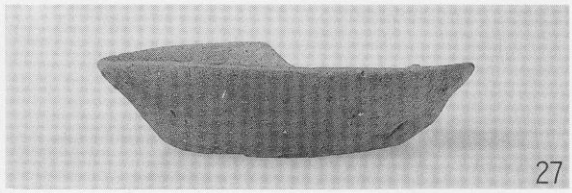


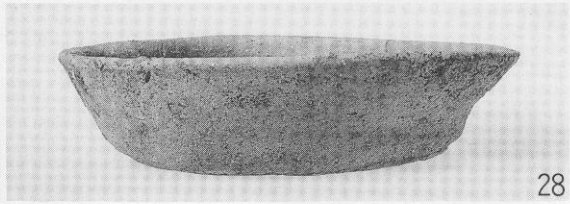


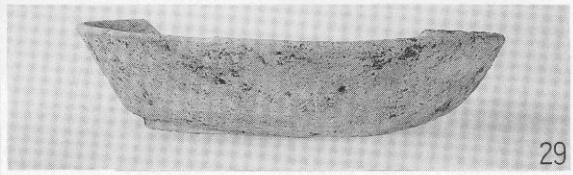


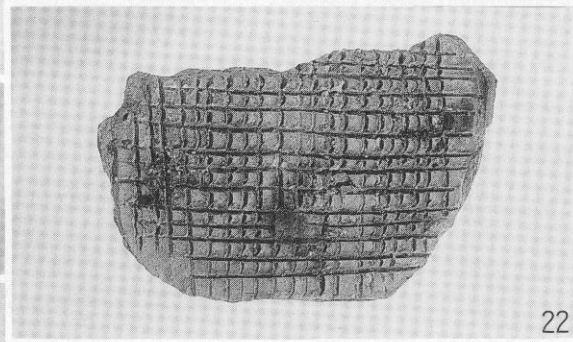


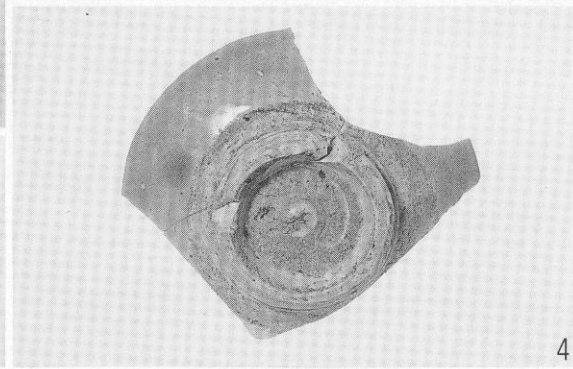




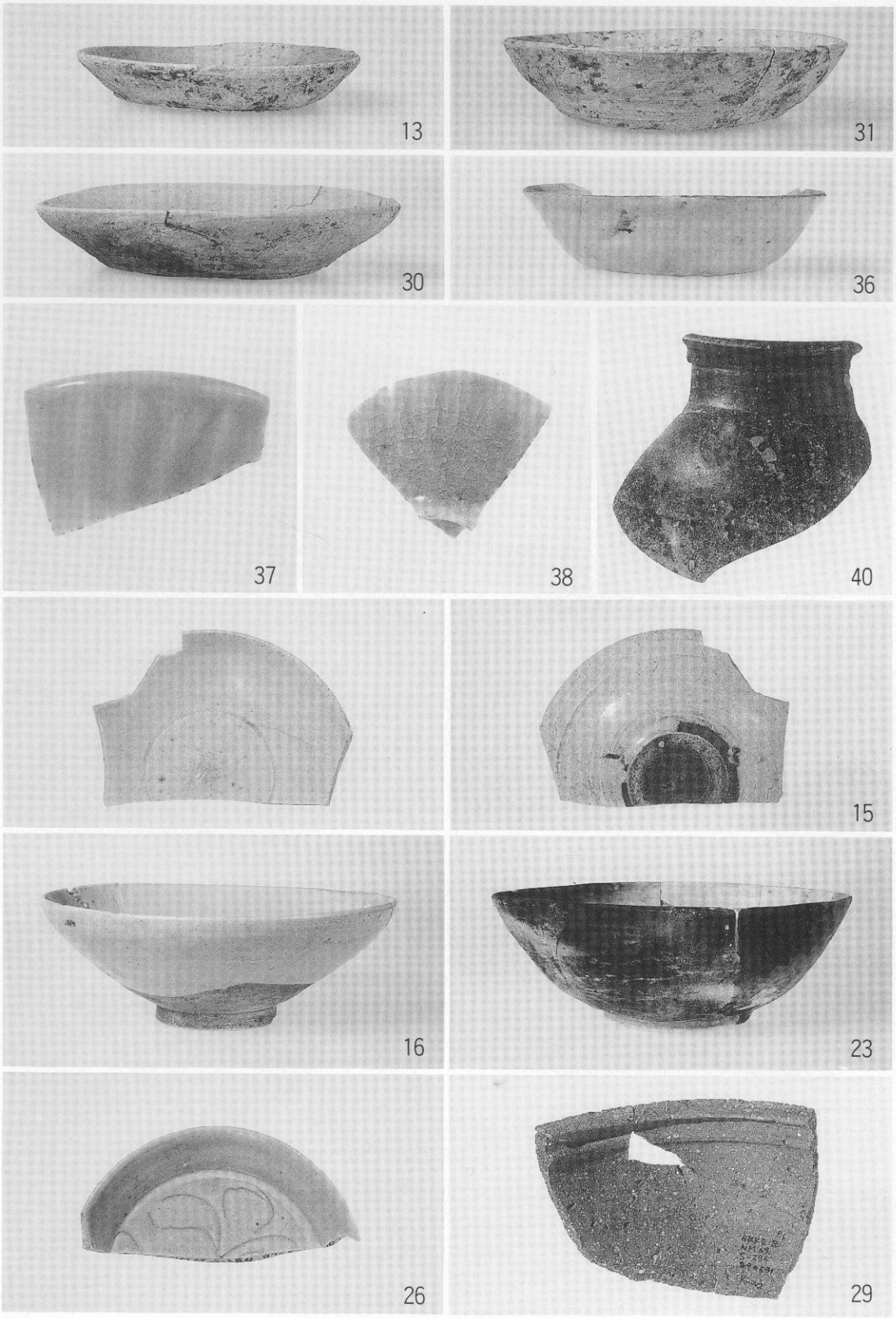




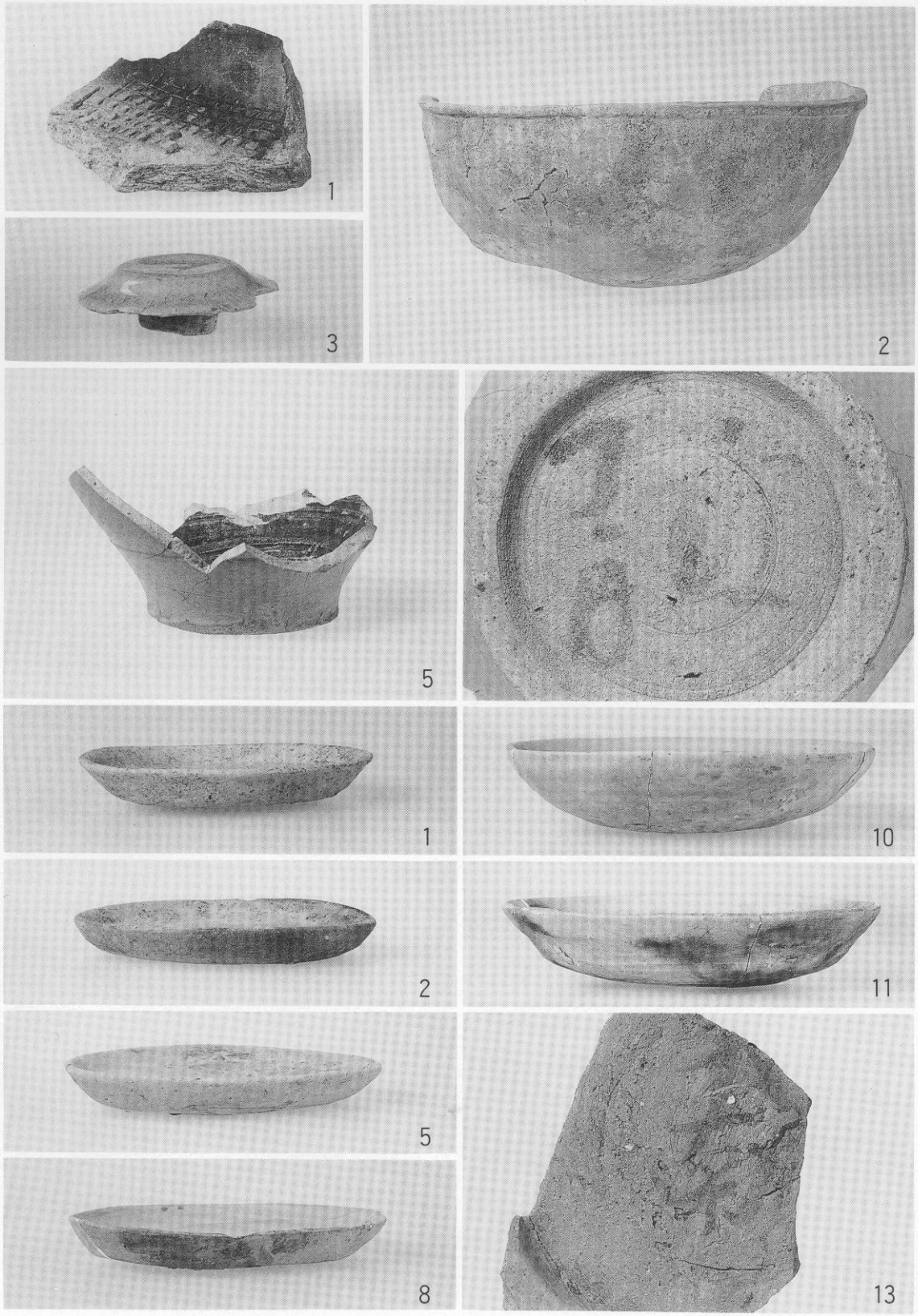




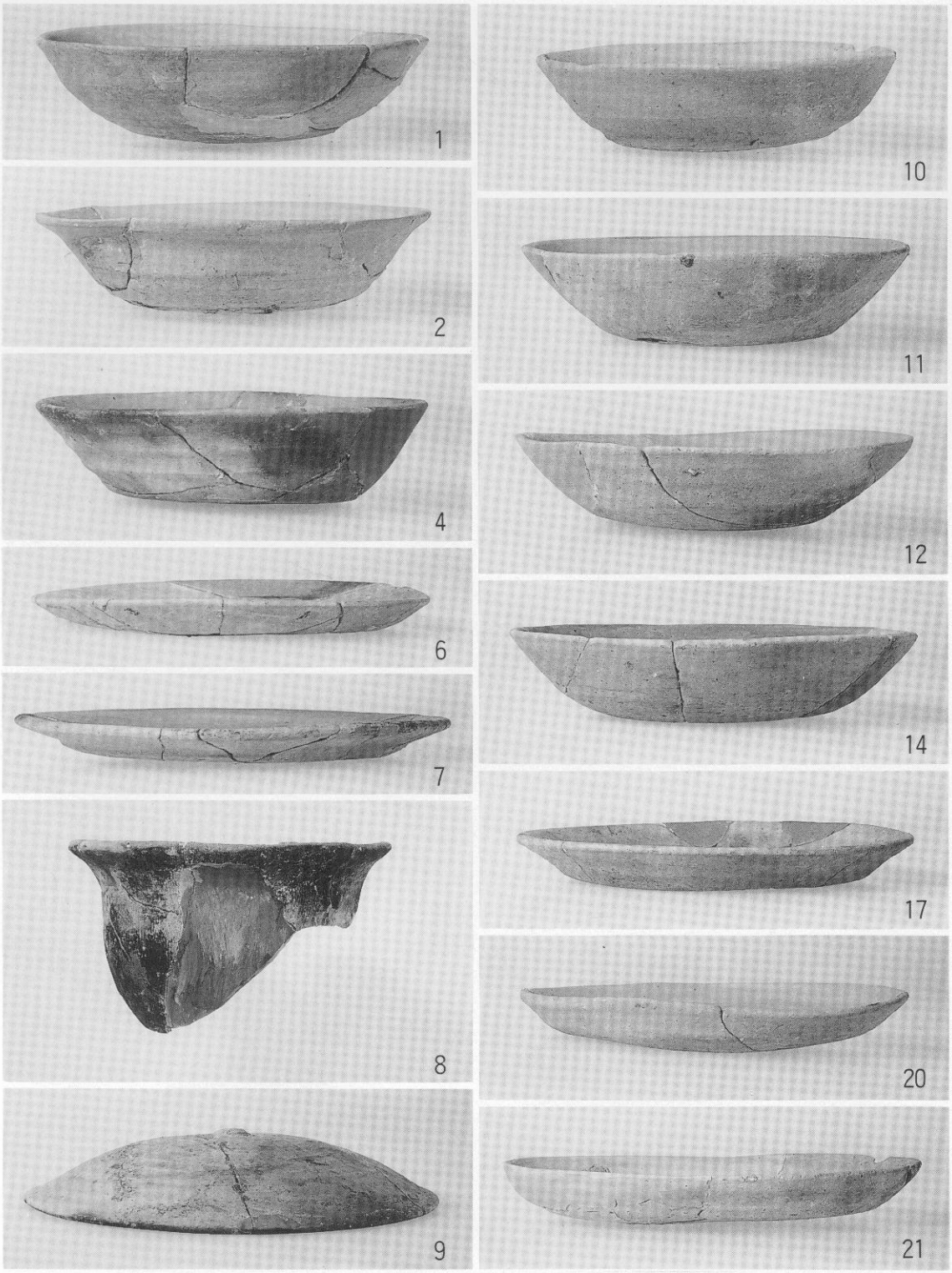
第119次調査　SE3480・3530・3535・3540出土土器・陶磁器



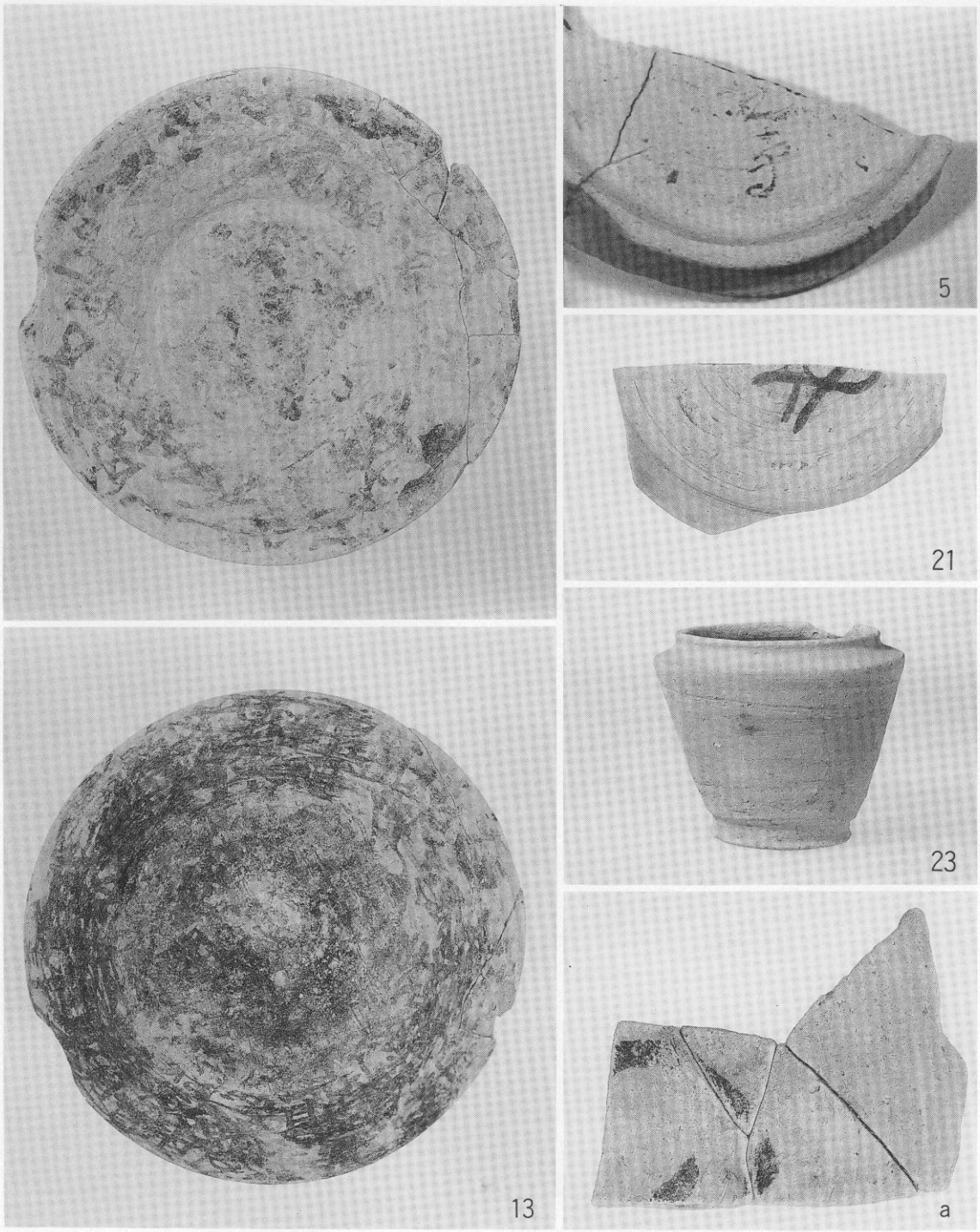
第119次調査　SK3501・3506・3529出土土器・陶磁器



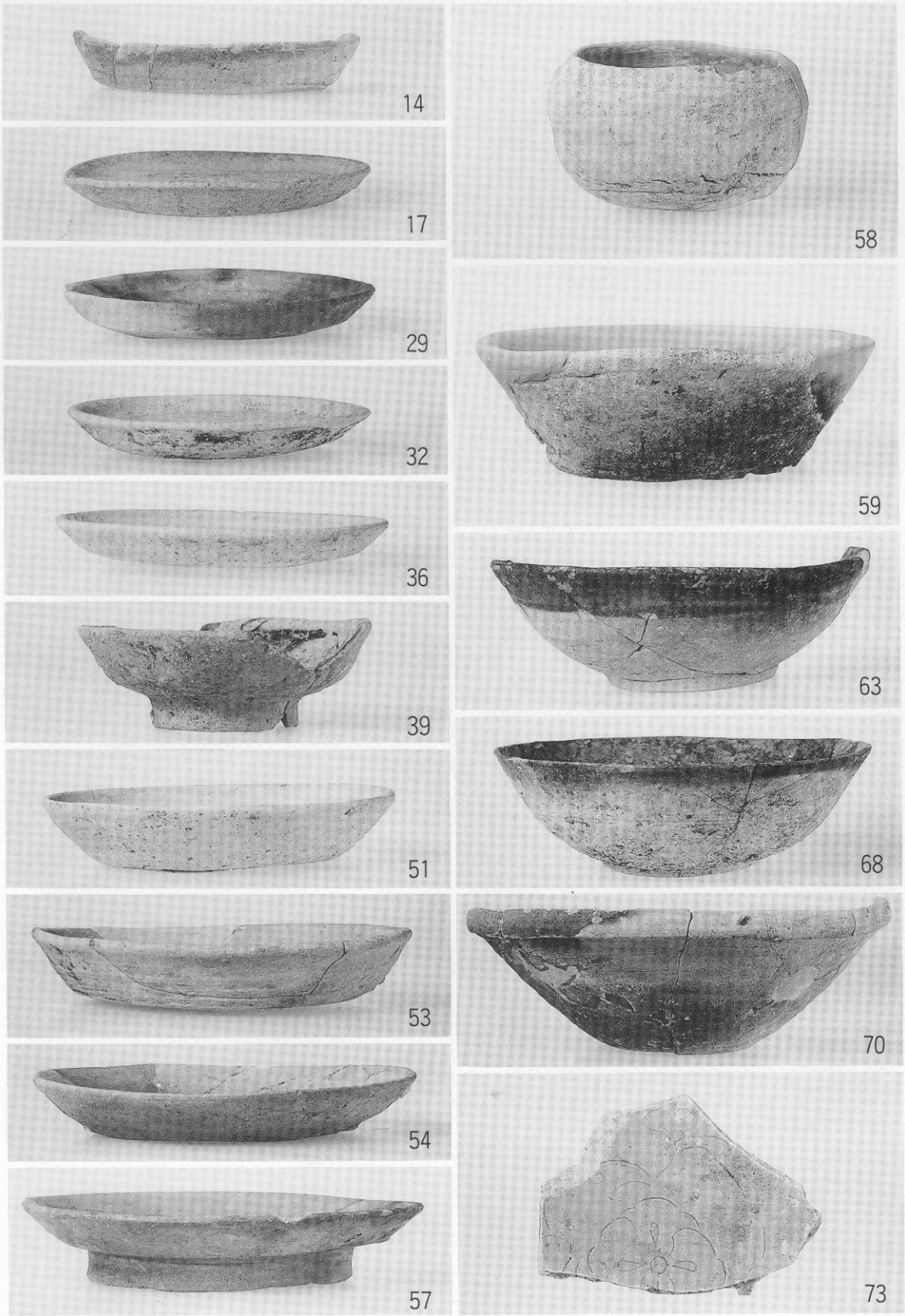
第119次調査　その他の遺構・黄褐色土層出土土器・陶磁器



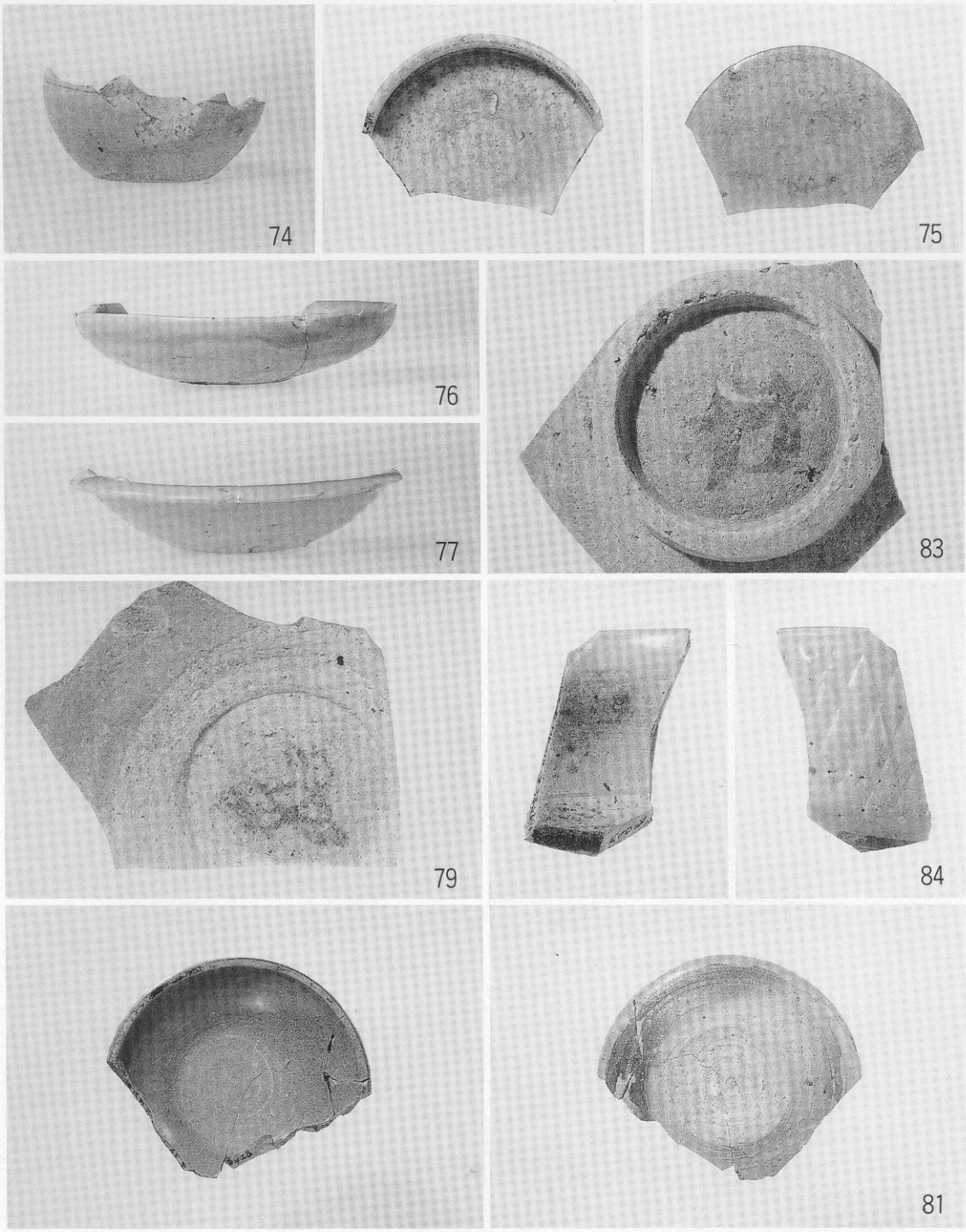
第119次調査　炭層（SX3455）・茶灰色土層出土土器



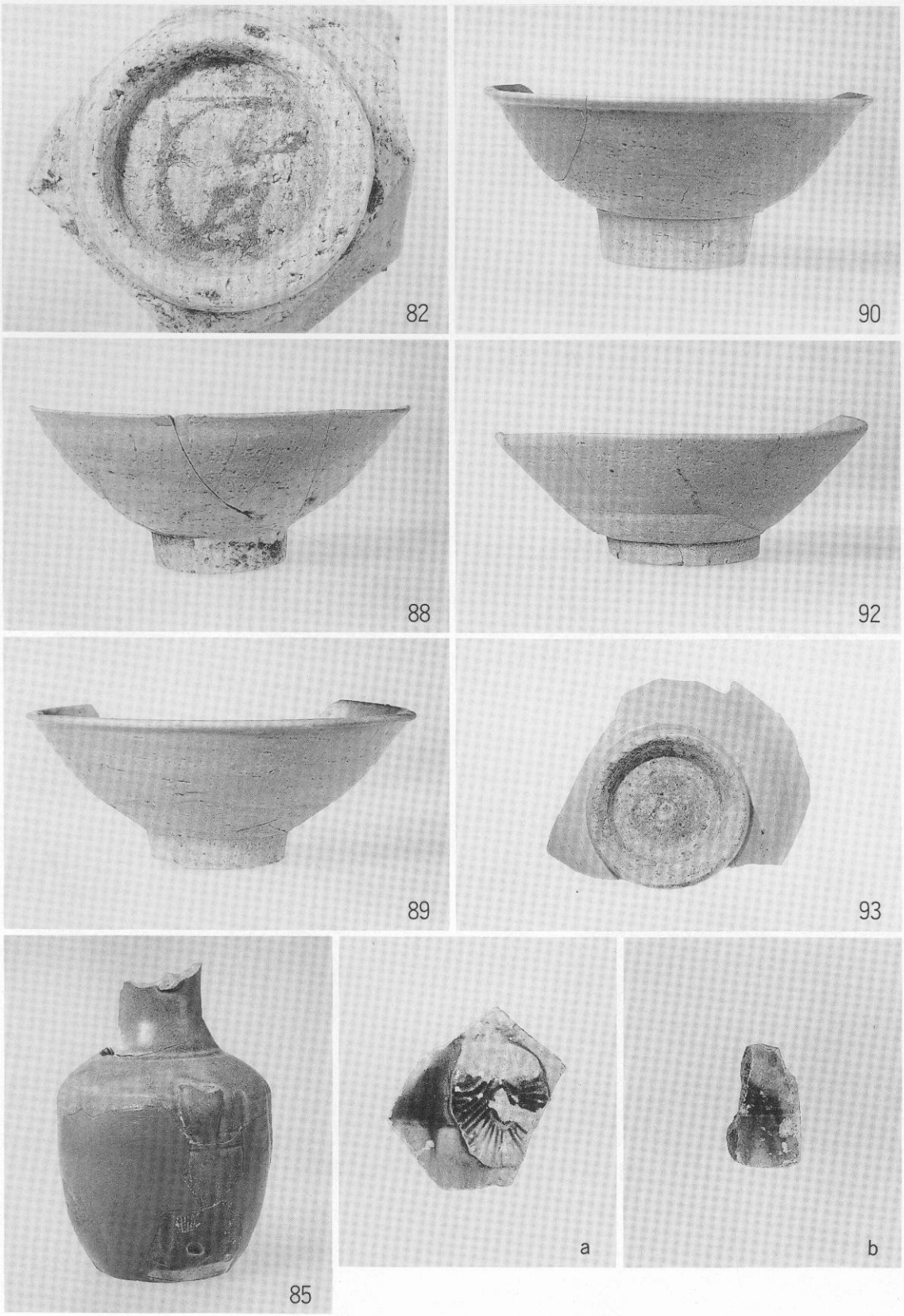
第119次調査　炭層（SX3455）・茶灰色土層出土土器



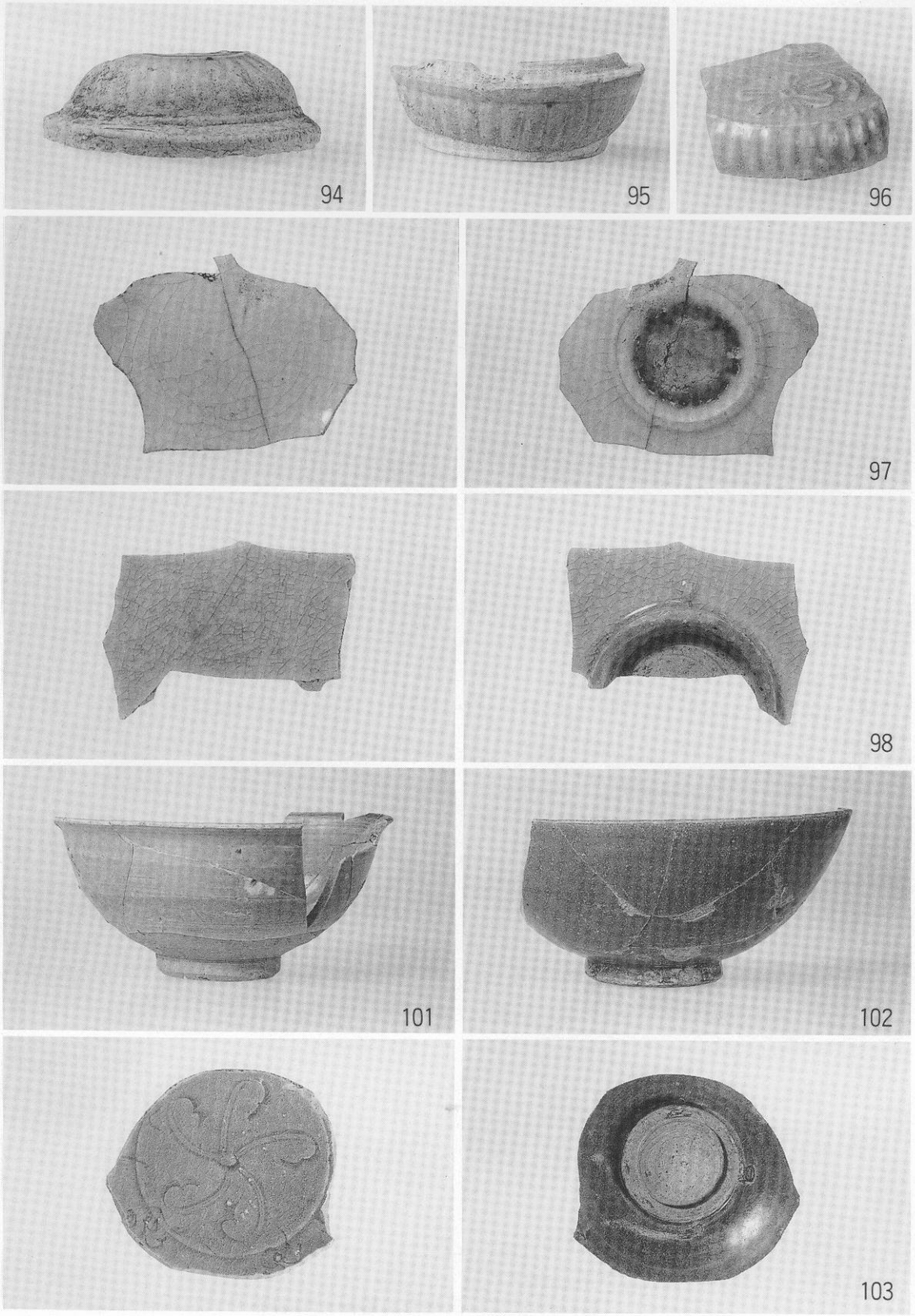
第119次調査　黒褐色土層出土土器・陶器



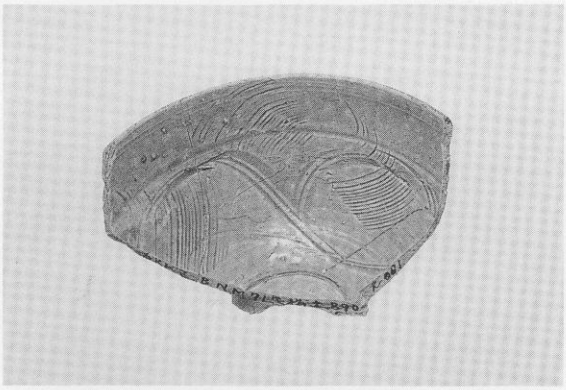
第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器

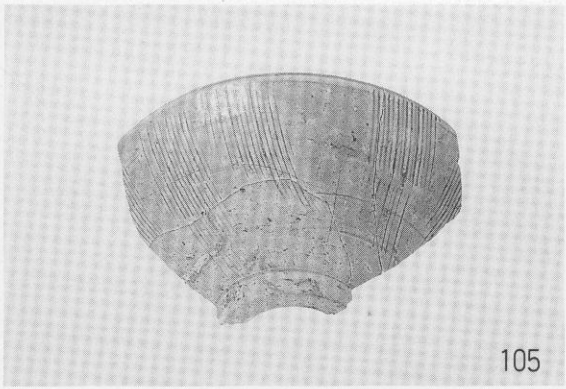


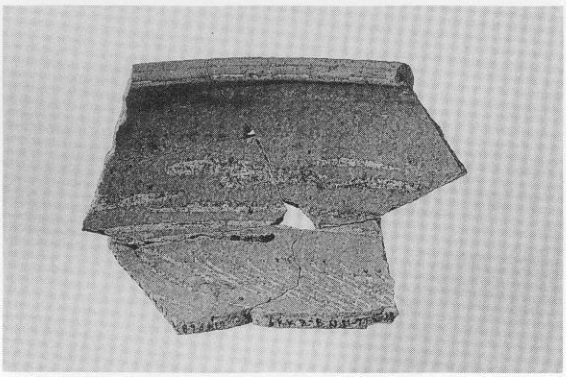
第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器

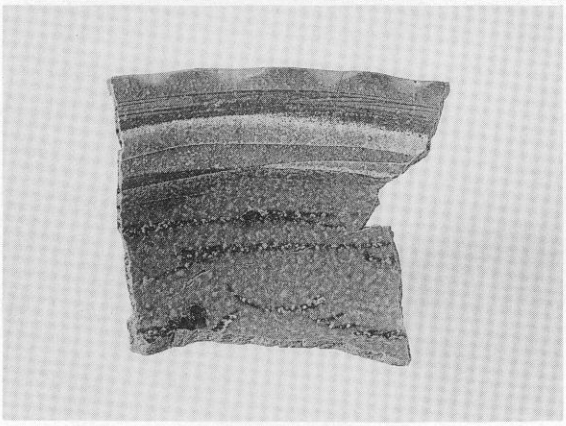


第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器

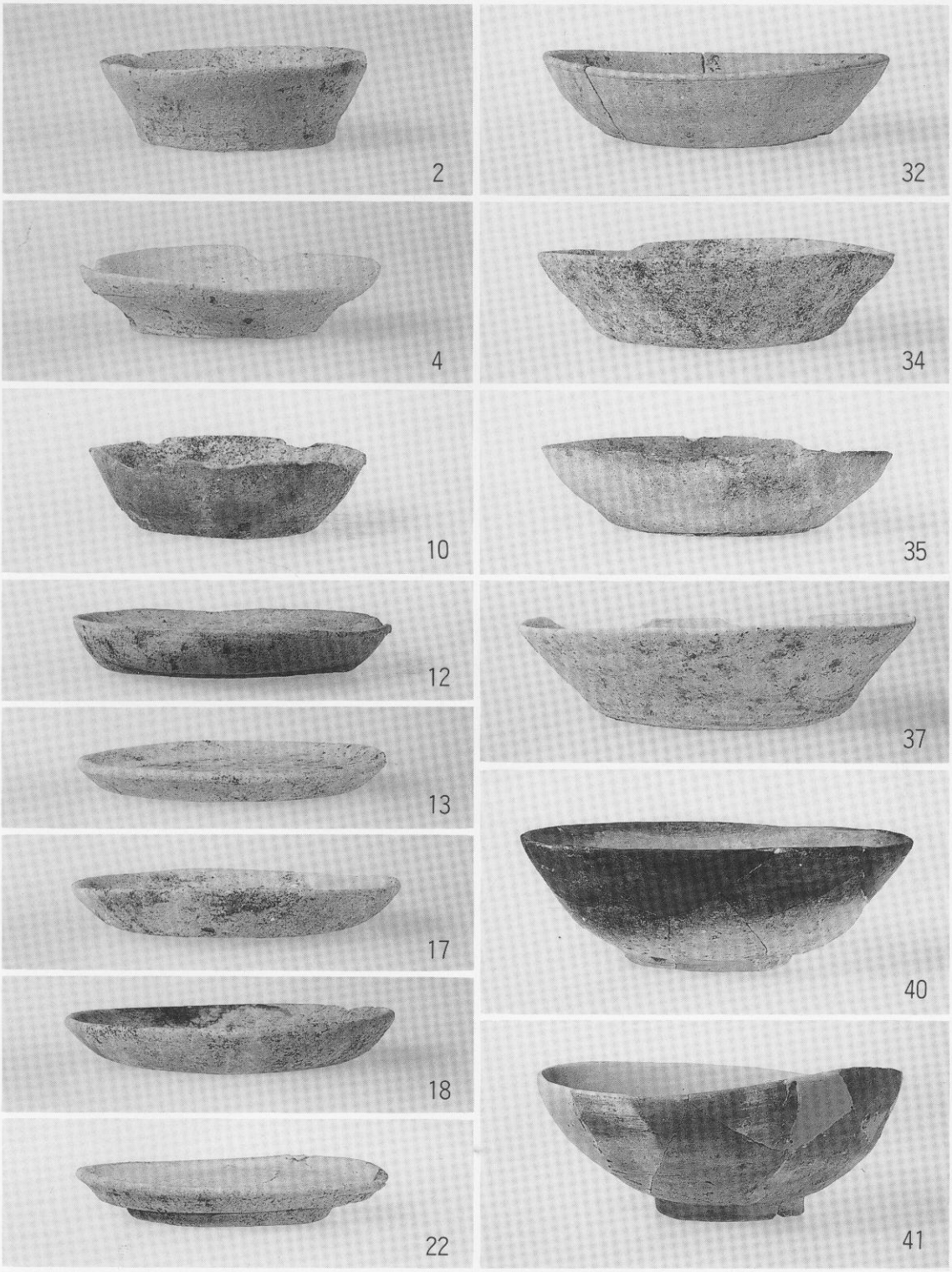




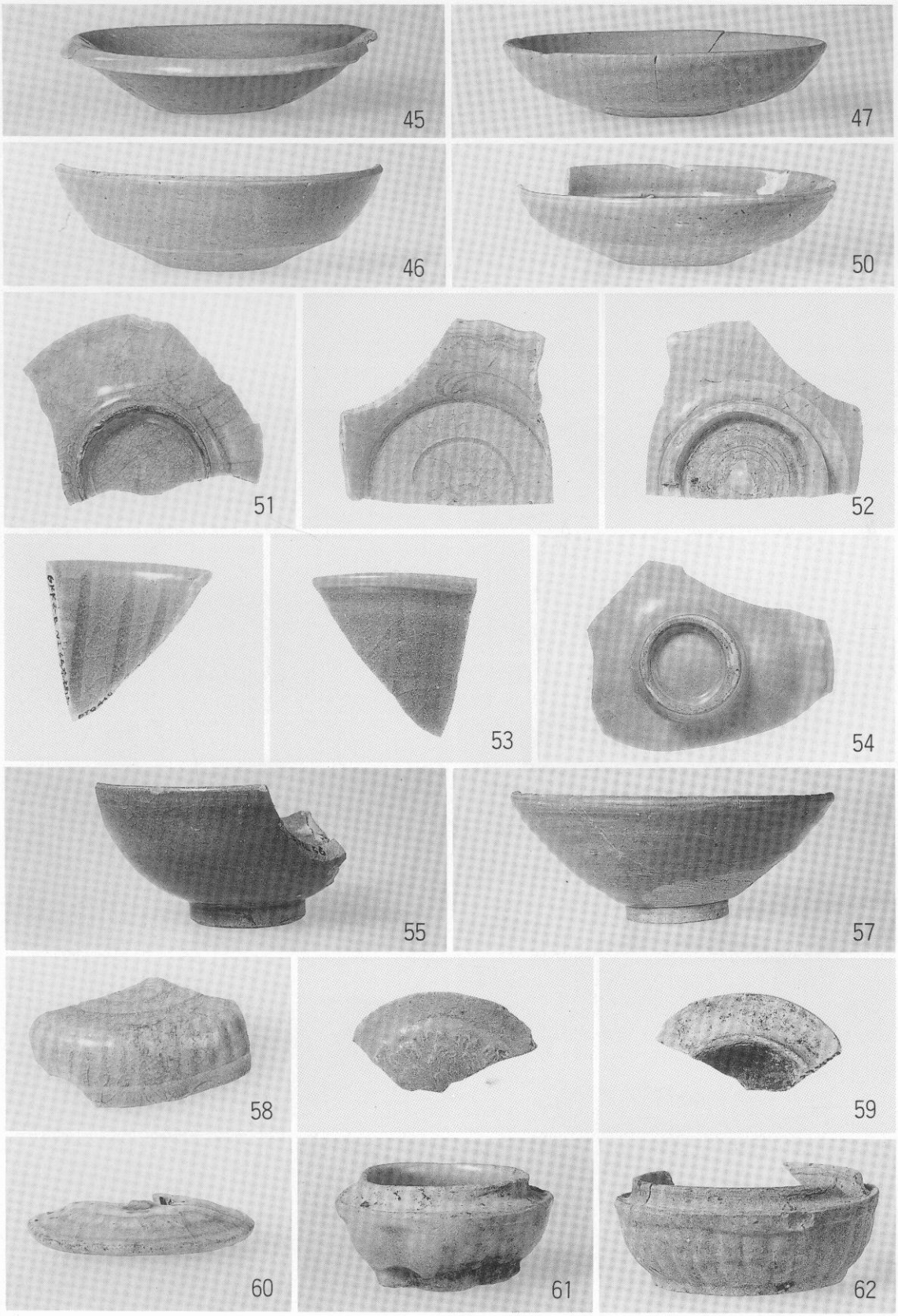




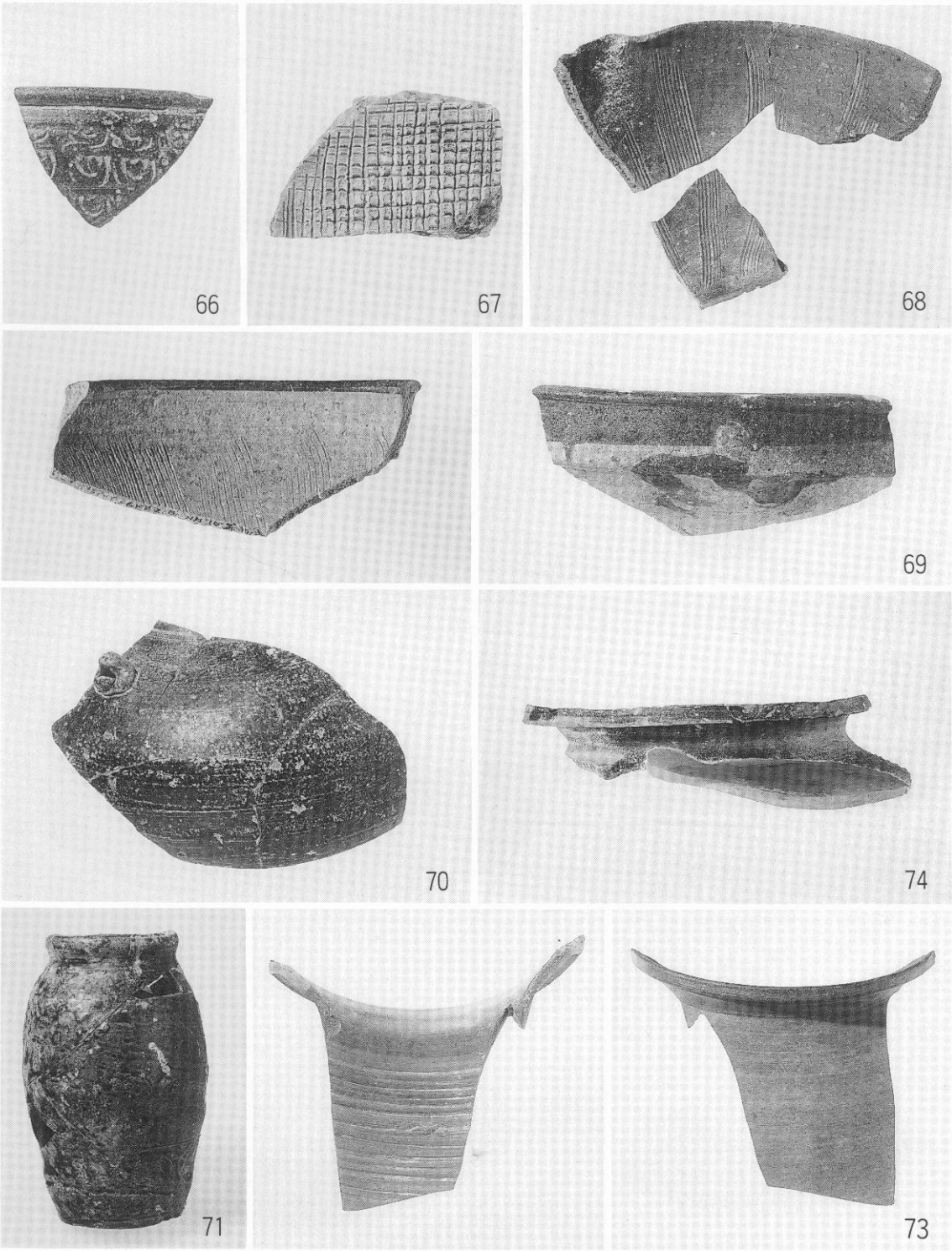
第119次調査　黒褐色土層出土陶磁器



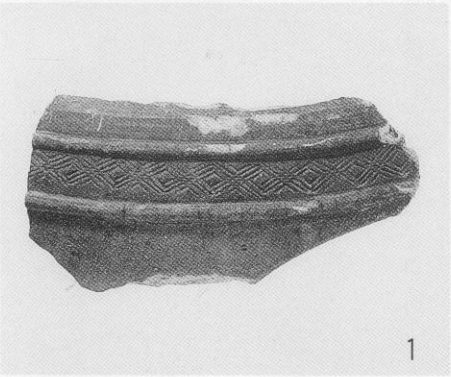
第119次調査　茶褐色土層出土土器

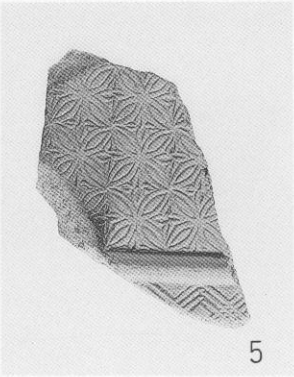


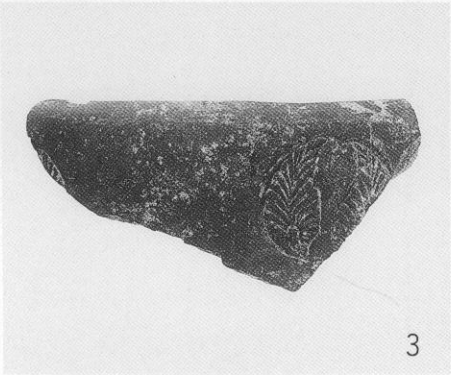
第119次調査　茶褐色土層出土陶磁器

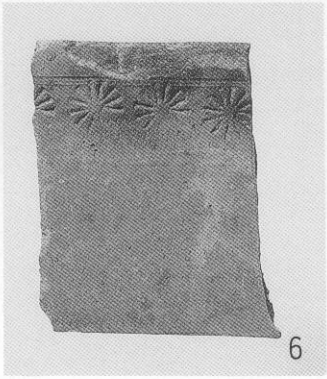


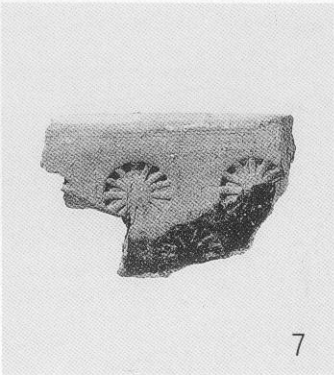
第119次調査　茶褐色土層出土陶器

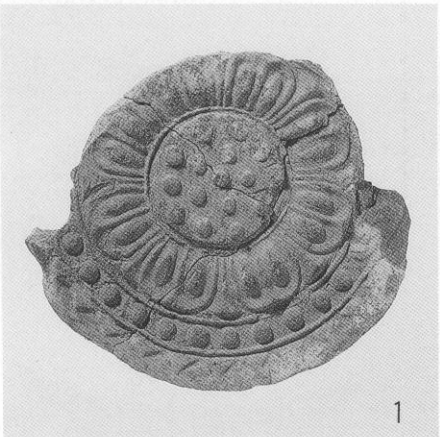




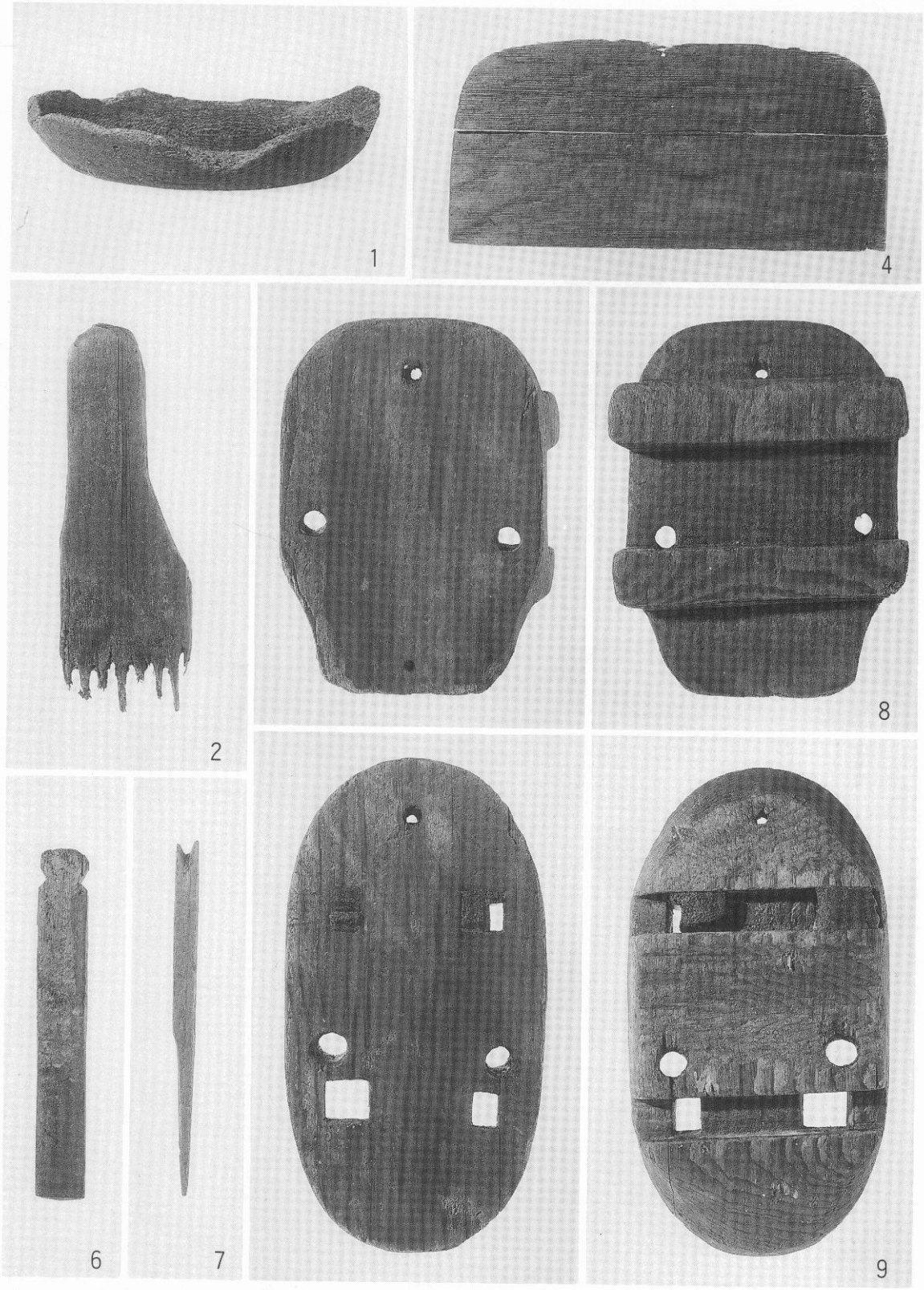




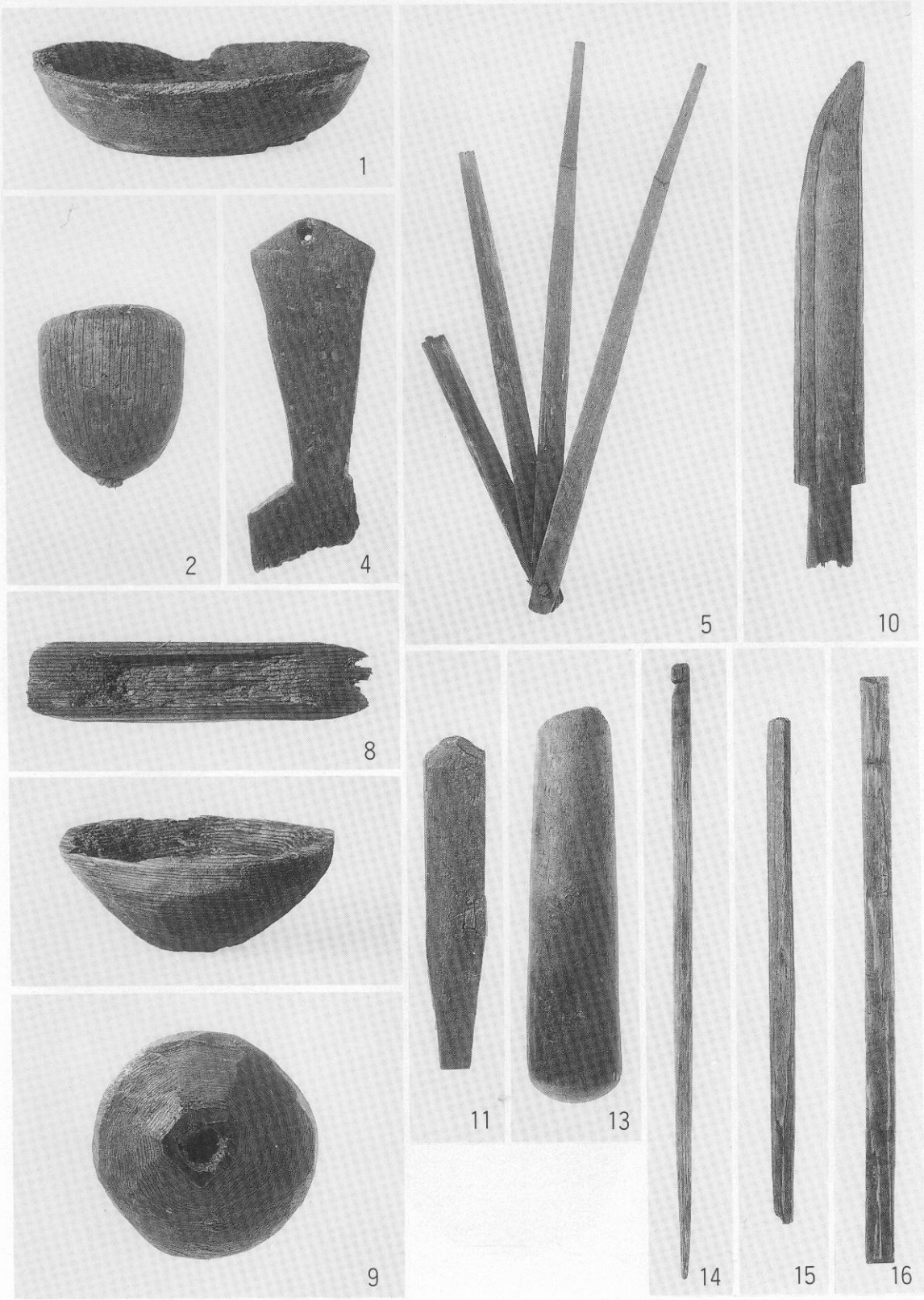




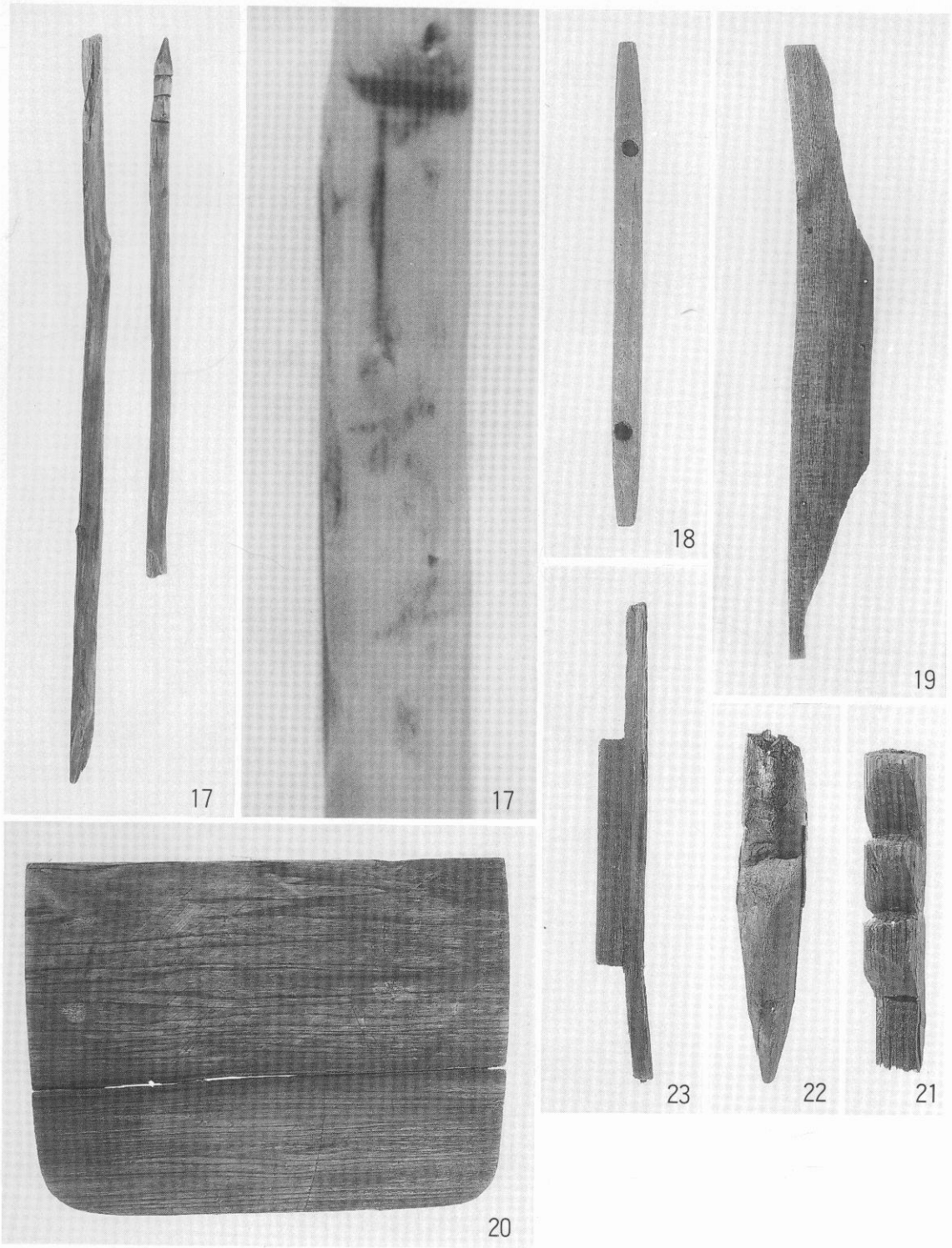
第119次調査　瓦質土器・軒丸瓦・軒平瓦



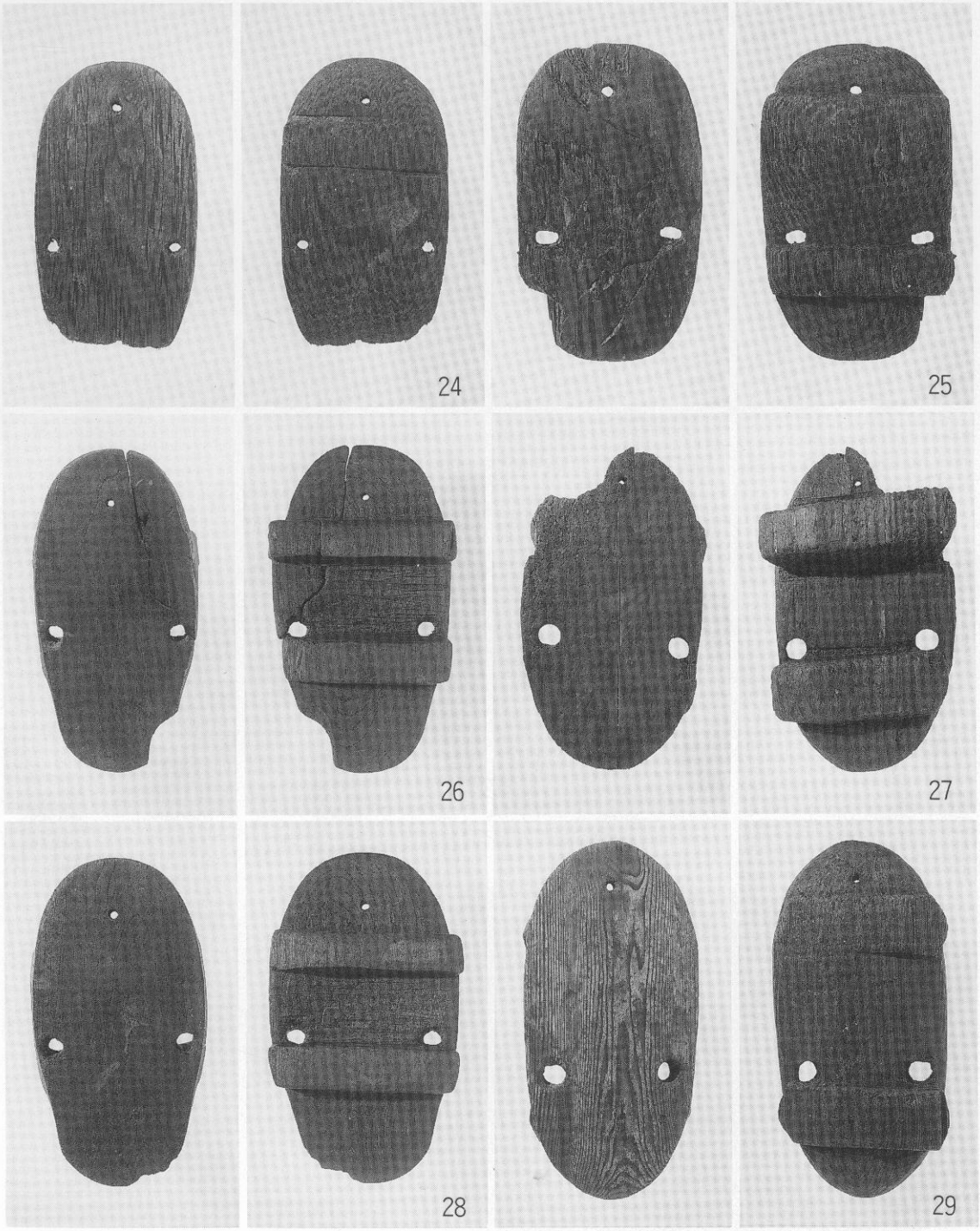
第119次調査　SD3500黒色土層出土木製品



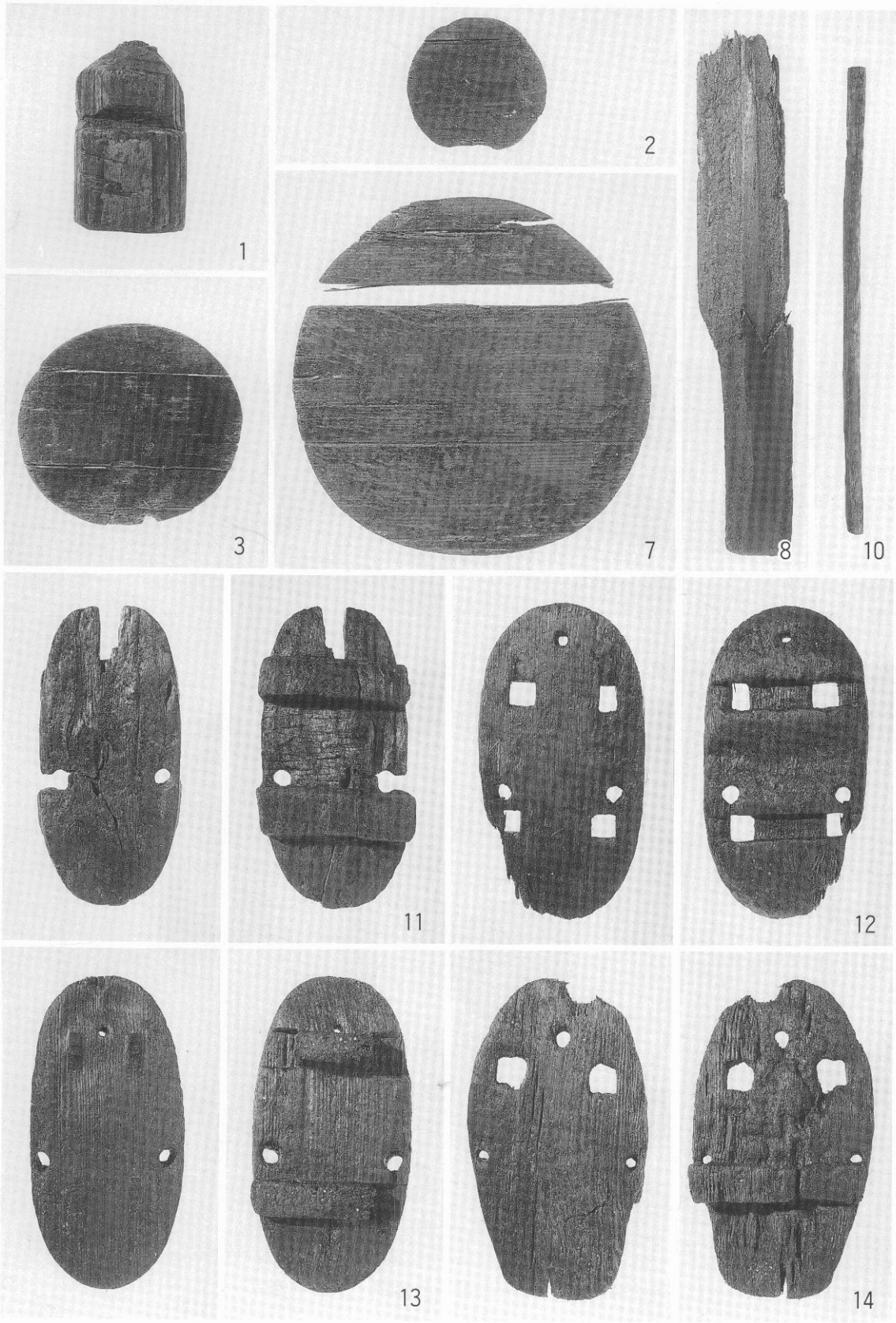
第119次調査　SD3500腐植土層出土木製品



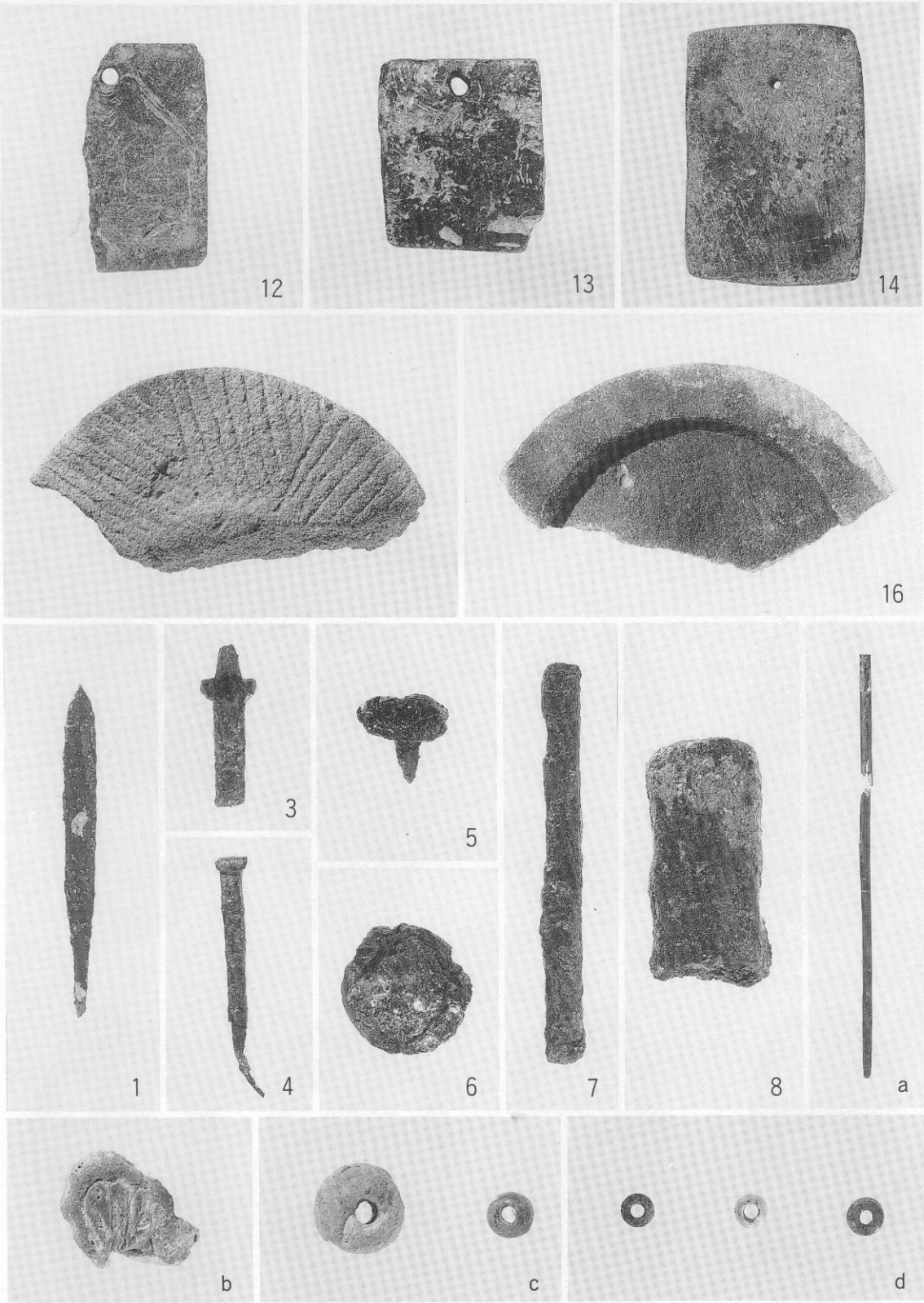
第119次調査　SD3500腐植土層出土卒塔婆・木製品（17(右)は細部の赤外写真）



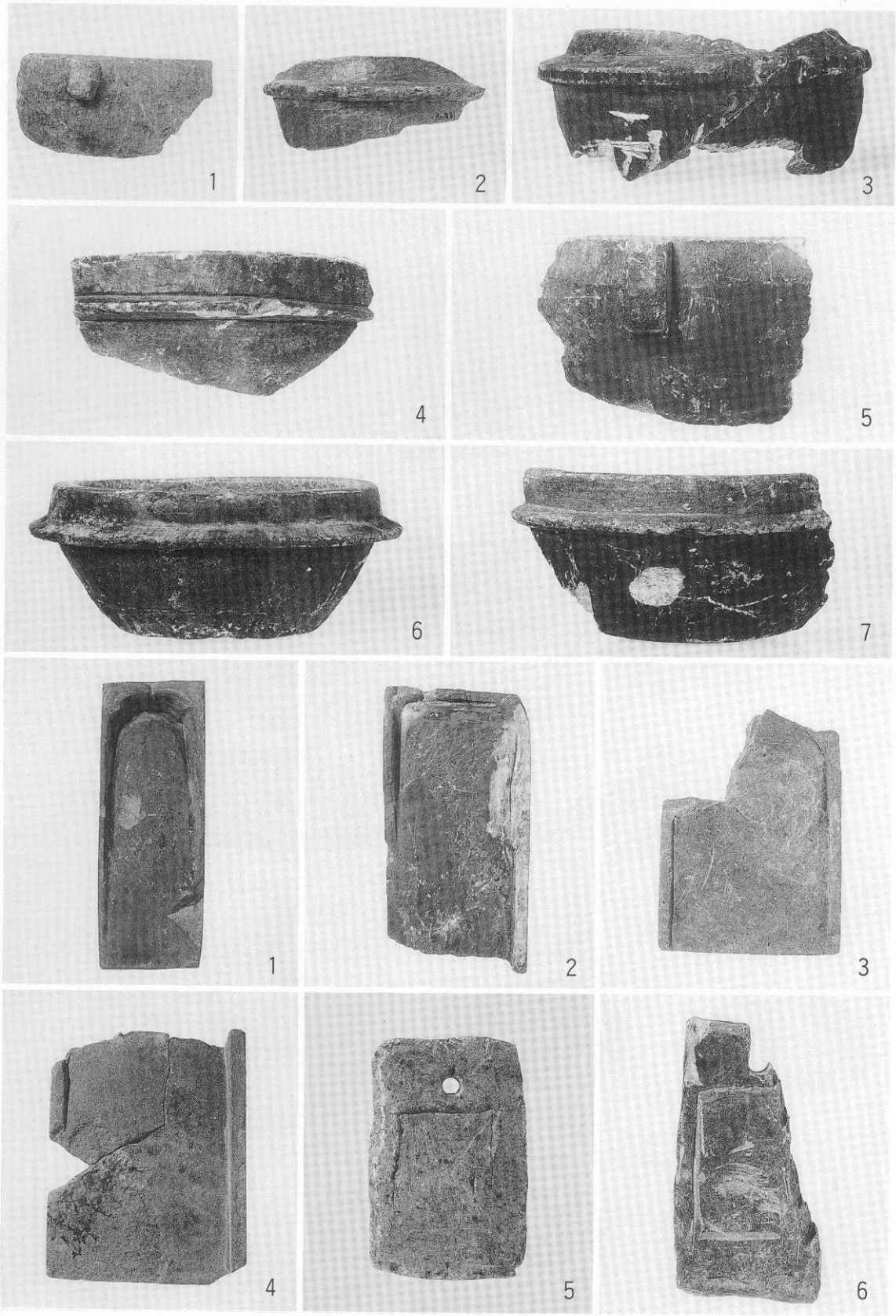
第119次調査　SD3500腐植土層出土下駄



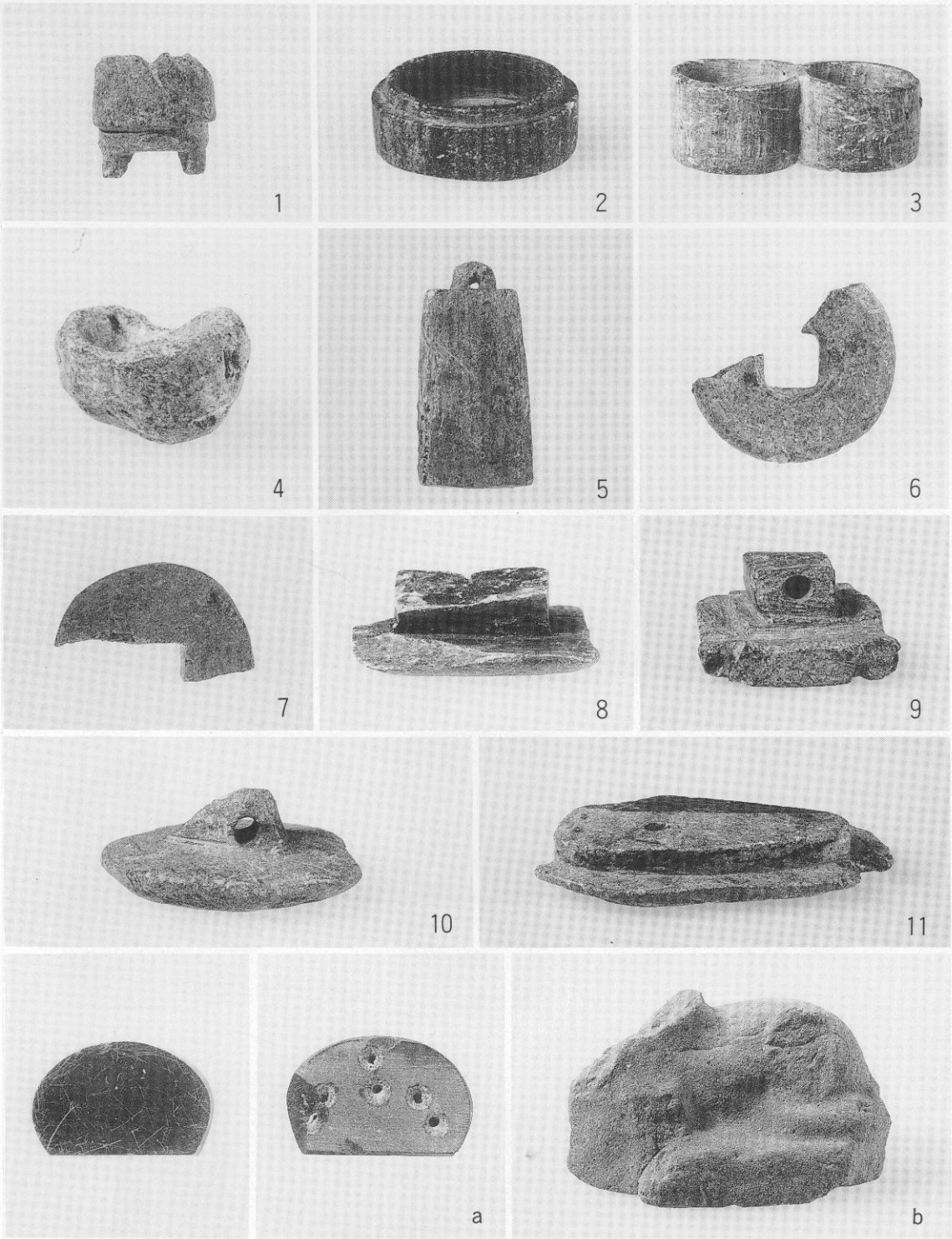
第119次調査　その他の遺構出土木製品



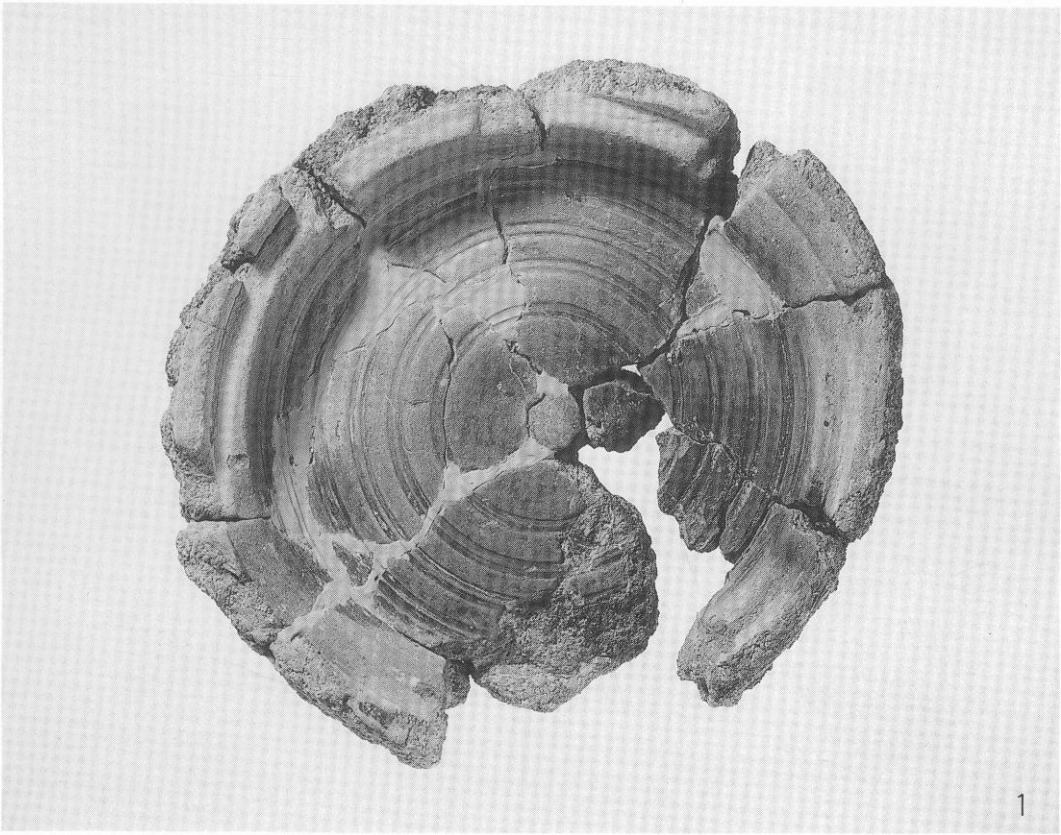
第119次調査　金属製品、石製品、ガラス製品

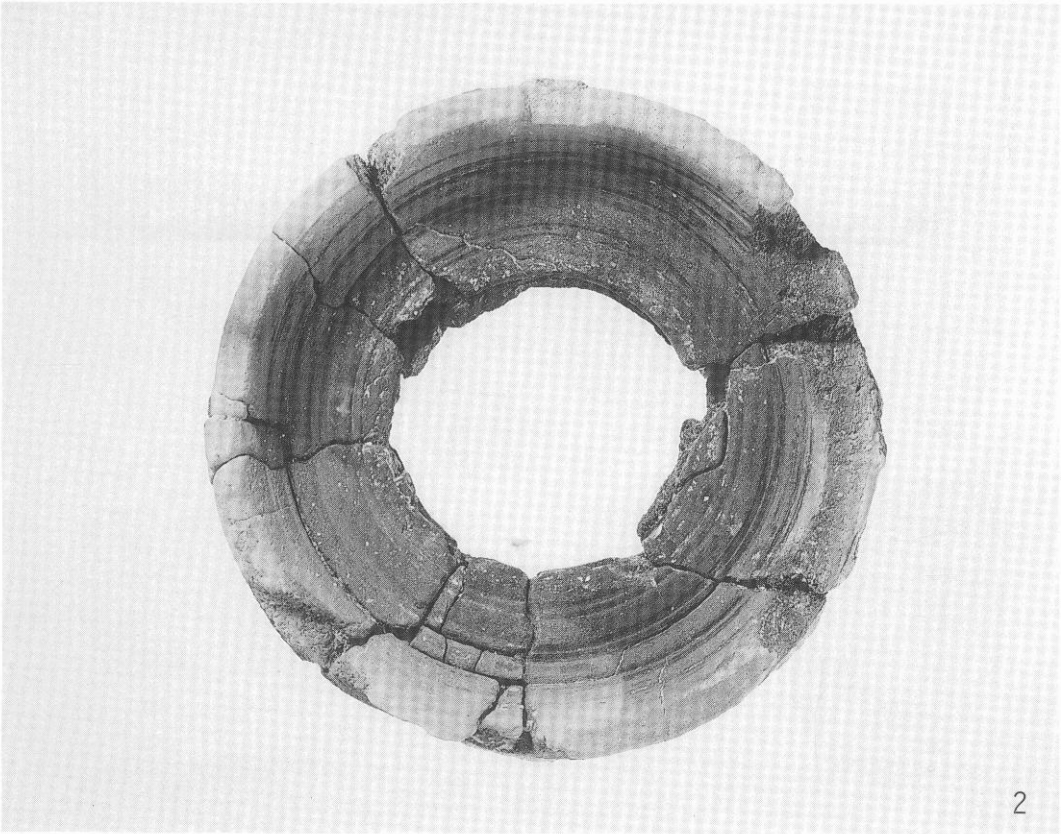


第119次調査　滑石製石鍋、石硯

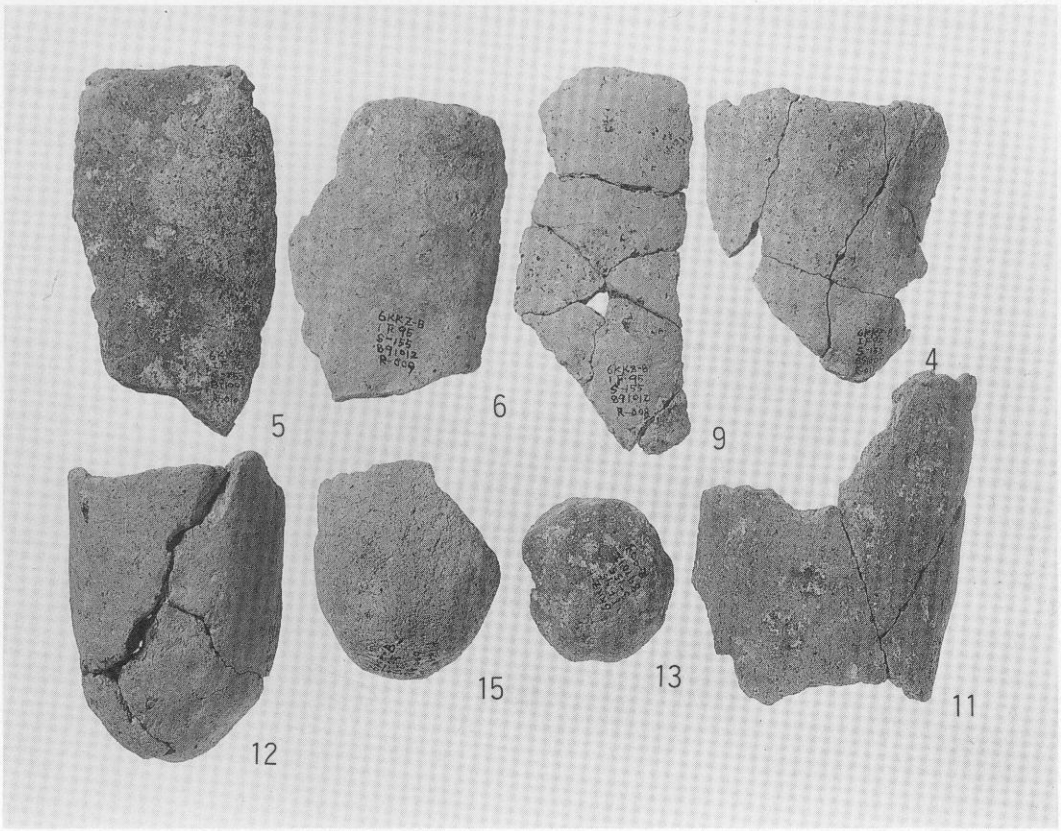


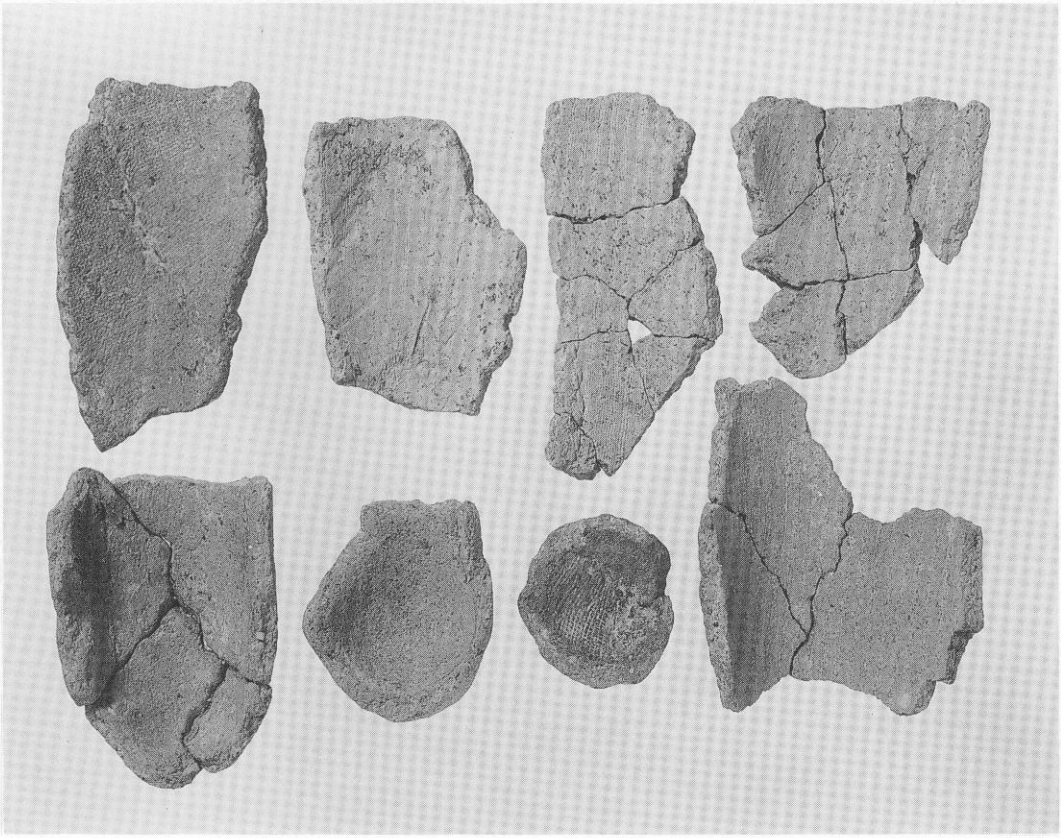
第119次調査　石製品、石帯



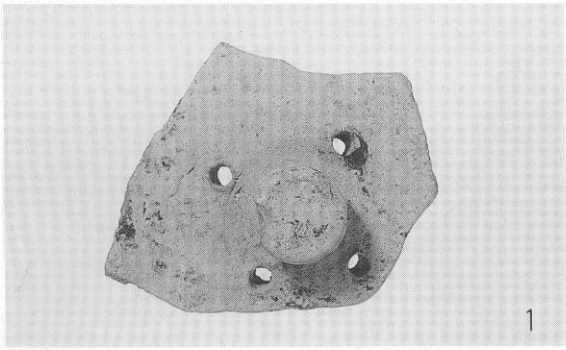


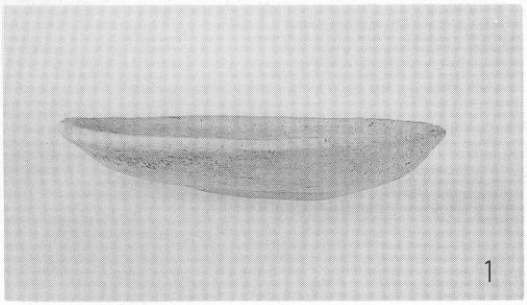
第119次調査　金鼓鋳型

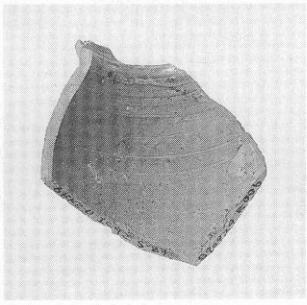


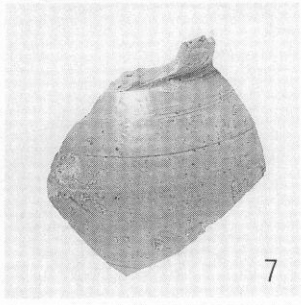


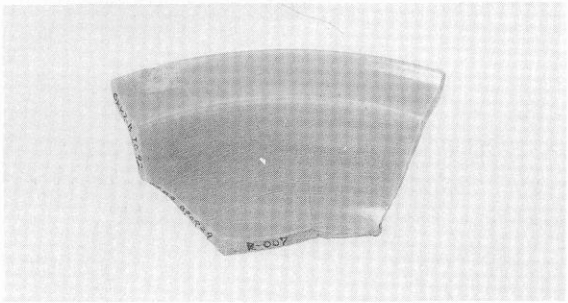
第120次調査　下層遺構　SX3600出土塩壺

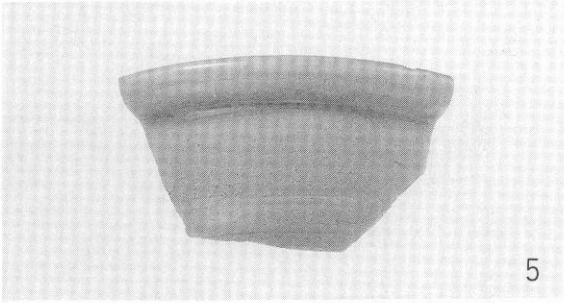


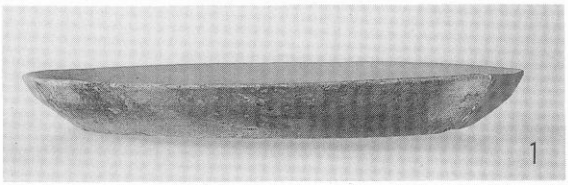


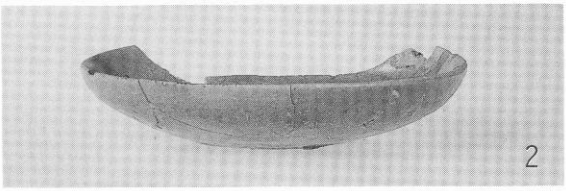


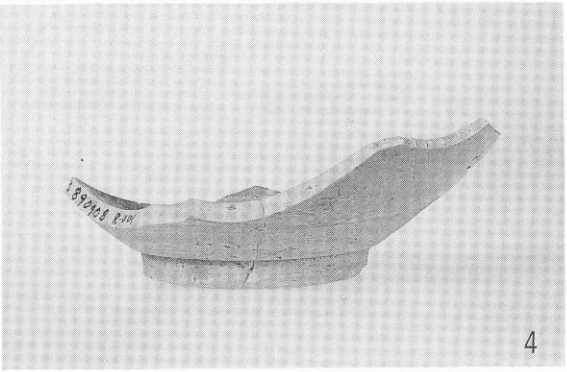


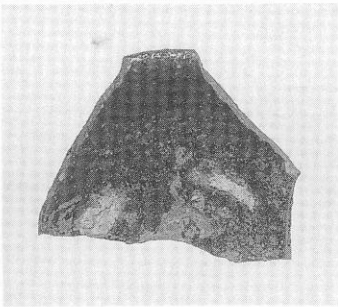


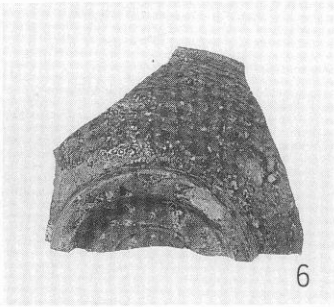




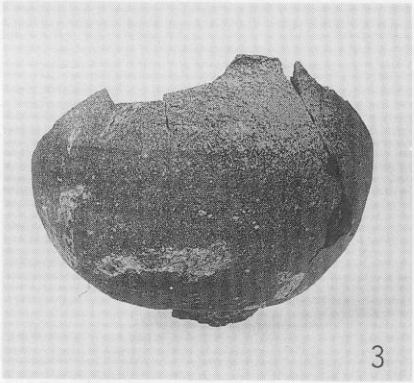


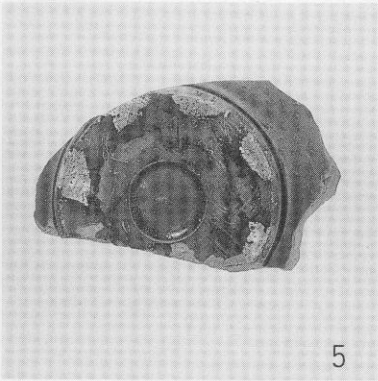


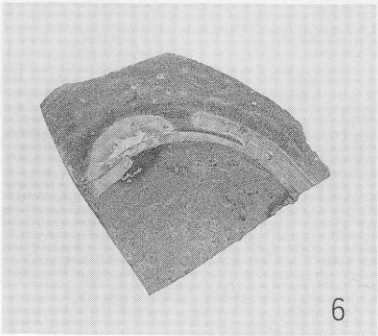


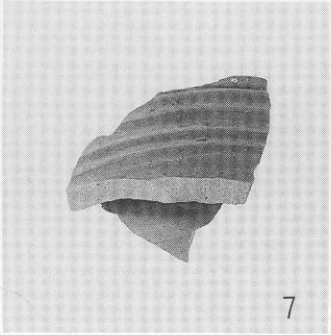


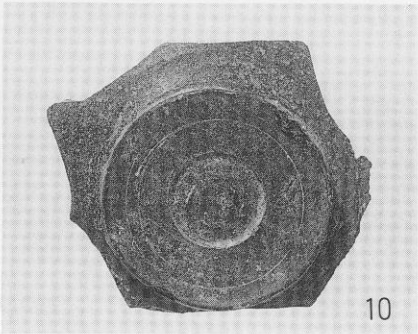
第120次調査　SX3600・SK3576・SE3570その他の遺構出土土器・陶磁器

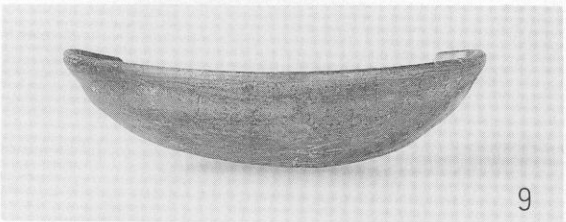


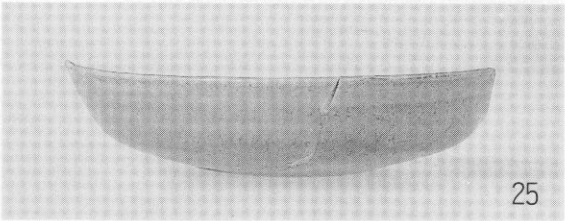


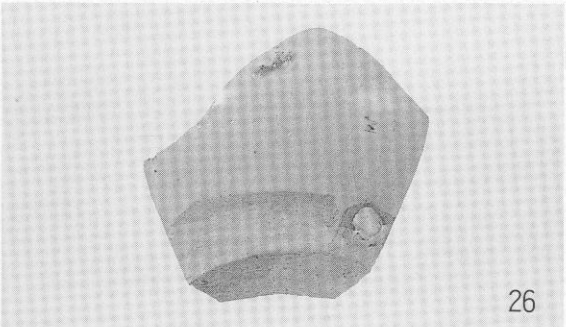


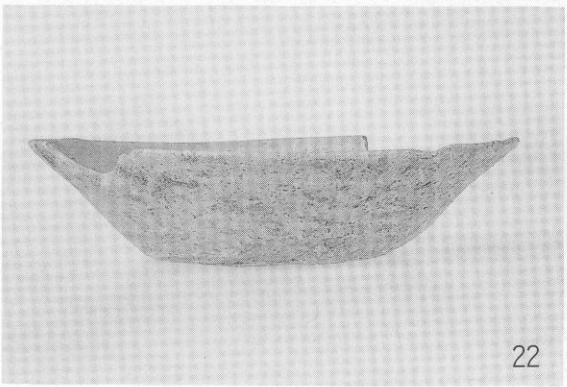




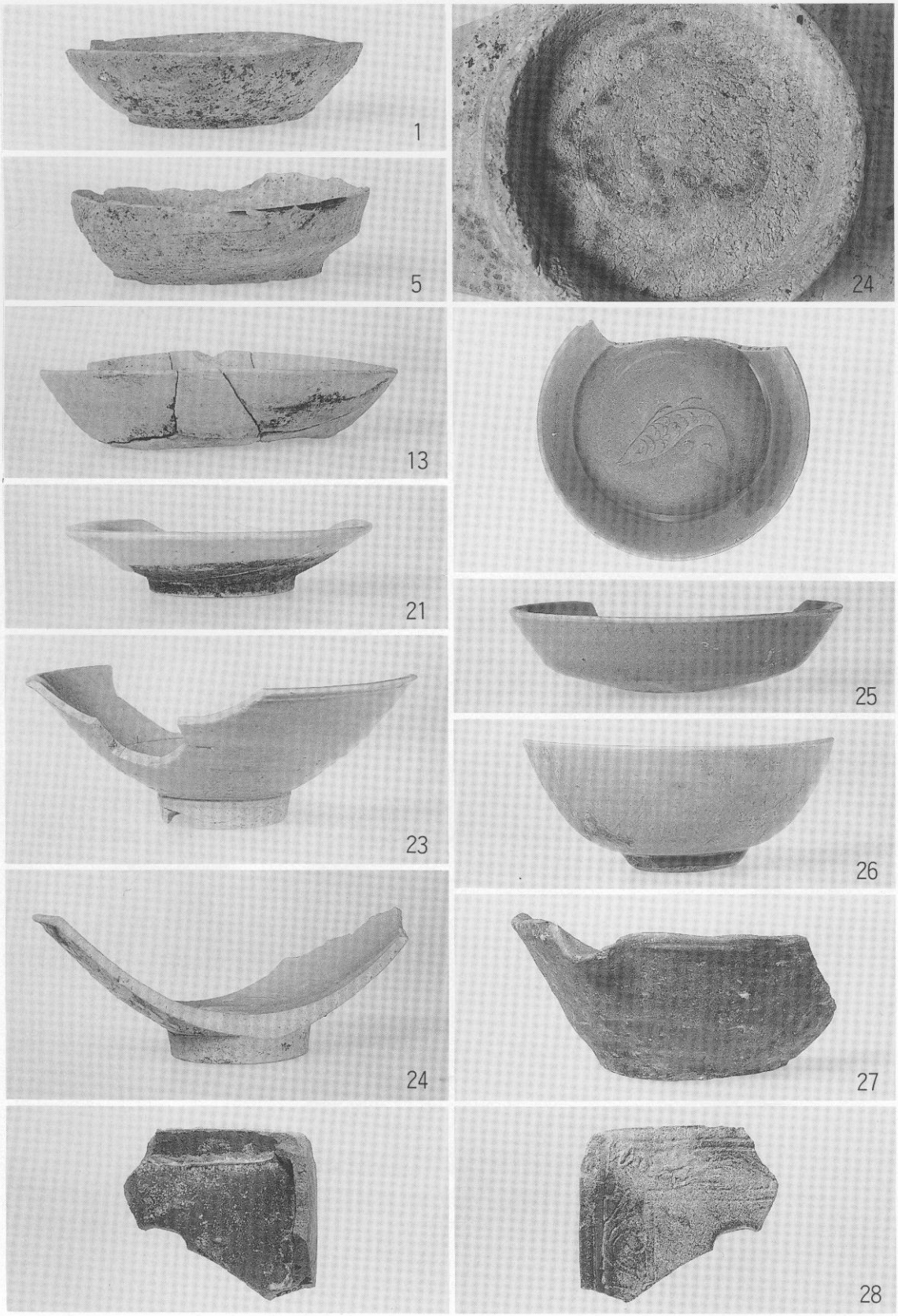




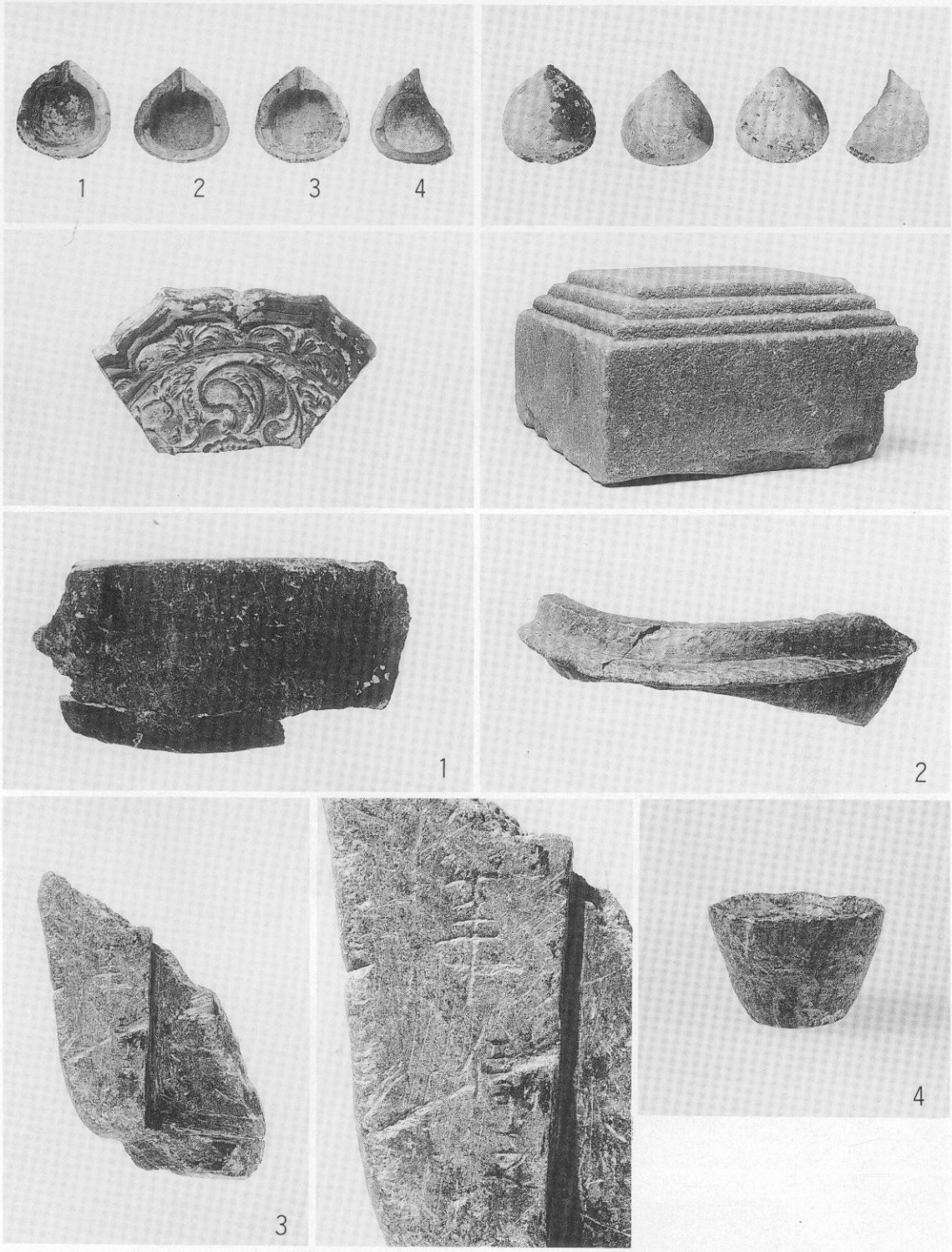




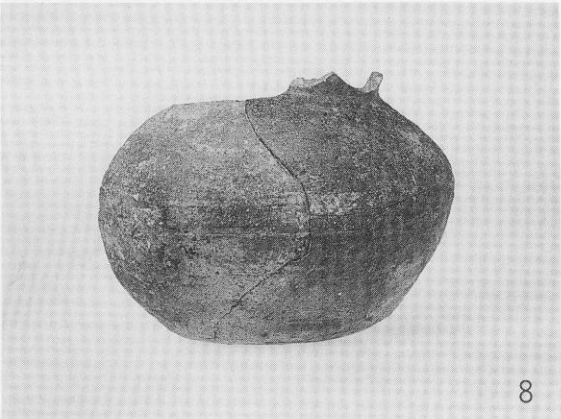
第120次調査　各層位出土土器・陶磁器

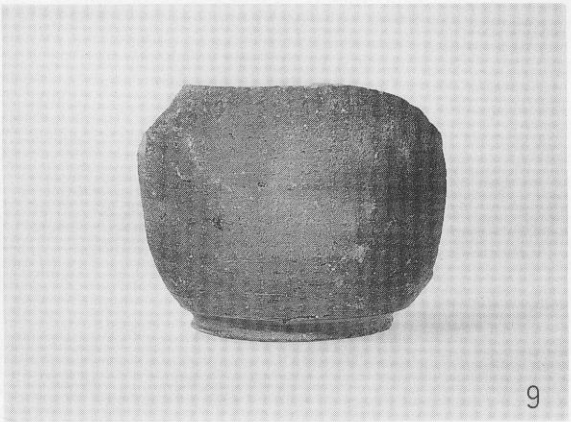


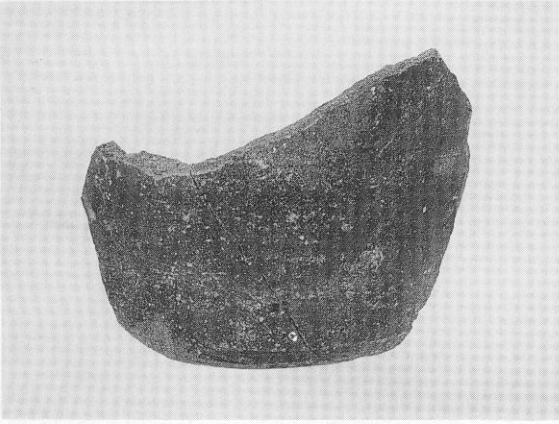
第120次調査　茶灰色土層出土土器・陶磁器

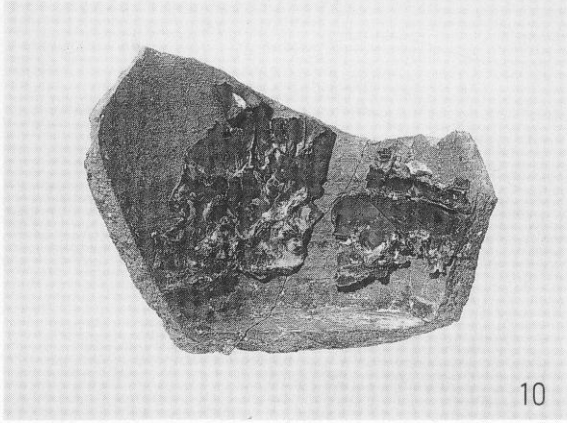


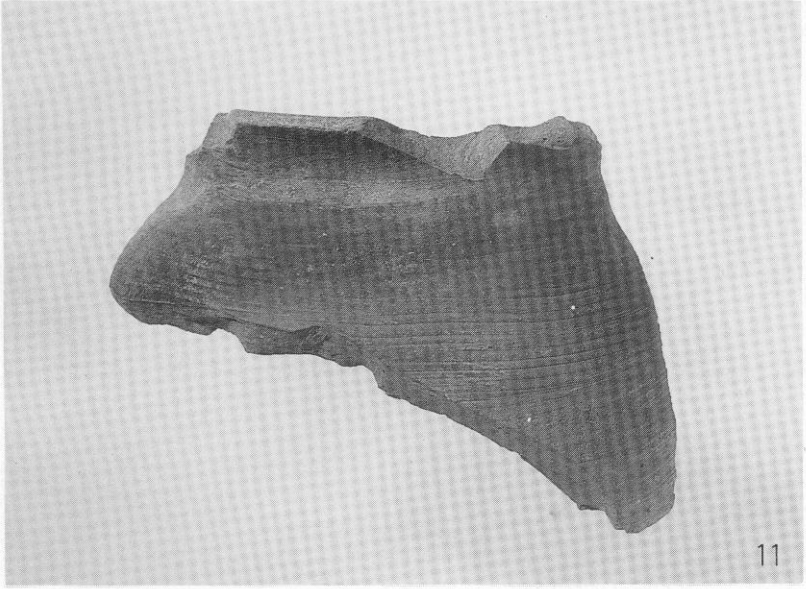
第120次調査　鈴鋳型、八稜鏡、宝篋印塔、滑石製品











第70次補足調査　SD1850出土土器

大　宰　府　史　跡
平成元年度発掘調査概報
平成２年３月
発　行　九州歴史資料館資料普及会
太宰府市石坂４丁目７番１号
印　刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門１丁目８－34